
グルメの日々

モンテス級

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グルメの日々

【Nコード】

N1376P

【作者名】

モンテス級

【あらすじ】

斎藤薫。享年 十八。死因は刃物の刺傷による失血死。

状況を確認してみると未来の日本ではないか！

転生した少年は未来の日本を調べていく内に驚愕な事実を知る。

洗脳系主人公が色々と暗躍し時にはお腹いっぱい喰らい。時には餌をやり、時には罪深い研究（初恋ジューズ）を阻止する為に動く！

ハートフルブレインウォッシュなお話です。

洗脳系主人公と書いてますが……されてる側です。

第一喰目 死んで生き返りました。（前書き）

書いた小説を公開するのは初めてですので、人の読みやすい、読みにくいが分かりません。

アドバイスをしてくれる方いらっしゃったら是非お願いします。

第一喰目 死んで生き返りました。

体が焼けつくように熱い。それと同時に自分の体から温かいものが外へと出て行き熱を失って来ている。

『熱い』『痛い』

そう、思ったのは薫が背中を刺されてから数秒たった時だ。

何故？ 僕が？ 何をした？

どうして？ 僕はこうなったのか？

出血で意識が朦朧としながらも様々な思考を薫は脳内に張り巡らす。…… 答えは出ない。

ああ、刺されたんだ。

呑気にこれは死ぬなと薫は思った。

薫の脳裏に走馬灯が駆け巡る。

友人達との思い出が脳裏に浮かび最後に現在の回想が脳裏に巡る

薫は高校を人間関係のいざこざで中退した後、人間関係の練習をしようとコンビニでバイトし始めた。

そして、いつも通り、彼は朝バイトに出て帰宅中に刺された。

刺した人間は……誰？。あれ？どこか見覚えの

あれ？ 僕上手く人間関係作れてなかったのかな……………

そこまで考え薫は意識を失った。

斎藤 薫 享年十八

死因 出血多量による失血死。

再び意識が覚醒した彼は考えては自分に問いかけていた。

（ああ、僕生きてるんだ？。入院中みただけど何故か体が動かないな。そんなに重症だったかね？）

状況が良く分からない中彼は必死に情報を集めようと五感を研ぎ澄ませた。すると男女の肉声が入る。

「……めん。……をそだ……こ……を……ない」

（話声が聞こえる。聞き取れん）

大分経ってからまた話声が聞こえた。

「よし……お……は……薫だ」

どうやら、違う先ほどと違う人物だが薫に考える余裕はなかった。

動かない体を必死に動かそうとするが時々ピクツと動くだけで何もならない。薫は動かない体を必死に動かし、抗えない強烈な眠気に襲われそのまま眠りに落ちる。曖昧な意識を無理やり覚醒させ体を動かそうとするが、結局は徒労に終わった。

その繰り返しを数十と重ね漸く目をあける事が出来たが……どうにも視界がぼやけていた。誰かに流動食の様な物を食べさせて貰いながら、薫は考えていた。

長い間夢を見ていたような感覚。そして、自身の起きている状況を薫は確認したかった。

ガチャリ、と開く扉。

「薫、飯の時間だ」

扉から入ってきた女は入って来るなりそう言った。

その女を見ながら、薫は一番最悪な推測が当たらない事を祈った。

容姿は最上級と差し支えない程、美人で艶のある長い黒髪をそのままのばしていた。

大和撫子、眉目秀麗といった言葉がそのまま形となって出来てきたような人物だ。

何処か懐かしい空気を醸し出して居ている。薫の記憶に似たような人物を思い浮かべるが似ているだけで別人のようだった。顔の作りが似ていたが表情や髪の色等が違った。

薫が女を観察していると女は買い物袋からミルクの粉を取り出し他の粉と混ぜ合わせお湯を哺乳瓶に注ぎ込む。自身の手にはミルクを出し温度を確認しながら薫に哺乳瓶を咥えさせる。

さすがにその状況を正しく認識した、薫は驚きミルク吹きださずにはいらなかった。

「おい薫?! 大丈夫か?!」

哺乳瓶を咥え始めてすぐに吹きだした薫に女は心配し女の背丈の半分以上 赤ん坊状態の薫の背中を優しくさすり、ミルクが気管に入った事を心配していた。

ここで、薫は一番嫌な推測が当たった事に自身の動かない表情筋をピクピクと引き攣らせてここに居ない両親に報告する。

斎藤薫 死因失血死から何の因果が生まれ変わりました……と。

生後五年 薫は、積み木で義理の姉弟となった、一瞥 かおりと遊んでいた。精神が体に引き攣られているのか？と思ったが…よく考えれば、高校生になってからもトランプタワーとか作って…

いたなとズーンと落ち込んだ。

薫の義理の姉、馨は薫が確りと幼児が自意識が芽生える時期に子供には刺激が強すぎる話をいきなり出した。

「私は薫を拾った。拾ったからには、最後まで責任をとる」

（僕は、ペットか何かか?!）

余りにもぶつちやけた事実に関いた口が塞がらなかった事を薫は、今でも覚えている。馨がワタシオマエノハハジャナイって茶化して言っていたが、その手が震えていた事を見て、薫は何も言わずに馨に抱きついた。

それから、特に今までと変わらなかったが、馨が以前より薫にスキップをするようになった事だけここに追記する。

今度の姉はクーデレだった。

薫の生まれたのは日本で、前世の日本から未来に当たるものだ。
現在、西暦2060年。前世より約五十年後だった。

薫が立つ事が出来た時、馨は大層喜び散歩と言って家の外へ連れてって貰った。そこで薫が疑問に思った事が、機械が発達している割には何故か、人が少なく。そして機械が多い割には空気が綺麗だった。

自身が生まれ変わった事を再認識する。前世と少し違う日本、前世の姉と少し似ている義姉。色が変わった自身の髪の毛、瞳の色。

前世までは見事までに黒髪黒目であったが今は銀髪赤目になっていた。にも拘わらず自身の顔のつくりは変わっていなかった。

少しの違いだが間違いなく違うのだ。

3

漠然と夢を見ている。薫はそう思った。

ああ、これは前の記憶か。薫は曖昧な意識でそう判断を下した。

薫は所謂天性の才能を持った少年だった。

両親は、逸早くその才能に気付き薫に英才教育を施そうとしていたが、薫が性格が極めて気紛れの為、英才教育は諦めて薫の好きにやらせていた。

それでも諦めきれなかったのか母は薫に様々な物に触れさせた。

ある日、偶然母が何か掲示する度に、薫はそれに興味を持ち、飽きては興味を持ちの繰り返しをする事に気が付く。その事を知った薫の両親二人は薫の教育に熱を入れた。

その教育の弊害が薫が本当に興味を示さない限り、何も動かない自堕落で面倒くさがりの子供に育ってしまった。

人より、早く回転する頭。

人より、優れた感覚。

非凡に生まれ平々凡々と毎日を過ごしてきた人生だった。

「努力しろ」折角の才能なんだからと友達に言われ続け薫は頭に何故？と疑問に思いながら、明るく特に何も考えず過ごしてきた。

高校の入学から三ヶ月、漸く薫は新しい生活にも慣れ、生活リズムにハリが出てき、薫は期待で胸いっぱいを膨らませていた。新しい制服、見慣れない地区。

だが、それは期待は脆くも崩れ去った。

薫のクラスメイトが薫の能力を妬み、薫は人間関係が調整できず学校を中退した。

切っ掛けは単純だった。

出来た友人が完璧な優等生で薫は無邪気過ぎた。それだけの事。

漸く高校にも慣れ、友人出来た。友人 政次と知りあった。

政次は、優等生だった。それも、生徒の模範となるような優等生だ。彼は、それを自負にしていた。これからも、そうであるべきと心がけていた。

お互いの家に遊び行き、今度は政次が薫の部屋へ行く時の事だった。

政次と薫は暫くカードゲーム、PSP等で遊んだ。少し、遊び疲れたか休憩を挟む事にし、政次は薫の部屋を見渡し机にある物が無い事に気づく。

「あれ？お前教科書とかは？」

「え？学校だけど？」

「宿題とかどうしてるんだよ」

「授業中とかにやってるよ？」

政次が薫の余りのいい加減さに呆れ果てた。それが、始まり。

政次は薫と席が近く、先日薫の言った事が気になり、時々薫の様子を見ていた。

薫は授業中で寝てるところもあれば、絵を描いて遊んでいた。やけに上手く、まるで本当に写真で撮ったかの様に教師の顔が描かれていた。本当に才能の無駄遣いである。

最初、こいつ実は凄い？と思っていた政次だったが、その羨望はやがて嫉妬に変わった。

絵が上手い。ピアノ、ヴァイオリン等が弾ける。演算能力が高い。理解力が高い。

政次から見て薫は才能の塊だった。止めを刺したのは、体育の授業だった。

政次の最後の砦、運動まで薫より劣っていた。

自分が優等生だと自負している。政次は、自身に憤慨していた。今まで一番だった。そして、この学校を首席で入学し学年委員にも所属した。様々な想いが政次の心を掻きまわす。

それでも、政次は努力した。薫に、負けまいと……

必死に勉強し薫と競った。が、残酷な結果に終わった。

色んな物に興味を示し勉強を疎かにしている薫に負けたのだ。

正確には、負けなかった。

が、薫は疎かにしているにも関わらず、政次と同じ満点を取ったのだ。

もし、薫が興味を持っていたなかつたら、この点数は取らなかつただろう。

もし、薫が自身の才能に気づきその才を隠していたのなら、人間の負の部分を知っていたら……。

薫と政次の不幸は正しくそれだった。

政次は薫と過ごしていく内に、心にどす黒い物が重なっていくのが感じた。その物は、はち切れんばかりに膨らみ、ある日爆発した。

二学期の期末試験が終わって一週間後の事だった。薫はいつも通りに授業中に絵を描き、政次に授業後「褒めて！褒めて！」と言わんばかりにそして政次に見せる。だが、その行動は政次の癪に障った。

政次は、薫がする全ての行動が憎かった。無邪気に知識をあさる薫。美味しそうに弁当を頼張る姿も、音楽は楽しいと言いピアノやヴァイオリンを弾く姿も、授業中寝てる姿も、こちらを見て「これは、楽しいね。」という姿も全部が全部気に食わなくなっていた。

この時政次は、自身の持つ薫への劣等感に耐え切れず、

「お前さ、そうやって俺を見下してるんだよね？」

鋭い言葉のナイフを薫に突き刺した。

「え？」

向けられた言葉が理解できない。

「そついつのつてさ本当につざいよ」

「え……何の事？」

心に溜まった泥のように溢れている想いを言葉にし薫にぶつけた。

薫は突然の友人の言葉に戸惑いを隠せず言葉が途切れ途切れになる。

罅が入った友情は直ぐに崩壊した。

その日から薫は学校から興味が無くなっていた。

昨日まで、笑い合っていた友人が自分に敵意を向ける。初めての事だった。

徐々に薫の表情に笑顔が消え、無気力になり、クラスから孤立し、友人と思っていた者には敵意を向けられた。

深い溝ができた。人間関係を再構築する術を経験がない薫は持っていなかった。

「……一気につまらなくなっちゃったなあ」

政次との関係が変わってから一ヶ月後、薫は退学した。

友人の思考が薫は理解できず落ち込んだ。

散々悩んだ後、いくら考えても分からず、そういう人間も居るんだ。と結論付け、退学して一ヶ月後薫はいつもの表情を取り戻した。

誰が悪かったのか？誰も悪くはなかった。

誰もが持っている生まれ持った能力がたまたま優秀だけだったという。顔が生まれつき良い奴が自分の顔に疑問を持たない事と同じで薫は自分の能力に疑問を持たない。

薫が退学した後、政次は後悔していた。現在の高校で自身に羨望の眼差しが集まっているを知っていた。その自分が、薫にその気持ち吐露するのは明らかに棚上げだった。

高校を卒業して少した時の事、薫の訃報を聞いて政次は自身の行動に深く後悔し涙した。

意識が浮上し見えていたものが白くなった。

大きな目をパチクリと瞬きをし、目が覚めた薫は、むーと背伸びをしながら、ラジオ体操を始める。五歳児が一生懸命にやるラジオ体操はその様子は黙って見ていた、馨の目の保養となり、後日、薫の素晴らしさを近所の友達に自慢した。

それだけに収まらず、馨は薫に隠れながらラジオ体操を友達ツバキと一緒に盗み見る。

が、ツバキには薫が変な子供としか映らない。

「五歳児がやるラジオ体操はどう見てもシユールだった」

ツバキが薫に思った一言だった。

転生して五年、薫が興味を持ったのは日本の状態変化だった。動物の生態系変化、自分の知らない未知の技術。前世と比べて未来はどうなったのかを薫は知りたくて仕方なかった。

初めに調べたのは生態系だった。

まず、一目で分かったのは格段に生物の数が少ない。

前世でよく見かけた犬がこの地域では、たった二匹しか居ないと言っただ。次にカブトムシやクワガタなどの昆虫生物は多くなっているかを確認したが、こちらもあり、前世と比べて減少していた。

昆虫や生物に興味を持った薫に、馨は動物が好きなのだろっと思
い薫にとって驚愕の事実を話した。

未来の日本では凶悪な妖怪が出てきたのだ。初めは信じられなかつた薫だが、情報がやけに具体的すぎ、それが真実と悟った。

この地域の人も被害に遭っており、馨も両親を亡くした。

その事実は薫は驚愕し馨を心配したが馨は吹っ切れているように
安心した。

馨やツバキは妖怪に詳しく薫に話し薫を怖がらせようと思ったが薫の目はその妖怪への興味一色に染まった。少し、怖がる薫を見た
いと思った二人だったが薫の笑顔を見てるとどうでもよくなった。

薫の知った情報によると妖怪はとんでもなく強いらしく、

曰く、妖怪は何でも食べる。

曰く、妖怪は人類の天敵と呼ばれる。

曰く、妖怪は限られた勇者にしか倒せない。

その情報に薫は何か引つ掛かるものを感じたが、気にせず話を聞いた。

未来の日本では魔法が存在しこれは、銃の勇者に選ばれると魔法が使えるようになるらしい。英雄は二つに分類に分けられ剣の勇者と銃の勇者だそう。

ここでも、薫は引つ掛かるものがあつた。

くしゃみが後一步で出そうで出ない様な感覚を味わいもどかしかった。

話を聞き終わった後、薫は眠ってしまった。頭脳 魂の年齢は、二十歳手前のモノでも現在の薫の体はまだ五歳なのだ。馨に抱き抱えられながら薫は馨のベッドに運ばれた。

「ええええええええええ?!」

朝目が覚めてみると薫は馨の腕の中で抱かれていた事にビックリし大声を出してしまった。

何事だと思つたのか薫を抱えて馨は外に出た。

「薫、どうしたのか?」

「何でもない、ちょっと嫌な夢を見たんだ」

「もう大丈夫か?、まだ不安か?」

「もう、大丈夫だから。ありがとう」

馨に叱られ、しゅんとなる薫。前世では若干人間嫌いになりかけた薫は血が繋がらなくとも自分を愛してくれる。馨が好きだった。その馨に余計な心配をかけた事に薫は反省した。

今日は薫は馨に連れられ、馨とツバキの仕事場に行く事になった。

何でもツバキは銃の勇者らしく、馨がツバキに頼み薫に魔法を見せてくれるよう頼んだ。薫はどんな魔法を見せてくれるか楽しみだ

った。

一時間程で仕事場へ着き、薫は辺りを見渡す。

仕事場を見た薫の感想は、コスプレ制服みたいな人が多かった。赤、蒼、白、カーキの制服の人が歩いている。

薫が辺りを散策してる間にツバキが来る。

「ツバキ、こんな事頼んですまん」

「気にするな、私も薫を気に入っているのだ」

訓練場に行き、魔法の準備をするからと言って暫く待つ事になった。十分ぐらいして再びツバキが訓練場に現れいよいよ魔法のお披露目。

薫の胸の動悸が激しくなり、手が汗ばんだ。

ツバキの方も準備が出来たのか、銃を構え魔法を放ち

.....
.....。

はあ？！

ツバキの魔法を見た薫は開いた口が塞がらなかった。

その、魔砲はどう見ても薫の知ってるアレだった。

オラクルポイントを使用した旧型の銃型神機で発射する、バレットだ。

薫の引っ掛かった部分がとれ漸くして燻つてた全てが繋がる。

（ツバキさん、あなたの名字雨宮って言うんですか。自分気が付きませんでした）

雨宮ツバキ　薫の前世でかなりやり込んだゲームの登場人物その人だった。

馨とツバキは薫に分かりやすく説明するために態と幼稚な言い回しをしていたのだ。

勇者　つまり、ゴッドイーター。

剣、銃の勇者〓それぞれ旧型神機の適合者。

妖怪〓アラガミ各種。

魔法〓オラクルポイント。

いつまでたっても驚いたままの薫にツバキと馨は大満足だった。

しかし、薫はそれどころではなかった。未来の日本に転生と思いきや、別世界でしたのオチ。天を仰ぐとはこの事かと実感した。

斎藤薫　未来の日本に生誕訂正、ゴッドイーターの世界に転生

しました。

第一喰目 死んで生き返りました。(後書き)

果たしてこの系統の小説は需要あるのか?と疑問を思いつつも投下

タイトルの決め方は至って簡単

ゴッドイーター

食う

グルメ

単純な作者でスマン

第二喰目 死亡率高いよね……………111。(前書き)

こんな作品でも評価してくれてありがとうございます。

ここで感謝の気持ちを……

正直な話、何の反応もなかったら、書くのを止めようかなと思ってました。

第二喰目 死亡率高いよね……………」」」。

薫はここがG O D E A T E Rの世界と理解し嘆く、

「ここ、とてつもなく死亡フラグ立ちやすいじゃん」

一人、さめざめと枕を濡らしたのであった。

薫は考えた、自分は一般住民だ。如何にして生き延びるのかを……。

第一案、ゴッドイーターになり外部居住区からフェンリル本部に住む。

衣食住は保障されるが、戦闘による命の安全が全く持つて保障されてないし、自分から何処ぞの某少佐みたいな笑顔の絶えない職場に行きたくない。

却下 自分にそんな勇氣はないし。そもそも、適合できるかどうか不明だ。

第二案、逃げ続ける。

件の人型アラガミ、特異点のシオはその身一つで宇宙に行ったので第二案は考える余地はなかった。

即座に却下　そもそも何処に逃げるのさ……在っても文字通り地の果てまで追いかけてきそう。

第三案、フェンリルの職員になる。

上層部だつたら外部居住区じゃなくアナグラで生活出来る。

一先ず、採用。

と、薫は今後の方針を決めたが別段そんな事を考えなくてもよかった。

薫の住んでる場所は外部居住区ではなく、アナグラの中の居住区だった。

ゲームでこそ、わずかな範囲でしか動けなかったがアナグラはアイコロジー施設なのだ。広くない筈がない。それにカオリはフェンリルの職員、幼い子供と一緒にに住む程度の許可は出されていた。

その話を聞かされた時薫は胸を撫で下ろす。

が、直ぐにある事に気付いた。

一度、アナグラにアラガミ侵入されてんやん。

……………詰んでる、どうしよう。

薫が思つ、心の奥底からの気持ちだった。

椿から魔法見せてもらった数日後。薫はリンドウに面倒をみられていた。カオリと椿はフェンリルで仕事が入ったらしく、面倒を見てくれる相手を探したところ、椿の弟　リンドウに白羽の矢が立った。

薫は、僕いい大人なんだけどなあと思うが、これまでの自分の行動を振り返る限り、自分は自然な幼児を無自覚でしていた事に気付く。

積み木に然り。パズルに然り。ただ、その遊びがちょっと難解だったりするが、至って幼児の遊びだった。

また、カオリや椿に甘えたりするのも年相応に見られる、原因の一つだったりする。前世でも、薫は人前でこそカリスマらしきもの出したりしているが、家の中や親しい友人達の前では一気にくへタレたり甘えてたりしていた。

家族も友人も薫に頼られる事に悪い気はしないので、薫の好きな風にさせていた。

薫が子供扱いに不満を思っている最中。リンドウはどうしようかと悩んでいた。

雨宮リンドウ十六歳 性別 男。

目下青春の真っ盛りである。

リンドウは現在、深い関わりを持つのは年下の幼馴染 サクヤと姉の椿だけである。昔、住んでた鎮魂の寺はコンゴウに襲われ廃寺となり、今ではアラガミの巣窟である。他の住民はアラガミに喰われてしまい。彼の交友関係は一気に狭まってしまった。

そんな彼が、子守りを任された。

彼は、訳が分らなかった。彼は同じ年の友達遊んでただけで、自分より一回り下の子供と遊んだ事がないのだ。

薫とリンドウ。二人して腕組んで、うーんと唸っていた。

リンドウの家に遊びに来ていたサクヤは、リンドウや薫の姿を見て笑った。

「あはは、可笑的い」

「サクヤ。俺は真剣に悩んでるんだ、忙しいのであっち行ってなさい」

「どうせ、子供とどう接すればいいのか悩んでたんでしょ？」

「ぐっ」

「図星でしょ？」

「……………」

余りにも的確すぎる答えにリンドウは黙る。実際に薫を任されたのはいいがどうすればいいのか分からなかった。

「この子の名前は？」

「斎藤薫。カオリさんの弟らしい。外部居住区に捨てられてきたのを拾ったらしい。姉上もカオリさんもかなり可愛がつてるっぽい。」

「この子が？ ふーん。」

薫は、カオリの事を母と思ってるがカオリは甘えん坊な弟として見ていた。ワタシアナタノハハジヤナイの言葉はその意味を含まれていた。

未だにうーんと唸ってる薫にサクヤは話しかけた。

「僕、名前何て言うの？」

「っ?!」

考えてたところ、いきなり話しかけられた為、薫は吃驚し、誰だろう?と考えながらも薫は自己紹介をした。

「斎藤薫です。お姉ちゃんは誰?」

ペコリと頭を下げ、薫は目の前の小学生ぐらいの少女　サクヤに名前を尋ねた。

「私、橘サクヤ。そこお兄ちゃんの幼馴染よ。幼馴染って分かる?」

「大丈夫です、分かります」

おお、橘サクヤだ。よく、考えればリンドウさんと言えば、サクヤさんじゃないか。しかし、横乳状態じゃないからわからなかったよ。と、薫はそんなアホな事を考えながら感慨に耽っていた。

「今いくつ?」

「五歳になりました」

そう言っ て薫はサクヤの前に右の手を開いて見せる。

「リンドウ聞いた?!この子五歳なのに舌足らずながらも、しっかりしてるみたいっ?!」

「サクヤ落ち着け、薫が困ってる顔してるぞ」

五歳児が落ち着きながら喋った事に感動し興奮した、サクヤをリ

ンドウは落ち着かせる。

「あゝ、さっきも言ったが俺は雨宮リンドウお前の知ってる、雨宮椿の弟だ」

ゲームで聞いたセリフと似たような物言いを薫は聞きちょっと感動を覚え、ここは本当にゴッドイーターの世界なんだと改めて思い直した。

「お前を預かったわけだが、薫お前何して遊ぶのが好きなんだだ？」

「色々！」

「ほう？例えばどんなのだ？」

子供と接した事ないにも拘らず、リンドウは薫の兄貴分に位置にあっさりとおさまった。この頃からリンドウはすでに頼れる兄貴發揮をしていた。

「絵とかかな？」

「じゃあ、俺と一緒に絵でも描いてみるか……そう言えば薫もつすぐカオリさん お姉さんの誕生日じゃないのか？」

「うん」

「描いた絵をプレゼントしてみたらどうだ？凄く喜ぶと思うぞ？」

「おおゝ。リンドウさんすごいな」

その言葉を皮切りに薫とリンドウは絵を描き始め、サクヤは自分が若干、蚊帳の外になっている事に寂しさを覚えながら二人の様子を見る事にした。

サクヤは、リンドウの絵心の無さを知っているので薫の方をメインに見ていた。リンドウが描き始めて十分ぐらいだろうか、薫は今まで動かしていない、持っていた鉛筆を漸く使い始めた。すると、臃気ながらも力オリの顔の輪郭が見え始め、さらに五分が経つとおよそ、絵の完成系が見えてくる。髪の毛を一本、一本丁寧に心を込めて五歳児が描く様はサクヤ心を打たれ、不覚ながらも年下の男の子に胸がときめいてしまった。

幼い子供が自分の義姉のプレゼントを一生懸命に描いているのだ。その気迫と真剣な眼差しがサクヤに目には酷く印象的だった。

一度、筆が止まり薫は顔上げ真剣な眼差しで、数分虚空を見続け再び描き始める。余りにも真剣な薫の雰囲気を感じ取りにリンドウも絵を描くのを一旦止め薫の様子を邪魔にならないようにサクヤと一緒に見始めた。

薫は、時々顔を上げ虚空を見る。二人はその行為が最初分からなかったが、その行為は虚空に力オリを見据えているだと気付く。すでに絵は五歳児が描く様な物ではなく、本職の人間が描いてると言っても過言ではなくなっていた。薫の絵の才能に二人は戦慄し鳥肌が立つ。

漸く描き終えたのか、薫は二人に挨拶を入れないまま、ぐったりと倒れこんで夢に誘ってくる睡魔に身を委ねた。リンドウとサクヤ

は行き成り、ぐったりと倒れ込んだ薫を心配し、脈を測ったりして無事と確認してから家のベッドに寝かせる。

二時間後薫は目が覚め、自身が知らない場所と気付いた。もうすでに日は暮れており部屋は暗くなっていた。

（また、終わった直後眠ったのか……）

自身の行動に呆れつつ、身体をベッドから起き上がらせた。

リンドウは、旧型神機 ロングブレードの適合候補者である。
姉、椿は銃の適性が高く、弟のリンドウも同じく高い適性を持つんじゃないかと推測され、検査の結果見事その推測は的中していた。
リンドウは一年間、神機の研修を終えてからフェンリルの組織
極東支部に配属が決まっていた。

雨宮リンドウは、姉 椿とその友達 カオリから任された

子供、薫について考えていた。

リンドウは自身がゴツドイターになるのは義務だと思ってたし、当たり前とも思っていた。アラガミが人類に猛威を奮う時代だ。人が生きる為には、才を持つ奴が世に出ていかなくてはならないとも感じてる。

先ほどまでやっていた、薫の遊び相手。リンドウは最初は何も思わなかったが、実際に遊んでみて印象は一変した。

アレは違う。姉上、カオリさん、気付いてないのか？

あの、子供はそこらの子供と全く違うんだ。先ほど薫が描き上げたカオリさんへのプレゼント。異常すぎる才能だ。

幼い外見とは裏腹に、頭の中は大人顔負けの思考をしているに違いない。

知能が違う。子供が描く様な絵を真剣に描いていると思っていたら、余りにも真剣すぎる雰囲気にも十年も生きてない子供に圧倒された。あれは、天才なんかじゃない異才だ。

薫が疲れて眠った時に完成した絵を見た。

カオリさんが慈愛の笑み浮かべた絵がそこに描かれてあった。絵の良し悪しが分からない。俺でも分かる。この絵は素晴らしいと。

この時代に養えず捨てられた子供が、カオリさんの善意によって救われた。普通なら見向きもしない外部居住区の廃墟で拾われた。そして、その子供の知能があまりにも高い。

運命だ、薫はその才を持って将来アラガミから人類を救うのかもしれない。姉上に、フェンリルに聞いてみよう。

ブルツと薫の背筋に悪寒が走る。

（何か 嫌な事に巻き込まれそうな気がする）

後日カオリの誕生日に件のプレゼントを渡した所、カオリは感激し薫を力いっぱい薫の骨が軋む音が聞こえるまで抱きしめた。薫がタップしているのを気付かずに……

薫を寝かせた後、絵を大事大事に額縁に入れて自分の部屋に飾っ

た。その絵を見て、カオリは絵とは真逆な笑みを浮かべ、ニヤニヤと笑っていて大層気持ち悪かったそう。

第二喰目 死亡率高いよね……………二二二。（後書き）

ひっそりと、生き抜く想いとは裏腹にリンドウに才能（笑）を見抜かれ巻き込まれる。

さて、薫の才能の話ですが、前世でも彼は評価されていますが基本的バカです。

追い込まれないとキチンとできないタイプでこのゲームスキルで言えば生存本能、生存本能全開です。

基本ヘタレパンダです。

作中と関係ないですが……

この話し書いてる時、サーカスギャロップ、マゼッパ等聞いてました。

……………何アレ。

第三喰目　ロリだ！シヨタだ！いや、僕もロリシヨタ状態だけどさ……（前書き

PCのディスプレイ新しくしました。

23型！かなり綺麗です。デスクトップの壁紙が映えますね。

……壁紙は太陽系の図です。趣味が変ですかね？

第三喰目　ロリだ！シヨタだ！いや、僕もロリシヨタ状態だけどさ……

『神』の名を冠する人類の天敵。

それは、2050年代突如として発生した「オラクル細胞」が気球場のありとあらゆる対象を「捕喰」しながら急激な変化を遂げ、多様な生物体として分化した。

いつしか人々は極東地方に伝わる八百万の神々になぞらえて荒ぶる神　「アラガミ」と呼ぶようになった。

アラガミは、考えて捕喰を行う、一個の単細胞生物「オラクル細胞」が集まって構成する群体であり、それ自体が数万、数十万の生物の集まりである。それぞれの「オラクル細胞」は眼であれば眼らしく、牙であれば牙らしく、それぞれの役割に応じて機能を特化させて器官を形成している。中でも「コア」と呼ばれる器官は群体の統制を司っており、これが破壊されるとアラガミの「オラクル細胞」は霧散する事が確認されている。霧散した「オラクル細胞」はやがて再集合して新たなアラガミを形成するため、地球上からアラガミを駆逐するのは事実上不可能と言われている。

そんな、アラガミの出現により世界の大部分の都市文明は短期間のうちに崩壊してしまった。アラガミが世界中で闊歩し人々の生活を脅かす。『神』が蹂躪し、『神』がいないこの時代人々は何を思っのか……。

ツバキとカオリはリンドウから言われた事について考えていた。

薄々気づいていた。薫がただの子供ではない事に……同時に薫は
気を許した人間にしか懐かない事も知っていた。時折、こちらを観
察する目。まるで、自分を見透かされてる気分させる。人類の為
であれば、今すぐにでも適性検査をし適性があれば、薫をゴツドイ
ーターにし幼少期から訓練や実践に出させるべきだ。が、姉として
弟がいる身として、それをするのは、憚られた。確かに、薫の才能
は目を見張る物がある。しかし、薫はまだ五歳の子供なのだ。適性
検査で適性がない場合。その時は、英才教育を施してあげるのがい
い。対アラガミについてきつと成果を上げてくれるに違いない。

その日、薫はカオリからの許可が下りたのでアナグラの公園に来ていた。疎らだが、子供は砂場で遊んでいた、シーソーで遊んでいた、滑り台で滑っていたりしていた。園児は薫しか居なく、他は皆小学生だった。

（折角の小さい身体になったんだ。ブランコしないわけにはいかないよ。おお、やっぱ身体が小さいとブランコがでけえ。これで、簡単に立ちこぎとかできる）

ブライン、ブラインと薫はブランコに乗り小さいな身体でブランコに勢いをつけ遊ぶ。薫があまりのも楽しそうにブランコをやるので、他の子供が集まり薫に次乗りたいという視線を向ける。すると、少しつり目のした、健康的な麦色の肌をした、ガキ大将っぽい子供が列に横入りし薫に近づいてきた。

「お前、ブランコ寄越せよ」

おい、横入りかよ。薫はそう思いつつも、言葉にしなかった。

「いやいや、次あの子じゃん」

手を振って次ブランコを渡す予定の子供に目を向ける。

「お前、うざいな。いいから代わって！」

薫に近づき、勢いのついているブランコを掴んだ。

（おい、危ないぞ?!）

その余りにも危険な行為に薫はブランコに急ブレーキをかける、

それを好機と見たかつり目のガキ大将は薫を突き飛ばしブランコに乗った。当然ながら、他の子は文句を言っていたが、ガキ大将はパンチするぞ？と言って他の子を黙らせた。次、乗れる予定だった赤毛の女の子は涙を浮かべてた。それに薫は申し訳ないと思ったが元凶はガキ大将なので何もしてあげる事はできなかった。薫は知るよしも無かったがガキ大将は普通の子供の二、三倍の身体能力をもち普通の人間である薫はとてもではないが身体能力では勝てない。

薫はブランコを取られた事に少しも、ほんの少し、一ミリも気にしていなかったが！

ほんのちよつとだけ、ちよつとだけ腹が立った。かといって、奪いなおすなんて大人げない事はしないので素直に砂場でも行って山でも作るうと思いい砂場に向かう。

砂場、それは過酷な労働作業。一歩間違えれば、（作品の）命が無くなり、行動を起こす度精神（気力）を削られる。

砂を揉み解す、山に盛り、砂を選別する。ここまでは良かった。

（真剣になるのはこれからだ！）

薫は自身に気合を入れ選別された砂の山を手に取り、薫は泥団子を作り始める。そんな薫に公園の子供達は惹かれたのか、薫に倣って泥団子を作り始めた。形が出来ないもの、綺麗なもの、崩れやすいもの、丈夫なもの、大小様々な泥団子が出来上がる。

一番最初に作り始めていた薫は未だに出来ていなかった。ピカピカに光る泥団子を作るのは時間が掛るのだ。泥団子に妥協していちや前世の時、近所でやった泥団子

選手権で友人の刹斗を押し退け優勝した薫は、刹斗に顔向けができなくなる。薫はその全て技術を持って泥団子の水分を全体に行きわたらせ砂で研磨した。

少し満足はしたのか……そこで砂での研磨を終え半ズボンジャージに泥団子を擦り始める。やがて、ただの泥団子は艶が出てきて他の泥団子よりも圧倒的な存在感を放つ。

たかが泥団子、されど泥団子、子供たちにとって泥団子を上手く作れる人は英雄なのだ。

「完成した……刹斗見てる？ 僕は、また一步前進したよ」

薫は今の自分が持てるすべてをつぎ込み完成した、泥団子を太陽に掲げる。

「おおおお！」

「すげえ！」

「泥団子の王様だ！」

「王様！！」

「すごい！」

矢継ぎ早に薫に掛けられる声、どれもが賛辞だった。その中一人、上手く泥団子ができずに泣いている子供がいた。先ほどのブランコの子供だった。上手く作れず、みんなに馬鹿にされ泣いていたのだ。薫はその少女に近づき血と汗の涙（笑）の結晶を少女に渡した。

「何で？ 何でくれるの？」

「……………」

（いや、ブランコの件でちょっと罪悪感が……あるんです。本当にゴメン精神は大人だけど身体は年齢からみて人より高い身体能力を持つだけの子供なんだよ。）

薫は何も言わず、そのまま少女に差しだす。すると少女はこちらの顔を伺い言う。

「本当に、本当にもらってもいいの？」

「うん」

頬笑みながら薫は少女に渡し、願う。

（出来れば大切にして欲しいな五郎丸（泥団子）を……）

薫から光る泥団子を貰った少女は花が咲いた様な笑顔を浮かべた。その一連を見ていた子供達は、ある者は顔を赤らめ、ある者は羨ましがった。

「いいなあ」

「ずっとこい！羨ましいよ」

「くそう、俺だっていつかは頂点に泥団子の王様になってやる！」

少女は手に持ってる、ピカピカに光る泥団子を見て、

「わあ！すごい」

とてもではないが、自分の作った同じ泥団子とは到底思えなかった。同じ土から作ったのに肌触りも見た目通り艶々としていて、少女の頬は少女自身の髪みたく赤く染まり興奮していた。さっきはブランコに乗れなかったが、泥団子くれたあの子はブランコを自分に渡せなかった事を負い目を持っている。少女は子供特有の動物の直感を働かせて薫の心の内を当てた。ブランコに乗れなかったのは残念だったが、これを貰えたならいいや。少女は嬉しい気持ちでいっぱいだった。そんな少女に先ほどのガキ大将が近づいてくる。

「お前、それくれよ」

「いや、だってこれは私のだもん」

「いいから、寄越せよ」

腕力で少女を黙らそうとし少女に勢いの乗った拳を振りおろす。次の瞬間に来る痛みと恐怖に耐える為目をとじる。

瞬間、鈍い音が公園に響いた。

「いったゝ。痛いじゃん。僕すごい泣きそう」

激痛が薫の体に走る、子供ながらかなりしつかりと綺麗に拳が握られており、アバラがズキズキと身体の異常を伝えると同時にガキ大将が持つあふれる近接戦の才能が薫の身体を通じてしつかりと伝わってくる。

ガキ大将がブランコから降りて砂場に来た時、薫はすぐさまブランコに向かっていたのだ。ブランコで楽しんでいたが、先ほど泥団子の少女とガキ大将の雰囲気は怪しくなってきた。これはさすがにまずいと思い、薫はガキ大将に向かい振りおろしてきた拳を止めようと思ったのだが、全く常人より高いと思っていた腕力が歯が立たず、そのまま押し負けてしまった。

急な乱入者に苛立ち入ってきた人物を睨みつけるガキ大将。

「なんだよ？ 邪魔するのか？」

「暴力、反対だってば！」

「何言ってるのか、分からねえ」

言葉とともに振りおろされる拳。

薫は痛みで動けず、できるのは脱力しガキ大将から繰り出される拳の痛みを軽減する事だけだった。

動けない薫に救いの神は来た。

「ソーマっ！お前は何をしている？！ 怪我していないか？ すまないな、息子が迷惑かけて御両親に病院に連れってもらってくれ、治療代、診療代はここに請求すると良い」

そう言つて薫に名刺を渡し、ガキ大将の親　ヨハネスはソーマに向き直り叱る。だが彼はそれを聞き入られず、

「ちっ、覚えてろよ」

「ソーマっ！彼に謝るんだ！」

「ご・め・ん・な・さい」

形だけの謝罪をしてソーマはそっぽを向いた。

「たくっ、どうしてこう育ってしまったのか……。本当に申し訳ない。どうも、息子は他の子供と比べて、力が強くてね。いつのまにかこんな子に……。後これもあげよう、この後用事があってね。申し訳ないけど、ここで、失礼させてもらうよ。いくぞソーマ。今日はお前の用事が溜まってるんだ」

こちらの状況を無視したまま、ソーマ・シックザールとヨハネス・フォン・シックザールはソーマの手を引き帰って行った。

薫は啞然としながら手のひら一杯に渡されたお菓子をポケットに入れた後、殴られた右胸部をさすり、痛みを鎮めようとする。渡された名刺を見ると、

フェンリル極東支部長。

ヨハネス・フォン・シックザール。

TELEXXIXXIXX

宣伝部長ですか……、予想外すぎる。っていつかソーマ小さい頃ガキ大将だったのかよっ！初めて知った驚愕の事実には薫はソーマ恐ろしい子っ！とアホらしい思考に耽っていた。

「あの、……………」

「ん？何？ごめん聞こえなかった」

薫はこの世界に生まれてから前世よりも深く集中する癖がさらに酷くなってついてしまっていた。そのため薫は思考に没頭してしまうと周りが見えなくなってしまう。

「薫？帰るぞ」

カオリが薫を呼ぶ、声量大きくなかったがは公園に響き渡った。思考に没頭していたら気付かなかったが、思考に没頭していない薫はその大好きな姉に気付く。少女は薫に何か言おうとしていたが、姉が呼んでいる為薫は公園の子供別れを告げる。

「あつごめん。お姉ちゃんが呼んでるから、じゃあねえーバイビー！」

そう薫はさよならをすると公園の子供達は薫に手を振り、

「もう帰っちゃうのか……。また来たら遊ぼうよ！」

「今度は俺の方が泥団子勝負つよくなってるぜ！」

薫に遊びの約束をする。前世では友達が余り多くなかった薫はその言葉が嬉しくて満面な笑みを浮かべ、振り返りながら「うん！」と子供らしく元気に返事を返した。

第三喰目　ロリだ！シヨタだ！いや、僕もロリシヨタ状態だけどさ……（後書き

書いてて思った事。

「何故、こうなった。」

書いていたら、いつの間にかソーマがガキ大将になっていた。なにが（ry

薫は、ソーマへ負の感情を持っていません。

むしろソーマも子供なんだなと思っています。薫が楽しくブランコやってるのを奪う　薫が楽しく泥団子を作り、ソーマから見て至高の泥団子を欲しくなる。

子供ですね。はい。

しかし、薫は子供のソーマに腕力で負けた事に結構気にしていたり

……

このころから、ソーマ君チートです。あふれる主人公オーラ+補正で薫を圧倒しました。

それと……お気に入り登録ありがとうございます！！作者のやる気がでました！！

第四喰目 その思いは散りゆく花に似て……（前書き）

今回はほのぼの一色です。

タイトル？ああ適当に頭に浮かんだものを書いただけで……

第四喰目　その思いは散りゆく花に似て……

薫は、念のために病院へ行き怪我を診てもらった。何せソーマである。主人公を空気にするほどの主人公したソーマ、中二な過去、バケモノ並みの身体能力、新陳代謝。怪我をしてないはずがない。

結果から言うと、打撲、右アバラに罫が入っていた。薫は一先ず安心したが、良く考えるともし、自分の新陳代謝や身体能力が普通の子供だったら、大怪我じゃないのか……。

怖っ！怖いよ、ソーマ。ソーマ恐ろしい子！薫は若干心の中でテンパリつつもしっかりと治療費を支部長に請求していた。当然馨は薫が支部長の名刺を持っていた事に吃驚し問い質したが、薫はソーマに殴られたからその現場を見ていた支部長からお菓子と名刺を貰った事を説明し、馨は薫見て呆れていた。

自分は確かにフェンリルの事務職員。だからと言ってゴッドイーターと深く関わるわけではない。確かに友人　椿はゴッドイーターだ。薫が関わりあいを持つのは椿や弟のリンドウまではず……何故この子はフェンリルとこうも縁があるのか、と。

後日、馨の職場にヨハネスが来て今度は馨が上司に何故、支部長が？！と問い詰められたのは完全な余談だった。

それからと言うものの薫は外へ遊びに行かなくなった。ソーマや変な人　榊や支部長　ヨハネスに会いたくない為だ。自ら死亡フラグに飛び込むマゾではないと薫は自分自身を納得させ外のブラニコを諦めた。

外で遊ばなくなってから三ヶ月経ち、何事も平穩に薫は過ごしていた。外で遊ばなくなったと言って、薫自身不満が無いわけではなかった。自分の為とはいえブランコに乗れない。好奇心が満たせない。探検したい。そんな薫のストレスを解消するモノがあった。

フェンリルの偏食因子の研究資料である。

馨は事務員なので、その系統の本が机の上に多数置いてあり薫はそれを読み始める。五歳の幼児が自身の身体の半分もある百科事典、研究資料を見るのは理解できているかどうかは別にして微笑ましいものがある。

今日も薫はアラガミの偏食因子について本を読む事にした。アラ

ガミは危険だがそれでも面白いと薫は思った。オラクル細胞に対して偏食因子を刺激すると偏食因子を誘導でき、自身の望む方向にオラクル細胞を変化させる事ができる。単一細胞にも関わらず、その多様性は人間の万能細胞　iPS、ES細胞などにそっくりだった。細胞一つで思考でき、自己分裂する。ヘイフリックの限界がない。特に思考ができるというのは人間の万能細胞にはないものだ。薫は様々な思考を張り巡らす、なまじ生まれてからずっと考えて過ごしてきた為、脳が鍛えられ、現在薫の頭の回転速度は五歳にして前世の自分に匹敵していた。

薫は考える。

オラクル細胞が霧散するのは、自分たちが象ったアラガミ　オラクル細胞の司令細胞群コアを破壊されると霧散する。その霧散するさいに自ら自身の細胞情報をリプログラムし情報をリセットした為形がなせず霧散したようにみえるんじゃないかと……。原作で榊は言っていた事は思い出す、『アラガミは考えて捕喰する。彼らは進化しているんじゃない。彼らは凄まじいスピードで知識を得ているだけなんだ。』取り込んだモノの知識を得ると言う事はどうやってそれを維持しているのか？　人間のES細胞みたくリプログラムしリセットされた状態で再出現するかもしれない。単体で生命活動が完結しているという事は、アラガミは一種のオラクル細胞の社会かもしれないな。命令をだす上司　コアと請け負う部下　牙などの司令細胞群以外のオラクル細胞。

薫はオラクル細胞の社会も辛いんだな。ニートなオラクル細胞もいたりしてと思ったが余りにも馬鹿らしい思考なので思考を彼方へと追いやる。

アラガミ、オラクル細胞の考察に飽き、興味を失って数日後、薫

は部屋で歌を歌っていた。

「人間っていいな」

しかし、過去の唄を歌った所で知らない人が殆どで薫は寂しかった。人に刺されて死んだ自分が記憶を持った状態で転生した。他人に刺されるほど怨まれていたのに何故転生できたんだろうか？ また怨まれるのだろうか？考える度に鬱な気分になってくる。

「薫、配給のトウモロコシが出来たぞ」

負の思考に囚われかけていた薫を引き挙げたのは馨の鶴の一声。

「食べる」

寂しいと思っていた感情は一気にどこかに消え、薫は机に座り、前世でみたトウモロコシよりも三倍程でかいトウモロコシに齧りつく。原作では食べにくいと言っていたが何てことはない。トウモロコシを横に持ち右から左へと齧る、左端に行ったらトウモロコシを回す。

もぐもぐとトウモロコシを食べ終えた後、呟いた。

「今日も楽しい一日になりそうだな」

薫は楽しそうに馨に笑いかけた。

そんな薫を見て馨もつられて笑う。

ソーマは脅えていた、自分自身の力に。薫との喧嘩で自分が暴力を振り相手を傷つけた。最初は何も思わなかった。外で遊ぶうちに幼いソーマは理解していく、自身の異常。

気付いたきっかけは、公園で薫にピカピカの泥団子を作って貰おうと思い公園に赴いた時の事だった。父親　ヨハネス・シツクザールに暴力を振るなと言われていた、大事になる。とも言われていた。公園に着き、目的の人物を探す。しかし、薫は居なく代わりにいるのは他の子供達だった。残念だったが薫が乗っていたブランコに乗れば気が晴れると思ったのかブランコを寄越せと言った。当然、子供反抗したがソーマの知ったこっちゃない。父親の言葉が脳裏によぎる。何でもかんでもソーマの行動を縛るヨハネスに逆らいたくて言いつけを破った。脳裏の警告を無視し薫の時と同じ再現で胸を

殴った。

酷く鈍い嫌な音が響いた。前回聞いたのとは違う、人体特有の骨が折れる音だ。

数秒たった後に子供の悲鳴が公園に響き渡る。何かと思い、周りの大人が公園に集まる。子供はアバラの骨が折れていた。内臓は傷ついていないが、それでも骨が折れたのだ。十分に大事だ。

自分が何をしたのか理解できないソーマは自分の手を見つめていた。何せ薫を殴った時は違ったのだ。

やがて、父親が迎えに来た。

「ソーマ、暴力を振るわなかったか？言いつけを守れたか？」

ソーマは目に涙を溜め、ヨハネスを見上げる。フルフルと首を横に振った。『天の邪鬼』な息子の意外な反応にヨハネスは驚く。

「振った……。暴力振った……」

嗚咽を上げながら自分に恐怖を抱くソーマ。その事実をヨハネスに素直に話し自分について恐怖も話す。

「そうか、ソーマ。お前は賢い子だ。間違いない、お前は私とお前の母、アイーシャの息子だ。だから、分かる筈だ。今度は言いつけを守ろうな」

ソーマの髪をときながら頭を撫で、ソーマをあやすヨハネス。

後日、怪我した子供のご両親に挨拶しに行き治療費の受け入れ願いや謝罪をする。支部長としての仕事もあるので長々と話せなかったがヨハネスの誠意を受け止め怪我した子供の両親は謝罪を受け入れた。

ソーマが自身の異常を自覚してからすでに一週間。ヨハネスはため息をついた。すでに一週間経っているにも拘らずソーマを落ち込んでいた。深刻な事態だった。何とか打破せねば、とヨハネスは思うが具体的な案は浮かばなかった。

さて、私はどうすればいいのだろうか……。

身近な人物に頼る。これが一番懸命だ。一番に挙げられるのは古い付き合いのペイラーだが、却下だな。とてもじゃないが、あいつ

には任せられない。他は……………。

待て、他が思い浮かばないって言うのはどういう事だ?!まさかとは思うがペイラーと同類なのか?!私は友人が少ないのか?!くっこれではペイラーに言えないではないか……。いや、違う。あいつと違って私は、仕事で忙しいのだ。そうだ、仕事で忙しいのだ!だから、大丈夫の筈だ。私は違う。……………思考がずれた。

ソーマはまだ幼い子供だ。しかも特別な子供だ。どうしたら……。子供……………。遊び相手を作ればいいんじゃないのか?!これだ!

心あたりは……………怪我しにくく年が近い者リンドウ君ぐらいだな。怪我しにくい、ふむ何かが引っ掛かるな。何だ?

以前の子供だ!以前の子供。あの子はソーマに殴打されても泣かず、怪我が軽傷だった筈だ!しかし何故だ?ソーマはP 73偏食因子を持ち……………まあ、今はそんな事はどうでもいい、そういう人間もいるだろう。人間にも天才凡夫とるように老若男女と千差万別だ。その子にもう一度しっかり会わせてみるか……………。

薫は恐怖で身体が動けなかった。

今まで積み上げてきたのは何だったんだろうのか？

積み上げてきたモノがこうも容易く壊され、薫の顔が絶望の色に染まる。

夢や幻であればどれほど良かったか。

しかし、相手はこちらの想いなど関係ない、知った事ではないと言わんばかりにその存在を否認なしに、目に入れさせ、これが現実だと思い知らされる。

緊張感が張り詰められ、空気が酷く重かった。

薫の喉が渇く、潤すためにゴクリと唾をのむ。

薫は心の中で嘆いた。何故、自分はこんな目に遭うのか？日頃の行いはむしろ良い筈だ。いくら、嘆いても状況は変わらない。

しかし、これだけは言わせて下さい。

ソーマ、支部長、何故僕の家の前で立っているのでしょうか？

第四喰目 その思いは散りゆく花に似て……（後書き）

ソーマが支部長にデレました。ソーマはむっつり兼ツンデレだと思
うのは作者だけ？

それよりもヒロイン誰にしようか……………。

ヒロイン無しでも……………。

ヒロインは欲しいですか？

第五喰目 神は死んだ。『神』が人喰ってる時代だけどね……。 (前書き)

シリアス（笑）な展開？

注意書き

ある人物がキャラ崩壊しています。まあ、本編になったら元に戻すつもりですけど……。

キャラ崩壊が駄目な人は即ブラウザバック！

注意書き読みましたか？

いいんですか？それではどうぞ……。

第五喰目 神は死んだ。『神』が人喰ってる時代だけどね……。

ああ、この思いは散りゆく花にも似て……。

詩人っぽい事を思ったが、状況が状況だけに薫は笑えなかった。

（公園デビューがいけなかったのか?!）

外に出て以来薫は思考を乱れに乱されていた。

薫は己の不運を呪う。

余り関わりあいたく薫の思いとは裏腹に親しげにヨハネスは薫に話しかける。

「君、覚えてるか？ 私は公園で会った、ここの支部長をしているヨハネス・フォン・シックザールだ。そこの愚息の父親でもある」

（ええ、覚えてますとも。覚えてますとも。ええ、忘れる筈がない。そもそも、僕は貴方に会うのが嫌で、毎日家の中で過ごしたんだ！ ブランコに乗れない悲しみを分かるのか！）

薫は呑気に挨拶する、シックザールに軽い殺意を抱く。しかし、シックザールはその様子を見て子供が警戒しているのと思い、薫の保護者を呼ぶ事にした。

薫の家のベルが鳴る。

「はい」

「ヨハネス・フォン・シックザールと言う。ちょっと子供の事をお願いをしに来たんだが……。現在、多忙で？」

ヨハネス・フォン・シックザール、その言葉を聞いた瞬間に馨は扉をすぐさま開ける。自分が住んでるアナグラ居住区それに隣接して作られているフェンリル極東支部長なのだ。下手な事はできない。下手な事して仕事クビになり薫を路頭に迷わせるわけにいかない。その思いもあり馨は丁寧かつ素早くヨハネスに対応した。

「薫？これから一緒に出かける予定だったが、支部長との話があるから終わったら行こうか？」

「うん、分かった」

「すまないな。えーと……」

よく考えれば、自己紹介していない事に馨は気付き、

「斎藤馨です」

ヨハネスに簡潔に名乗った。

「すまない、斎藤君」

子供達が大人しく部屋の隅で待っていた事に気付き馨は遊びに行つておいでと促す。

「薫、話が終わるまで公園に行ったどう？後で迎えにいくから」

「じゃあ、ブランコしてくる」

ずっと、ブランコしてないので公園の話しに飛びつく薫だった。

「ソーマ、お前も行ってくると良い。久々に身体を動かさない、最近外出てないだろう？」

薫は走って公園に向かい、ソーマは薫が公園に向かった事に気が付き、慌ててソーマは薫を追いかけた。

ソーマが公園来ると子供達は逃げ出した。骨折の件が尾を引いており子供達はソーマを怖がっていた。その事を知らない薫は疑問を浮かべながらも公園のブランコに乗り出した。

一方、ソーマは子供達が逃げ出した事に深く傷つき落ち込む、言いつけを破った自分が悪いのだ。ソーマは幼くとも賢かった。事態を深く受け止めていたのだ。しかし、子供の心はその事実は重く、幼いソーマの心を深く抉った。

後に、ソーマはわずか十二歳で初任務に出る事なる。次々と任務をこなし、仲間が死に自分だけが生き残りあらぬ噂を流され、幼い頃の心の傷に塩を塗られ心を閉ざしていく事になる。

薫は泥団子の件、以来乗っていないかった。ブランコに目を輝かせながら乗る。子供の背丈でブランコはダイナミックな気分を味わえる。児童期でしか味わえない気分を味わい薫は大変に満悦だった。しかし、その気分は長く続かなかった。その気分はソーマ暗さに当てられ薫は何事と思いブランコを中断する。

「ブランコ乗らないの？」

「乗らない」

薫がソーマに話しかけても、ソーマは上の空で生返事だった。

この事に薫は驚愕し、僕がいない間に何があったんだ?! と心の内で叫んでいた。

やばい、どうしよう?!

薫は混乱の極みに至った。ソーマ 主人公が落ち込んでいる。その展開は先じゃないのか?! いや、幼少期だ。ゲームは少ししか描写がなかった。ある意味これはリンドウさん救出後の話と同じだ。何も分からないという状態だ。

薫は気持ちを落ち着かせ情報を整理した。

情報が殆どないゴッドイーター以前の話し。薫はその状況を正しく理解しこれからの行動は慎重にならざるを得なかった。

一先ずは、ソーマを元気にさせる事だ。

薫は状況を確認した後、まずソーマを元気にさせる事にした。

「そういえば、自己紹介してなかったね。僕は斎藤 薫五歳だ!」

「……………ソーマ・シックザール」

「よろしくね、ソーマ!」

「?! ……よろしく」

ソーマは予想だになかった薫の言葉を聞き数秒置いてから答える。返事はぶっきらぼうだったがその返事には歓喜の色が混じっていた。

今まで、友達がいなかったソーマは名前を父親以外に呼ばれず他の人に呼ばれた事が嬉しかった。それ以上に以前、薫を殴ったにも関わらず、怖がらず普通に接してくれる薫に好感を持った。

「ソーマ?一緒に泥団子作ろうよ」

「いいのか?」

無邪気に笑い遊びに差そう薫にソーマは素直に嬉しさを表すのが恥ずかしく控えめに聞く。

「一緒に遊ぼうよ!」

「うん」

この時、初めてソーマが笑い。薫は行き成り元気になったソーマを見て吃驚する。急な変わりように驚いたが元気になってくれたのならいいや!と特に考えなかった。

ソーマの笑顔につられて薫も一緒に笑顔をソーマに向ける。それを見たソーマは満面の笑みを浮かべた。

薫とソーマは泥団子で遊んだり鬼ごっこしたりして遊んでいた。

無論、鬼ごっこはソーマの身体能力では薫は勝てないので前世から優秀な脳を活用しソーマを詰将棋の様にして追い込み鬼ごっこしていた。三次元な運動を思考と同時併用するのは初めてでは不慣れな薫はソーマより疲れ果てていた。薫は薫で思考の手加減をしていたし、ソーマはソーマで身体能力の手加減していた。

ソーマは感動していた。これが友達なんだ！と薫との遊びは楽しかった。

知らない事を薫は知っており、オラクル細胞の社会の話とか面白かった。

色褪せていた世界に色が染みわたりソーマの世界は色を取り戻す。楽しい時間は過ぎるのが早い。話が終わったのかヨハネスと馨が公園に迎えに来た。

ヨハネスは涙を目に溜めていた。ソーマが無邪気に笑う姿を見て、涙腺は崩壊しかかっておりヨハネスは根性で粘っていた。鼻水は先ほどから止まらない。

「ソーマあ、良かったなあ。ぐっアイーシャあ。私は……私はっ！………私はっ！！！！！」

今は亡き妻に泣きながらソーマの小声で報告するヨハネス。

時を少し遡る。

馨との話をヨハネスは早々と終え用件を済ませた。と言うより公園で二人を見るのが用件だった。馨にソーマの様子を伝え薫に協力をして貰えないかと頼む。一度だけとは言え溺愛している弟を殴りアバラに罅を入れたのだ。余り良い顔は出来ない。しかし、支部長としても親としても頭を下げられ馨は渋々協力した。

初めは普通だった二人だが、徐々に二人ともおかしくなっていた。

馨は薫の笑みを見て先日の公園に迎えに行った時笑ったに薫綺麗な笑みが馨の脳裏を駆け巡り悶えた。

普段無表情で思考に耽る姿から、考えられない。ふと、馨に見せるニパツとこちら向ける。馨の薫への溺愛は深まるばかりだった。

ヨハネスは歡喜に震えていた。

（私は間違っていないかった！やはりこの子供に合わせて正解だった！）

ソーマがつ！ソーマが笑ってる！くっビデオカメラを持ってくればよかった。

ヨハネスは手元にビデオカメラを持っていない事に悔いる。

時は無限だが人の時間は有限だ。譬もヨハネスも余韻に浸りたかったが、薫達の前に出ていき迎えに行った。

その後、ソーマは誕生日を迎え九歳になりソーマはゴッドイーターとしての訓練を受ける事になった。薫とは疎遠になり、次第にソーマの記憶から楽しかった思い出は忘れていき、楽しい記憶は苦痛の記憶で上書きされ、苦痛の記憶だけ残る。

一方の薫はソーマに少し遅れて誕生日を迎え、六歳になった。義姉の聲から誕生日プレゼントに赤淵の黒いバンダナを貰い毎日頭に巻くようになった。

薫はソーマとは疎遠になったが、逆にリンドウと会うようになった。薫は前世の経験から何か僕にやらせようとしているなと感じ取る。しかし、邪な感じしないので実害が来ると思ったら逃げる方針に決まった。

また、一年が過ぎる。特に変わり映えもしない毎日に薫は満足感を得ていた。リンドウが相変わらず薫に積極的に接する姿に何処か前世の両親を思い出す。

ある日の事だった。神機を見せてくれたリンドウに他の人が神機を触る為の手袋をくれた。

「そいつを嵌めて、触ってみな。疑似的な剣の勇者だぞ？ 薫」

そうそう、ない機会に巡り薫は喜んで神機を弄る。イヴエイダやブラッドサージを見て薫はゲームでしか見られなかった感触に興奮する。

リンドウは余り見られない、薫の無防備な姿に笑う。

神機の適合者である、リンドウを尻目に薫は弄りに弄る。リンドウが、

「そこ開けるのか……」

と落ち込む程、薫は神機を弄った。別れの時間になり神機を薫は返す。名残惜しそうな目をした薫に明日も又来るとリンドウは背を向けながら言った。

聲に神機を触らせてもらったと薫は嬉しそうに言った。神機はこうだった。などと説明していく薫。遊び疲れたのか薫は糸が切れた人形みたいに突如動かなくなった。

すぐさま駆けより脈を測る。ただの遊び疲れと判断できた聲は一息つく。

そのころ、ソーマは毎日の訓練や実験に追われていた。

訓練や実験が終わった後、別れの唄 m y l i f e を聞きながら夜空を見るのが日課になっていた。

傷ついた身体や心を癒す唯一の時間。

身体が半分アラガミの彼は人間と自分の違いを知り孤独を感じ思考に耽る。

ソーマ・シックザール、十一歳。ゴッドイーター開始まで残りわずか……。

物語は着々と始まりに近づいていた。

第五喰目 神は死んだ。『神』が人喰ってる時代だけどね……。 (後書き)

ヒロインどうしょうか……。

ゴッドイーター本編開始までに何か希望がなければ、ノンカップルで行こうと思います。

作者自身恋愛した事ないので作り方フラグは折った事はあっても立ってた記憶はないです。

感想の制限は外してます。物語の希望があればどうぞ！

第六喰目 ははは、はあ、おかしいな幻覚が見えるよ。妖精が見えるよ。

（前書

現在、メインヒロインの希望はリツカさんです。

このまま何にも本編開始までに何もなければ彼女でいきます。

ノンカップルが良い。

アリサ・・・etc etcが良いと言う方は感想の制限を外して
るので

気軽にキャラクター名のみでもいいので書いてください。

今回の話は正直すまなかったと思う。

でも、これは初投稿から決めていた事なんです。

タイトルで大半の人は分かったんじゃないかな？

第六喰目 ははは、はあ、おかしいな幻覚が見えるよ。妖精が見えるよ。

少年が立っていた。

晴れ渡る青空の下、心地よい風が吹く草原の丘に立っていた。

年は十代後半のくらいだろうか……。

鈍く光る銀色の髪に赤淵のバンダナをしていた。

少し強い風が少年の髪を揺らす。

少年は何をするわけでもなく、ただ待ち人を待っていた。

草を踏みしめる音が段々と大きく響き、少年 薫の耳に入ってくる。

丘に顔を現したのは金髪碧眼の少年ソーマ・シックザール。

対照的な二人が対照的に立つ。

「待たせたな、薫。じゃあ始めるか」

二人とも目で合図し腰に手を伸ばし声を張り上げる。

「行けっ！ エリック」

「行けっ！ リンドウ」

薫は腰に手を伸ばした後、球体状の入れ物を投げる。

中から出てきたのは、オウガテイルだ。

ソーマから出てきたのは、ハンニバル。

「リンドウ、切り裂くだ！」

ハンニバル　リンドウは、オウガテイル　エリックに向かい
その手甲のついた腕を振りおろす。

「エリック！華麗によける！」

エリックはハンニバルの切り裂くを優雅な動きでかわし尻尾で顔面に攻撃した。

「くっ相変わらず。おかしいぞ、お前のモンスター」

ソーマが薫に文句を言う。

「エリックは華麗だからエリックなのさ」

「いや、その理屈はおかしい」

ソーマは理不尽だと思った。

自分のパートナーはハンニバルと言われる種族なのだ。育てるのが難しく、さらに言えば捕まえるのも難しいと言われるモンスターだ。

なのにだ！

ハンニバル種の中でも素早い攻撃を次から次へと避けていく薫の持つオウガテイル エリックだったか？ あれはおかしい。時折、此方を見て優雅に、そして何処かむかつく顔で避ける。

オウガテイル種、それはどこでも居るような種族だ。

所謂、ペットしか使えないような種族だ。

しかし、薫のオウガテイル エリックは違った。オウガテイルなのにどこか王の風格があり気品があった。

そのオウガテイル他のオウガテイルとは違った。

ハンニバル リンドウは困惑していた。モンスターの王者と言われてる彼が弱者のオウガテイルに翻弄されている。

視認もできない一撃で圧倒的な実力を見せつけて終わるつもりが、結果はどうだ。

全くもって正反対の結果だった。圧倒的な実力の前に膝をついているのはこちらだった。

薫の声が草原に響く。

「そこだ！行けっエリック！必殺、華麗なるエリックシュートだ！」

「待て、……何だ。その技名は？！」

ソーマの疑問は華麗にスルーしエリックは口から極太のレーザーをだしハンニバルを沈黙させた。

「何か納得がいかないが、賞金だ」

そう言つてソーマは薫に賞金を渡し丘の上を去って行つた。

姿が見えなくなった後、エリックの様子がおかしくなる。

「ぐるるる」

エリックは光に包まれ形態変化をしようとしていた。

獣みたいな足は人間の様な足みたく細くなり、胴体からは腕が生え、頭にはオウガテイルの名残なのかオウガテイルの頭蓋をかぶっていた。

進化したエリック。知能は進化し完全体となった。

エリックは空を見上げ遠吠えをし、その声を草原全体に響き渡らせる。

自分の存在を示す為に。

「にゃあああああああああああああああああ！」

「はっ」

薫は冷や汗をかいていた。

パジャマは薫の汗を吸い、かなり濡れていた。

お気に入りのナイトキャップも薫の汗でぬれていた。

「はぁ、はぁ何だ……。夢か……。ああ、夢で良かった。夢で良かった。本当に………」

何だよ最後のエリックって思いっきりマスク・ド・オウガじゃないか……。……。

薫は小声で愚痴を零した。

時間はまだ、午前三時。日が昇るまでに最低でもあと三時間。

着替えてから、寝なおそう。そう思い薫は着替えそしてシーツも替えてからベッドに入った。今回はいい夢見れますようにと切実に願いながらベッドの中で目を閉じた。

今度は何も夢を見ず朝を迎えられた事にほっと息をつく薫。

いつも通りに配給の品種改良を施したトウモロコシを食べ、今日来る予定のリンドウを待った。

家のベルが鳴り薫はリンドウが来た！と思い玄関に走り出す。

開けるとそこには薫の予想していた通りにリンドウともう一人いた。

……サクヤさんじゃない？

薫は記憶の中を探るが、この時期でリンドウと一緒にいた人物を知らない。

サクヤはリンドウの五つ下だ。

従って薫の六つ上になる。目の前の人物はどう見てもサクヤさんと同じ年に見える。しかし、サクヤの関係性はなさそうに見える。リンドウの交友関係、性癖を前世の記憶から探ってみるが、やはり思い浮かばない。

謎の中性的な少年……………。

…………… 中性的？

謎？

ん？少年？

え？あれ？

思考が混乱していたがリンドウを玄関に居させるのも悪いので居間に通す。

「おう、今日もよろしくな。あつそれとこれお土産だ。薫好きだろ？こついの」

リンドウが薫にフェンリルの手土産を渡す。土産は子供が使う物じゃない本格的な顕微鏡セットだった。

本来だったら薫は大層喜びリンドウにありがとうと抱きついて感謝を表していたが薫は安心していて、

「ありがとう。リンドウさん」

と返すのが精一杯だった。

リンドウがその土産を選んだ理由は簡単だった。薫の好奇心を観察方面に持って行きたかったのだ。

その思惑を露と知らず薫は居間へ案内する。

少年？はリンドウの後ろを着いて行き、こちらを時折見て頼染めてモジモジとしていた。

薫は一つの事柄を思い出した。その人物は最初から居た。しかし、その人物が出て来るのは物語のフィナーレを飾る時だ。

薫にとって最悪な推測が出てしまった。

.....はい？

いやいやいやいや。

何故僕に見えるのさ？！

いや、触ったよ？触ったけども.....ちゃんと整備用のグローブ着けましたが？

何で？何でなの？！

見えると言う事は僕はオラクル細胞に犯されてるの？

そう、薫の懸念はそこだった。

リンドウの後ろに居るのは少年の名は レン。

リンドウの神機 の疑似人格だ。

薫が幼児期からの懸念事項、物語の後半。

主人公が神機の不調でアナグラで休んでいた所、アナグラにアラ

ガミ侵入がある。

アナグラには非戦闘員しかおらず対処できる人物がない。

その事を知った主人公は神機の整備室に向かう。

そこに居たのは、神機の整備士　楠リツカ。

リツカは神機のロック作業の最中だった。

主人公はロックされていない、リンドウの神機を見つける。

主人公は迷わずリンドウの神機に手を伸ばす。

リツカは適合していない神機を使うとオラクル細胞に捕喰されてしまうと言うがオラクル細胞に侵されても尚主人公は手を離さず。侵入してきたアラガミ、ヴァジュラテイルを切る。それだけでは効き目が足りなく再び活動を再開するアラガミ。

細胞に侵され動けない主人公に助けに入ったのが　レン。

リンドウの神機のオラクル細胞に侵され、それからレンが見えるようになるのだ。

その後、主人公がリツカに抱きつかれるのだが、ゲームを男主人公でプレイしていた薫は若干イラッとしていたのは完全な余談である。

話を戻す。

現在、薫は神機の妖精？レンが見えている。

つまり、見えている〓オラクル細胞に侵されている〓死ぬ。

薫の脳裏に文字列が並ぶ。

（ああ、短い人生だったな……。お姉ちゃん旅立つ不孝を許してね）

薫は二度目の人生の幕切れが早すぎるなと思ったが虫のよすぎる記憶を持ったままの転生だ。所詮のこんな者だろうと思いき直した。

リンドウは様々な問題を薫に問いかける。薫に是非ともフェンリの道に来て貰いたい為だ。

リンドウの問題に答えるが薫は思考の大半をレンに囚われており片手間で答えていく、しかし薫は迂闊な答えをだしてしまう。

「オラクル細胞の話しに終末捕喰つてのがあるが、あれはどうだと思っただ？」

「終末捕喰は巨大アラガミ ノヴァによる地球の再生システム……っ?!」

そこまで言うてから薫は気付いてしまう。

自身が迂闊な答えを言ってしまった事に……。

しかし、リンドウは薫の答えに興味を持ってしまった。

「何？ 薫それはどういうことだ？」

リンドウは顔が強張る。薫の答えはこの世界の真実にも等しいのだ。興味を持たざるをえない。

「……………」

薫は答えない。

薫は答えられるわけがなかった。

しかし、薫は答えるわけにはいかなかった。

覆水盆に返らず。

盆から零れ地面に落ち張った水は盆に戻らない。

一度、起こった事はなかった事にはできないのだ。

何も答えない薫を見てリンドウは聞き出すのを諦める。

別れ間際までその話題に触れなかった優しさを薫は感謝した。

リンドウは帰宅後フェンリルの自室で考え込んでいた。

ああ、間違いない。薫はこの世界の真実に気付いている。

何処か遠くを見てるのはこの世界の結末を知つての事だろう。

あの洞察力。思考力。物言い、演算能力。その他の技能。幼いながらも如才がない。

はつきり言つてしまえばアレは異質だ。

生きるのが精一杯の世界に幼児の教育なんてものは各々の家庭でやるしかない。

だからこそ、その異彩が分かる。

薫は幼いながらも気付いているのだろう。己のその身に納まらない程の才覚を……。

初めて出会った時以外に薫の凄さを見た事がなかった。

最初は絵だけの才能かと思った。

しかし、姉上達にその推測は外れだと分かった。

薫の遊びは基本的に本を読む、パズル。

幼児がやってる様なパズルじゃなかった。

三千ピースのジクソ パズル。

知能が高いなんてもんじゃなかった。

大人や成長した児童がやるのなら、まだ分かる。

だが、薫は身体が動けるようになって数ヶ月後にやり始めたのだ。

馨さんが過保護だったのか、薫は歩き始めるのが一般より遅かったらしい。

所がどうだろうか？動き始めてからは……………。

出てくる言葉が全て陳腐に思える。

思えば、薫があの絵を描いていた時俺は圧倒されていた。頭を垂れたくなるようなそんな錯覚を受けたのではないだろうか？

自身の能力が異常だと薫は分かったのだろうか？ それ以目立つた行動をしていない。

俺の見立ては間違っていないかった。薫にアラガミに興味を持たせ、考察させ結果が、

『終末捕喰 巨大アラガミ、ノヴァによる地球再生システム。』

馬鹿な俺でも分かる。その答えが事実だと言う事に……。

FWC付属学校にでも入れた方がフェンリルにも慣れ高度な教育が受けれる。

これは何が何でも薫をフェンリルに引きこまなければならない。強いては人類の為にだ。

リンドウが帰った後、レンはまだ薫の家にした。

薫は恐る恐る手をレンに手を振ってみる。

レンは薫にニコツと笑い手を振り返した。

薫はその笑顔が眩しく思わずうつとよろめいた。

これが、ニコポの力が恐るべしレン！

「あれ？ オラクル細胞はもう侵喰してない筈なんですけど……。まだ、体調が悪いんですか？」

（何？！侵喰してない？）

小さな声でボソツと放たれた言葉に薫は鬱だった気分が一気に吹っ飛んだ。

しかし、薫はその嬉しい知らせに囚われ。深い事実にお気付けなかった。オラクル細胞に侵食されていると身体はそれに合わせ疑似的なゴッドイーターとなるのだと。

「いや、体調は大丈夫だけど」

「そう、良かった」

そう言ってレンはまた薫に微笑む。

「あれ、そういえば何でここに居るの？というか誰？」

薫は知っているが一応聞く。

「自己紹介してませんでしたね。僕レンって言います。神機使い適合候補者です。フェンリルの医療班配属になります。って幼い君に

「言っても分からないか」

いや、それ嘘じゃん。知ってるって神機の妖精でしょ？

「あつても、幼くても責任は取って貰いますからね？僕を隅から隅々まで弄んでくれたのを覚えているんですよ？」

いや、責任って……レン。君男？でしょ……。

あれ？ 性別ゲームに書いてあつたつけ？

とにかく君神機だつて……知ってるんだよ？

……。

それに責任どうやって取るんだよ。

レンは薫に責任云々を言うだけ言つて帰つて行つた。

もしかして、調子にのつてリンドウさんの神機弄つたからこうなつたのか……。

「あははははは………はあ、どうしよう。これから」

湯いた笑い声とため息が一般より広い居間に響き渡り消えていく様は、薫の心を表しているようだった。

第六喰目 ははは、はあ、おかしいな幻覚が見えるよ。妖精が見えるよ。

（後書

レンは男だって？

いや、きっと主人公が男女いるからどっちにも対応できるように中性的にしたんでしょう。

主人公が男の場合は女。女の場合はryという身勝手な理論を振りかざしてみる。

ちなみ最初の話は作者の夢話し（実話）でした。

完全な余談になります

l i l i u mって曲を弾いてるんですけど以外に音色に感情込められますね。

自分でもびっくりです。みなさん知ってます？l i l i u m

第七喰目 おおう、見事に失敗した。（前書き）

漸く、漸くです。

漸く出来ました。

まあ、相変わらず酷い出来ですがどうぞ！

第七喰目 おおう、見事に失敗した。

薫は悩んでいた。自業自得とは言えど薫にとってこの世界……フ
エンリル極東支部と言う組織は死亡フラグ以外の何ものでもないの
だ。

現在、雨宮リンドウの年齢は十九。原作開始の年齢は二十六だ。

西暦二千六十四年。

残り七年。

薫はその七年の間に今までに立ててきてしまった。無駄に乱立す
る死亡フラグをどうにかしなければと考え込んでいた。

前世から持ち前の頭脳で何とか死亡フラグを回避しようとするが、
対人関係のスキルが無い極めて低い為薫はいつも空回りで終わって
しまうのが常だった。

もちろん薫はその事に薄々と気付いているが認めたくなく現実逃
避をしているだけである。

一先ず薫は頭の中を整理する。

まず、交友関係の把握だ。

年上にまず、義姉の斎藤馨が挙げられる。その友達雨宮ツバキ、

弟 リンドウ、リンドウの幼馴染 橘サクヤ。そして最も薫が
関わりあいたくない相手 ヨハネス・フォン・シックザール
支部長だ。

直接は薫には関係ないが馨はフェンリルの事務員だ。ゴッドイ
ターとは密接ではないが関係はある。

次に同年代。

ソーマ・シックザール。

彼については薫は微妙と判断をつけた。原作開始以前に関わる死
亡フラグが立つだろうと予想している。

逆に原作開始から最も安全フラグだろうとも思っていた。

薫は重要人物を忘れていなかった。

エリック上田だ。

本名、エリック・デア・フォーゲルヴァイデ。

ゴッドイーターバーストでは彼らしき人物マスク・ド・オウガの
予約特典の為に薫は予約したのだ。それほど、彼を気に入っていた。

だからこそ、薫は忘れていなかった。

彼が本編に置いて唯一主人公の目の前で死ぬ事を……。

薫はここで疑問を持つ。

原作主人公　　は誰？

自分の立ち位置はそれで決まる。

薫は急に足が止まったなと思い周りを見上げる。

馨に連れられてフェンリルの事務室に着いていた。

リンドウ、ツバキ、馨が見送る中で薫は先日リンドウに向けて言った己の言葉が蘇る。

（これってやばいんじゃない……。）

しかし、特に何も聞かれる事もなく簡単な講義を聴きその後簡易なペーパーテストを受けそのまま馨と一緒に帰宅する。

真新しい赤色のフェンリルの制服を着込み、もはやトレードマークとなっている黒と赤のバンダナを身につけ薫はフェンリルの支部長室に来ていた。

支部長室には四人。

薫とその保護者の聲。

私服の男　　先日薫に講義をした人。

そして、私服の男と仲良く並んでいるヨハネス。

ヨハネスは薫を見て大層驚き思わず声を上げる。

そんなヨハネスを見て私服の男は思わずヨハネスに言葉を発した。

「ヨハン、君が珍しく素直に驚きの感情を表すとはね……。まあ、こんな子供が驚くべき頭脳を持っていると驚く気持ちも分かるがね。」

「榊博士、この場では私の事を支部長と呼んでもらいたい。公私の区別をキチンとね。」

「あの、支部長？ 薫は何処に配属されるのでしょうか？」

いつもの気丈でクールな性格は何処へ行ったのか聲は元氣なく質問する。

「斎藤君、安心していい。薫君が配属されるのは研究班だ。しかし、驚いたよ。まさか彼の知能は榊博士を凌駕するとは……正直言つて結果を見て啞然とした。それもソーマと友達 薫君と聞いてね。」

薫はその会話を尻目に落ち込んでいた。

（おう、最年少フェンリル職員になってしまった。おのれえ、リンドウさんこの借りは絶対に……。）

薫はリンドウにその矛先を向ける。

無論、薫自身もそれがやつあたりと分かっていたがやつあたりせずいらなかった。

（絶対にサクヤさんと結婚したら浮気の証拠でうちあげてやる……。）

薫がリンドウにとって不穏な企みの計画を立てている間にドンドンと薫のフェンリル入りの話が進む。

「さて、大人の話だけここまでにして……薫君、聡明な君の事だ……。自身の持つ異常なまでの才能を気付いている筈だ。」

馨と榊ヨハネスの話が終わり、ヨハネスが薫に語り出す。

しかし、自分の能力対して疑問を持たない薫は何の事が分からない。「才能？　なんの才能の話だろう？」と。

それもその筈、薫は前世から自身の能力に対して疑問を持たなかったのだ。そして、現在薫は自身と他の比較対象がいない。薫は才能と言われても何の事だと首をかしげるしかできなかった。

薫自身の対人能力の低さそこにあつた。

比較対象、薫にはそれが無かった。

薫の前世　薫の周りは所謂天才しかいなかったのだ。

その中でも薫は一番に立っていた。一を知れば十を知る。それは当然と言えるほど天才集団だ。

もちろん薫にも出来なかった事もある。薫はどちらかと言つと貪欲だ。

ただ、それは興味がある物と付く。

できない物は出来る友達を観察し自身に適応させる。薫のやり方だった。友人は薫の能力と呼んでもいい能力を面白がり様々な事をやらせてみたがやはり、そこは薫で興味のない事は一切身に付かなかった。

薫も友人達の持つ能力に羨ましいとも思わなかった。いくらそういう才能を持っても活用しなかったらただの持ち腐れと分かっている。それに持っているだけ好奇の目に晒されるのだ。

だからこそ薫はそのグループでしか付き合えず。友達はその中でしか自分を表現できなかった。

他はどうだったか？

周りは当然その集団に近づけない。文字通り格というモノが違なのだ。

誰もがその才能に嫉妬し劣等感を抱く。

当然それに対して敵意を抱きその牙を向けられる事もしばあった。

前世の姉は純粋な薫を穢したくなかった。異常なまでの家族愛。弟への愛。

それがゆえに薫は何も知らなかった。

自身の才能も周りの思惑も。

薫の前世の姉もまた、天才と呼ばれる人物だった。

それが故に周りの世間の眼差しは人一倍酷いものだった。

敵意好意すべて押し掛かる。

しかし、薫と居るそれを和らげてくれ癒される。薫の友達もそうだった

幼い頃から姉や友達に守られ続けられる。幼い頃から薫は比較対象は天才しかいなかった。

「薫は純粹なままで居てほしい。薫を護る。」

一見するとその言葉はどれほど愛に満ちた言葉だろうか？

しかし、それは違った。

その言葉は酷く醜くい人間の本性が表されているものだった。

薫を自分の都合の良い人形、道具としているのだから……

有り余る才能のおかげで世の中が窮屈に思えてた。

光も差さない酷く狭い闇の中、そこに自分と同類で一筋光が差し込んできたらどうだろうか？

彼ら彼女らにとって薫はそういうものだった。

待ちに望んでいた。温かい光。安らぐ光。

誰にも渡したくない。

自分だけのモノにしたい。

自分たちで奪い合った結果、薫の灯が消える未来が見える。

ならば、自分たちから薫を離してしまおう。

高校では薫と一緒にではない。

平等に薫と接するのだ。

狂気にも似た思いが彼女らを蝕む。

だが、薫は対人関係の能力は彼らに守られてた為、低い。

薫は知らずに歪な人間にそうなる様に成長を促されていたのだ。

榊博士と薫の二度目の対面が終わり、薫は明日よりフェンリルで働く事になった。

直属の上司はペイラー・榊。

薫の所属は研究班だ。

この時薫は九歳になっており、どこの魔法先生もかくやと言うところだ。

しかし、薫はこの状況に悲観的にはなっていなかった。

ただ、薫は学校に入っていないのだ。

薫は学校に行きたかった。

前世では灰色の青春どころか真っ暗な青春を送っていた為薫は学校に行きたい。

しかし、薫が学校に入っていない原因は本人は気付いていないが薫自身にあった。

無駄に発揮するカリスマ。

異様に高い演算能力。

これらの要素が薫を学校に入れてない理由だった。

教育事体は馨やツバキ、リンドウが教えており、まあリンドウは資料を渡すだけだが……。

薫はそれだけ知識を吸収している為、特に問題ないだろう、と判断されていたのだ。

その事も露と知らずに薫はこれから送れるだろう学校に対して思いはせていた。

しかし、薫の教育は小学校ではなく 榊博士によって行われる
ことになる。

後日、薫はその事を聞いて枕を濡らした。

ソーマ十二歳、彼の初任務まで後半年。

第七喰目 おおう、見事に失敗した。（後書き）

ソーマの初任務は十二歳、西暦二千六四年

原作は二千七十一年。

原作スタートになりますね。あと少しです。

さてさて、感想でも言われてた様に原作主人公ですが……。

正直に言うとなつ案があつて未だに迷つてゐるんです。

これ以上言つとネタバレになつてしまうので言えませんが、何かアドバイスをいただけるとありがたいです。

現在ヒロイン票は

リツカ2

アリサ1

になります。

原作までまだあるんでよろしく願いします。

第八喰目 ん？何か悪寒が走ったような……。 (前書き)

注意、かるい鬱が入ります。苦手な方は回避してください。

第八喰目 ん？何か悪寒が走ったような……。

ユーラシア大陸でアラガミの掃討戦を発案したらしい。

薫がその事を聞いたのはつい先日だった。

情報源はいつものようにストーカーの様に薫に付添うリンドウと新人のタツミだった。

若干薫はリンドウはアレなのかと考えたが自分の貞操が心配しなければなくなるので薫は考えないようにした。

フェンリルの研究施設で働く事三日。

薫は青春にハンカチを振っていた。

働くと言っても薫は榊の手伝いや講義を聴くだけで他は特に何もしていない。

変わった事と言えば、原作キャラ 大森タツミと関わった事ぐらいだった。

その日、大森タツミは榊博士の研究施設に指定されたアラガミ討伐の仕事を受け回され、完了したので報告に来ていた。

入って一年でゴツドイーター防衛班の成績上位に食い込むのはかなり優秀。

そこに榊が目を付けタツミにちよくちよくと仕事を頼むようになった。

それに応じてタツミの能力もさらに上がりそれに伴いまわされる仕事も増えたのは余りにも笑えないが。

「おいおい、子供がこの研究施設に入っちゃ駄目だろ？ それに学

校はどうした？」

薫はタツミに抱き抱えられジタバタともがくが身長差がある為逃げ出す事は無理だった。

現在、薫の身体は造り変わっておりオラクル細胞を自分の細胞に合わせていた。

疑似的なゴッドイーターとなったわけだがそこは本職のゴッドイーターには敵わない。

抱き抱えている子供をタツミは見る。

見覚えのない姿だ。間違いなく記憶に残るだろう容姿をしていた。

「ん？ 名札？」

タツミは薫を降ろし胸元に付いてる名札を見る。

フェンリル極東支部

技術開発部所属

斎藤薫 九歳です。

いじめないで。

何か余計な文字が入っているが間違いなくタツミの報告先の部署に所属している子供だった。

普通は所属と名字だけ書いているものだけだが薫のは違った。幼い事を考慮してなのか、御丁寧に自己紹介の欄まである。

タツミは白昼夢でも見ているのだろうと思い一度頬を抓る。

（痛い。夢じゃない。）

タツミは薫をマジマジと見る。

どう見ても子供だ。仕草も行動もすべて。

鈍く光る銀髪の上に巻かれたバンダナが実に映えていて似合っている。

服は小さいサイズの赤と黒のパーカーとハーフズボン。

顔はバンダナに隠されていて見えない。

困惑している最中さなかタツミは薫に榊の場所を聞く事にした。

が、榊が研究室に戻ってきた為それは必要なかった。

「おや？ 誰かと思ったらタツミ君か。ここに来ている事は終わってたんだね？」

「あっはい。終わりました。」

そう言って報告書のデータと素材を渡す。

榊はそれを受け取り薫に目をやった。

「紹介するよ。この子は斎藤薫君。私に付いた部下だ。まあ、教育係でもあるんだけどね。」

タツミは益々困惑する。

（教育？ いや、F W C 付属学校行けばいいんじゃないか？）

タツミが考えに耽るといつの間にか榊がタツミの顔の近くに近寄っていた。

「不思議かい？ この私が研究以外に教育をすると事は？ でもね、私はスターゲイザーだ。全てを観察したいのだよ。この子はその一つさ。この子は実に興味深い。」

榊は研究室の天井を見上げる。

しかし、彼の意識は天井ではなく、さらにその上の空に向いていた。

タツミは薫に意識を移す。小学校にも通わずフェンリル入りとなった子供に興味がそそられた。

タツミと薫リンドウはこれ以降頻繁に会う事になる。

その一部始終を見ていた薫は悪寒が走る。

（はっ 阿部さん スターゲイザーじゃないだろうな？ だから、顔を近づけるのか……恐ろしや。）

若干、蚊帳の外だった薫に榊の声が掛る。

「薫君、紹介しよう。彼は太森タツミ君。防衛班 二班所属の剣型神機の適合者だ。彼は優秀でね私の欲しい物くれる。良い神の狩人だ。」

「その紹介は酷くないですか？ 博士。」

「すまない。でも感謝しているよ。」

再び、タツミに顔を近づける榊。

それとは逆に薫は二人から遠ざかる。

薫は榊が苦手だった。

「薫君？ 聞いてますか？」

リンドウに憑いてる妖精 レンが薫に話しかける。

「聞いてるよ？」

それを聞くとレンは再び楽しそうに薫に話しを続ける。

曰く、人間は贅沢な味覚だ。

曰く、神機をもうちょっと大事に扱ってほしい。

曰く、薫君は丁寧に扱ってくださいよね？

等々。

（こいつ隠す気ないな。自分が神機だと……。）

薫はレンの所々のセリフに自分が神機だと仄めかす様な言葉を吐いてる事について頭を抱えていた。

これは神機と気付いて欲しいかそれとも気付いて欲しくないかと大変に分かりづらい。

（とりあえず、保留にしよう。）

薫は考えるのを止める。

自分が居る時点で原作がずれると分かっていた。

ふと、時間を見てみると一時五分前だ。

昼休みを終わりにして午後一時から榊の手伝いをしなければならぬ薫と一緒に食事をしていた。レンと別れる。

エレベーターで地下三階に下り一番奥の部屋に向かう。

そこには神機の新しい案を考えている榊がいた。

「おつ来たねえ。とりあえず、今回は君は手伝いじゃなくて神機についての意見が聞きたいんだ。前々から考えてたんだけど、どうも上手くいかなくてね正直に薫にすぐる感じがすまないけど力を貸して欲しいんだ。」

その言葉を聞いて薫は、

（ああ、新型神機の事か。）

と理解する。

薫にとって神機は旧型よりも新型の方がなじみが深い。何せゲームでは極東支部初の新型神機の適合者が主人公として活躍するのだ。

薫はついにここまで来たかと腕を組み「うんうん」と感慨に浸った。

「何か唸ってるようだけど……どこか具合でも悪いのかい？」

柙に顔を近づけられる薫。

「いえ、大丈夫です。それよりどういう事で悩んでるんですか？」

薫は腰が引いたまま答えた。

「アラガミのコアに偏食因子を組み込んで加工したのが神機というのはこの間説明したね？」

その問いに薫は頷き続きを促す。

「それが故に神機にはそのコアの特性が出てしまっただ。君も知ってるヴァジラ、そのコアを取り出し加工すると雷の属性が伴った神機が出来上がるわけだ。」

「そうですね。」

「だけど、雷属性の伴ったら他のアラガミには強いがヴァジラな

どの雷を使うアラガミに対して効き目が弱くなる。」

柷は一息つき、再び話し始める。

「逆に万能な神機を作るとなると。逆にオウガテイルなど比較的小さい物しかできないわけだ。」

再び頭を抱えキーボードを打つ柷。

はあ、なるほどと薫は思う。

だからこそ主人公は期待されていたのだ。変形機構を伴った全く新しい神機。

各部位のパーツを取り換えられ討伐対象のアラガミに対して優位に立つ事ができる。

その構造は討伐できる対象が増える事にその神機も比例して強くすることが出来る、最良の循環だ。

新型神機はいつ開発されたんだろうか……。

薫の疑問が思い浮かぶ。

現在、二千六十四年。

主人公のフェンリル入りは二千七十一年。

という事はだいたい一年前ぐらいだろうか……。

新型神機をここで言うとは歴史と七年も違う事になるなあ。

薫は成るように成れと言葉を発する。

その裏には主人公が早く見たいという気持ちがあった。しかし、安易な発言で自分の首を絞めるようになるとは薫は思っていなかった。

「神機の機構をバラバラにしたらどうでしょうか？」

その言葉を聞いた榊はまさに青天の霹靂の衝撃を受ける。

旧型神機ではパーツ固定という先入観で思考が制限されていてパーツをバラバラにする発想が無かったのだ。

榊は恐怖を抱く。

確かに自分は一流の技術屋でもあり一流の科学者でもある。

一流の中の一流。

その自負があった。

実際に今の今まで、事^{こと}勉強においては苦勞のくの字も知らなかったし知識だって無意識の内に頭の隅に置いていた。

所がどうだこの子供は、設計図の神機を一見し神機の構造を把握し考慮した上でこの発言だ。

初めの印象は少し賢い子供としか見ていなかった。

それも特筆するようなものではない。

しかし、知能指数を計測し数値を見ると私を軽々しく超えていた。

その事実には驚愕しながらも二回目の対面を迎える。

柗は事実を知り薫と会っても普通の子供の印象しか出てこなかった。ただ、興味深い観察対象が増えたその認識だった。

その時の薫に驚くべき才能の片鱗さえ見られなかったのだ。

（本当にあのテストを受けた子供なのだろうか？）

柗はそう思わずにいらなかった。

本当の意味で今日薫の才能に触れ、柗は確信し決意する。

（この子に私の全ての知識を受け継がせよう。この子の教育はもつと力を入れるべきだ。）

こうして薫は自身の発言が原因で青春からドンドン遠ざかる事になる。

柗は薫を家に帰し新型神機制作に取り掛かった。

家に帰ってきた薫を迎えたのは義姉　馨だった。

仕事が大分落ち着き蓄えが出来たので仕事を辞め薫に愛情を注ぐ事に専念する事にしたのだ。

ただ、蓄えが出来ただけでは馨は仕事を辞めない。薫がフェンリルに入ると同時に多大な給与の振込が馨の通帳にあったのだ。

馨は最初目を疑ったが振り込んだのがヨハネスと知り薫の名刺に書いてあった電話番号に電話をかけた。

結果的には振込間違えではなかった。

ヨハネスが言うには薫にはそれだけ重要性があり、フェンリルの為に何れは役に立ってもらうのだ。

余りその言葉を信じられなかったがきょとんとしている薫を見て、どうでもよくなり薫との時間が増えるからいいかと思いを放棄した。

ヨハネスは親馬鹿である。

原作でもちゃっかり箱舟にソーマの席をつくり冷たく言葉で突き放しながらも心配していた。

今回の件はその溢れんばかりのソーマへの愛情が形となって現れただけだ。

今まで、ちゃんとした礼ができずにヨハネスは悩んでいたのだ。

そんな中薫のフェンリル入隊の話が出てきた。しかも、薫は特大の原石だという。

ヨハネスはこれに目をつけた。

薫は重要だからと理由で馨の通帳に振り込んだのだ。

ソーマのツンデレはここから来ているかも知れない……。

馨は薫を自分の傍に抱きよせ、薫に今日の事を聞く。

「今日は何かしたのか？ 薫。」

「やったのは神機の研究かな？」

「ほ、どんだ？」

「新しい神機の開発！」

（普通に楽しそうな顔で重要且つ重大な事をサラッと……。）

馨は能天気な薫に呆れたが、薫の頭を撫でよく頑張ったなと褒める。

褒められる事が前世も含め余りない薫は嬉しそうに馨に抱きついた。

急に抱きつく薫に驚く。自分のプレゼントしたバンダナを外し薫の髪を梳くように撫でた。

薫は目を細め気持ち良さそうに馨の為すがままにされ睡魔に身を委ねる。

薫が寝てからも馨は慈愛の笑みを浮かべ薫を愛おしく撫で続けた。

（ああ、薫生まれが変わっても君のままなんだね。今度こそは私のモノに……。それに今、私は姉じゃなくて義姉なのだから。）

馨は慈愛の笑みを歪め、代わりに暗い笑みを浮かべた。

どす黒い背徳感と酷く歪んだ倫理観が芽生えるのが分かる。

久々に味わうその感覚に馨は胸の動悸が高鳴り興奮した。

そして馨は感謝した。自身の幸運に。

馨は随分と昔の事を思い出す。

そもそも、馨が薫を拾ったのは自分の弟に髪の色が違うだけで瓜二つだからだ。

最初は気紛れだった。

しかし、育てていく内に余りに行動や仕草が薫そっくりなのだ。

時折、こちらが薫を見ているとこちらを向いてニパツと笑う仕草は薫そっくりだ。

感だった。馨の感だった。

ドクンツと馨の胸が高鳴る。

馨だけが持つ感覚の様な勘。

（この子は薫だ。）

馨はそう感じた。紛れもないあの薫なのだ。

『アノカオルノウマレカワリナノダ』

（自分が薫を間違えるはずがない。）

馨は超能力とも呼べる感覚を以て、薫が薫と知ると歓喜した。

（……薫は誰にも渡さない。）

馨は人知れず歪んだ愛情に誓う。

第八喰目 ん？何か悪寒が走ったような……。 (後書き)

愛は正の感情であるとは限らない。

吾輩は……トレーナーである。バッジはない。(前書き)

お気に入り百件突破！

感想十件突破！

総合評価三百突破！

総合ユニーク五千突破間近！

総合アクセス四万五千突破！

素直にうれしいです。

皆さまのおかげです。本当にありがとうございます！！

記念にゲーム繋がりで行ってみました。

駄文ですがどうぞ！

吾輩は……トレーナーである。バッジはない。

斎藤薫はトレーナーである。

しかし、バッジはない。

というのも薫がここがポケモンの世界と認識して一ヶ月しかたっていないのだ……最も薫はトレーナーになってもバッジを集める気サラサラないが。

薫には所謂記憶があった。ただの記憶ではない前世の記憶を持って生まれたのだ。

死亡フラグを回避する為過した二度目の世界。

しかし、何の因果か薫はいつの間によらこの知らない草原にいた。

何故だろうか？薫は考える。

しかし、考えた結果 摩訶不思議なオラクル細胞は何でもやれそう。と結論づけ根拠はないまま薫はオラクル細胞の所為にした。

ここはゴッドイーターの世界なのか……と考えに耽ながら辺りを警戒しながら散策する。

ハクリューが飛び出してきた！

薫の脳内にその言葉が瞬間的浮かび上がる。

薫は眼が点になった。

蒼い胴体に首元に青い宝石みたいなものに頭に角があった。

東洋の龍の姿をそのまま表現した生き物 架空のゲームの中で存在したとつくが。

ゲーム名、ポケットモンスター。

通称ポケモン。

薫はポケモン世代である。

ポケモンは物理法則をぶち破っている生き物だと言う事も知っていた。

混乱しない筈がない。ポケモン相手どう生き残ればいいか算段を立てる。

たしかにハクリューは大人しいポケモンだ。

だが、薫にとってハクリューはトラウマだった。

「OK、落ち着こうハクリュー。とりあえず、待って。」

薫は焦りながらハクリューが飛びかかろうとするのを制止させる。

ハクリューは不思議と薫に逆らわずじっとしていた。

ゴッドイーターの世界に生まれたと思いきや行き成りそれである。
何が何だか分らなかった。

ポケモンはサイヤ人ぐらいしか飼えないペットであると薫は認識している。

この世界には体温一万度のマグカルゴという生き物がいるのだ。

（どうみてもアスファルト溶けるでしょ?!）

薫はゴッドイーターより最悪な世界に来てしまった事に嘆く。

ややあつてから出てきたハクリューは薫に懐いてる事が分かった。

しかし、ハクリューにトラウマを持っている薫。

薫は触れなかった。

「きゅ〜?」

ハクリューが悲しそうに薫の顔を見つめる。

薫は罪悪感に耐え切れず恐怖を振り切ってハクリューを撫でる。

「きゅ〜!」

ハクリューは嬉しそうに鳴き。薫の顔をぺろつと舐める。それとは逆に薫の顔は恐怖で引き攣ったが……。

それからという物ハクリューと薫の奇妙な共同生活が始まった。

見渡す限り草原が広がっており町は見えない。

自給自足の生活を送りつつ町に向かい。様々な手続きをしトレーナー登録をしたのだ。

この世界において薫は戸籍がない。しかし、トレーナーは顔写真や声紋等の生体登録をする為戸籍の代わりになるのだ。

そして、一ヶ月後の現在に至るわけである。

……それと何故か付いてきたハクリュー。

薫は頭を抱えた。

「何故だ……。」

つむじ風が舞い、それに巻き込まれ砂ほこりが舞い上がった。

おまけして貰った、モンスターボールを見つめる薫。

薫はハクリューに問いかける。

「一緒に来る？」

「きゅー！」

ハクリューは物凄い勢いで頷く。その様子に若干引くがゲームのトラウマをいつまでも引きづるわけにはいかない。薫はハクリュー

にモンスターボールを投げた。

ポン、ポンポンポン。とボールが跳ね特にボールから出る事もなく動かなくなった。

正しくとんとん拍子で初のポケモンを捕まえた。

薫は腑に落ちないものの目下の目標を為す事にした。

それは、所持金だ。

現在薫の所持金はゼロ持っているのは通称FCと言われる。フェンリルクレジットのみ。

このハクリューで何が何でもトレーナーとバトルして勝たねばならない。

そう考えてたところ、ボールに入ったハクリューが出せ出せ！と暴れてるのかボールがゆらゆらと揺れていた。

何だろうと思い薫はハクリューを出して見る。

「きゅーきゅー……！！！！《マスターと一緒に居たいです！ ボールの中は嫌！》」

ハクリューはどうやら薫のポケモンになるのは構わないがボールに入るが嫌らしい。

「どこのピカチュウですか……。」

薫は思わず呟く。

その時薫は気付く。何故ポケモンの言いたい事が分るんだ……。

「きゅー！！《愛の力ですから！》」

「うん、幻聴だ。」

「きゅー？《マスター？》」

「ハクリュー、お前喋られたっけ？」

「きゅー！《もち！》」

「オカシイナーきゅー！としか聞こえない筈なのに……。」

ずっとハクリューと喋っていた為、日が暮れ、その日は結局ポケモンセンターに泊まる事になった。

数カ月後、ある少年が一匹のハクリューを連れてチャンピオンのドラゴン使いのワタルに非公式だが勝ったと噂が流れた。

噂を確かめる為、リポーターはワタルに質問する。

ワタル本人はなんとも言えぬ表情で黙る。

諦めれないリポーターは一言だけでもと続けた。

ワタルは言った。

「彼をせめて国家公務員のジムリーダー等にしたかった。」

この一言で噂の黒白くろはくがついた。

リポーターは目を見開き、開いた口が塞がらなかった。

真実だったのだ。やがて、特番で放送され人々の間に憶測が飛び交う。

中には自分がそのトレーナーだと言う人物も現れた。複数人名乗り出たが全員違った。

尻尾を出さない謎のトレーナー！。

しかし、ハクリューで本当に勝てるのか？　と言う疑問も出てきた。

その人物事体がないのではないか？

人々の間に様々な憶測が再び飛び交う。

やがて、噂は沈静化し都市伝説となった。

シロガネヤマの頂上付近。薫は半そで長ズボンでうろついていた。

「ヘクチっ寒いなここ……どこだここ、また迷った。」

薫はハクリューに大文字を命じる。

「きゅ〜《了解！マスター！》」

ハクリューの口から超高温の炎が噴き出す。その火は薪に向かいボアッと薪が燃え上がった。

「ハクリュー？ そろそろ他のポケモン捕まえさせてよ……。」

「きゅ！！《私だけ十分！》」

「いや、だからボールをはじくの止めてよ……。」

薫のトラウマが脳裏をよぎる。

金銀時代。

薫はわくわくしながら図鑑を集めを頑張った。

だが、薫は思わない事に遭遇する。

そうバグだ。

事の始まりはコガネシティのジムリーダーが倒せなかったからだ。

コガネシティはカジノがある。薫はすこしそこで気分転換する事にした。

スロットの景品はミニリュウがあった。

薫はミニリュウが欲しくてスロットをやり始めた。

それがいけなかった。

ミニリュウを貰えた。そこまでは良かった。

ミニリュウは可愛く進化すると分かっていた薫はレベル上げに専念したのだ。

専念したおかげでミニリュウはすぐにハクリューに進化した。

ハクリューをつれてアカネに挑む。余裕綽々で勝ち。気分が良かった。

そこからゲームがおかしくなった。

ハクリューが暴走したのだ。

一大イベントのハウオウの降臨マスターボールで捕まえようとしたら何故か弾かれた。

人のモノとつたら泥棒！

そのメッセージが流れたのだ。あきらかにおかしい。

やせいのハウオウに投げたマスターボールが露と消えた。

電源を消しもう一度他のポケモンを捕まえてみる。するとまた同じメッセージが流れた。

新しいポケモンが捕まえられなくなった。

これがきっかけとなり薫はトラウマになったのだ。

そして、薫のトラウマを決るポケモン、ハクリュー。

この最初から薫に懐いてるハクリューはそのバグのハクリューとそっくりだ。

ハクリューに薫は懇願する。

しかし、その願いは届かない。

実際にこのハクリューは強いのだ。それも異常なまでに。ハクリューの進化たるカイリューを異常なまでの力でねじ伏せたのだ。それもチャンピオンワタルのカイリューをだ。

さすがの薫もこれには驚き表情が引き攣った。

身体が一回りも違うカイリューをハクリューは尻尾で投げ飛ばす。

余りにも異常な光景だった。進化前が進化後のポケモンを圧倒した。

ワタルも焦った。チャンピオンが無名なトレーナーに負けるわけにはいかない。ワタルは全力で立ち向かったが文字通り手も足も出なく。歯が立たなかった。

薫の不幸は相手がチャンピオンのワタルだった事だ。薫に異様に懐いてるポケモン、ハクリューと薫がどんな風に戦うか知りたくてワタルは指導するような気持ちで勝負を持ちかけた。

少し年上の青年から勝負に誘われ、軽い気持ちで受けたポケモン勝負がこうなると思っていなかった、薫は賞金を貰う事も忘れその場から逃げた。

こうして少年は（都市）伝説となった。

吾輩は……トレーナーである。バッジはない。(後書き)

どうでしたか？

感想をお待ちしてます！

それにしてもポケモンは……うん。

ある意味ゴッドイーターのオラクル細胞より酷いですよね。

第九喰目 いいもんね。別に寂しくないもんね。(前書き)

悪夢の夜は過ぎたね。

長くも苦しい戦いだった。

第九喰目 いいもんね。別に寂しくないもんね。

薫は新型神機の発案に貢献し、予定の六年間も開発を縮めた。

ヨハネスから称賛を貰い照れながら家に帰る。

馨は笑顔で薫迎え抱き締める。

いつも通りに甘えて過す。幸せな時間だった。家は死亡フラグも立たない、安らぐ時間、深い愛情を注いでくれる義姉。

薫は幸せに浸ってた。前世の幸せであつた高校中退するまでの事を思いだす。

薫は懐かしくて目を細め遠くを見る。

薫は知らない。気付けない。

そうなるように成長させられ、余計な情報を与えられず。性格を固定された。

気付けない。

薫の交友関係は表面上では非常に穏やか。だが、水面下では醜い人間の欲望が渦巻いていた事を……。

その様子は正に一触即発だった。事が起これば間違いなく大惨事になる。

そうならなかったのは薫が抑止力の役割を果たしていた。

何も知らない薫は無邪気に笑う。

榊は新型神機の構図を完成させ、唸っていた。

彼の目下の悩みは新型神機の事ではなく薫の教育だった。

つまり……薫をどの分野に育て上げようかというものだ。

薫も悩んでいた。薫の悩みは神機ではなくその腕輪の事だった。

リンドウの姉　雨宮ツバキは薫を可愛がっている。

馨の友達抜きに薫を気に入っているのだ。

その時に薫を抱くのだが、腕輪が背中等に当たって非常に痛い。その上ゴッドイーターの腕力で抱きつかれるのだから、苦しい通り越して死にかける。

薫はその事に悩んでいた。

抱きつかれるのは親愛の感情に触れられる為薫は好きだった。

だが、死にかけるとなると洒落にならない。

ゴッドイーターの腕輪をかなり大きい。ゴツイのだ。

それも日常生活に支障をきたす程だ。

ゴッドイーターになると以前の服が着られない。

それに伴い。ゴッドイーター特注の服しか着られなくなるのだ。それでも服が着難い。

ベッドで寝づらいと言つものも上げられ、日常の様々な所で不満が出てる。

ならばだ！と、

「小型化だな、うん」

薫は立ち上がり決意した。

さっそく、薫は小型化の案の為に榊博士の研究資料を引っ張り出した。薫が奇妙な行動を起こしても榊は気付かず、未だに薫の教育方針を決めあぐねていた。

ゴッドイーターの腕輪の正式名称は『P53アームドインプラン
ト』。

ゴッドイーターが着用を義務付けられてる装備品。装着すると肉体と融合し、生涯外すことはできない。『P53偏食因子』を媒介とした、神機に対する神経信号の伝達とゴッドイーターの神経接続された神機の『オラクル細胞』の制御を担ってる。位置情報特定用のビーコン、ターミナル接続インターフェース等の様々な機能を持っている。

最初の資料を読み終わり、まだ知識が足りず考察ができない。

薫は次の資料を探した。

様々な資料を引っ張り出したが早くも薫は躓いた。

背が届かないのだ。資料室に薫はリンドウを呼び本を取って貰う事にした。

資料室に來たリンドウは薫の白衣姿を見て感慨に耽る。

（俺の苦労は報われたんだな。薫がここまで凄いとは思わなかったがな。）

子供が身体の四分の一ぐらいある資料を広げて読む様は微笑ましい。それが難解な資料でなければ……。

リンドウは薫の読んでる資料を見て顔が石の様に硬直した。

（分からねえ……。何もかもが分からねえよ。）

自身のあまりにもお粗末な脳みそで無力感に襲われたリンドウは資料室の隅で真っ白になっていた。

ここは榊の研究室だけあって様々なものがあつた。

粗方、読み終わった薫は情報を整理した。

最初の資料に書いてあつた事は腕輪の役割。

次の資料は神経接続の際、腕輪内の偏食因子動き。

最後の資料は腕輪とゴツドイターの相互関係。

基本的な事は分かったがしかし、自身の記憶にある。とある情報と資料が食い違つてるのだ。

腕輪と肉体の融合の話だ。

これは、笑える程に食い違いが起きていた。

感応現象と言うものがる。

感応現象は新型ゴットイーターの特有の現象で触れればその『適合者』同士の間で、稀にに意識や記憶の交錯が起きる現象。

原作では主人公はその感応現象を起こす。

その感応現象で主人公はレンに触れ教会に閉じ込められたリンドウの状況を理解した。

何処が、問題なのか……。

リンドウの状況を理解した点である。これが薫を悩ませる原因だ。

その状況はフェンリル第一討伐部隊はヴァジュラの上位互換種、プリティヴィ・マータに囲まれていたのだ。

アリサはトラウマを利用され洗脳を施された。それにより、リンドウは教会の中に閉じ込められたのだ。

プリティヴィ・マータに囲まれてるのだ。助けようにも数が多すぎてその時の選択肢は逃げるしか選べなかった。

リンドウを除く第一部隊の隊員は撤退するがリンドウは閉じ込められた教会の中でプリティヴィ・マータを相手にし勝利を収めた。しかし、それだけでは終わらず教会内に帝王ディアウス・ピターがあらわれてしまった。

リンドウはぼやきながら相手にする。しかし、相手の攻撃が腕輪

に当たってしまい動作不良を起こしてしまう。リンドウは最後の力を振り絞って帝王の口に神機を突き刺した。その際、肉体と融合してる筈の腕輪がディアウス・ピターの体内に入ったのだ。

一生外せない筈の腕輪が外れた。この矛盾について薫は悩んでいた。

外せない理由は分かる。人体と神機の神経接続である。外さないではなく正しく外せないのだ。

神経は生えてこないのだ。逐一外していたら神経がズタズタになるだろう。心臓に対するペースメーカーの様に腕輪も同じ役割なのだ。

さらに言えば腕輪はペースメーカーと違い生体機械とも言えるのである。

腕輪の改良は実際には肉体改造と同じようなものになってしまうのだ。

薫は悩んでしまう。

この日は資料を読むだけで終わった。

朝起きてシャワーを浴びフェンリルの制服に着替える。

フェンリルの制服には色々なカラーやバリエーションがある。

薫の制服は配属時に支給された赤色の制服だ。F制式上衣 レッドと呼ばれるもの。下はフェンリル狙撃下衣 ブラック。

後者に述べた制服、出撃しないのにこの制服を選んだかと言うとポケットが多いからだ。

単純且つ明解な理由で薫はそのズボンを選ぶ。

着替えた後、キッチンで朝ごはんを作ってる義姉に挨拶する。

薫がリビングに出てくると馨は作っている料理がちょうど出来たのかテーブルに料理を持っていた後、薫を思いっきり抱き締める。これは薫が馨と一緒にベッドに寝なくなってから朝やるようになったスキンシップだった。

「頂きます！」

「頂きます」

薫が手を合わせ元気よく言うとそれを見て苦笑する馨。二人は話しながら食べ、朝食を終わらせた。そろそろ時間になり薫が出勤兼登校の準備をし始める。

玄関先に立つと馨が薫の見送りに来た。

薫にとって懐かしい雰囲気の流れ出す。この雰囲気は前世で散々味わった心地よい空気だ。少ないながらも気の置けない友人に囲まれてた日々を思い出させてくれる。薫はこの雰囲気が好きだった。

やる気が満ちた薫は子供らしく元気いっぱい扉を開け、

「行ってきます！」

「行つてらっしゃい」

馨は微笑んで薫を見送った。

来て早々、榊が薫を案内したのは神機整備室だった。

神機の保管する機械の一つ一つパーツを榊が薫に説明する。

当然、薫と榊に視線が集まる。しかし、榊はその視線は無いとば

かりに薫だけに意識を向け講義する。

「アラガミの強固でしなやかな細胞結合を絶つ神機の整備室だ。当然この部屋もそれなりにできてるんだ。それとさっき言ってた、この部分はね。」「榊博士。」「

熱心に説明していた榊に話しかけ話を割る。

「話を途中で遮ってすみません。これはどういう状況でしょうか？一つの神機保管器を使用不可にしてまでの少年への説明。この子は裕福層の？」

中年でがっしりした体格の男性が榊の話を遮って質問した。

「あれ？ 通達行ってなかったかな？ 昨日送ったと思うんだけど……」

「いえ、来てませんけども……」

「ちょっとすまないね、薫君。端末見てくるよ」

榊は薫を置いて自分の研究室に戻り確認しにいった。

その間薫は何もすることが無い。薫は整備士の整備を観察する事にした。

整備用のグローブを嵌め神機を不調を調整した後、その適合者に使いやすいように調節していた。

今まで表舞台の人しか見てこなかった為、薫の目には整備士が目

新しく映った。

ゲームでは知りえなかった神機の整備風景。現在、薫の心は好奇心で溢れていた。

榊が出て行って五分程、先ほど榊に話しかけた人物が薫に話しかける。

「坊主はフォーゲルヴァイデの御子息か？」

薫の目が点になった。何故その名前が出てくるのだ。

「いえ、違いますけど」

「そりゃ、そうだよな。こう言っちゃ悪いがお前さんにそんなオラはこれっぽちも出てねえもんな」

ガハハハ、と笑い薫の背中をバンバン叩く。敬語を使ってないと通常の時のギャップが激しすぎた。

「じゃあ？何だ？お前さん榊博士の隠し子か？」

（……何故その発想になる）

薫は突っ込まずにはいられなかった。

「こつちばつか聞いたって面白くねえな。自己紹介しとくか……俺は楠 零治。お前さんの名は？」

「斎藤薫です」

「榊博士の隠し子って線が消えたな。隠し子でも坊ちゃんでもない
お前さんはここで何してるんだ？」

零治には薫と同年代の娘があり、薫に娘を重ね薫に興味が出た。

薫が答えようとする時、計ったかのようなタイミングで榊が戻ってきた。

「彼は斎藤薫君。技術開発所属。私の直属の部下だ」

「……は？」

零治は驚く。自分の娘と同じくらいの子供がフェンリルで働いてるのだ。

薫の素性を知りたかった整備士は榊の話に耳を傾けていた所とんでもない事実が発覚し榊の所へ殺到する。先に通達の送信忘れの旨を伝え、それから薫の話をし始める。

一方の薫はコミュニケーションのチャンスを取られたと拗ね、整備室の隅でいじけていた。

「いいもーん。別に自己紹介したかったんじゃないもんね。置き去りにされたのが寂しいわけじゃないから」

どこまでも薫は子供だった。

後日、薫のカリキュラムに神機の工学が加わった。

第九喰目 いいもんね。別に寂しくないもんね。（後書き）

楠零冶、オリキャラです。

まあ、誰の父親か分かりますがね。

名前の由来は娘のリツカ 律花 雪

雪 冷たい 零 零冶。

本当に単純な作者ですみません。

ヒロイン投票やってます！

よろしければ投票して下さいな。

第十喰目 最大級の死亡フラゲ……新型適合者（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。

はい、どうもモンテス級です。

今回は難産の上少し短いです。

評価が少し見ない間に大変な事になっているようです。

拙作をお気に入り登録および評価して頂きありがとうございます。

こんな作者ですがこれからもよろしく願います。

第十喰目 最大級の死亡フラゲ……新型適合者。

『常識とは十八歳までに身につけた、偏見のコレクションのことをいう』

薫の前世にとある有名な人物の残した言葉がある。

その人物の名はアルベルト・アインシュタイン。相対性理論で有名な『 $E=mc^2$ 』の式を残した人物だ。

現在、薫は自身の偏見による勘違いを起こしていた。

前世と比べ、フェンリルの職場の人は気軽に話しかける人ばかりだな。

薫はそう勘違いを起こしていた。

勿論、前世にも薫に話しかけようとしていた人物はいたのだ。だが、薫の友人が話しかけさせなかったただけだ。

薫は十八歳まで、そういう状況にいたからこそ薫の常識はねじ曲がったのだ。

薫の常識とは周りは自分に話しかけない事であり、薫の非常識と

は自分に話しかける事である。

薫が勘違いに至った理由はフェンリル極東支部の榊が弟子を取った。それが広まったからである。

新型神機の発案から、薫が神機の腕輪の小型化を決心してから約半年が経った。

榊は天才と称されるだけあってその開発スピードに周りは驚かせた。そして、まわりの関心はその新型の神機の開発している榊博士の、部下兼生徒、弟子の薫にあった。

天才と謳われる榊が弟子と言える子供を教育しているのだ。

自然と興味の視線が薫に向くのは必然だった。

それにともない、薫に話しかける人も増え、色んな人から話しかけられた薫は驚きビクビクとしながらも話す。

薫は話しかけられ知りあい以外と話したのは本当に久しぶりだなと実感する。それと同時に薫の心は幸福感でいっぱいだった。

様々な人と繋がりが持てた事に薫は歓喜する。

『自分自身の目で見、自分自身の心で感じる人は、とても少ない』

アインシュタインはこんな言葉も残している。

常識も体験も縛られた事さえ知らず生きてきた薫は不幸なのだろうか？

薫が自分自身で感じ集めた偏見という情報は制限されたもの。

アインシュタインの言葉を借りるならば、自分自身の心で感じ、情報を集め、偏見のコレクション足る常識が制限された中での物だ。

薫は純粹過ぎて歪んでいるのだ。

その歪みは成長するにつれ障害が薫の表面上に現れるようになる。

薫の世界は友人、姉によって守られていた。

成長してもそれが変わらぬようにとつぎはぎで固められた。

継ぎ接ぎの世界は安定しない。

ギリギリのところを保っていた薫の世界は最後に出来た友人政次によって壊され、薫は何もかもが分らなくなる。

政次から伝わる二つの思いが薫を困惑させたのだ。

薫を友達と思う心と薫は敵だと言う心。

二律背反の心があり、友達と思う心が敵だと言う心に塗りつぶされていく。今まで護られてきた薫は心を守る術がない。心が壊れるのを感じ、薫の本能がその出来事から思考を逸らさせた。

薫の子供みたいな心は歪みの弊害だったのだ。

薫の腕輪の小型化を目指してから半年。

新型神機が概ね出来上がった。

ヨハネスと榊は研究室で話し合っていた。

ヨハネスと榊は新型をユーラシア大陸での掃討戦で出すつもりだ。すでにユーラシアの方から救援要請が来ている。

新型神機は旧型神機と違い。変形機構を有しておりオラクル細胞の配列が極めて複雑。

しかし、様々なアラガミに対応できる。ヨハネス、榊は人類の少し明るい未来が切り開けたと胸を膨らませた。

だが、致命的な欠点があった。

オラクル細胞の配列が複雑なお陰で適合できる人間が少ないのだ。唯でさえ旧型神機の適合候補者は少ないのだが、新型は旧型が可愛く見えるほど少ないのだ。

このまま、見つからないまま終わると掃討戦には間に合わない。

二人は悩み頭を抱える。

「クマの子見ていたかくれんぼ」

間延びした幼い声が研究室に響く。

二人は部屋に入ってきた人物　薫を見て思い出した。

薫はまだ、新型の検査を受けていない。

「お尻を出した子一等しょ……」

二人の視線に気付いた薫は歌うのを止めた。

（何か酷く嫌な予感がする。）

薫はその直感に従い部屋を出て行こうとした。

「薫君。待ちたまえ。少し話があるのだが……」

部屋から出て行こうとする薫をヨハネスは呼び止めた。

榊は今は好機と言わんばかりに検査の準備をし始める。注射器、チューブ、アルコール等。

終わったのか榊は薫に話しかけた。薫は出て行こうとしたのだがヨハネスに引きとめられて部屋から出られなかった。

「やあ、薫君ちょうどいい所に来てくれたね。少し時間を貰えるかな？　ちよっと血液を貰うだけだからね」

薫の返事も聞かずに勝手に採血をする榊。文句を言った所で検査は義務。薫は為すがままにされた。

結果から言うとも見事に薫はクロだった。

これでもかっと言うぐらいに旧型に合わなかったのだが新型はその逆の結果になった。

二人はその結果に満足したのだが、一つ問題点が思い浮かぶ、榊

の後継と育てている優秀な人材を戦場に送りだす事だ。二人は新型のデータ 欲しさに肝心な事を忘れていた。

二人は考えに考えた結果、薫を新型神機適合候補者として登録する事になった。

戦闘に出すのはユーラシア作戦で最初で最後にしその後は神機の開発に当たる。という方針に決まった。最初から出さないと言うのは選択肢に無かった。言葉の悪い言い方をすればゴッドイーターの替えは聞くが榊のような学者の替えはないのだ。薫は知らない間に自分の資質に助けられていた。

それに伴い薫の生活習慣も変わる。

研究の時間、授業の時間が訓練に代わり戦場での生き残る立ち回り方を叩きこまれる。

「何故、こうなった」

薫は膝を折り手を床についた。

薫の神機の適合率はソーマと肩を並べる程高かった。

それもその筈。

ソーマは先天的な資質、人とは違う偏食因子を作りだしている。

一方逆に薫は後天的なモノで人とは違う偏食因子を作りだしていたのだ。

薫は謎の塊　　レンの本体に触り、薫の自身の身体が作り変わり後天的にソーマと似たような身体になったのだ。とは言ってもソーマ程、身体能力は無い。ソーマの偏食因子は薫の偏食因子と違い形成する必要が無い為オラクル細胞の結合が強固なのだ。薫のは柔軟にする為、細胞結合の配列が簡単に切り替わる。それに関しては、一長一短があるがここでは割り合いとする。

新型の適合者となりたくなかった薫としては非常に不本意な適合

率だが、何百以上の《アラガミ》が闊歩する戦場に出て生き残る為には自身の高い適合率に頼るのが些か複雑な心境だった。

しかし、これ乗り越えれば薫は晴れて原作のツバキと同じ扱いになるのは思ってもみなかった嬉しい誤算だった。

薫はアラガミを死亡フラグと見据え折る事を考えた。掃討戦が終われば薫は元の研究生生活、華麗な青春を送れる事を夢見て意気込む。

ゴッドイーター開始まで後一年。

第十喰目 最大級の死亡フラゲ……新型適合者。（後書き）

最終投稿が……去年？

クリスオスのダメージが思いのほか出かったのだろうか。

それにしても、作者の周りでイチャついているカップルばかりなのだが正直勘弁して欲しい。

この間なんて、店先を掃除してゴミを捨てようとしていたら店の前で発展しそうなカップルがいた事に驚愕。

何へ発展とは言わないけども察して欲しい。

ぶろーくん まいはーと

第十一喰目 ソーマと一緒に……えっ？（前書き）

タイトルがあれですが、ソーマ自身は出ません。

何となく思いついたモノをタイトルにしてみました。

第十一喰目 ソーマと一緒に……えっ？

薫の新型神機使いとして訓練が始まってからリンドウは特に気合を入れていた。

「おっしや！ やるぞ薫。」

「待て、リンドウ。いつも言ってるだろう？ 薫は私達と違うんだ。新型の神機使いなんだ。ここで何かあったら目も当てられん。今回もすまないけど、薫。榊博士の所へメディカルチップを受けに行ってくれ。」

ツバキは何故か薫と訓練するたびに張り切る弟を嗜め、心配性な薫の義姉 馨の為にメディカルチップを受けに行かせる。

データは全て馨にも開示されており薫のデータを血眼になつて異変がないか六回も調べてる。

表面上では普通にしているが薫が新型神機使いになったと聞いて馨は気を失ったのだ。

ゴッドイーター、それは勝ち組の職業と同時に死亡率の高い職業でもあるのだ。

薫を溺愛している馨が気を失っても仕方ない事だった。

ツバキはこれからの掃討戦までに薫を仕上げなければならない事を考えると頭が痛くなる。

（上層部は何を考えているのだ。いくらデーターを欲しいからと言って幼い二人も子供を戦場に出すとは……倫理観が欠如している。）

ツバキは上層部に対して憤慨する。

ユーラシア大陸の掃討戦では薫ともう一人薫と同年代の少年が初任務でくると言うのだ。

名はソーマ・シックザール。この極東支部長の一人息子だ。

データーを見れば適合率をはるかに自身とリンドウを超えてるではないか。

ツバキは何を考えてるか分からない上層部に疑念を抱いた。

新型の神機使いの適合候補試験の当日。

馬鹿みたいに広い空間に一人薫は立っていた。

「さて、薫君。これから君発案の新型神機の適合試験だがリラックスしたまえ。分かっているとと思うが、その方がいい結果が出る。」

広い訓練場のスピーカーからヨハネスの声が響く。

（ゴットイーターに成るのは嫌だけど感慨深いな。）

薫は想いに耽る。原作とは違うがそれと同様な試験を自分自身が受ける事になったと。

「さあ、準備ができたなら中央の機械に立ちたまえ。」

薫は中央に歩み寄り機械を観察する。

原作の相違点は二つ。

薫の身長に合わせたのか機械の前にある補助台。

そして、機械の両端についてる小型化した神機の腕輪だ。薫は自分が新型の適合候補者と聞き腕輪の小型化を急いだ。不便な生活は嫌なのだ。

腕輪の小型化は最終的な大きさは少し大きめの腕時計と同じ大きさになった。まだまだ、邪魔になるが前の腕輪よりは大分マシであろう。

この満足感は前世でやった夏休みの自由研究の宿題をやった以来だった。

（トカゲの尻尾をヒュドラにしたの楽しかったなあ）

「では、機械の前にある神機の柄を掴んでくれ。」

スピーカーから聞こえてきたヨハネスの声に意識を戻され、前世の思考を破棄して目の前の事柄に集中する。

薫は神機を握る。数秒後機械が落ちた。

身体の中をかき回される様な感覚。

内臓だけ洗濯機に入れた様なそんな吐き出しそうな感覚だった。

やがて、気持ち悪さは無くなり身体が突如軽くなる。

欠けていた最後一ピースが当てはまったか様に。

機械が再び上げられ。薫は神機を持って補助台から降りる。

神機の大きさが薫の身体より大きく余りにも不釣り合いだった。

それを見たヨハネスは、

「おめでとう。君が初の新型だ。これから頑張ってくれ、とはいっても掃討戦が終わったら君は今までの生活に戻って貰う。」

新型の神機と自分に付けられた小型化した腕輪を見る。

「本当に邪魔にならないな。あのままだったら嫌だ。完成して良かったよ。」

薫は一人愚痴る。

こうして薫は世界初の新型となった。

夜中の三時。研究室で一人キーボード独特の音鳴らし作業している。

薫のメデイカルチェックの整理終え榊は、ほっと一息をついた。

榊は机の上にあるデータと薫の顔写真を見比べ苦笑する。

写真に写っている、この少年は自分も含めて大の大人が嫉妬を掻き立てられる程才能の塊だった。

自分もその資質に羨望は抱くがやはり自分の性分はどこまで行っても観察者なのだ。

羨望は抱いてもそれすら観測の結果になる。

榊は自分に対しても苦笑する。

「それに……他人が羨む地位に居る私が言葉にしても信用できないだろうね。」

改めて視線を手元に戻す。

ファイル 斎藤薫。年齢9歳。

保護者 斎藤馨。

榊は誰にも告げてない。薫のもうひとつの結果を見ていた。

心理テストから知能指数、薫に行ったあらゆるテストの結果が載っているモニターを興味深そうにスクロールさせる。

「五万飛んで三百六十×三万二千八百二十二。」

「十六億五千二百九十一万五千九百二十。」

唐突に榊は薫に質問に投げかけた。

少しきよとんしてから薫は答えるのかと理解すると聞き返さずに計算した結果を答える。その映像が映っていた。

他にも、

「10人の選挙人が5人の候補者を2名連記で無記名投票するとき、票の分かれ方は何通りあるか。但し、選挙人は必ず異なる2名の候補者名を書くものとしようか。」

「七千五十一通り。」

これまた、薫は答えを即座に返した。

なるほど、これは本当にこれは嫉妬したくなる、と榊は改めて思う。

常人離れた演算能力。そして記憶能力。

何度見てもこれは突出した能力だ。

テストとは関係ないが薫は音楽の技能も絵の技能も榊に見せていた。

その異常なまでも高水準な能力に榊は舌を巻く。

ヨハネスは気付かなかったがこの映像を知ってる榊は気付いた。

この高水準な能力に比べて薫のEQが心の知能指数があまりも低すぎるのだ。

ヨハネスは幼いからと片付けたがこれは余りにも異常だ。

こんな才能を持って生まれたのなら絶対に他人は羨望や嫉妬を抱

いた筈だ。それに気付き自身の感情や他者の感情を理解し脅えるか、傲慢となるか遅かれ早かれ心が成長し大人に近づくだろう。他者に対して優越感を感じ傲慢になる。あるいは、他者に対して恐怖を抱き対人恐怖症になる等の兆候が見られない。

薫自身も自分の才能の大きさに気付いていない。

意図的に誰か薫の成長を妨げたしか榊は考えられなかった。しかし、周りに入る人物を考えてもそう言う事をしそうな人物が思い当たらない。

再び考えてみるが薫の周りは薫に対してそういう事する時間がないうというのも事実だ。

薫の成長を妨げてメリットはあるのだろうか？

しかし、誰かが薫を変則的なアスペルガー症候群にしたという事実は消えない。

考うる限りのメリット上げようとしてみたが思いつかない。薫の精神的成長を妨げてもデメリットしか思いつかない。薫の能力を十全に使い操るなら精神的成長させて洗脳を施す、弱みを握る等した方が遥かに良い。

薫のEQが低い状態だと人間関係に問題起こす。現在は幸い子供だ時間はまだある。

自分がEQを高める事をしても全く上がらない。様々な方法で薫の自身の為にとってみたが効果がない。

薫の深層精神を分析してみると分かった事があった。

薫の精神はパンドラの箱に似たモノだ。薫を精神的に大きく揺さぶり、薫が特定の感情を抱けばその人を依存する形になっている。この事実には驚くこの精神構造を作り上げるならば監禁に似た状況でなければならない。

依存させるだけなら最初から依存させれば済む事だ。何故こんな周りにくい事をしてるのか？ 雛鳥の刷り込み習性を想わす薫の精神構造に神は戦慄する。

これでは、まるで薫を……。

「いや、そんな筈は無い。何より、その環境を作りあげる事自体が難しい。」

恐ろしい考えに行きつくが神は頭を振る。

どうやっても不可能なのに人為的な痕跡もある。それも一人ではなく複数犯だ。

「正直に言って不可解だね。私の観察不足だろうか……。」

そう言っただけ神はモニターの電源を切り床に就いた。

ユーラシア連合掃討戦まで後半年。物語の始まりはもう目前。

第十一喰目 ソーマと一緒に……えっ？（後書き）

さて活動報告にも書きましたが、こっちの方が目に触れるのもう一度

作者の優柔不断で投票して頂いたのに申し訳ないですが、ストーリーの都合上もしかしたら番外編の短編連作という形になってしまう可能性がございます。

あくまで、もしかしたらですので問題なければ現状ですと投票の二割のアリサがヒロインを張り見事馨から薫を奪い去ります。

このような事態になってしまい本当に申し訳ありません。

作者に罵倒雑言を言いたい方はどうぞ。
感想の制限を外しておりますので。

第十二喰目 さむっ寒いよ?!ここっ?! (前書き)

はい、来ました。

ユーラシア連合軍アラガミ掃討作戦。

漸く、ここまで来れました!

ここまでで十一話って……先が長いな……。

第十二喰目 さむっ寒いよ?! じじっ?!

薫は自身が新型の適合者となった場所 訓練場に居た。

そこで、ツバキとリンドウは薫に最初は好きにやってみなと言い、二人は訓練場の上段に上がり薫の様子を見る事にした。

しばらく薫が待つてると地面から黒光りする疑似的アラガミ、ダミーオウガテイルが出てくる。

薫はそれを視認した瞬間。

ダミーの後ろに周り捕喰した。

身体全体が高揚するの感じ再び形態をショートブレードに戻し、そのまま薫はダミーを後ろから切りつけダミーは霧散する。

霧散したダミーに代わって新しいダミーが出てくる。

今度は銃形態スナイパーでバレットを打ち出すそうするとコアを貫かれたダミーはその一撃の元にひれ伏す。

「いやいや、あつけないでしょ……」

本当にあつけなかった。余りにも拍子抜けした戦闘に薫は毒気を抜かれる。

リンドウとツバキはその戦闘に驚きを隠せずにはいらなかった。

圧倒的という言葉すら生ぬるい薫の制圧。ツバキは薫の戦闘を見て、今度掃討戦に同行する少年　ソーマを否応なしに思い出させる。彼は薫と同じ適合率の同等かそれ以上を誇り、その戦闘見てるとアラガミを殲滅する為に生まれてきたかと錯覚する程に、虐殺的だった。

彼は、一撃で何体ものダミーを葬り去り身体能力は大人のリンドウ以上のモノを持っていた。

（上層部は何を隠している？　他の支部に対してゴッドイーターの有用性を示すだけなら歴戦の戦士、百田ゲン大尉を掃討戦に出せばいい。薫と言い支部長の息子と良い不可解過ぎる）

ツバキの考えは当たっていた。今は知るよしも無いが七年後アラガミノヴァによる終末捕喰を人為的起こさせ地球再生を目論んでいるのだ。

訓練の様子を窓ガラス越しに見ていたヨハネスは自身の計画が順調に進んでいると晒う。

「実に嬉しい誤算だ。五年は掛るとみた新型神機が今年で完成したとは……。私の願いはもうすぐ成就する」

薫とソーマはその為の人員　ノヴァの餌集めの人員だ。ヨハネスは薫の適合率を見て何らかの原因でソーマと方向性の違う人種になったと見たのだ。

自分の息子にP-73偏食因子を投与しただけあって、偏食因子

による生態変化は榊よりも詳しくヨハネスは薫の身体の状態を検査時にはすでに見極めていた。

原因は分らない。だが、現に存在しているならば次に進ませる。それがヨハネスと榊の違いだった。

榊は薫の偏食因子を解明しようとするのに対してヨハネスは偏食因子が違うならば違うで次の事項に進む。

研究者である榊と統率者であるヨハネス違いだった。

ヨハネスの中では薫とソーマを次世代への道を切り開く者として旗印になってもらおうと考えていた。

ソーマはその力を以て人類をアラガミから守り、守護神の役割を。薫はその頭脳を以て人類を発展させる、技術者の役割を。

（そう、今の私とペイラーのような関係になってもraitたい）

「アイーシャ、もうすぐだ。もうすぐに私もそちらに行く」

その言葉を吐いた、ヨハネスの目は不透明な色で光を差していなかった。

西暦二千六十五年。ついに掃討戦の日がやってきた。

これから大規模な作戦へ参加するのに上機嫌にリンドウはヘリに乗る。

「年がいもなくはしゃぐなリンドウ」

浮かれてヘリに乗ったリンドウを叱咤するがツバキ自身も嬉しさを隠しきれておらず、リンドウに続いてヘリに乗った。

「ふんっ」

鼻を鳴らしてツバキに続いてソーマも乗り込む、しかし彼の身体はどこかうずうずと動いていた。彼が素直に喜びを表さないのは天の邪鬼な性格な為だろう。

そして最後に薫がへりにニコニコしながら乗った。

薫を除く三人は腕輪が小型化した事が嬉しいのだ。

一方薫は自分のした事がツバキやリンドウ等の役に立てた事が嬉しかったのだ。

不便な生活だったのが小型化した事によってゴツドイーターなる以前の生活に近づいたのだ。嬉しくない筈が無かった。

薫はへりの中で久々に会ったソーマと喋ろうと思ったが非常に寒くがたがたと震えていた。

自分の持ち物を思い出し、リュックの中から金平糖やお気に入りのコート、ノワールスニーカーを取り出す。

コートを着た薫は金平糖を嬉しそうに頬張る。

その様子を見ていたリンドウやツバキはこんな時でも薫らしいと苦笑した。

視線に気付いた薫はリンドウとツバキに金平糖の入った瓶を向け、

「いる？」

「いや、俺はいいわ」

「私も遠慮しておこう」

「……………」

言葉にはソーマは反応していなさそうにしていたが、薫はピクツと身体全体が動いた事に気付き、薫はソーマに向けもう一度言った。

「いる？」

「……………」

まだ、子供のソーマはお菓子が持つ誘惑に勝てず、薫から色とりどりの金平糖をいっぱい貰った。

これから戦闘に行くのに満面な笑みを浮かべて美味しそうに頬張る薫。

その薫から貰った金平糖を食べてる仏頂面のソーマ。

出してる表情は違えど実によく似ている二人だった。

そんなこんなで目的地に着き四人共へりから降りる。

現地は元ロシアなだけあって肌寒く吹雪いており視界がままならない。

その状況下に迎えるの兵士が立っており薫達がフェンリルを表すマークを制服を着ているのを確認すると言葉を発した。

「フェンリル極東支部の方々ですね？ お待ちしておりました！」

吹雪から顔を守るように腕で顔を隠しながら兵士は薫達を基地内へと案内した。

そのへりから降りる様子を見ていた、連合軍の指揮官は怒りを隠せない様子でヨハネスに通話をしていた。

「どういふつもりかな？ シックザール支部長……この大事な作戦を前にフェンリル極東支部からの支援はたった四名だと、そう本部報告しろと？」

支援と聞けば普通は一個大隊が基本だ。しかし、フェンリル極東支部に支援を要請したのだが送られてきた人数は片手で足りる程。

ツバキ達が普通の人間としか思えない者は馬鹿にされたようにしか感じない。

「落ち着いて下さい大尉殿。彼らの働きは一人一人が一個大隊に値すると自負してます。それに今回は貴方がた主導の作戦だ。うちの支部は後処理担当が本領ですからね」

怒りで声を震わす大尉に対してヨハネスは余裕のある声で言及された事について答えた。通話相手とのヨハネスの様子にサクヤは不安そうに旧ロシア地区に行ったリンドウ達を心配していた。そんなサクヤの内心も露と知らずにそのまま続けた。

「……ぬう、しかし！」

余裕なヨハネスに益々大尉の怒りのボルテージが上がっていく。

「それに恥ずかしながら今回は私の愚息の初任務でしてね……………」
「よろしく頼みますよ?」

それを最後にヨハネスは電話を切った。

椅子の背にもたれにヨハネスもたれかけ思案する。

(旧人類の最後の足掻きだ……………しかと見届けてもらおうとしよう)

ヨハネスはこの作戦が失敗すると分かっているかのように心の中で呟いた。

通話を切られた大尉は電話を乱暴に放り投げた。電話のアンテナは折れ曲がり机の端飛ぶ。

バンツ!と大尉は両腕で木製の机を叩き部屋に鈍い音を響かせる。

「あれが、アラガミに対抗できる唯一の存在神機使いだとっ?」!

完全に頭に血が上がっており気持ちを抑えず物にあたる。

「ただの子供じゃないかつ!」

「全く腹立たしい話ですね。あんな連中にとって代わられる等と……………」

部屋の隅で待機していた補佐官は大尉に同感の意を伝える。

「認めやせんよ。この作戦が成功すればな……………」

大尉は吐き捨てるように言った。

ツバキ達ゴッドイーターは連合軍作戦室居た。

部屋はプロジェクターが見やすいように照明はなくプロジェクターや機械類のランプのみ点灯していた。

ツバキ達以外にも連合軍の軍人が多数おり人口密度が高く外は吹

雪いているのに暑苦しかった。

「本掃討作戦はユーラシア地区のアラガミを戦略地点である核融合炉に誘導し爆破させる事によって一気に殲滅すると言っかつてない……大規模な作戦である」

プロジェクターに映っているマークを核融合炉の場所に移動させ作戦の概要を語り終えた大尉は一息吸って、憎々しげに言い放った。

「フェンリル支部派遣の神機使いの諸君には、アラガミを戦略地点へ誘導する、いわば羊飼いの役をお願いする事になる」

大尉のフェンリルという言葉が発すると同時に連合軍の軍人達は部屋後ろで待機しているツバキ達を敵意の籠もった目で睨みつけた。タバコを吸おうとしていたリンドウはその視線を受け吸うの中断し、ソーマ達子供組に話しかけた。

「……ふう。おい少年共。今回が初任務だろ？ リラックスしていこうや？」

「うい！」

「少年じゃねえ、ソーマだ」

話しかけられたソーマはぶっきらぼうに返す。

「おっと、こいつは失礼。もう一丁前らしい」

薫と違った子供らしい返し方におどけた様子でからかうリンドウ。

「からかうのは止せ、リンドウ」

ツバキは作戦の書類を吟味しながらリンドウを嗜めた。

ツバキに窘められたリンドウはこれ以上は何もできないと思い頭を掻いた。

薫はそれをどう思ったのか、リンドウに金平糖を差し出し、リンドウは金平糖を受取タバコの代わりに口に含む。

「ありがとよ、薫」

「いえいえ。……ん？」

薫は突如違和感を感じ始める。体の五感以外の何かから妙な感覚が伝わる。

「っ?!」

薫とリンドウの呑気なやり取りの中ソーマが急に立ち上がる。リンドウとツバキは突然立ち上がったソーマに視線を向けた。

その直後、基地内でかなりの揺れが起こり警報が鳴った。

軍人達がざわめく中ソーマは小さな声で言う。

「来やがった」

そう、アラガミ群の来襲である。

第十二喰目 さむっ寒いよ?!こっつ?!(後書き)

漸く、原作PVシーンに来ました。

ここに来るまでに十一話って、おい何してるんだって話ですよね…。

さてさて、本来なら三人の所薫が加わって四人になったのでここから原作と色々ズレが生じてきます。微妙なズレだったりと大きなズレだったり。

文章間違いや物語り構成の指摘等ございましたら是非下さい。

多少きつめの指摘でもかまいませんので何処何処が悪い、その改善点を教えて頂ければ幸いです。

感想、ご意見をお待ちしております。

でわっ！

P・S

このまま問題なければヒロインはアリサですけども……。
アリサが主役?の小説。
ノッキングなんちゃらかんちゃらは買った方が良いでしょうか?
もし、読んでいる方がいれば、教えて下さい。

カリギュラ……かつこいな。

第十三喰目 もぐもぐ美味しいよ？これ。(前書き)

ハッピー！バースデーモンテス級。

目出度いね？

え？一月十八じゃないかって？

いやいや、あれは、法の精神を書いた人ですよ。

作者はモンテス級なので

第十三喰目 もぐもぐ美味しいよ？これ。

吹き荒れる雪の中、次々と人が大小様々なアラガミに襲われ次第に数を減らし息絶えて逝く。

人々もただボーっと襲われてるわけではない。重火器などで応戦しアラガミに対抗する。しかし、アラガミは唯の銃弾の一発二発、存在していないかのように無視し兵士達を捕食した。

何処にも隠れる場所がない、この荒野の中のアラガミの攻撃は兵士達にとって脅威だった。銃は効き目が無い。剣、ナイフなどの刃物も効き目が無い。

人知及ばない領域の生命体 アラガミ。

荒ぶる神を前にして人類は余りにも無力だった。

大型アラガミ クアドリガのミサイルが発射される。

数瞬後、辺りに轟音が響き、また一つ小隊の生命反応が消えた。

後から遅れて音が吹き飛び、爆音が耳に入る。

遠くで応戦している軍人仲間を助けてやれない。

兵士達は心が折れそうになる。

『神』は無情だった。

その兵士の思いさえ平等に喰い尽す。思いを届けさせない。

ただ本能に従い目の前のモノを喰らう。

大尉は早歩きをしながら廊下の先にある制御室に足を向けていた。

作戦司令部は急なアラガミ襲来で予定時間を繰り上げ緊張感で空気が張り詰めていた。

「状況はどうなっている？」

大尉は急な事態にも拘わらず、冷静に状況を確認し対処しようとしていた。長年、連合軍に務めているのだ。この状況下での焦りが無くて良い甚大な被害をもたらす事を知っていた。

補佐官も常人が焦る状況の中冷静に事を進めていく大尉に尊敬の意を抱いていた。大尉の姿勢に敬服し大尉の望んだ答えを発する。

「はっ融合炉周辺にアラガミ群体が強襲。現在、アラガミは第一次防衛装甲を突破、第二次防衛ラインで応戦中です」

「誘導は必要無かったようだな。……融合炉の臨界は？」

現在の状況を把握し作戦が決行可能と知ると作戦の要について聞く。

「急点火しましたが……まだ40%と言ったところでしょうか。爆破可能までには時間が掛りますが、神機使いを向かわせていますので何とか持ちこたえられるかと」

「ふん、それまでには奴らには張り付いて貰うしかあるまい」

「ええ。いざとなったら羊飼いまろと」

突如、アラガミ　　ザイゴートが基地内に侵入し補佐官の言葉を遮る。ガラス、木材が飛び散り退路は進行方向にしか無かった。

すぐに大尉を背に庇いすぐさま銃を連射する。

「下がってください！　　うおおおおああああ……」

アラガミに唯の銃弾は聞かず、突進してきたザイゴートに捕喰され息絶える。

ザイゴートは獲物がまだ後方にあると分かり今度は大尉を餌と認識した。

「っ？！　バケモノめっ！」

ホルスターか銃を取り狙いを定めザイゴートに向けた。

大部分の人間が捕食されアラガミの数が上回った頃。ツバキ達は上空のヘリの中にいた。

「うようよ居やがる」

リンドウが下の状況を見て心底嫌そうに言った。

「融合炉の準備が整うまでの時間稼ぎだ！ 覚悟はいいな！」

ツバキは自分も含めこれから出陣する全員に発破をかける。

「羊にしちゃ、凶暴そうだぜ」

「いくぞ！ 一匹も通すな」

三人はヘリから飛び降りアラガミの討伐に向かった。

遅れて薫がヘリから顔を出す。

（えー、ここから降りるの？ どうみても高度百メートル前後はあるよ？）

薫はまだ降りてなかった。

まだ、感性が一般人の為に飛び降りるのを躊躇っていた。

「うーん、皆飛んで僕だけ飛ばないのはおかしいから飛ぶか」

一人遅れてヘリから飛び降りる。

ソーマは飛び降りる途中ザイゴートを一匹神機で引き裂き容易くアラガミを沈黙させた。

三人は着地しアラガミ群体の前に降り立つ。

それが『人』による『神』へ反逆の狼煙だった。

その三人は今までの餌とは違々とアラガミは認識したのか一斉にツバキ達に視線を向けた。

リンドウが先陣を切る。

アラガミ群に向かって走りその行く道を阻むアラガミをブラッドサージで切り裂いた。

「うらああっ！！！」

空中でリンドウに襲いかかるもサリエルも今までと兵士を蹴散らしてきたように行かず空中で脳天から引き裂かれた。

空中から着地したリンドウにコンゴウが好機と見たか続けざまに拳を振りおろした。

拳はリンドウに当たらず、イヴェイダーによって防がれ隙が出来たコンゴウは前に倒れたサリエルと同じ道を辿った。

ソーマはバスターブレードと呼ばれる刀身を軽々と持ち上げまるで剣自体に重さが無いかのように振り回しアラガミを次々と沈黙させる。

アラガミ達はソーマを強敵とみなし複数で襲いかかる。

襲いかかる多重レーザー、その身のこなしだけでかわし路傍の小石を蹴るが如くアラガミ達を攻撃を仕掛け沈黙させた。

ツバキは銃型 アサルトと呼ばれる神機を使っている。

剣と比べて華やかさが無い？ オラクルポイント等の制限がある？
制限があるしかし、それを負っても補う物がある。

オラクル弾の一発一発は剣型神機の凡そ三倍以上に匹敵するのだ。

華やかさが無い？ それは違う。

一番ド派手な神機が銃型神機なのだ。

ツバキは自作したバレットを以てザイゴート、サリエルを沈める。

グチャグチャ、水気を帯びたグロテスクな音が近くの兵士に聞こえてきた。

「ん？　これ、なんか美味しいかも知れない」

薫は捕喰形態で生きたアラガミをそのまま捕食する。

ダミーでは得られなかった。活力と満たされた感覚が沸き、それに釣られ好奇心が沸き次々とアラガミを捕喰し引きちぎる。

アラガミは薫を危険な敵と認識する。

捕喰の度その速さは上がり、打撃力等もあがり捕喰する速さも上がる。アラガミに取って最悪な悪循環だった。

アラガミに取って不幸だったのが薫が旧型神機ではなく、新型という点だ。

旧剣型神機では捕喰はできてもそのオラクルの活用は身体能力の向上でしか使い道が無い。

旧銃型神機ではオラクルの活用ができてても捕喰ができず、オラクルが尽きてしまう。

しかし、新型はその両方が出来る。

オラクル細胞の配列が複雑な上簡単に配列が切り替わる。

適合者が少なくなるが適合者が居ないわけでない。

旧型神機と新型神機の適合者を実践で組むと、

「それ！　いつくよ」

薫の間延びた声が響き、ソーマに活性化したオラクルエネルギーが受け渡される。

「ちつ余計な世話だ」

唯でさえ脅威だった。ソーマが凶悪な性能を発揮する事になる。

ボルグ・カムランがソーマに向かってその尻尾先で突こうとする。

バーストした、ソーマにその攻撃は無意味に等しかった。

勢い付けてボルグ・カムランにイーブル・ワンを振りおろす。

地響きが鳴り近くに居たザイゴートは巻き込まれ、ボルグ・カムラン共々沈黙する事になる。

尻尾の一撃で兵士に多大な被害を齎したボルグ・カムランはソーマのたった一撃よって完全に沈黙する。

薫が捕食したエネルギーを次々とツバキ、リンドウ、ソーマと渡していく。

「おっ？　新型ってのはこういう事もできるんだな！　おっと回復弾か、すまん」

リンドウは薫が戦闘に加わる事によって今までの任務より動きやすくなった事を実感していた。体力が落ちた時に回復弾がアラガミとアラガミの間から薫が撃ち幼い子供に妙な頼もしさを覚えていた。「礼を言うぞ、薫。弾切れだった」

予め、新型の性能を聞いていたツバキは戦闘能力の向上を感じ旧銃型神機ではバースト状態にはなれない為初めて感じる高揚感に釣られ攻撃の勢いが増す。

三人に渡した途端、爆発的に戦闘は加速し兵士が苦戦していたアラガミが次々と沈黙し地に伏せる。

ある兵士は目の前に起きている事が理解できなかった。

銃も刃物も効き目がない存在を容易く葬る目の前の四人の所業が信じられない。

「っ？！ なんなんだ、あいつらは……………」

兵士がそう言ってる間にも次々とアラガミが地に伏せていく。

「……………本当に人間なのか？」

ゴクリと唾を飲み込みリンドウ達の戦闘に目を奪われる。

それがいけなかった。

隙を狙われ兵士はコンゴウに押し掛かれた。

「うつつわあああああああああああ！」

コンゴウは自分の下で泣き叫ぶ人間捕喰しようとした大きな口を開き兵士に口を近づける。

「つぐひい、あああああああああああああ！」

恐怖で思考が定まらず抜け出そうにも唯の人間には無理だった。

イヴェイダーが突き刺さりコンゴウが血飛沫を上げる。

「下がってろ！」

リンドウはそう言うなり兵士に背を向け次の目標へと走った。

兵士は九死に一生を得て安心した所に別の方面から悲鳴が聞こえた。

グチャグチャ、と音を立て薫は兵士に襲いかかっているアラガミを捕喰し素材もついでに物色していた。

全体からみたら少しずつ、少しずつではあるが確実にアラガミ群の数は少なくなっていく、リンクバーストの影響で数の減りは加速していく。

三段階のリンクバーストを受けたツバキは薫が捕食したアラガミ特色を受け継いだバレットをアラガミに撃ち返し広範囲のアラガミを沈める。

大尉は命からがらザイゴートから逃げ果せ、代償に身体に多大なダメージを負い足を引きづって廊下を歩く。

「うぐっ！ はあはあ」

指令室についた大尉はキーボードのボタンを押し、兵士へ告げる。

「つぐ、全兵士に告ぐ……総員退避せよ」

言葉を言うのがやっとの状態で全兵士に告げた。

「繰り返す、総員退避せよ」

その言葉を受けた兵士は退避の準備を始めソーマ達が戦闘を続行しているにも関わらず誰も告げずにへりに乗り込んだ。

サリエルがツバキの神機から発射されたアラガミバレットから縦横無尽に逃げる。

ツバキはオラクル弾一発撃ちサリエルの動きを止めアラガミバレット命中させた。

アラガミの数は減り漸く一段落ついた所でへりが上昇する音が四人の耳に聞こえる。

リンドウとツバキは退いていくへりを見つめ、

「おい！ 何であいつら退いて行くんだ！」

「つく見捨てるつもりかっ！」

ツバキはその行動を理解し顔を歪ませる。

「ん？ また？ なんぞこれ？」

薫は身体が初めて感じる感覚に疑問を持ち唸っていた。

「まだ来る」

ソーマは、得体の知れない感覚でツバキ達が気付かなかったアラガミ群の来襲に気付く。

よく見ないと分からないが確かに遠くの方でアラガミ群がこちらに向かってくるのが分かる。

「くっそ、このままじゃ持たねー！」

リンドウが現在の状況を理解し毒づく。

そんなリンドウを尻目にソーマは自身の思考に埋没していった。

場所は核融合炉制御室。大尉はその場所に身を移していた。

大尉は核融合炉を制御する機械にパスを打ち込み、これから行う、ある機械を引きだしロックの解除を行った。

打ち込んだ機械の隣に機械が出てき大尉はそれに向かって歩く。

「バケモノどもめ！」

それが大尉の最後の言葉。

ボタンを押した大尉は作戦の成功を感じ取り顔がにやつく。

核融合炉のが臨界点を突破しエネルギーが暴走し始め周りに被害をもたらした始めた。

「あれ？ これやばくないかな……」

薫は目の前で起こった核融合炉の暴走に冷や汗を掻く。

そのエネルギーは巨大で眩しく地上に出来た小さな太陽だった。

極東支部に居るリンドウ達の無事を祈ってるサクヤ。

極東支部の外部居住区で空を見ていたシスコンの少年。

同じく極東支部の外部居住区で異変を感じた黒髪の少女。

旧ロシアの地区に住む灰色の髪を持つ少女。

見ている場所は違えど皆（みな）一ソレを見ていた。

それはやがて薫達を飲み込み、その大きさは月の十分の一までもなった。

作戦の成功を感じ取っていた大尉は羊飼いを犠牲にして良かったと思い。成功をした事を安堵していた。

しかし、そのにやついた表情が突如凍る。

大尉以外だれも居ない部屋に鳴り響く、甲高い機械音。

画面の表示にはunknownと表示されていた。

暴走した巨大なエネルギーに帯状のモノが何重にも巻きつけられ締め付けられる大きさを限界まで締め直後、爆発を起こす。

あらゆるものが吹き飛ばされる。

雲も、樹木も建物も退避したへりもすべて吹き飛んだ。

旧ロシア地区の雲が吹き飛ばされ、あれだけ吹雪いていた雪も消え空は晴れ渡るような空に変わる。

青々とした空は人間の愚行を嘲笑ってるようにも見え、何もかも瓦礫にかわった地帯は人間の無力さを表しているようにも見えた。

融合炉の近く瓦礫が動く。

手をピクピクと動かしリンドウが起き上がり、それに続け瓦礫にうつ伏せで埋もれていたツバキ、ソーマと起き上がる。

三人は視線を合わせお互いの無事を確認し……一名足りない。

三人は顔面蒼白になった。

「おいっ！ 薫を探すぞ！」

「ちっ世話を焼かせやがる」

「リンドウ！ 私はこっちを探す！お前は向こうを当たれ！」

ソーマは薫を幼い頃初めて出来た友達でありバケモノである自分と今でも普通に接してる人物である。何より幼い頃の借りを返さないまま目の前から居なくなるのは癪だった。

三人が思い思い探しているとあっさりと薫が見つかる。

ツバキは融合炉の入り口付近で気絶している薫を見つけ抱き起こす。安心する三人、だが薫の口からとんでもないものが漏れた。

「ふっ渡ればいいんでしょう？ この川を……」

不穏な寝言を吐いてる薫を起こし、逝ってはならない川の向こう岸に薫は行こうとしていた。

焦るツバキ。リンドウは頭に手を当て、あちゃーと呟く。ソーマはふんつと鼻を鳴らしたが内心安心したが川の向こう岸に行こうとしている薫を見て冷や汗を流す。

「待て、薫それは渡るんじゃない！」

ツバキが薫を揺さぶり薫を起こす。

「む？ あれ？ここは？生きてるの僕？」

心底安堵したツバキは薫を胸に抱きしめ、小学三年生である薫はこのメンバーでは一番幼く。薫の幼い身体では辛い、戦闘の疲労がどっと押し寄せそのまま眠りついた。

一時間後フェンリルから後処理部隊が現場に来て死傷者の身元確認などが行われ黙々と作業が行われた。

その様子を見ていたヨハネスは予想通りと言わんばかりに顔を歪ませた。

リンドウは寝ている薫を背負い作業を見つめこの作戦は違和感を覚えた。

自分達をバックアップと後始末の為に送り出したヨハネスの皮肉めいた微笑が脳裏から消える事がないのだ。

幼いすぎる薫、漸く思春期に入っただけのソーマ。

まるで最初から結果が分かっていたという任務。

余りにも不可解だ。

多くの犠牲を生みだし作戦は失敗に終わった。

多くを失い何も得られず、ただ犠牲を生みだしたただけの人類の愚行それだけだった。

本当に？

以前薫に問いかけ返ってきた言葉を思い出す。

『終末捕喰は巨大アラガミ　ノヴァによる地球の再生システム……っ？！』

その時の薫は自分が気付き他者が知ってはいけないものを話してしまったという感じだった。

地球の再生システム。

これはどういう事かリンドウは自分なりに調べてみた。

姉であるツバキにどことなく昔は地球はどうだったか？　等と聞き、確信を得た。

アラガミの出現により着実に地球は太古の昔へ戻ろうとしている。

だが、その答えは同時にリンドウに新たな疑念を抱かせる。

巨大なアラガミ、ノヴァこれはどういう事なのか？

捕喰の果てに地球を……星を捕食する存在ノヴァ。

すでに存在しているのではないか？

様々な疑念が浮かび上がる。

リンドウはこの事件を境に真実を探し求め始めた。

粗方作業が終わったのかツバキ達はヘリに乗り極東支部へと帰った。

ソーマはヘリの中で初任務で起きた事件について思いふけていた。

（あの事件が人類最後の愚行だとしたら荒ぶる『神』はそれで静まっただろうか……。ともあれ物語りは終わらない。俺達人間がソレを繰り返す限り『神』への贖罪は続くのだ。）

「……マ！ ソー……！ ソーマ！ おい！ ソーマ！」

ソーマは眼を開けしつこく自分の名前を読んでもリンドウに視線をやる。

「ソーマ、そろそろだぞ」

（それでも一緒にくるかい？ このイカれちまった世界に）

「ソーマ？ 金平糖いる？」

（ちつ能天気な馬鹿が声を響かせやがる。落ち着いて想いにふけやしない）

「……もらっ」

そう言ったソーマの顔は確かに少し笑っていた。

へりは上昇していき極東支部へと向かう。

上昇したへりを見つめていたのは真っ白な少女が一人。

視認できなくなってもずっと見続けていた。

真っ白な少女はその方向へと歩き出す。

第十三喰目 もぐもぐ美味しいよ？これ。（後書き）

ちょっと早い中二病ですが、ソーマは患ってます。

中学一年生で中二病患者です。

ちよつと背伸びしております。早く大人になりたいんです彼は。

PV 編終了です。

ええ、終わりました。長かった。非常に長かった。

頭フル回転で書いてましたよ。それでもこのクオリティです。薫君、君の脳みそきれい。作者が楽できるようになるからさ。

さてさて、お気づきの方はいらっしやると思います。

原作主人公っぽい人物がちよろつと出ております。

作者は男主人公しか作ってなかったので女主人公のボイスを聞きに行きボイスを決めて参りました。

女主人公のボイスは……それは原作開始時で分かる事なのでその時にでも

この小説内での彼女の立ち位置は結構重要な位置にしています。主に薫関連です。

薫のイメージは3の性格と10の生意気さが無い少年っぽさを足し

てのをイメージすればそのままなので分かりやすいかな？

まあ、どちらも少年というイメージですが。

以下コメント返し

>リツカが好きだっ！

リツカさんがバーストでヒロインしたから人気なんですかね？

>ヤンデレって可愛いですよ

間違いなく馨は薫を喰いますからね。ピュアな薫が消えちゃう！薫逃げて！

>このメンバーが大好き

原作メンバーの中に馨が入ってそれを大好きと言って頂けるとは至極恐悦です。

>ハーレムになって欲しい！

ヘタレパンダである薫に魅力感じますか？

>最強メンバーだな

最強ですね。頭脳か技術か武力どれかに才能が入ってますしねこのメンバー。

>皆と幸せになることを切に願っておりますっ！！！！

できるかなあ？薫の場合コミュ能力皆無なのでフラグ立てても放置って事が一番ありそうで怖いんですが……。

所謂神様転生の場合……薫はどうなるか？（前書き）

十万アクセス突破！

一万ユニーク突破！

総合評価500突破！

本当にありがとうございます！

皆さまのおかげでここまで来れました。

記念しましてこれをお送りします。

この物語は……以外にも若干薫の核心部分に触れており……若干ではないですね。ええ。

注意としてあげるならば、青いです。

凄く青いです。

これも中二と言っのかな？

地雷臭がする方は直ぐに回避を！

所謂神様転生の場合……薫はどうなるか？

体が焼けつくように熱い。それと同時に自分の体から温かいものが外へと出て行き熱を失って来ている。

『熱い』『痛い』

そう、思ったのは薫が背中を刺されてから数秒たった時だ。

何故？僕が？何をした？

どうして？僕はこうなったのか？

出血で意識が朦朧としながらも様々な思考を薫は脳内に張り巡らす……答えは出ない。

ああ、刺されたんだ。

呑気にこれは死ぬなと薫は思った。

薫の脳裏に走馬灯が駆け巡る。

友人達との思い出が脳裏に浮かび最後に現在の回想が脳裏に巡る

薫は高校を人間関係のいざこざで中退した後、人間関係の練習をしようとコンビニでバイトし始めた。

そして、いつも通り、彼は朝バイトに出て帰宅中に刺された。

行き成りの状況、薫の頭は混乱する。

混乱した頭で考える。

刺した人間は 誰？。知らない人？ 通り魔 かな？

僕はなんて運が悪いんだ……。お姉ちゃん、母さん、父さん
ゴメン。僕、ここで死ぬ運命みたいだ。

そこまで考え薫は意識を失った。

斎藤 薫 享年十八

死因 出血多量による失血死。

薫は気が付くと自分が知らない場所に居る事を理解する。

ただ、真っ白い部屋。

真っ白な椅子、真っ白な机、真っ白な光。

何もかもが真っ白。

白一色。色が統一すぎる。薫が机等を認識できたのは下に出来た影から推測しただけである。

薫は訳が分からなくなった。

自分が刺されていつの間にかこの辺鄙な場所に居た。

ここは、どこなのだ？

何故？ 自分に背中に痛みがない上に傷がないのだ？

疑問を上げれば切りがなかった。

ただ、持ち前の頭脳で状況を分析する。

確かに、自分は刺され出血により意識を失いになりおそらくそのまま死んだ筈だ。

そして、現在傷が無い上に地も足りている状態だ。

夢？ いや違う、あの痛みは確かに現実のものだ。

様々な分析をしたが訳がわからなかった。

今の薫はまるで魔法が掛ったみたいに傷を負っておらず、至って普通の健康な状態なのだ。

薫が考えを止めて数十分、数時間が過ぎる。

正確な時間が分からないのはここには白いテレビなど用品があるにもかかわらず、時間を知る事ができるものがないのだ。

テレビをつけてもつける前と同じ真っ白な画面。本を開いても字も書いてない。

薫は知るよしも無かったが本には字が書いてあった。ただ、真っ白な文字で紙と同じ色で書いてあるのだ。だが、それを読めない薫にとっては書いてないと同義。

この部屋には時計がない。暇を潰そうにもテレビも本も訳が分からない代物だ。

途方に暮れる薫に声をかける存在が現れた。

「ふおおおおおお、驚いているのぉ？」

薫は声のした方向に視線を向けると、居たのはこの部屋の主に相応しい真っ白なヒトだった。

それを人間と言うには些か不快で理解ができない程気持ちが悪いのだ。もし、常人がこの人物を目にするとまず、不快を抱き次に目の前から消そうと強烈な殺意を抱き殺そうとするだろう。

しかし、薫は良くも悪くも普通ではない。

理解できない事象を見ると幼い頃から好奇心に駆られて行動したのだ。

そして、薫は感情操作により敵意は抱けない。殺意は抱けても敵意を抱けないのだ。幸か不幸か薫は洗脳により感情的にならなかった。

ただ、薫は目の前に現れた人物に興味を持つ。

「あなたは？」

薫は目の前のヒトガタに問う。

「わしは神じゃ」

「……………続きを。」

薫は目の前のヒトガタに対する答えを保留とした。

「分かっていると思うがお主は死んだ。それを告げに来たじゃ。」

「……………」

「正直に言つとわしのミスでお主は死にお詫びという形で能力付き転生をさせてやろうと思う。そして、一つだけ願いを叶えてやろう。」

ヒトガタの言葉が言い終わると同時に薫の心は壊れた。

見る影もないくらいに砕け散り薫という存在は死んでしまった。

「い……………らせてください。」

「ん？」

「生き返らせて下さい……………。なんで？ 転生は嫌です……………お願いだから生き返らせて下さい。」

ヒトガタはひげをさすり薫を見やる。

薫は泣いていた。目の前の人物に縋り泣いていた。

「お主は見る限り悲惨な人生だったぞ？ 幼い頃から姉を始め友人が洗脳をお主に施したのだからな？ その弊害でお主は最後の友人

に敵意を抱かれたのだぞ？」

神は怪訝そうに薫を見た。

そうヒトガタは神だった。初めて神格を出し神として薫を見やる。

神は本来、ヒトの世界に関与しない。

神はわざと薫を殺しきまぐれで能力をやり転生特典をつけ暇つぶしを兼ねて行った。

本当にきまぐれだ。本来神というものは人間に興味をもたない。人間が細菌に感情を抱く筈がないように神は人間に感情を抱かないのだ。

薫はみつともなく崩れ落ち泣きながら神に乞う。

「僕はそれでも頑張って生きていたんです。洗脳を施されていても僕の掛け替えのない姉と友人だったんです。例え嫌われていても政次とは仲直りできるように頑張って人間関係を理解しようとしていたんです。」

嗚咽を上げながら薫は泣き、必死に神に乞う。

「お願いです。神ならば僕を……僕を生き返らせて下さい。」

「今なら転生を選べばお主が欲しかった友人がいつぱいできるよう計ってやるぞ？ そうじゃ、なんなら能力を増やそう！ 何、わしにかかればそんなもんちよちよいのちよいじゃ。」

薫は首を横に振り転生を拒み。神が最初に言っていた願いを聞くと言う言葉にすがり再度乞うた。

「あなたから見たら僕はちっぽけでまともな関係もつくれず、不幸な人生だったかもしれない。でも、僕は必至に頑張って生きていたんです。僕のまわりは僕自身に洗脳を施したかもしれない……ですが、僕を大切にしてくれました。離れたくないんです。」

神は人を選び間違えた。洗脳の所為か薫は純粹なのだ。歪んでいる純粹な人間の薫はただ一心に姉と友人の事だけ想っていた。

どれだけ薫を優遇しようとも薫は首を縦に振らず転生を拒み、生き返らせてくださいとしか言わない。

神は薫に対して負けを認め薫を生き返らせお詫びに洗脳を解き、対人関係の能力やると言ったがこれも薫は首を横に振り、代わりにこう言った。

「この出来事の記憶を消して下さい。自分で気付いてみせます。」

神はそれに驚き、その考えを理解し初めて薫に向けて笑った。

薫を生き返らせ殺人の出来事を無かった事にし、記憶を消した。

すべて、終わらせた神は背伸びをし下界を見る。

「たまには普通の人間の観察でもいいか。」

神は姿を変え薫の顔とよく似た少年の姿で言った。薫を気に入る薫と同じ姿を取ったのだ。

薫に重要なモノを与えなかったが、

「これぐらいのお詫びはさせてよね。」

縁結び、心願成就、神恩感謝等のお守りみたいな加護を与え楽しそくに薫の様子を見守った。

何もかもが戻った後、薫はバイトから家に帰り家で為替をやつてる姉 馨に甘える。

馨は現在の作業を止め、溺愛している弟の相手をし存分に甘えさせる。

「どうしたの？ 薫？ 今日はやけに甘えるね？」

薫は姉に抱きつき膝枕をして貰っていた。

「うーん、なんでだろう？ 何でか寂しくなっちゃって……。」

幼い頃から変わらない無邪気に笑う薫を馨は苦笑し頭を撫でた、二人は居間で就寝するまで一緒に過ごした。

少しだけ変わった明日がまたやってくるのを楽しみに薫は眠った。

後日、少しだけ友人を含めた女性に縁が増え、政次と仲直りの時間を割くのに苦労する事になる。

所謂神様転生の場合……薫はどうなるか？（後書き）

神様転生は薫にとっても神にとっても鬼門です。

まあ、問答無用でやる。邪神等の神様ならば薫は為すすべもなく転生させられるでしょうね。

ちなみに作者は無神論者ですが、幽霊はいると信じてます。

作者の中の神というのは昔の逸脱した能力をもった人間が神として呼ばれたのではないのかと論じております。

超常現象的な物を考えますと

神と言うのは五次元にいるのではないと考察しております。

知らない人もいるだろうと思うので五次元と言うのは簡単に説明しますとフランスパンを二つ用意します。

二つを縦に並べて下さい。―― こうなりますよね？

この二つのフランスパンの間が五次元です。そしてフランスパンを切るとそれが四次元を含む世界になります。

つまり、フランスパンの縦の長さが四次元の時間軸になるわけです。

神という存在がいるとするならばこういった場所にいるんじゃないですかね……。

こういう事を考える胸が熱くなります！キリッ

では、感想、ご意見をお待ちしております。

間喰 ふいゝ、やっと研究に戻るよ。(前書き)

今回は閑話みたいなものです。

P・S

しかし、ゴタゴタが現在最悪な展開を迎えました。
重すぎる、後輩よ前も何故私に頼るのだorz

間喰 ふいゝ、やっと研究に戻るよ。

深夜三時、研究室はまだ明りがついており部屋の中からカタカタとキーボードを叩く音が聞こえていた。

「こうしてみると、随分と薫君は……」

榊は夜中まで薫についてのデーターを整理していた。

ディスプレイには『斎藤 薫』と大きく書かれ、そこには薫の身長体重、生年月日、オラクル細胞の適合率まで詳細に表示されていた。

斎藤 薫 九歳

保護者、斎藤 馨との血縁の関係はない。

知能、運動能力、音感、あらゆる方面の才能を所持している。

育て方によってフェンリルの損得に関わる可能性が大。

本人はその才能に関して自覚していない模様。彼が同年代と同じ教育機関に行くとは無自覚に彼の才能が他の人材を潰す可能性大きい、よって同年代と隔離すべき

榊は薫の能力面の欄を一通り見た後、画面をスクロールした。

斎藤 薫の『精神状況』

エニアグラム、タイプ五。

『知識を得て観察する人間』

に該当し、中でも社交性のあるタイプ五と診断。これには条件がつき彼が心を許した相手には甘える等の行動を取る。それ以外の相手には人前用の仮面被っており距離を取る。

知識を蓄える事を好み賢明であろうと心がけている。分析力や洞察力に長け客観的な傍観者に徹する事を好み、現実の観察力に長けているが、口数が少なく遠慮しがちだ。愚かさを恐れ仕事を始める前、あるいは意見を述べる前に、こつこつと情報を収集し、状況を

すべて把握しようとする。これに関しては薫がP・53アームドインプラントの小型化する時の行動が示している。

また、タイプ五は孤独を好む傾向がある。薫も自分の時間を大切に考察をしている模様。

榊はここまで見て一息吐いた。

（タイプ五というのは私と同じみたいだね……さてさて自我、個性共にしっかりと確立しているのにも関わらず、彼の精神は人より複雑怪奇、何故だろうか？）

榊は心の中でため息を吐きながら隠しファイルを開く。

画面にはパスワードを要求しており、デフォルメされた可愛らしいオウガテイルが此方をみたり明後日の方向を向いたりして動いていた。

画面をみて榊はうんうん、と上機嫌に頷きながら十六桁のパスを打ち込む。

すると、パスを受け付けた画面は切り替わり、Secretと画面に表示され今まで明るい背景が急に暗くなり出す。

しばらくした後、薫の精神グラフが表示された。

これは榊が自分でまとめた薫の精神状況のレポートだ。

余りにも不可解な状態の精神と才能。

榊はこれを格好の観察対象として捉えていた。

前回疑問に思った薫の吊り合っていない高水準な能力と精神状況。他者と関わりによって遅かれ早かれ自身の才能に気付くものだ。

それを自覚できないというのは妨害があると考えられるのだ。

榊はこのままだと確実に薫は孤立する事を憂いでいた。

天真爛漫な性格、才能。

そしてこの状況において最悪なエニアグラム。

エニアグラムというのは人間を九つ分類する人間の本質を表す地図、グラフのような物だ。

赤ん坊と言うのは無垢で生まれてくる。つまり、その子の本質以外の何も持たず生まれてくるのだ。しかし、その後、環境や他社との関係の中でうまく生きていく為に様々なモノを身につけていく。

赤ん坊が泣くというのは肉体的トレーニングであり、成長の重要な行為だ。だがそれは同時に現状の不満を示す、自己主張でもあるのだ。

赤ん坊が一切泣かない環境は造れない。当然だが、自己と外界のギャップがある。だが赤ん坊はそれが我慢ならないのだ。

自己を守る為、赤ん坊は外界と自分の間に防壁をはる。

これが自我意識。

自我意識は社会に適用する為に人間が初めて身につけるものだ。
恐れを対処し外界から自分を守る防具。

赤ん坊はこの自我意識を活用し他者と触れあうのだ。

この時本質が表れる。そして同時に囚われが生まれる。

両親に大切にしてもらおうと言う時、行動で分かるのだ。

前世の幼児時期の薫の場合は情報や知識を収集し、自らの頭の良
さ知識の豊富さを褒めてもらおうとしていた。

薫の本質はタイプ五。

囚われは『空虚を避ける』

これが非常に問題だった。榊はこれについて悩んでいた。

榊自身薫と同じ本質持っている。だからこそ理解^{わか}る空虚さを避ける事を……。

だが、薫の場合は違うのだ。極端に空虚さを怖れその囚われが深

い、そして逃げ道として知識へ執着する。

そこまでは良い。問題はその後、薫は特定の他者へ依存するようになっていくのだ。

元来タイプ五は子供頃家族に余り構われない寂しさから、過干渉の余り感情がわずらわしいと感じ感情から遠ざかる。

榊も親から構われない寂しさから感情から遠ざかったと記憶している。

だが、薫は逆に特定の他者から感情を受けようとするのだ。

本質がねじ曲がっている。おかしかった。おかしすぎた。

例えば、葬式に向日葵を飾り矢で射らず弓で叩く。あまりにも不自然すぎる強烈な違和感。

（間違いない、薫君は洗脳を施されている。歪まされている。だが、何時？ 何処で？）

榊は以前考えた恐ろしい予想が当たっていた事を知る。

しかし、その方法がわからない。薫が外へ遊びソーマと遊んだ事も事実だ。

薫は監禁されていない。これも馨が仕事に出ている為分かる。

二人は確かに一日中一緒にいる。その様子は変な所は見られない。若干他の兄弟姉妹とスキンシップが激しい、多いかもしれないが、

…。

このまま薫が成長し他者と関わるようになる。

だがこのままでは駄目だ。双方ともに良くない。

薫は無自覚に他者の才能を潰し、そして孤立していく風景が榊の脳裏をよぎった。

「しばらくは薫君を変則的なアスペルガー症候群として診断だ。薫君の感情を理解してから社会見学など様々な知識を受け渡せばいい。幸い彼は私よりも聡明だからね……」

薫の精神状態はアスペルガー症候群に似ていた。

その内容は対人関係及び他者の気持ちの推測力不足の問題だ。

実に今の薫の状態に似ている。あくまでも似ているのだ。

榊が薫を疑似的なアスペルガーと称したのはここにあった。

そもそもアスペルガー症候群というのは障害である。

似た症例としてあげられるのはよく知られている自閉症　カナー症候群だ。アスペルガーはカナーと違い知的レベルが健常者と同レベルの為発覚しにくい上誤診されやすいのだ。

薫には障害が見られない為榊は変則的なアスペルガーと称した。

健常者である薫にアスペルガーに似た症例、だがアスペルガーで

ない以上矯正は可能である。

薫の精神の矯正をする事に決めた榊は「何年掛る事だろうね？」と呟きながら研究室を後にした。

ユーラシア掃討戦後、リンドウとツバキ、そしてソーマの知名度は格段に上がった。

たった三人でアラガミ群を蹴散らしその強さは鬼神如き！

等と噂に尾ひれ背びれがつきアナグラ中に広まった。

自分の噂を詳細に聞く人はめったにいない、そう三人はその噂の欠けている部分を知らなかった。

そう、薫の存在である。

新型神機を発案したというのは極東支部、果てはフェンリル本部にまでその名は届いている。

しかし、新型神機の適合者や掃討戦に参加したと言う事は腕輪が小型化し服に隠れる事もあり全くと言っていい程薫存在を知られていなかった。と言うのも榊、ヨハネスが薫を失わなうよう適合試験の前に綿密に検査し神機に喰われぬよう尽力した。身内で試験を済ませた為、薫の紹介が無かったのだ。常に神機使いは外に出ており薫の神機の訓練関係者 リンドウ、ツバキ、ソーマ以外は薫が新型と知らない。

ヨハネスも榊も特に今後の業務に支障はないのと薫がその事実を言わない為、時間の省略を兼ねそのまま薫を自身の成長に集中させた。

薫は噂が耳に入っても自分がいないと分かったが特に何も思わず、今までと変わらず榊の講義と言う名の社会訓練を受ける。

講義を受けている最中薫は講義と並行して頭の中で二つの出来事
を処理していた。

一つは講義もう一つは掃討戦において自分の状態だった。

ユーラシアの掃討戦後薫は悩んでいた。

何故こんなにも普通の神機に威力があるんだ、と

薫の神機はショート、スナイパーのシールド遠近両用の神機である。これについてはレンが「僕と一緒にですね！」と喜んでいた事をここに追記する。

新型の神機なのだ。勿論銃身、刀身を変えブラスト、ロング等と
替える事も可能だ。

問題はパーツの種類。

ナイフ、支援シールド、ファルコン。初期装備である。

原作を知っている薫はこれらの装備品が能力値が低い事を知っていた。

しかし、薫は先日の掃討戦においてアラガミに対して甚大な被害
をこの装備で与えた。

（何でだろ？ あっ？！……捕喰と回復弾しか撃ってない気がする）

あっさりと答えを見つけ思考を終わらせた。

掃討戦での疑問はまだ残ってる。

あの時に感じた感覚がどうしても忘れられない。

掃討戦でソーマが変な事を言う時になったあの感覚、薫は自分の身体の変化に戸惑う。

これについて薫は考えても答えが出ず保留となった。

実際の所、もう実戦に出ないのだ。

戦闘について悩まなくてもいいだろうと薫は結論付け片方の思考を破棄し榊の講義に集中した。

間喰 ふいゝ、やっと研究に戻るよ。（後書き）

今回はエニアグラムの話でした。

知ってますか？エニアグラム自分の本質を見極めるのに使い、人生のコンパスにもなります。

やっておいて損はないですよ。

今回は薫のタイプ五しか出ませんでしたが一応ここに全部書いときます。

タイプ一、完全でありたいとする人（完全主義者）

タイプ二、人の助けになりたい人（献身家）

タイプ三、成功を追い求める人（達成者）

タイプ四、独特な存在であろうとする人（芸術家）

タイプ五、知識を得て観察する人（研究者）

タイプ六、安全を求め慎重に行動する人（堅実家）

タイプ七、楽しさを求め計画する人（楽道家）

タイプ八、強さを求め自己を主張する人（統率者）

タイプ九、調和と平和を願う人（調停者）

なお、これは本質ですのでどれがいい？とかは関係ありません。

アインシュタインはタイプ四の芸術家タイプですが、彼は知っての通り研究者として大成しています。

しかし、その相対性理論の側面は思考実験という独特なものがあります。これはタイプ四の特徴が表れています。

タイプ八では有名な画家パブロ・ピカソと思想家ニーチェ等挙げられます。

タイプ九ではホラー映画で有名なアルフレッド・ヒッチコック。

タイプ二では宗教改革家マルティン・ルター、かの有名な歌手エルヴィス・プレスリーがあげられます。

最後に申しますと

この本質はその人自身の一番の長所が挙げられると同時に短所も挙げられます。

例に挙げるならばタイプ八。

この赤ん坊の頃に両親への自身のアプローチは正義を貫く強さを評価しようとしてもらう。

これは赤ん坊が自分の一番の長所が己の意思強さと無意識に感じ取っているからです。

だが同時にこれは頑固ものとなりますよね？

そう言う事です。

ヨハネスはタイプ八でリンドウはタイプ七ですね。

I K E M E N Nの幼馴染はタイプ二で作者は薫と同じタイプ五でした。個人的に作者はタイプ七だと思ってたんですがね。

両親に聞いてみれば幼い頃図鑑が友達だったそうで……寂しい話ですね。ええ。

皆さんはどのタイプでした？

感想にて御指摘があった為アスペルガー症候群について補足説明分を追加しました。

第十四喰目 届かない叫び（前書き）

自分の文才の無さに心が抉られる。

処女作だからってこれは酷い出来です。

文章等のアドバイス等ありましたら是非教えて頂ければ嬉しいです。

第十四喰目 届かない叫び

ユーラシアの掃討戦後、現在に至るまで薫は自室と研究室の間を行ったり来たりしていた。

と言うのも、榊が薫の対人関係のスキルが一般人レベル以下だった事が起因する。

榊が薫の能力も踏まえて以前見たデータを参照するに薫は孤立してしまうと考え一般と隔離したのだ。

本格的に薫の精神矯正が始まったのだ。

これにより、薫の一日は完全固定化されサラリーマンと同じ生活習慣を送る事になる。

朝起きて、歯磨き。髻の手作りのご飯を食べ、お気に入りの服パンキーパーカー、パンキーハーフを着て榊の所へ向かう。昼まで講義を受け、昼食を食堂で食べ再び、研究室に戻り今度は精神矯正を受ける。小学生が帰る時間帯に薫も帰り。家で遊び夜には寝る。そして朝となりまた同じ行動を取る。

榊は一週間と同じ行動を薫に取らせたが薫の精神には何も影響を与えられていない事に驚愕する。

さすがにこの結果は無視できないものがあり。榊は髻に許可を取り薫を一週間外泊させる許可を取った。

一週間、榊以外の人物とコンタクトを絶ち。同じ行動を取らせた。薫はつまんないと言っていたが我慢してもらい。一週間固定生活を送ってもらった。

一週間後検査を試みたが、薫の精神は揺らがなかった。

固定生活を送る際、薫は自分以外と会話していない筈だ
っ！

珍しく柗は興奮した様子で薫の結果を眺めていた。

（不可解だね、実に不可解だ。）

柗は自分の考え纏めてみる。常人より早く回る頭はたちまち情報が整理され、状況が把握しやすくなった。

薫を固定生活を送らせたのはゲシユタルト崩壊を狙ったもので、薫に対して現在の状況を疑問視させるのが目的だった。

しかし、一度たりとも揺るがなかった。これにより柗は洗脳した人物が薫の近くにいと断定し、今度は薫を自分以外の誰からも接触できないように軟禁と言う形で薫を固定生活させた。

今度は状況が変わっているだろうと考えた柗は結果を見て感情を激しく揺さぶられた。

何一つして変わっていないのだ。薫の精神は固定生活する前と全く同じだったのだ。

柗が驚愕するのも無理もない。

洗脳というのは状況を疑問視させる事によって洗脳は徐々に崩壊していくのだ。そして洗脳を掛けられる時間はそのまま解除の時間に繋がる。

一週間洗脳されたならば、一週間もすれば解除できる。ゲシユタルト崩壊を起こしてやればさらに加速する。洗脳の解除中に洗脳の重ね掛けをされないように他者とのコンタクトも絶ち切った柗は薫の精神状況が信じられなかった。

洗脳解除をやり始めて約一ヶ月、榊は戦慄する。

おかしい、明らかにおかしいのだ。

一ヶ月だ。榊風に言いなおすとしたら秒数して二百五十九万二千秒。

これだけの時間を費やしても若干の揺らぎがあるのみだった。榊は洗脳が十数年単位で行われた事しか考えられなかった。

しかし、薫の年齢は九歳だ。生まれる前から洗脳を施す？ 否、無理だ。

自我意識と無意識に掛けるのが洗脳だ。自我意識のない状態で掛ける等あり得ない。ましてや、薫は捨て子なのだ。捨てられる前からどう掛けるというのだ。

榊は動揺する。洗脳を掛けた人物が複数、年数は十数年単位。それでは薫の年齢が噛み合わない上、人数的、場所的な問題が浮かび上がる。

噛み合わないのだ、状況全てが……。

結果だけみれば、薫は二十数年生きてる事になるが……当の本人は一桁の年齢。

榊が混乱するのも無理もない。榊はある事実を知らないのだから。

薫が転生をした人物である事。

この事実を知らないのが痛手だった。

さらには、馨の存在もある。彼女を筆頭に薫の洗脳を施した人物でもある。それも十数年に渡ってだ。

榊は馨を計り間違えていた。

榊にとつ馨は自分と同等の能力の持ち主と思っていた、それと同等に素晴らしい人格の持ち主とも思っていた。

それは違う。馨は薫に対しては違うのだ。

馨は薫が刺殺され、自暴自棄になっていた所、目覚めてみれば知らない両親と幼い自分だ。何らかの因果でなったのか、馨の海より深い狂氣的な愛情かは分からないが再び薫と出会った。

馨はこれにより箍が外れる。

元より狂おしい程に薫を求めていたのだが、血縁関係が無くなった事により前世の弟を合法的に犯す事ができる。

その事実には馨の背中から言葉で言い表せない背徳感が走り、歪んだ倫理がより一層馨の劣情を抱かせ馨の目は猛獣のソレになる。

榊は馨という人物を計り間違えていた。

馨は聖人ではない、薫に敵対する者はすべて排除する厄介な人物だった。

答えの出ない問いに榊は頭を悩ませる。

仕方ないと諦め薫の洗脳を徐々に解かす事をしかできず五年は掛る事にため息をついた。

「……………はあ」

椅子に深く腰を掛け天井を見た。これから、どうなるのやらといつもの笑みを浮かべた表情を崩し無表情になる。表情と言う表情を削ぎ落としたその顔は薫が被る仮面に非常によく似ていた。

薫の精神矯正から三年経ち、薫の対人関係構築能力は飛躍的上昇した。如何せん未だに精神の矯正がまだ必要ではあるが、前世とくらべても薫の能力はまさに雲泥の差である。

同じ人物であるが……十八にもなる少年が、現在の十二歳の少年に負けるコミュニケーション力は情けないにも程があった。

成長した薫が社交的になったかと言うとそうでもなかった。対人関係については榊がみっちり文字通り朝から晩まで教え込んだのだが、かといって薫の洗脳が解けているわけではなく。

薫の交友関係は狭いままだった。

「おばちゃん、今日はカレーライス！」

赤と黒のバンダナを頭につけている少年が食堂にいる中年の女性に注文をする。

三年もお昼時の食堂にきっかり十二時三十分にくる少年に中年の女性はガハハと笑いながら注文を受け盛りつけに掛る。

盛り付けが終わり少年 薫から食券を受取、メニュー写真とは違う多めのカレーライスを渡す。

「いつも通り多めの大盛りで入れといたよ。ところで薫君、勉強は進んでるかい？」

最初は無表情に注文していた薫だが顔なじみになってから笑顔を

見せるようになり食堂で働いている人は薫を可愛がるようになった。今では、こうして食事におまけをつけて貰うまで親しくなった。

「結構進みました！ いっぱい覚える事があるんですよ！」

「そうなのかい、頑張りなよ？」

「はい！」

しかし、中年の女性は勘違いしていた。薫の言う勉強とは薫の年齢 小学生が通常やる勉強とは違う。薫の勉強とは榊が教える高度な講義だ、経済、技術、オラクル細胞学等を指していた。

薫は中年の女性の勘違いには気付かず、それじゃあと別れカレーライスを持ちテーブルに向かい黙々と食べた。

仮に、薫が気付いたとしても榊に「自分の能力を一定のレベルまで落とすんだよ。」と指示されておりどちらにせよ薫の評価は素直な子供と変わらない。

榊は薫の対人関係で一番の懸念事項は薫の能力と考えていた。薫の才能は観察者 スターゲイザーである榊が強烈な嫉妬を抱くほどに凶悪なのだ。その才能は使わない時はなり潜めているのだから性質悪かった。榊は三年の間に薫に多くの制限を設けていた。前世の頃と比べ今の薫は知り合いが多い。薫は薫で制限を設ける事に疑問に思ったが前世の政次の事もあり、榊に講義を受ければ自分の対人能力の低さを改善できると考え薫は榊に従い三年間過してきた。

ゆっくりとカレーを食べていた薫だがふと考え込む。

「あつ！ 次アナグラの新しい人が来るんだつた…… 急いで食べなきゃ」

薫は用事を思い出し、急いでカレーを掻き込み、食器をトレーに乗せ返却口に置き食堂を後にしエントランスへ向かう。

エントランスで今アナグラにいるゴッドイーターが全員集められていた。

出撃ゲートの前で二人の男女が並んでおり両方とも緊張で顔が顔が強張っていた。

銀髪、スポーツ刈りの男が出撃ゲートの前で各部隊の隊長へ深々と頭を下げた。

「新しく、極東支部第二部隊へ入隊となりました。ブレンダン・バードルです。よろしく頼みます」

続いて、赤色の髪を持つ幼さを残す少女が言葉ともに頭を下げた。

「この度オペレーターを務めていた、橘サクヤさんに代わりましてオペレーターを務める事になりました竹田ヒバリです。よろしくお願います」

つい最近までオペレーターを務めていたサクヤは適合候補者にリストがあつたが適合する神機が無い為オペレーターを務めていた。ヒバリは奇しくもサクヤと同じ経緯でオペレーターになったのだ。

二人の挨拶が終わりメンバーの顔合わせが終わった各自解散となりエントランスは人が疎らになる。

ホッと一息吐いた二人にツバキが声を掛ける。

「一息ついてる所悪いが、この後予定が詰まっている。一度しか言わないので聞き逃さないように、予定が詰まっているので簡潔に済ますぞ。私の名前は雨宮ツバキ、旧型遠距離式の神機使いだ。ブレンダン、お前の教練は私の弟がやる手筈になっている。ブレンダンはメディカルチェックを済ませた後再びこのエントランスに^{のち}戻るように、次ヒバリは事務関係の仕事は正式に配属するまでに一通り覚えたらしいな。特に何も言う事が無いが……何か分からない事があれば斎藤馨という人物を尋ねると良い」

二人に一気に言葉を捲し立てた後、さっそくツバキはヒバリに任務の発注をさせ、任務の準備に取り掛かった。

啞然としていた二人は予定が詰まっている事を思い出し、ぎこちないながらもそれぞれ動き始めた。

二人の様子を見ていた薫自身も用事があるの思い出し整備室へと向かった。

整備室についた薫は神を待っていた。待つだけなのも退屈だと思いい、以前知り合っていた楠零治を探す。何せ新型神機やら三年間軟禁状態講義で碌な場所に行っていないのだ。

いくら探せど、薫の目当ての人物は見つからない。仕方ないとばかりに整備士に聞く。

「ああ、楠さんは亡くなりましたよ。寿命みたいだね、本当に唐突に亡くなれたよ。ただ」

続きは耳に入らなかった。

死んだ事を聞いた薫はいつも通り、原作通りかとは思えず、榊が来るまでただ茫然と立っていた。

薫は漠然と死ぬとはこういう事なんだな、とただ漠然と理解し感情を思考から切り離し整理した。

死んだら居なくなる。涙は出ないが、薫は知っていた人物がいなくなった事が寂しかった。それに釣られ自分が殺される瞬間を思い出してしまう。

思考が負のスパイラル落ちかける薫を救いあげたのは榊だった。

「薫君、さてお昼は食べて来たね？」

榊は伊達に三年間薫の精神を分析してない。薫の状態がどういった状態にあるかを講義中に把握していた。しばらくは薫の精神の揺れが収まるの待つ方針に決まった。

ヒバリ、ブレンダンがフェンリル極東支部に入隊して二週間。

二週間もすれば二人はアナグラにも慣れ、それぞれすっかりと役目を果たせるようになっていた。

人が二人程入ったからアナグラでの行動が劇的に変わるわけではないが、二人が加入された事で行動が変わった人物がいた。

「ヒバリちゃん、任務終わったらどこか遊びに行かない？」

「……えーと、予定が詰まっていますので……すみません。タツミさん」

そう、タツミである。いつも通り任務を頼もうとしたらオペレーターが違っていたのだ。二週間前タツミは少しその事に驚愕しながらも任務発注をしてもらう。

任務発注して帰ってきたら笑顔と共に放たれるお疲れ様の言葉。

タツミは自分の心臓にバレットを打ち込まれた感覚を起こし、それが恋愛感情と自覚すると即座にヒバリにアプローチに掛ったのだ。

しかし、二週間も続けているそのアプローチは未だに実らない。

タツミは知らない。このアプローチは今後四年間何の実りも無い事を……。

最も、その事実を知っている薫は可哀想な目でタツミを見ていた。薫は今度金平糖でも渡してあげようと慰めの言葉を心の中で呟いた。

零治の死から薫の精神は立ち直り、元気を取り戻していた。その際神が薫の洗脳についてある法則が分かり洗脳解除の手掛かりを掴んだのだった。

「さて、次は整備室で神機の機構改良だっけ？」

薫は最近行く事の多い整備室に向かう。

少し早目に整備室に着き、空いた時間で久しぶりに自分の神機を見に行こうと思い薫は神機の保管庫に向かった。

神機の保管庫には油や煤で汚れた少女が一人神機を整備しており他には人がいなかった。

薫は少女に挨拶しようと思ったが、時間が迫っている事を思い出し、自分の神機の保管ケースの前に立つ。

(……………懐かしいなあ、三年経ったんだよね)

薫は感慨深く神機を眺めていると声が聞こえる。

聞こえてくる方向を薫は見る。

「よう、新入り初任務はどうだったか？」

タツミ（の神機）がブレンダン（の神機）に話しかける。

「相棒は実践に出ても状態は、いつも通り冷静で頼もしかったぜっ！」

ブレンダン（の神機）は自慢げにタツミ（の神機）に返事をしてガタガタと神機の拘束具を揺らしていた。

「おいおい、マジかつ？！　だが、うちの相棒は一年で部隊長になったんだぜ？」

タツミ（の神機）の言葉を皮切りに他の神機達が自分の相棒を自慢し始めた。

「いやいや、うちの相棒は俺に金を掛けてくれるぜ？　これも絆だよな？」

カレル（の神機）は自慢げに自分のボディーを見せる。

「私の相棒はすでに戦力として数えられているわよ？　この間ツバキさんから聞きましたもの。実力は申し分ないってね」

ジーナ（の神機）はない胸張る。

「俺の相棒はすげえよ？　なんたって剣術の才能があるだぜ？　この間なんてアラガミをぶった切る時に『つまらねえものを切っちゃまった』とか言ってたし」

生意気そうにシュン（の神機）は他の神機に主人の行動を伝える。

「それは、厨二病だ。うちの相棒も罹ってるがな。」

ソーマ（の神機）が冷静にシュン（の神機）に突っ込みを入れた。

薫は目の前で起こっている状況が訳分らない。何故神機が喋っているのだ……。これもレンの所為なのか？

薫は頭を抱え、状況を整理する。するとそこへ聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「待って下さい！ やはり、一番すごいのは僕の相棒です。彼はユーラシアの掃討戦において文字通り何百のアラガミを奢ったんです」

リンドウ（の神機） レンが他の神機達に言う。

神機の自慢大会はレンの優勝で決まり、大人しくなる。

（レン 君も参加してるのか。……もう、カレルやシュンの神機もあるんだ。少しずつ少しずつ原作が近づいているんだね）

当たり前のように会話に参加しているレンを見て薫思考を放棄し、自分の神機を見る。

………

………

「………よし、喋らない」

喋らない事を確認した薫は満足そうに神機保管室から出ていく。

その様子を見ていた、少女 楠リツカは疑問を浮かべる。

「あの子、何しに来たんだろう？ フォーゲルヴァイデ家の子供かな？」

蛙の子は蛙。彼の血筋はしっかりとリツカに技術と共に受け継がれていた。

中学一年生が下校する時間、それは薫の講義終了の時間だ。

薫は先ほど挨拶できなかった。少女に挨拶に行こうと整備室に向かう。

薫は時期的なものを考え、少女を楠リツカと判断した。

研究室を出てエントランスに向かう為にエレベーターに乗った。エレベーターに乗る際近くにある自販機で薫は冷やしカレーをリツカの土産に持っていく事を決め一本買い、もう一本は普通の飲み物を買った。

エントランスに向かうと懲りずにヒバリを口説くタツミが見られ、困ったヒバリが薫に視線を合わせてきたが、薫はすまなさそうに微笑みながらエントランスを通り過ぎ整備室へと向かった。

ヒバリがその顔を見て固まる、タツミは行き成り反応が無くなったヒバリを心配する。ヒバリの顔は驚きで固まっていた。

数分後、平静を取り戻したヒバリはツバキを呼ぶ事にし業務妨害するタツミの油を絞る事を決めた。後日、エントランス、出撃ゲート等が綺麗になり憔悴したボロボロのタツミが見られた。

整備室に着いた薫は自販機で買ってきた、冷やしカレードリンクをリツカに渡しながら、

「お疲れ様です」

「っ？！ あっ！ さっきの子……これ貰っていいの？」

行き成り後ろから話しかけられたリツカはビクツと肩震わせ後ろを振り向く。

振り向くと先ほど神機保管室に入り眺めるだけ眺めて何もなかった男の子が目の前で好物の冷やしカレードリンクを差し出した。た。

「どうぞ、飲んで下さい」

「それじゃ、貰おうかな」

リツカは冷えに冷えた。冷やしカレードリンクを飲み、

「ぶはっおいしい〜！ やっぱ整備の後はこれだよね！ 君もそう思わない？」

「いや、僕は……カルピスが」

薫は改めて手に持つてる缶をみる。そこには冷やしーカレードリンクと書いてあり『選び抜いたスパイス、まるやかさを伴った濃厚なルーを冷やしてお届けします』と謳い文句がでかどかど書かれてあった。

（そもそも、カレーは飲み物なんかじゃ……）

薫は言いたかったが口をつぐみ、自分の好みを言うだけにした。

「そう、残念。そういえば、自己紹介してなかったね」

リツカは薫に目線を合わせる為に屈んだ。高校一年生のリツカと中学生になったばかりの薫では身長さが大きい。

「私は楠リツカ。まだ正式にはここに配属されていないけど、このクルーとして高校行きながら働いてるよ。君は？」

「僕は斎藤薫。技術開発部所属になります」

リツカが薫の名前を聞いて、目の前の子供が新型神機の発案者として知り驚愕する。薫の名前は知られていてもその顔は知られていないのだ。

「へえ〜！ 君がそうなの？」

「?? はい？」

「いや、だから君が新型神機の発案したんでしょ？」

「ああ！ いや、それは本当にアイデア出ただけで……発案と呼べるような実際に作ったの博士だし……」

「それでも、これまでの常識を覆したんだから凄いよ！」

「そ、そうかな？」

二人の間に神機と言う共通の話題ができたのかすぐ打ち解け互いにタメ口で話すようになった。二人実際に神機を弄りながら神機について語り合っていた。

時間を気にせず話していると薫はもうすぐ夕飯の時間だと気付く。

「あっそろそろ時間だ。じゃ、僕はこれで……」

「そうだね、私もこれ終わったら帰ろうかな。じゃまたね、薫君」

二人は手を振り別れる。

神機を弄って油まみれになった身体を綺麗にしようとシャワーを

浴びる。

シャワーを浴び、夕飯を食べ終えた薫は上機嫌になる。

油で汚れてしまったバンダナを惜しみながらも洗濯機にバンダナを入れ頭に何もつけず外に出てエントランスに向かう。

エントランスでは、今度はタツミ以外の男性ゴッドイーターがヒバリを口説いていた。

（おお、モテモテだね）

薫はヒバリの男性神機使いからの人気の高さが垣間見え二週間で骨抜きにしたヒバリに戦慄する。

（レンと同じニコポ持ちであつたか！）

薫がヒバリに畏れ慄いているとヒバリが迷惑そうに口説かれている現場を見たタツミがデッキブラシを持って男性ゴッドイーターに近づき、

「ヒバリちゃんが迷惑してるだろ？ ちゃんと考えな」

と言いながらエレベーターに乗り降りて行った。

「いや、それは貴方も当て嵌まるだろうに……」

薫の呟きはエントランスにいた人、全員の心内を代弁した。

よろずやの前で固まっている薫を見たヒバリは急いで業務の引き

継ぎを行い次の人にオペレーターを任せる。

ヒバリは薫に近づき声をかけた。

「王様！」

薫はキョロキョロするが、ヒバリの近くはよろずやしに居ない。ヒバリ目は薫を見ており、薫はヒバリの王様は自分を指している事に気付く。

「僕？」

「そう、泥団子の王様でしたよね？」

泥団子の王様、そのフレーズは薫の幼児期公園でソーマに殴られた時言われた言葉である。薫はその言葉で幼児期の思い出がフラッシュバルブする。

おおおおお！

すげえ！

泥団子の王様だ！

王様！！

すごい！

矢継ぎ早に薫に掛けられる声、どれもが賛辞だった。その中一人、上手く泥団子ができずに泣いている子供がいた。先ほど

のブランコの子供だった。上手く作れず、みんなに馬鹿にされ泣いていたのだ。薫はその少女に近づき血と汗の涙の結晶を少女に渡した。

何で？ 何でくれるの？

「思い出しました？」

「おお！ 五郎丸の！ 五郎丸は元気？」

「それで思い出さないください。五郎丸はちゃんと部屋に飾つてますよ。置いても崩れませんし、汚れませんしね、アレ」

「でしょ？ そりゃゝ頑張つて作ったもん」

ヒバリは薫の反応に苦笑する。あの時と薫は全く変わっていないかったのだ。

最初、薫を見た時ヒバリは薫に既視感を感じていた。しかし、薫みたいな強烈な印象を持つ子供は後にも先にも、泥団子をくれ、男の子の暴力から守ってくれた子供だけだった。

気のせいだと思い直し、こちらを見ていた薫に助けると視線を送るがすまなさそうに微笑みながら断られた時、幼い頃の記憶とその顔が合致した。

あれから、一度も会えなかった男の子。

学校に入り様々な人に出会ったけども、あの時子供程好きになる事はなかった。

その男の子が今、目の前にいる。

今バンダナをつけていない、その子はやっぱり、記憶の中にある少年と一致していた。

今思えば、アナグラで不意に不整脈が起こったのは必然だったのだ。無意識では薫と男の子が同一人物だって気付いていたのだ。

ヒバリは自分が神機の適合候補であつた事を感謝した。

適合候補者でなければ会えなかったのだから。

「紹介が遅れました。これから自分に適合する神機が見つかるまでオペレーターをします。……竹田ヒバリです。よろしくお願いします」

ヒバリは自分の名前を薫の記憶に深く刻みつけるよう自分の名前を薫に言う。私が竹田ヒバリだと……。あの時の君が守った女の子は私だと……。

「ありやどうも、御丁寧に。斎藤薫言います！ 所属は技術開発部です。よろしくお願いします」

ペコリ、と薫はヒバリに頭下げた。

肩の力が抜けるような薫の自己紹介をヒバリは薫の名前を自身の記憶に刻みこむよう聞いた。

自身の記憶に刻み込んだ後。

ヒバリは薫を改めて見る。薫は第二次成長期を迎えてないかヒバリより小さい。しかし、頼もしくないと見えなかった。なぜならあの時も同じだった、自分より年下の薫が男の子が振るう暴力から自分を守ってくれたのだ。体を呈して守られた幼いヒバリが薫に好感を抱かない筈がなかった。

自己紹介が終わった後、ヒバリは薫と話し込んだ。

結局、その日は薫の挨拶周りにはリツカ、ヒバリの二名のみで終わったのだった。

「あいばおおおおおおおおおおおおお！」

タツミ（の神機）が叫ぶ、相棒が惚れた女は既に意中の人がいるのだと。

しかし、タツミ（の神機）の声はタツミには届かない。彼ら神機、喋らないのが普通で聞こえないのが普通なのだ。

普通のゴツドイーターであるタツミには声が届かないのは仕様だった。

「ん？　なんか今日はやけにアラガミをぶった切れるな……調子がいいのか？」

「ああ、相棒。今日の俺は切れる男だぜ？」

神機の声は届かない。

第十四喰目 届かない叫び（後書き）

投稿が遅れて申し訳ないです。

ゴタゴタが片付いたので漸く投稿となりました。

今回の話ですが、まあ平たく言えば薫君のフラグ回収の話ですね。

しかも今回はなんと九千文字オーバーです。

書いててびっくりしました。

今回の話はお気に召しましたか？

感想、御意見お待ちしております。

前回返せなかったとコメント返し

>みんなを幸せにして下さい！

違った意味でのハッピーエンド的なできそうな気がします。

久々にヒロイン投票しましたが、アリサが盤石すぎますね。

それはそうとアリサの小説アンダーワールドの方は一先ず買いました。

ノッキングオブヘブンズドアは近くの書店には無かったので、迷惑代として親友をパシらせました。（笑）

これ読んだら多少は文章力上がるかな？と思いながら読んでみよう

と思います。

第十五喰目 罪深い研究（前書き）

タイトルがおかしい？

そんな事はありません。十分に関係あります。

厨二風味な要素？ それはソーマ君でしょう。彼にはこれから出張ってもらいますからね。

第十五喰目 罪深い研究

ソーマ任務から帰ってきた後、ベッドで震えていた。

「死神か……」

死神、それは他の神機使いがソーマを指す言葉。

チームを組みソーマと行くと仲間の内の誰かが死ぬ。チームを組み任務に向かう、すると戦闘能力が高いソーマが生き残る。神機使いとは弱肉強食の世界だ。弱ければ、その身を喰われアラガミの糧となり果て、強ければアラガミを退け生き残る事が出来る。実に分かりやすい構図。

『死神』それは、何てことない人間の弱さが生んだ蔑称^{へつしやう}。

仲間の死が受け入れられず、矛先をソーマに向け自身が太刀打ちできないアラガミを恨まずソーマを恨む。すり替えるのだ。

仲間の死をソーマの所為にする事で自分の心が保てない人間の弱さが作り上げる別のはけ口。

そもそも、任務には死が付きまとう。どの神機使いでも平等にだ。

死ぬ。死ぬのだ。

任務に出ていれば、死ぬ可能性が無くなるわけではない。

どんな屈強な者であろうと、死ぬのだ。

どんな虚弱な者でも生き残る事もあるのだ。

ソーマは、ベッドで仰向けになり右腕で目を覆った。

「死神かあ……バケモノの俺にはぴったりだな」

言葉の終わりと共に頬には雫が伝いベッドに落ち沁み込んでいった。

傷ついたソーマの心は癒されぬまま、ソーマは眠りについた。

午後二時、榊の研究室。

研究室に二人の人物がとある研究を進めていた。

ペイラー榊、斎藤薫の両名である。

薫は手に持っているガラス製のコップを置き一息ついた。

置いてから榊は頃合いを見計らって、

「薫君、どうだった？」

榊はフラスコの中に入っている、サーモンピンク色の液体をくると回しながら聞く。

先ほど薫が飲んだのは榊が現在進行形でフラスコの中にある液体である。

薫は目をフラスコの液体向けてから榊の目を見て一言。

「凄く、美味しいです」

「そう、でも薫君。これは失敗作なんだよ。私が想い描く至高の飲み物は甘さの後に苦みが後を引く様な……」

「……えっ」

「ん？ 何だね？」

「いえ、何でもないです」

薫は気付いた。榊がカロリー栄養バランスすべてを計算しながら

作っている飲み物は未来においては『初恋ジュース』と呼ばれるのだ。

どう気付けと言うのだ。三大栄養素である炭水化物、脂質、たんぱく質。果てまで代謝を補助する栄養素、従属する栄養素を調整し計算した飲み物が未来において『初恋ジュース』と呼ばれるものだと……。

榊は無駄に高速回転する頭脳を無駄遣いし『初恋ジュース』の完成を目指していた。

薫としてはその味を味わいたくない。

どちらにしろ薫の所為で研究が二年分は進んだ。薫自身の頭の良さが研究の速度を速めたのである。榊にとって願っても無い事だが薫にとって実に嫌な出来事だった。

「薫君！ さあ、研究の続きと行こうか！」

榊は研究室を出て実験場に向かった。

「……はい」

少し意欲減退した薫を尻目にスキップする榊をみて薫は普段はあまり動かさない表情筋を引き攣らせた。

榊の研究から解放された薫は挨拶周りの前にソーマに会いに行く事を決めた。きっと今頃ソーマは謂れのない事で陰口を叩かれるだろうからと。

薫は前世の人間関係に苦しんだ口である。そして現在、榊に対して人間関係について教育を施され経験を積んだ。

人間関係で苦しんでいるソーマを慰めるのは道理だった。

エレベーターに乗り込み、ベテラン区域に向かう。

すると、ソーマがちょうど部屋から出てきた所で薫は都合が良いとばかりにソーマに近づいた。

「ソーマ！ 良い所に！ はい！ これあげる」

滅多に見せない笑顔をソーマに向け手に持っている。『初恋ジューズ』の失敗作を渡す。

「それ飲んで元気になってね！ じゃ、バイバイ！」

薫はソーマに何も言わず去って行った。

残されたソーマは薫に渡された缶を見る。綺麗に印刷されており、ピンク色の文字で初恋ジューズと書かれてあった。

「薫に慰められるとはな……」

『死神』その言葉思い出し胸がチクリと痛んだ。

貰った缶のプルタブを開け一気に飲む干す。

「美味^{うまい}いな。これ……っ!？」

飲み干した後、ソーマは自身の目から涙が込み上げてくるのを感じ自室に再び戻った。

涙は止まる事なく、涙は際限なく溢れ出てきた。

ポロポロとソーマの目から涙が零れおち床へ落ちる。

薫の優しさに直に触れたソーマは心の防壁を崩され丸裸にされる。

ソーマの心を覆ってた鎧は砕け、感情が吐き出される。決壊したダムのように心の防壁は役目を放棄した。

「くそつくそつ！ あいつが渡すからっ！ 止まんねえ……………くそつたれ……」

薫に毒づくソーマの顔は怒りで歪んだ顔ではなく泣き笑いで顔を歪んでいた。

抑えきれない嬉しさで涙腺は締まる事はなく顔は破顔したままだった。

一頻り（ひとしきり）泣いた後、ソーマは洗面場に向かった。

鏡には涙で腫れた自分の顔が映る。あまりにも無様で笑いを誘う程だ。

顔を洗い涙の後を消し、タオルで顔を拭いた。

腫れは引かなかったが、いつもフードを被っているのが良かったのか顔を見られずに行ける。

部屋から出たソーマの足どりは軽くなっていた。

午後五時、竹田ヒバリの出勤時間である。学校を終えたヒバリは学校の制服を脱ぎ、フェンリルの制服に着替えてエントランスに向かうのだ。この時に一緒にリツカも整備士の服に着替えヒバリと共に向かった。

午後五時半。

この時間になると男性ゴッドイーターの任務発注率が格段に上がる。

皆が皆ヒバリを口説きたいのだ。しかし、強引に口説くと先日のタツミの例もあり強引な神機使いは、いなかった。

神機使いの任務発注のラッシュ。ヒバリは出勤して早々疲れに見舞われてた。

ラッシュが終わりヒバリの体感時間が緩やかになる。

そこに一人の神機使いがやってきた。ヒバリを口説く為に一番最後の最後まで待っていたのだ。

強引に口説く者が完全にいなくなったわけではなかった。しびれを切らしていた神機使いヒバリを強引に口説く。

その時に限って、百田ゲン、雨宮リンドウ等の良識のある神機使いはアナグラには居ない。

リツカは親友を助けたいが手段がなかった。

瞬間、一昔のコントで落ちとして使われた音がエントランスに響く。

ヒバリは目の前に居た神機使いが急に視界から居なくなった事に吃驚する。リツカも同じ気持ちだった。

見てみると盥たらいが近くに落ちていて、神機使いの頭部には控えめに
みても大きいタンコブが出来ていた。

この状況を察するに、アダマタイトとオリハルコン合金の盥たらいが
落ちてきて神機使いの頭頂部に辺り気を失わせた、と考えれる。

エントランスにちょうど出てきたソーマは、ヒバリの前で伸びて
いる神機使いを「邪魔だ。」と蹴っ飛ばし任務を発注した。

蹴っ飛ばされた神機使いはソーマの陰口を率先して言っていた者
だったのでソーマは少し気分がすっきりする。

ソーマは気分良く任務に向かった。

入れ違いで薫がエントランスにやってきた。丁度、職員神機使い
の挨拶周りがおわったのとある人物を回収しにきたのである。

薫はエントランスの盥を見て満足そうに頷く。

「うんうん、しっかり作動しているね」

薫は目の前で伸びている神機使いを米俵のを扱うように抱え医務
室へと連れて行った。

「えっ？ 何？ これって薫君なの？」

さつと目の前に現れて行き成り去る薫にリツカは混乱する。

「えっと……これは薫君の仕業でしょうか？」

ヒバリの眩きにリツカは目をヒバリに向けた。

「あれ？ 薫君、知ってるの？」

リツカは生じた疑問そのままぶつける。

「リツカさんも知り合いなんですか？」

「私は整備班にいるから、薫君と神機について話す事があるけど……私たちがみたいと一緒にフェンリルに来る事ってないよね？」

「小さい時にちょっと……ありまして……」

努めて無表情に言った。反応がおかしいヒバリを怪訝に思いながらも突っ込んで聞く。

「それで？」

「久々に会いまして……とまあそういう事です！ リツカさん仕事はいいんですか？」

ヒバリは話を強引に打ち切り、リツカを立ち去らせた。

リツカが整備室へ向かったのを確認すると、表情を崩し息を吐いた。

「ふう……危なかったあゝ」

薫の笑顔を思い出しヒバリの心臓が不整脈を起こし鼓動が速くなる。速くなるに連れて顔が赤くなった。

人がこちらに向かつて走る音が聞こえる。ヒバリは赤くなった顔をパンパン両手で叩き緩んだ顔を引き締める。

カツカツと音が大きくなり、音の主がヒバリの前に姿を現した。

「ヒツバリちゃん、任務終わったぜ！ で、この後何処に行かない？」

「相棒〜！ 気付いてくれえ〜！」

「あははは、すみません。ちょっと疲れてるんで……」

「何っ？！ 体調でも崩した？！」

「いや。純粹に疲れてるだけですから……」

「そっか、あのさヒバリちゃん聞いてくれよ……」

タツミは今日も絶好調であった。

第十五喰目 罪深い研究（後書き）

ソーマのフラグ回収。

え？ 知らない？

いやいや、薫君にとってソーマ君は掛け替えのない友達ですよ。友達を助けるのが当たり前、薫君は今でも政次の事を気にしてたりします。

しかし、ヒバリのフラグは美味しいです。かなり書けます。

アリスが出てくるまで待ち遠しいですね。彼女を早く書きたい。

P.S

web拍手変えました。

自身のシンボルである。モンテスキューの画像を入れてみて大変に作者は満足です。

今回の話はどうでしたか？

感想、意見、誤字報告を受け付けております。

以下コメント返します。

>カレーは飲み物異論は認めr(ry
断罪ヤマザナドウをご覧ください。彼女もこう言っております。力

レーは飲み物なんかじゃないからと

> 大好きだ〜

ハーレムって難しいんですね。近くで見ていると上手くやれてるなと思います。

> 押さずにはいられない性分なんで（ry

> というのは冗談で更新がんばり！

どうもありがとうございます。web拍手のお礼小説読んで頂けたら幸いです。更新頑張ります。

第十六喰目 薫と響と榊と……（前書き）

ふむふむ。

ようやく、明確な形として設定が出せます。

注意事項。

鬱です。ちよっぴりほんの少しダークです。

駄目な方はブラウザバックを押す事をオススメします。

第十六喰目 薫と響と柚と……

薫が初恋ジュースの失敗作を渡して以来、ソーマは薫にべつたりと懐くようになった。それこそ、未来ではシオを世話焼いていたように。薫に世話をしていた。

「ソーマ、お腹すいた、お弁当もあるからどこか行こうよ」

「もう少し待て、今歩いているだろうが」

「偶には食堂や休憩所や訓練所じゃなくてソーマの部屋で食べようよ」

「それだけは駄目だ」

「えっ何で？」

ソーマは自分の部屋に薫を入れるのを頑^{かたく}なに拒む。

現在、ソーマの年齢は十五歳。薫の年齢十二歳。つまりはそういう事である。

お年頃なのだ。すでにそういう事に興味深々なのだ。

部屋には薫に見られてはならない物^{ぶつ}が大量にある。

薫に下手な誤魔化しをすると頭の良い薫はソーマが隠していたものを知られてしまう。だからソーマは誤魔化せずに馬鹿正直に答えた。

「薫、お前にだけは俺の部屋を見られたくないんだ」

「でも、いつか見せてくれるだよね？」

「ああ、俺もお前も大人になってからだ」

ソーマの選択は合っていた。まだ、対人関係の経験が少ない薫は見られたくない物を勘違いしたのだ。薫はソーマの見られたくない物を過去 アラガミに関する事だと思ったのだ。ソーマは薫が何も聞かずに黙ったのを見て罪悪感が沸いたがこればかりは薫に見られなくなかった。

薫が口を開く。

「じゃあ、何処行こっか？」

「そうだな……」

二人は本当の兄弟の様に仲良く歩く。

楽しそうな薫の横でソーマは考える、本を何処に隠そうかと……。

草木も眠る時間帯 丑三つ時。

アナグラは夜勤以外の人物は寝静まっており。居住区の方は発電機等のアナグラの維持の為の動作音しか響いていない。その機械の動作音ですら日中より静まっている。

……すう……すうと規則正しく薫は寝息を立て眠っている。

当然だ、日中は榊の講義やデータのまとめ、精神矯正を受けている。年齢にそぐわぬ情報をその身一つでこなしているのだ。まだ、中学生になったばかりながらも大人顔負けの仕事をこなしていた。しかし、仕事がこなせるからと言って体は中学生。大人になりかけなのだ。大人ではないのだ家に帰れば夕飯を食べすぐに眠りにつく。

平日は殆ど自由がない、薫は休日に思う存分に心を許した相手に甘える。

それが薫の生活サイクルだった。

朝が来る。今日は薫の休日であり、薫の日頃の疲れを発散する日でもあった。

「薫、朝だぞ」

馨は寝ている薫を起こしに寝室に入った。

「……すう……すう」

「薫？ もう起きろ、朝だぞ？」

馨は薫に歩み寄り、仰向けに寝ている薫の肩を揺さぶる。

薫は身じろぎをするだけで起きない。馨は起きない薫に怒りは沸かずただ微笑む。

「薫？ そろそろ起きようか？」

薫を抱き起こす馨。まだまだ、背の小さい薫はいとも簡単に抱きかかえる事が出来る。

抱き起こされた薫はまだ寝ぼけているのか馨の方に雪崩れかかってきた。そのまま抱きつき態勢を次々と変え、すると突然とまる。しっくり来たの馨の腰を強く抱きそのまま眠りにつこうとする。

（我が弟ながら、実に愛らしい。）

馨は薫を熱がこもった眼で見る。

「お……ねえ……ちゃ……ん。だい……しゅき」

愛らしく、とろんとした目で薫は舌足らずの寝言で姉への好意を伝える。

馨の子宮が疼く。馨の胸が高鳴る。馨の脳が沸騰する。馨の腕が、脚が、震える。

身を焦がす程の感情で身体が熱を帯びる。馨は息を整え、震えながら馨の手が薫の頬に触れた。やわらかい頬は弾力で馨の指を押し上げた。

薫の頬全体を情欲を抑えて撫でる。それがくすぐったかった薫は身じろぎをし、馨の人差し指が薫のぷっくりとした唇に触れた。

ゴクリと馨は生唾を飲んだ。

キリキリ、細い理性の糸が音を立て始めた。

馨の理性が切れかかる。

その事を感じた馨は急いで薫の部屋を出た。流石に朝から理性を切らして劣情に身を任すわけにはいかなかった。

「……はあはあ……はあ……はあ……はあ」

胸の動悸を少しでも抑える為に右手で服を掴み、その場で崩れる。

馨の顔は熟れた林檎のように真っ赤に染まり心成しか背中に汗をかいていた。

呼吸の乱れを徐々に徐々に整え自身の身体を鎮めていく。

「ふうー」

暫くしてから漸く馨は落ち着く、衣服を整えようとし気付いた。

「……っ?! 服が駄目になってしまった。仕方ないシャワーでも浴びよう」

色んな意味で服が汚れてしまい、とてもではないが今の馨は人前に出れる状態ではなくなった。薫を起こすのを後にし、馨は替えの服を用意し風呂場に向かった。

いつもより長いシャワーを浴び終え、バスタオルを身体に巻く。

バスタオルを巻いても、馨の肢体したいの魅力を隠し切れていなかった。

ツバキ程豊満ではないがプロポーションが良く、艶のある漆黒の髪から香る甘い匂いが漂い。

その肌は蝶が華に吸い寄せられるが如く、一目見てしまえば手を伸ばし触れられずにいられない。

当の本人は自分の身体を誇示するわけでもなく自分の胸を見て、

「少し大きくなったような？」

両手で自分の胸を鷺掴み確認する。

「……薫と触れあえる面積が増えたな」

本人にとってはその程度の認識なのだ。胸が大きくなろうが小さくなろうが彼女にとって些細な事なのだ。

最もその思考は世の女性の大半を敵に回す為、馨は決して口に出さないが。

少しの間、自身の身体を凝視した後、一通り身体を拭き、下着を身につけ、冷蔵庫に向かった。

風呂上がり用と書かれたコーヒ―牛乳パックを取り出しコップに注ぎ飲む。

「やっぱりコーヒ―牛乳だな」

少し前までは薫が普通の牛乳派だったのが最近になってコーヒ―牛乳派になり、それに馨も釣られてコーヒ―牛乳派になったのだ。

飲み終わった後コップを洗い、下着のままだと忘れていた馨は替えの服に着替えから髪を乾かしに洗面場へ向かった。

髪を乾かし馨は薫を起こそうと寝室に向かおうとすると居間のテーブルで薫が足をぶらぶらさせながらヘタレ込んでいた。

「やっと起きたか」

クスクスと馨は笑い薫の額にデコピンを放つ。曲がりなりも前世においてすべての方面で優秀だった馨のデコピンの威力は大きく薫を仰け反らせた。

「のわっ」

薫が痛そうに額を抑える。バンダナをしている為多少は威力が落ちるが薫は涙目で馨に抗議していた。

「そんな顔をするんじゃない。お前が起きないのが悪いんだぞ？」

「……………」

薫は自身に否があると分かっており何も言わず顔を下に向ける。

「さて、薫」

馨は振り返り下に俯いている薫を宥める様に優しい声色で薫の名を呼ぶ。呼ばれた薫は顔を上げ馨をみる。

「今日の朝は何かいい？」

「ラーメン！」

冷蔵庫には薫は少し冗談混じりで馨に希望のメニューを言う。

「ふむ。そうすると、スープを煮込む時間帯を考えると昼ごろになるか……………」

薫の言葉を冗談と受け取らず頭の中でレシピとこれからの行動を確認する馨。

大好きな義姉に手を煩わせるのは薫にとって不本意だ。急いで取り消そうとする。

「お姉ちゃん？ あの……？」

「仕方ない、薫。今からラーメンを作ると昼ごろに出来るんだが……朝は他で勘弁してくれ」

既に豚骨と鶏がらを準備しスープを煮込み始めており薫はラーメンを取り消せなくなっていた。

薫の対人能力はまだまだ経験が足りなかった。冗談が通じず、冗談をそのままに鵜呑みする人物と冗談が通じる人物を見極めていなかった。

馨の行動はすべて薫の要望に応える為であり、前世からこの状態に晒されている薫は気がつけないのは道理であった。

「朝は……そうだな……コーンポタージュとパンとサラダでどうだ？」

「あっ……うん」

薫は何も答えられなかった。

数分茫然とし平常心を取り戻すと薫はこれを機に自分も料理をしようと思ひし馨に手伝いを申し出る。

最初は馨はそれを断ろうと考えたが、数瞬考え何れは薫の手料理が食べれるようになると閃き、満面な笑みで了承した。

「さあ、薫。お姉ちゃんが手取り足取りおしえてあげるからな？」

馨は誰も見惚れるような笑顔で薫に微笑んだ。微笑まれた薫も例外ではなく顔が赤くなった。

二人は並んで台所に立ち、話しながら料理を作りあげる。

出来た料理を食べながら話す。薫が話し馨が頷く。そのやり取りを十数回すると二人は朝ごはんを食べ終わっていた。

二人は食べ終えた食器を片づけに掛り、また再び並んで台所に立つ。

片付け終わっていた後、腹ごなしに二人は毎度の如くスキンシップをした。

薫はごろごろと猫の様に馨に甘える。

今朝の二の舞にならぬよう心を落ち着かせながら馨は薫に接し頭を撫でる。

ずっとこうして居たいが如何せんお互いにやらねばならぬ事があり、馨は名残惜しそうに離れラーメンの続きを作り始めた。

薫は自身に渡された書類をやる為に自室兼寝室に向かう。

薫は幼い体躯には見合わない大きなパソコンデスクに座り込みペンを走らせていた。

デスクの上にはディスプレイは三つあり、桝のそれぞれカスタマイズした物だが、今はパソコンに電源が入ってない為ディスプレイに明りがついてない。

ペンを走らせてる途中、薫は突如ペンを止めた。

ふと薫は考える。

（何かが違うんだよね……。前と今で）

薫は今でも忘れられない感覚がある。

その事を桝にも義姉の馨にも誰も話した事はない。

前世では感じた事ない感覚。『新型』になってからでも実践に出るまで感じた事ない感覚。

ロシアでの、過去において一度しか出てないあの実践で感じた身体の変異。

それが何であるかは薫は分からない。

が、あれ以来異様に燃費が悪くなったのも事実だ。

元々薫は食べる方だが実践に出て以来食べる様になった。

今の所、実践前後で変わったのはそれだけである。許容範囲だ。

「……ふう」

一息吐き、思考を彼方へと追いやり、自身の手元に目をやる。

プリント用紙に様々式がそこには載っており薫はそこに穴埋めで答えを書きこんでいた。

（ともあれ、今は榊博士からやる課題をやらなきゃな。うん、頑張ろう）

薫はプリント用紙の隣にある。榊から課題の一環として回されたフェンリルの書類の塔を見て心が折れそうになるも気合を入れペンをもち課題を終わらせ、紙の塔に手を伸ばした。

その時に警報が鳴り震動が起きる。アラガミがアナグラに侵入したのだ。

薫はアラガミよりも目の前に崩れ落ちた書類も見て茫然とした……。

散らばった数百枚の紙束になっていた書類。それが音を立てて部屋にバラけていた。

警報が鳴りすぐに飛び込んできたのは響だった。茫然としている薫に響は抱きつき手を引きながら避難所に向かう。

薫が茫然としている数分でアラートが消え神機使いが現場に駆け付けアラガミを撃退する。

そのまま安心して各々の日常に戻ると思いきやそうはならなかった。一時とは言えアラガミが侵入したのだ。アナグラは騒然となりフエンリル各職員は居住区の市民の沈静駆り出される事になった。

薫は子供の為駆り出されなかったが自室に戻ってアラガミによって齎もたらされた被害 部屋の惨状を見る。

（くそう、何故もっと早く耐震考案を出さなかったんだ）

薫の家はラーメンのスープが多少とは言えど零れており、薫の部屋は書類が悲惨な状態になっていた。

馨は部屋の掃除で忙しく、薫はそれを手伝い部屋を綺麗にする。掃除し終わった後。薫は自室に戻り自身の片付けながら耐震構造に考えていた。

（今度、博士にオラクル細胞を用いた耐震構造を考案してみよう）

心の中で決意し、集め終わった書類を重ね書類の塔が出来上がる。

さっそく取り掛かり、久々に頭をフルに活用し書類を終わらせにかかった。

そして、翌日。いつも通りに榊の研究室に来て、薫は昨日の内に終わらせた書類を榊に提出する。

一週間は掛ると見た榊に朝一番に先週渡した書類が出来ている事を驚愕した。

（まったく、君には脱帽するよ薫君）

榊は書類を穴が開くように見て不備がないか確認する。

しばらくして確認が終わる。不備はなく、計算された結果も間違っていないかった。榊が思う以上に薫は不安定な人物だと知った。薫の能力なら一週間弱で終わると思っていた書類が三日で終わった。

簡単な話である。

榊の思っていた以上に薫は能力をもっているのである。榊は自分の予想を大きく上回る薫の成果に下を巻きながら、内心焦った。

（やはり、私の思い違いではなかったみたいだね。薫君は深い私が想う以上に……）

榊は少し思案しプランの切り替える為に薫に今日は帰らせる事を

決める。

「薫君。予想以上の出来だね。少し驚いてしまったよ。そうだね、薫君のお陰で予定が上がったから今日はこっちの書類はデーターをまとめに入りたいから今日は帰っても構わないよ。」

榊の言葉に薫は吃驚^{びっくり}する。

てつきり他の仕事をさせられる事だと思ってたからだ。

「いいんですか？」

恐る恐る薫は榊に聞く。

「そうだね、実は今日の薫君の仕事はこの書類だけだったんだよ」

榊は書類の紙束をペラペラと振りながら言う。

「……そうですか。じゃあ、帰ります」

昨日の耐震構造について考えを纏め設計をしなくてはいけない為、アナグラ内の図書館に寄ってから帰る事に決めた。

「うんうん。ゆっくり身体を休めると良いよ。じゃ、気をつけて帰るんだよ?」

榊は頷きながら薫が退出するまで、見送る。

ガチャツと音を立て扉が閉まる。それと同時に榊の顔色が陰しくなった。

柗は頭の中で現在、薫に進行していたプランを破棄した。

柗の予想よりも薫は大きく歪んでいた。そして、深く深く精神を犯されている。

文字通り犯されているのだ。

先ほど薫が持ってきた完成された書類で柗は気付いた。

余りにも極端に能力と精神状況が違いすぎる。

三年前、状況を把握する為に柗は薫の精神に踏み込んだ事がある。

薫に話を聞かせそれと聞くと言う物、箱庭を作らせその箱にはを説明すると言う物、様々な表情の顔の写真を選ぶ物。

薫の精神にはある一定以上になれば敵意を抱けない。

それは普通だが、薫はその上に嫌悪を抱けないのだ。この洗脳を解く為に柗は三年間精神を矯正してきた。

今日の出来事で薫の洗脳が深い深い深層心理まで及んでいた事に戦慄したのだ。

これから先、薫に施すカウンセリングのプランを考えながら資料室に向かう。

資料室に入った柗は精神の資料を探した。

書棚は大きく綺麗に整頓されていた。

一番手前にあるオラクル物理学の資料は古くからある為、年月を感じさせる色合いになっていた。

今回榊が探す資料は物理学ではない。心理学、精神医学の類だ。

目的のコーナーに移動し資料を探す。今榊がいる場所の本は他の資料と比べ紙の色は白く。真新しかった。榊が薫の精神矯正の為に取り寄せた資料集だった。そこにはメジャーな物からマイナーな物まであり、榊が薫の精神矯正にどれほど力を入れているかが分かる。

「まずはこれだね。……………それからこれだね」

必要な資料を少し少しずつ手に取る。

一先ず、榊はメジャーな研究資料を集める。それでも足りないと感じた榊は徹底的に資料を再び探しはじめた。

あらかた探し終え首を鳴らし息を吐いた。

「ふうー。大体こんなものだろうか？」

ふと足元に埃被ったオラクル精神医学の論文を見つける。タイトルに興味を惹かれこれならばと淡い期待を込め本を手にする。

著者 オオグルマ ダイゴ。

「これは……………」

榊はこの資料を知っている。これはフェンリル本部にあったものである。そしてその著者を知っている。最近ヨハネスの周りにいた人物だ。

オオグルマダイゴはオラクル精神医学の研究者だ。榊はその論文に目を通す。

『オラクル細胞と人の記憶』榊の想った通りにそのタイトルがあった。薫の洗脳を消すには持ってこいの内容である。

「最終的にはこの方法しか出来ないものなのか……？」

榊は最終手段としてその方法を使うと決め、本を戻す。

その時榊は最近のリンドウとヨハネスの関係を思い出す。最初はそれなりに友好的だったが最近亀裂が出始めているとの事だった。オオグルマダイゴを使いリンドウを従順な手駒にするつもりだろうか？ と榊は自分の親友を勘ぐる。

「……………ヨハン、君は本気で…………ノヴァを」

ノヴァ 終末捕喰。

それはアラガミの特性故に生まれた風説である。

オラクル細胞 『考え、捕喰に特化した単細胞生物』

アラガミはそのオラクル細胞が結合した群体生命体だ。生物ではないのだ。

遺伝子としてDNAを保持しておらず、我々DNAと炭素をベースとする生物とは根本的に構造が異なる。

ウイルスに似た存在である為生命体と人々は称した。

捕喰する細胞群の『アラガミ』もまた無差別に捕喰する。それも無機物有機物関係なく。オラクル細胞には遺伝子がない。関係などないのだ。

終末捕喰はそこに目をつけられ生まれた通説だ。

あらゆるものを捕喰できる『アラガミ』は何れは地球を捕喰できるのでは？

他の存在を捕喰し喰らい続ける事で成長し続けるアラガミはこの星を飲み込めるのではないかと人々は考えた。

遺伝子が無い。それは変幻自在と言う事だ。ウイルスにもDNA又はRNAがある。だからこそ形を保っていられるのだ。

しかし、オラクル細胞は違う。遺伝子を持たない為、捕喰する度に形状を変える事ができるのだ。

『アラガミ』は喰らい続ける事で最終的には地球を捕喰できる存在になる事が出来る。

本能に忠実な貪欲な『アラガミ』は星さえも喰らいすべてを終わらせる。というのがノヴァの終末捕喰と言う物。

一般の通説はここまでだが神とヨハネスはその続きを知っていた。

ヨハネスがやろうとしている物はこの通説の先にあった。

榊がオラクル細胞の研究過程において、一つのシステムに辿り着き見つけたシステム。

それがノヴァの行きつく先だった。

そのシステムとは『アラガミ』は地上から消え、荒廃した大地に再び緑が齎され地球は息を吹き返し、この惑星は蒼い光を取り戻す。

だが榊はこのシステムを無視して情報を隠蔽し他の研究に従事した。なぜならば、このシステムには致命的な欠陥があるのだ。地球が本来の輝きを取り戻し蒼い光を取り戻す時そこには人間の姿はない。

ノヴァは地球以外を滅ぼし地球を救済するシステムだった。

これを知ったヨハネスはある計画を立てた。榊はヨハネスが着々と事を進めている事だけを知っていた。それが何であるかは榊は知らない。

自身の研究室に戻りパソコンを操作しメールを開きディスプレイを見る。

そこには、ヨハネスからのメールがあった。

TO ペイラー榊

ペイラー、薫君をソーマと一緒に任務を行かせてほしいのだが…

…。ソーマが少し落ち込んでいるんでね。薫君に簡単な任務でも与えてソーマと一緒に任務をこなさせたい。

f r o m ヨハネス・フォン・シックザール

榊はこの文の裏に神機使いとして薫の戦力として組み込もうとするヨハネスの動きが見えた。

もちろん、ヨハネスが少しの親馬鹿だと榊は知っている。純粹にソーマを励ますなら何処か薫と一緒に遊びに行かせればいい。榊にはヨハネスが薫をリンドウの代わりに特務をこなさせようとする思惑が見えたのだ。

榊はヨハネスに断りのメールを入れる。

榊の推理は半分だけ当たっていた。確かにリンドウの代わりに薫を特務に組み込もうとしていたが、ソーマが薫と任務行きたいと言っていたのも事実なのだ。親馬鹿であるヨハネスはその事を聞き、自身の親友で薫の師匠である榊にその許可を得ようとしていただけだった。

薫は榊にとって、もはや息子も同然である。戦場には出して失いたくないのだ。それに薫の性格、ニアグラムは研究向きだ。

パソコンの電源を切り、持ってきた資料を机の上に置く。

榊は精神医学の資料をめくり始め思考に没頭し始めた。

夕方、図書館で粗方本を物色し終えた後薫は決めた本を借りていた。

「これとこれ貸して下さい」

無表情で抑揚のない声で薫は言う。

榊の訓練を受けても初対面の人にはいつもこうだった。こればかりは榊は頭を悩ませ未だに訓練を続行中である。

図書館の女性職員達は怖いものを見るような、気味悪げなものを見るような目で薫を見る。薫に脅えながらも震えを抑え事務的に業務をこなす。

「期限はすべて一週間です。……その日は休館日ですので入口にあるポストに入れて下さい」

「ありがとうございます」

薫はそう言って図書館を去って行った。

家に帰る為、居住区間 第八、ハイヴに移動する。

地下へ地下へと作られている為、必然的に歩く場所が地上より多いのだ。

数十分かけて家に着き薫は扉を開けると同時に笑顔になる。

「ただいま!」

濡れた髪ををタオルで拭いていた馨が出迎えた。

「おかえり、薫。風呂が沸いたばかりだからお風呂入っておくといいよ」

「うん、分かった」

着替えを用意し風呂場に向かう。

風呂に入り終え、呑気に歌いながらパジャマに着替え髪を乾かす。

「貴方が欲しいとさけーんだ、この心は〜」

髪を乾かし終わった後バンダナをぽいっと洗濯機に入れ、居間へ向かう。

ソファーに座り居間で本を読んでいた。馨が本を置き薫をそばに寄せる。

「薫、今日はどうだった？」

「書類を終わったから図書館で次のやる事を整理していた！」

笑みを浮かべ馨に言う。

「そうかそうか」

目を細めながら馨は笑って返す。

「これからこのアナグラの建造物にオラクル細胞を用いた耐震構造を考えるんだ」

目をキラキラさせながら自分のしよつとする事を楽しそうに語る。

一通り語り終えた薫は満足し、喉が渴いたと言って冷蔵庫に向かいジュースを飲み行った。

ジュースを飲み終わり丁度コップを洗おうとしていた薫に馨は声を掛ける。

「薫」

「ん？なに？」

振り返った薫に馨は静かにしつかりとした声色で言葉を発した。

「Need to know, Need to share」

きつちりと韻を踏み綺麗な発音が部屋に響いた。

馨が口にした一言で音が部屋の音が消える。居間で音を発するものは薫がしつかりと締めきれなかった蛇口から落ちる水の雫だけだった。

ポチャンツと一雫落ちる。

その一粒は薫の心を変える。波が一切立っていない水面に一滴た
らされる。

薫の心に落ちた雫は静かに波を立て徐々に広がり波紋を大きくさせる。

波紋が広がり切ると同時に薫の目の明りが消えた。

「さあ、薫お姉ちゃんと遊ぼうか？」

馨は実に嬉しそうな目で薫の手を引き自分の寝室へと誘^{いざな}う。

「うん！ お姉ちゃんの遊びは楽しいもんね！」

満面の笑みを浮かべ心の底から嬉しそうに薫は馨に言葉を返した。
普段と違っているのはその目だった。

普段では太陽の様な光を灯してた薫の目には何も映っておらず、
映るのは底なしの澄み切った深淵だった。

薫は笑いながら馨に手を引かれ寝室に向かう。

「薫、今日はいつもと違う遊びをしよう」

馨はこれからの出来事に心を躍らせた。

馨を構成する、すべてが震え答える。

「薫、君の全てが欲しい」

「大丈夫だよ？ 僕はお姉ちゃんのだよ？ 僕たちは一緒だよ」

「そうだな。ああ、そうだったな」

馨は薫の頭を撫でる。馨は薫と出会ってから薫に洗脳を掛けた事
はない。

では何故薫は洗脳が掛った状態なのか？

馨の知る今の薫は前世の薫と同一人物なのだ。

馨を始めとする数人の狂気が詰まった烙印が転生をしても残って
いた。

記憶を持った転生だからこそ薫の心に楔がつけられたままである。

この烙印は馨と薫の前世からの繋がり証なのだ。

「じゃ、早く遊ぼうよ!」

無邪気に笑う薫。やはりその目には光は宿されていなかった。

「ああ、夜遅くまで遊ぼう」

綺麗に余りにも綺麗に笑う馨。

その笑みはおぞましさを感じさせ、戦慄させられる。

何も知らない薫と一緒に笑った。

第十六喰目 薫と馨と榊と……（後書き）

いつも通り、予約投稿です。

些細な事ですすがすこし書き方を変えました。

そして文章量はいつもの三倍近くです。ええ、この量は神機君を喋らせた時以来です。今回も九千文字オーバーです。

皆さんはどれぐらいの量が読みやすいんでしょうか？

これぐらいの文字数が読みやすいならば、これからもうこうしますが……。

さて、今回の話ですが……。

薫君の心に根付いているモノの話です。

洗脳ですね。

洗脳は一言キーワードを言うだけで施されたものを呼び起こします。

今回はそれを描写しました。

とある手法では言葉を発しなくても日常一緒に過ごすだけで潜在顕在意識双方に掛ける事もできます。

しかもこれは掛けられた本人が気付かない上、大変に凶悪で強烈な効果を発揮します。

これは暗喩ですが入ってます。

現に薫は気付いてません。

今回の話はどうでしたか？

御意見感想お待ちしております。

以下コメント返します。

< おもしろい、ガンバ

ひゃっほー！正直に嬉しいです。これからも拙作をよろしく願います。

< クソ吹いたw

これはweb拍手の閑話の話ですかね？

それとも私のシンボルの話ですかっ！

ともあれ、私の小説、web拍手のモンテスキューで吹いてくれてうれしいです。

< いつも楽しみにしています、執筆頑張ってください。

わぁーお、いつも楽しみにしてくれるなんて感謝感激雨霞です！執筆頑張らせてもらいます！

これからもよろしく願います。

第十七喰目 偏食因子（前書き）

今回は本当に頑張りました。作者を褒めて下さい。

元々脳みそがない頭を捻って作り上げました。そもそも作者はこの分野専門じゃないんですよorz

今回は捏造回でございます。訳の分からない理論でソーマの設定が原作よりも強化されてたりします。

受け付けない場合はブラウザバックのボタンを！

第十七喰目 偏食因子

その日薫は健康診断、メディカルチェックを受けに榊の研究室に
来ていた。

部屋には榊だけではなく、ヨハネスも居たが薫は別段それを何とも
思っておらず、前回受けたようにメディカルチェックを受ける為
に服を脱ぎ榊に全身に電極パッチをつけられる。

「さ、寒い……」

「おゝごめん、ごめん。今暖房をつけるから……」

「ペイラー……」

ヨハネスは呆れた目で榊を見る。

そんなヨハネスを尻目に榊はパソコンデスクの近くにあるリモコンを手に取り暖房のスイッチを入れた。

暖房が効き始め部屋が暖まる頃ヨハネスは口を開いた。

「さて、薫君。これからメディカルチェックだ……」

ヨハネスは目の前の薫を複雑な心境で見た。自身の息子とは違い後天的に神機使いとなったが、他の神機使いとは色々と勝手が違う。新型神機にしかり、偏食因子しかりだ。

「薫君。まあ、いつも通りリラックスして居れば良いよ。いつも通り、偏食因子の確認と身体能力の把握だからね」

榊は薫を精神的に楽にさせようと微笑みながら言う。薫は緊張はしていなかったが、やはり精神的にさらに楽になる。

「はい」

薫が返事をし、三人のメディカルチェックが行われた。

このメディカルチェックは一般の神機使いとは違い。薫本人と支部長であるヨハネス、そして技術開発統括責任者の榊の三人のみで行われる。

普通ならば支部長であるヨハネスが立ちあう事はないのだが、このメディカルチェックは少し目的が違う。

旧型神機の適合者と新型神機の適合者。使われる偏食因子は同じだが、薫の偏食因子は一般的な偏食因子ではなかったのだ。

適合検査の前に榊は薫の血液を調べた所、ソーマともリンドウも違う偏食因子を持っている事に気付く。

だが、ソーマと同じように偏食因子を自ら生産する事ができるのだ。

このメディカルチェックは薫の偏食因子の解析及び実用化が目的化されているのだ。しかし、残念ながら薫の偏食因子はソーマと同じ特殊な構造になっており人体への直接の投与が出来なかった事が分かった。

何故、ここまで偏食因子に執着するのか？

薫とソーマの偏食因子には偏食因子を自ら生産する事が出来るのだ。それが肝だった。

神機使いは定期的に偏食因子を静脈注射で摂取しなければならぬ。摂取しなければ自分の神機に喰われてしまう。P-53偏食因子。それが多くの神機使い達に打たれる偏食因子だ。

そもそも何故 p - 53 偏食因子と呼ばれるようになったか？

それは人間を構成する物質の一つたんぱく質から来る。

『p - 53 遺伝子』全二十三対の染色体の第17対目の染色体短腕上に存在する。

その p - 53 遺伝子に介入してオラクル細胞の偏食を誘導する物質だからだ。意図的にオラクル細胞に P - 53 という遺伝子を捕喰させる。そうする事で神機使いはこの偏食因子を投与される事により神機とのリンク、コントロールが可能となり副次的な効果として飛躍的な身体能力の向上が得られる。神機使いは身体構造を……遺伝構造を疑似的にアラガミに近くする事で同じオラクル細胞で出来ている神機を使う事ができるのだ。

これが一般的な神機使いの偏食因子。

薫とソーマは違う。

薫は『P - 63 偏食因子』を所持し、ソーマは『P - 73 偏食因子』を所持している。

ソーマの偏食因子に関してはマーナガラム計画という『偏食因子』を生化学的に応用利用する統合プロジェクトにより生まれながら発現。現在の出回っている偏食因子とは一線を画している。偏食因子の転写実験は失敗し、被験者であるアイーシャ・ゴーシュは死亡、実験参加者を巻きこんだ暴発捕喰事故を引き起こした。生存者は主任研究員 ヨハネス・シツクザールと、被験者の子である。ソーマの二名のみだった。凄惨な事故を引き起こした実験だがソーマ自身を研究する事によって、身体能力の著しい向上、アラガミへの抵

抗力。『P - 73 偏食因子』は人体の投与はできなかったが偏食因子の拒絶反応の減少等の研究成果『P - 53 偏食因子』の等の発見し『ゴッドイーター』『神機』の誕生を齎した。

しかし、薫の『P - 63 偏食因子』はそういった経緯がないのだ。榊はそう言った理由でも薫の偏食因子の研究を進めていた。

偏食因子のP - 53という部分は介入する遺伝子を表す。そう、ソーマの偏食因子はP - 73 遺伝子に作用しているからP - 73 と呼ばれ、薫の偏食因子はP - 63 遺伝子に作用しているからP - 63 と呼ばれるのだ。

同じ遺伝子ならば投与が出来る筈。しかし、マウスに投与した所投与した偏食因子に捕喰された。

ソーマの偏食因子は何故投与できないのか？

簡単な事だ。P - 73 遺伝子は染色体の第一対目。その役割は細胞分化であり、P - 73 遺伝子はP - 53 遺伝子、P - 63 遺伝子パラログと相似の関係である。

人間の細胞分裂それは根本的な機能だ。いくら人体に投与した所で捕喰されてしまう。ソーマ自身みたいに受精卵の状態で偏食因子の投与の段階でないと成功は難しい。しかし、その受精卵の状態での投与も先の実験 マーナガラム計画で失敗している。

ソーマの偏食因子は人間の根本的な問題で投与が出来ないのだ。

一方薫の偏食因子はどうだろうか？

薫の偏食因子の番号はP - 63。つまりP - 63遺伝子に作用する。P - 63遺伝子は染色体の第九対目。司る役割は細胞形成四肢、皮膚等、上腕部、頭部等、人の形を形成する役割を持っている。

ソーマと同じ理由だった。形成を司るのであれば人体に投与が来ない。しかし、薫はレンを触つて以来、身体の構造が変わったのはその為である。だが疑問が残る。ソーマの様に先天的な資質ではない薫は捕食されていなければおかしいのだ。

では何を持って薫は捕食を免れたのか？

結論から言うとその答えは変異だった。薫の身体に流れ込んだオラクル細胞と『P - 53偏食因子』。それは第一次成長期であった薫の活発なP - 63遺伝子に反応し偏食の傾向が変わった。

考え、喰らう 『オラクル細胞』は捕食対象を切り替えた。薫の身体に入ってきたオラクル細胞は微量であった為、薫の身体は対応し偏食因子を変化させたのだ。薫の身体は本能に従い『P - 53偏食因子』から『P - 63偏食因子』へと。

無論そこにはレンの助けもある。彼女の力で薫に流れるオラクル細胞を鎮静化させたと言う理由もあった。まさしく綱渡り。薫もヨハネスも榊もその事実を知るよしはない。薫は薄々は気付いていた。細かい事はどうであれ薫はレンに助けられていると言うのは直感で分かっていた。オラクル細胞の恐ろしさは知識を得れば得る程その脅威は大きい。

薫の『P - 63偏食因子』はソーマと違って細胞結合が非常に柔軟である。一方ソーマの『P - 73偏食因子』は細胞結合の密度が

非常に高い。

その特徴から薫とソーマは一般の神機使いとは違い様々な環境に適応できる。薫はその細胞結合の柔軟性を以てソーマはその細胞結合の密度を以てだ。

細胞結合の密度が高いソーマは彼の持つ《神機》の刀身パーツ、バスターブレード《イーブルワン》の破壊力は同じバスターブレード使いのブレンダンとは威力が全く違う。ブレンダンののは戦術的理論を以てアラガミを破壊する。しかし、ソーマは違う。ソーマは気にせずに叩きこむだけでブレンダン以上の威力を叩きだせるのだ。ソーマの偏食因子は纏うエネルギー、出力が高い。細胞密度が高いからこそ繰り出せる威力だった。

ソーマと反対方向の性能を持つ薫はやはりその性質も反対方向だった。細胞結合が柔軟性があるこれは旧型神機では多種多様のアラガミを適応できるで終わってしまう。薫は幸運な事に新型神機の適合者だ。アラガミを喰らい。その力を自分に適応させ細胞結合の配列を喰らったアラガミに合わせ切り替える。またその喰らったエネルギーを他者に渡す事によって、多種多様なアラガミ達に適応させる事が出来る。喰らう事によって真価を発揮する偏食因子だった。

ソーマと薫の戦闘能力が高いの偏食因子特徴によるもの。とどのつまり薫とソーマの偏食因子は似ていてもその根本的な能力は全く違う。

偏食因子は介入された遺伝子によりそれぞれ一般の神機使い一角する大きな特徴が出来ている。薫は細胞の形成、ソーマは細胞の分

化だ。一般的な神機使いの場合は再生力だ。

遺伝子P - 53たんぱく質は細胞の恒常性の維持等の役割を持つ。そう、最初から限られていたのだ。

人間として生まれ神機使いになるには介入出来る遺伝子は最初から『P - 53 遺伝子』のみだった。アラガミに対抗する為に汎用的に使える偏食因子は『P - 53 偏食因子』だけだと。そもそも適合者が少ないにもかかわらず汎用的というのは些かおこがましいが……。

結局のところ薫とソーマの偏食因子は遺伝子的な役割で投与ができないのだった。

「いや、アポトーシスを意図的に……」

しかし、それでも諦めないのは神であった。

「ペイラー……」

ヨハネスは思考に没頭する自分の友を呆れた目で見てため息を吐き。

「博士？」

薫は次の検査が始まらない事に疑問を持った。

「すまない、薫君。続きは私が代わって行っよ」

ヨハネスはコメカミに手を当て頭を振り薫に申し訳なさそうに言

う。

「あっはいお願いします」

薫は他人の事を言える立場ではないので軽く流して検査の続きをヨハネスにやってもらった事にした。

現在は午後二時、ヒバリは学校の為フェンリルにはおらず、リツカも同様の理由でエントランスにはいなかった。

ヒバリと言う受付嬢がいなかったためかエントランスには人が疎らで任務を頼まれた人等、エントランスに用事がある人しかいなかった。

その中薫はよろずやの反対側の椅子に座ってボーっとしていた。薫は休憩時間をここで潰す事を決めたのだ。

あのメディカルチェックを受けてから、薫は神機の適合者のメディカルチェックを担当する事になったのだ。本格的に薫は神の助手として動き出した。

甲高いベルが鳴り響いた後にエレベータの扉が開く音がベル音の後に続いて響く。

薫は扉の方に視線を合わせエントランスの来訪者の顔を見た。

浅黒い肌に金髪碧眼を持ち、常にフードを被っている少年で古参の神機使い　ソーマ・シックザール。

ソーマが姿を現した途端エントランス内の空気は数度下がる。薫、百田ゲン、受付嬢を除いた全員に緊張が走り、エントランスの空気が張り詰め始める。

ソーマはエレベーターでエントランスをキョロキョロと見渡し、
薫を発見した所で視線を動かすのを止め、張り詰めた空気の中ソーマは動く突き刺さる視線を無視しエレベーターから真っ直ぐ薫に近づいてきた。

「薫、榊博士が呼んでるぞ」

ソーマがぶつきらばうに薫に用件を伝え、薫の手を引いた。

「あれ？ 休憩はまだ終わってないんだけど？」

用件を不思議に思った薫は首を傾げながらソーマに聞く、急を要する用事なら放送が掛るはずなのだ。

「どうやら、俺らに伝える事があるらしい」

「ふん、じゃ行こっか？」

コクリとソーマは頷き、二人はエレベーターに乗り研究室に行く為にエレベーターに乗り、地下へと降りて行く。

第二次成長期を迎えているソーマは背が高く足が長くなっている為ソーマが薫の歩幅を合わせ歩いていた。

二人は無言のまま廊下を歩き目的地へ向かう。その沈黙の空気は嫌な雰囲気を出しているのではなく落ち着ける雰囲気であった。

人通りが少なくなった所でソーマは口を開く。

「そっいえば……前に貰った初恋ジュースだったか？ あれって何

処に売ってるんだ?」

ソーマはよつぽあの味を気に入ったのか、薫に初恋ジュースの出所^{でしよ}を聞いた。

「……気に入ったの?」

薫は榊プロデュースの初恋ジュースver0・78の成分表を思い出しながら聞き返す。

「……………まあな」

返事をして、貰った時の事を思い出し恥ずかしそうに頬を染めソーマはフードを深く被り直した。

「実はあれは非売品なんだよね……。今度持ってくるよ何本くらい欲しい?」

非売品の言葉にがつくりと肩を落とすソーマ。だが続いた言葉に目に希望の光が宿る。

「できれば多く」

(そんなに気に入ったのか……ソーマ)

内心驚きつつ薫は返事を返す。

「んゝそだな。今用意できるのは……」

指を折りながら数える。と言っても薫の頭の中で羅列している

数字は全く違っている。榊は初恋ジュースをほろ苦さと甘さの追及をしている為、材料の消費が激しいのだ。薫は材料を確保する為に計算する。

「一ダースぐらいかな？」

「ん、分かった。いくらかかる？」

ソーマはアラガミの討伐数は同年代に比べて群を抜いて高く。渡される報酬も群を抜いて高い。ソーマは余り使わないお金を初恋ジュースにつぎ込む事を決めていた。

「別にお金はいらないんだけど作るだけだし……ソーマに頼みたい事があるんだ。」

「それはいいがな……ん？初恋ジュースってお前が作っているのか？」

ソーマは驚いた。まさかあのジュースが薫の作ったものだと思わなかったのだ。

「いや、主導は榊博士なんだけどさ……僕が助手になった事もあって、最近ではアラガミじゃなくてそっちの方向に情熱が注がれてるんだよ」

薫はその真相を話し、肩をがっくりとさせた。

「あのおっさん何やってるんだ……」

ソーマは榊の所為で仕事が増え肩をがっくりとさせた薫に同情し

た。

薫ががつくりさせた理由は違う。薫が落ち込んだ理由は少しずつ少しづつ初恋ジュースの完成が近付きつつ事にあつたのだ。

榊は馬鹿な事を研究していろいろが、腐っても天才である。一步一步つ一步步つ着実にその味を『初恋ジュース』に近づけていた。

薫は榊がもう止められない事を知り最後の足掻きに『初恋ジュース』の軌跡を残し特定の材料を加える事で『初恋ジュース』の味から初恋ジュースの失敗作の味へとなるように手を回していた。

「で？薫。俺に頼みたい事とはなんだ？」

ソーマの一言で思考の海から現実へ呼び戻され、頼みたい事を思い出す。

「うん、頼みたい事はね……天使殻を持ってきて欲しいんだ。ほら僕って一回しか出てないでしょ？ あれ以来、僕は榊博士直轄で管理され色々教えられた後、助手にされてるから身動きできないんだよね」

あれ以来、それ聞いてユーラシア大陸での掃討戦をソーマは思い出した。薫と一緒に任務に出たあの時で最初で最後だ。

「天使殻か……アラガミの素材だな……何に使うんだ？」

アラガミの素材を欲しがる薫に疑問を持ったソーマは薫に素材の用途を聞く。普通ならば使い道などない。そこらの素材ならばよろずやで買えるからだ。

「餌」

薫は予想外の言葉を発しソーマは眼を白黒させた。

「餌？」

余りのも予想外すぎる返事に聞き直すソーマ。耳に入ってきた言葉が間違いじゃないかどうかを確認した。

「うん、餌」

ソーマの耳に入ってきた言葉は合っていたようで薫は同じ言葉を吐く。薫がソーマに頼みたい事はアラガミの素材を持って帰る事だった。この任務に既視感を覚え記憶の中を探り、一つ思い当り薫にその言葉を言い渡す。

「薫。お前、榊博士に似てきたな。行動が……」

「はうつ？！」

ソーマから言い渡された言葉に硬直し崩れ落ち。手を床につき落ち込んだ。

そんな薫をソーマは呆れた目で見て立ち直るのを待ち床に座る。全くの余談だが薫が立ち直ったのはこれより十五分後だった。

暫くしてソーマの言葉から立ち直った薫は目的を思い出し、待っていたソーマと一緒に研究室に向かった。

研究室に着き、薫はノックを二回ならし、返事が来るのを待つ。

「薫君とソーマ君かい？ 入ってきたくれたまえ」

数秒とかわからず、返事が返ってきた。薫は一呼吸置きドアを開けた。

「薫君は休憩中にすまないね……さて君たちを呼びだした理由と行きたいんだけど先にこれを伝えておくよ。これから私とヨハンは欧州のフィンランドに行くんだ　つまりフェンリル本部なんだけどね」

榊はやれやれと言ったように肩をすくめ、内容を語った。

「どういうことなんだ博士？」

ソーマは聞き返す。ここの地帯のトップである自分の父親とこの支部の技術屋のトップが揃いも揃って支部を空けるのは異常な事だった。

薫は何も言わずに二人を見上げた状態で黙って話の続きを待った。

「簡単に言ってしまうえばフェンリル本部で各支部の技術交流と言うわけさ……有名どころを挙げるとアドルフイーネ博士だね彼女等と一緒に研究したりして、ヨハンは支部長だから人材補充の話とかもするね」

「それで、俺達が呼ばれた理由はなんだ？」

「うん、それなんだけどね。ソーマ君、君は特異点を探してるね？」

その任務を偽装するから薫君から言い渡される素材の集めに従事して欲しいんだ」

その言葉に疑問を持ち、ソーマは薫に目をやる。薫は首を横に振り知らない目で答える。それを見たソーマは榊の言葉の素材集めは薫が欲しいと言った天使殻となんら関係性がないと知り、ソーマは榊に続きを促す。

「知つての通り薫君は私の部下であり助手であり弟子でもある」

榊は言葉を少し区切り、薫を見て少しばかり感慨に耽る。文字通り薫は手間暇かけて教育した子供だ、自分よりも才覚がある。今までの教育を考えても出来ると分かっているが心配なのだ。榊の心境は親が初めて子供をおつかいに行かせる事そのものだった。

「そうだから、薫君には神機工学も教えてあるんだ。そこで、私が本部に行つてゐる間に二人で協力してパーツの強化、合成等してほしい」

榊はソーマと薫見る。その目は明るい未来を見ているようで……実際に榊は薫とソーマに明るい未来を幻視しているのだらう。ヨハネスと榊はその手段は違えど明るい未来を薫とソーマに見出していたのだ。薫を育てる事もう五年。榊の教えは薫の中でしっかりと息づいていた。

榊の目がすべてを物語っていた。二人は余り見せない榊の本心に触れる。

「わかった」

「わかりました」

ソーマはぶっきらぼうに返事をし、薫はいつも通り気負いなく受ける。

「話しは以上だね……薫君はこのままここで講義を行っよ。ソーマ君も一緒にどうだい？」

「やらねえ」

ソーマそう言って榊の部屋を出て任務を受けに行った。ソーマを見送り残った二人は講義の準備をし始め、数分後準備を終えた榊が声を研究室に響かせ薫にオラクル物理学を叩きこみ始めた。

柵とヨハネスが本部に行って数日後。

薫は誰も居ない神機保管室に来ていた。自分の神機の拘束具の前に立ち自分の神機を持つ。

久々に感じる神機との一体感。神機の変形を二、三度繰り返し^{プレ}捕喰形態にする。
データフォーム

ダクスターの左ポケットからソーマから渡された瓶に入った天使殻を床に投げた。

投げられた瓶はガラガラと転がり止まる。

薫は瓶に自分の神機を近づけそれを捕喰した。

バリバリ、モグモグゴックン。薫の神機はやけに人間臭さを帯びている捕喰の仕方だった。食べ終えた神機を見た薫は腕から伝わる満足感を感じ以前感じていた疑問が解決した。

「ああ、やっぱり。お腹すくんだ。神機」

薫がその言葉を発した時、神機のコアが点滅する。モールス信号でもないその点滅の意味を薫はただ漠然理解する。

「アラガミが喰べたい？ いや僕、実戦に出ないし」

再び神機が点滅し薫に自分の意を伝える。

「えっ？じゃないと喋れないの？ 新型だからエネルギーがかなりいる？ 他の神機みたいに喋りたい？」

神機は強く光った。

「とりあえずこれでも食べてよ」

ソーマに取ってきてもらった他のアラガミの素材を神機に食べさせるにした薫は矢継ぎ早に瓶を投げた。瓶の中身は硬身丹、軽身丹、氷砲体、炎砲体、雷砲体、荒砲体、龍種砲、墮龍ヒレ等様々な素材を薫は神機に咀嚼させ、腹を満たさせる。

人間臭い食方で投げた瓶事捕食し投げられた瓶すべてを薫の神機は捕喰した。腹を満たさせると同時に薫のお腹も満腹感得て以前疑問感じてた自分の身体の異変の原因に気付く。

自分の空腹の原因は自分の神機に餌をあげてないからだ
と。

薫の神機は再び点滅し薫にアラガミが喰べたいを意を伝える。

「むう、と言ってもね……。今の僕はしがない研究員だし……」

薫は自分の神機を床に置き、両手が自由になった薫はポケットの中を探り、初恋ジュースの失敗作を取り出し神機の前に置いた。

薫の神機は勝手に捕喰形態になり初恋ジュースを飲み込み始めた。

その様子は薫の目から見ても表情はないが美味しそうに飲んでいた。ジュースを飲み終えた薫の神機は捕喰形態の状態で薫にすり寄り薫の足を甘噛みし始める。

「何これ……かわいいなこいつ」

神機が勝手に動く驚きよりも薫は神機の行動に愛しさを覚えた。さながら、ペットが余り構ってくれない飼い主に気を引こうと甘えようとする。薫の神機の行動はそれを彷彿とさせた。

「うーん、もう無いんだよな素材」

それでも甘噛みを止めない神機。薫は自分の神機が何が欲しいのか分からなかった。

「んー、メンテナンスの時期は早いけどするか」

薫は自分の神機を持ちあげ語りかける。すると神機のコアが先ほどより強く点滅した後、点滅間隔が早くなった。

「なるほど、メンテナンスがして欲しかったのか」

薫は薫の神機に歓喜の感情が直にぶつけられた。唐突に起きた感覚に驚くも薫は自分の神機を見てこの神機が原因だと分かった。

一つ疑問に思った薫は神機に質問をした。

「メンテナンスはたしかに二週間に一回はしてるけど……いつも清掃はしているよ？」

神機は激しく点滅をして、少し怒った感情を薫にぶつける。直にぶつけられた感情は薫を心大きく揺さぶられる。本質的に感情と距離を置いている薫には大変効果的だった。

「わかった！ わかったから！ これからは掃除もご飯あげるし毎日するからっ！ メンテナンスも間隔を短くするよっ！」

薫は自分の神機に謝りながら保管庫を出てメンテナンス室に向かうために神機の保管室から出る。保管庫から出る為に保管庫のドアを開けるとすぐに整備室に着いた。すぐつくのは当たり前だ。

薫は部屋の奥にある神機のメンテナンスの為水槽みたいな機械に近づく。機械の大きさは少なく見積もっても薫の背丈より十倍はあり、かなりの大きさだった。薫は水槽みたいな機械の上から神機を入れる、本当ならば専用の機械を使って神機を運ぶのだが薫は腐っても神機使いだ。高い身体能力で神機を機械の上ある骨組みに向かって跳躍し骨組みを掴み神機を水槽に入れた。手を骨組みの鉄パイプから離しコンソールに近づく。水槽の上層から垂れている電極パッチのケーブルをキーボードで操作しパッチを神機につける。

つけた後、エンターキーを押して水槽の中に神機メンテナンス用の液体が水槽に注がれ始める。

「あのーメデイカルチェックってここですかー？」

エントランス方面の整備室のドアが開きに整備室に人影が出来た。入ってくるなり、その人影は薫に話しかけた。

「む？」

行き成り話しかけられた薫は声のする方向に振り返り声の主を見る。

「あの……ここは……」

ピンク色の髪を三つ編みをカチューシャのように巻いてる少女がそこに立っていた。

(……………カノンだ)

薫はその少女を見て一発でカノンだと分かる。今日入隊した神機使いだ。その写真付きの資料をあらかじめ予め榊やヨハネスから渡されていた為顔を見てすぐにカノンだと分かった。改めて少女見て薫の苦々しい記憶が甦る。捕喰して後一步の所で誤射。チャージクラッシュで最後まで溜めた後ぶつ放そうとして後ろから誤射。ショートで出向いた時此方に銃口を向けてきた時アドバンスドステップで避けた時は回復弾。なんでこういう時に撃つんだろうか……。薫は遠い目で見る。

何も返事しないで無表情でカノンに視線を向けている薫。最も目の焦点は合っており、意識はカノンではなく自分の記憶だったが、部屋は暗い為カノンは目の前の子供に脅えていた。

「ひっ!? あ、あの! ごめんなさい!」

カノンは薫に反射的に謝る。今日入隊して数時間で問題を起こしてしまったのだ。それはカノンの単なる勘違いであったが入隊したてのカノンには分からない。

薫は現実に戻り、目の前で謝られているカノンを見て訳分からなかった。とりあえず、カノンの最初言っていた言葉を思い出す。

『あのーメデイカルチェックってここですかー？』

メデイカルチェックの単語を思い出して薫はだらだらと冷や汗を掻き始めた。

薫が思い出して数秒後放送がかかった。

『業務連絡。雨宮ツバキだ。今日の午後三時よりメデイカルチェックの予定が入っている。該当する神機使いは斎藤薫の研究室の前へ集合。それと技術開発班所属、斎藤薫は直ちに自分の研究室に移動しろ。以上だ。……薫、後で覚悟をしておくように。』

ツバキからの放送が終わり、薫はツバキの最後の言葉を頭の中で繰り返していた。何度記憶を掘り返しても言葉は変わらない。薫は終わった後にツバキと義姉からの説教を想像して背筋が凍った。

「あの……？　どうかされました？」

カノンが急に何も動かなくなった薫を心配する。子供が放送を聞いてから冷や汗を流し始めたのだ。

再起動した薫は気を取り直し、掛けてあった白衣を取り、服ビビッドオレンジの上に羽織る。

白衣を羽織った薫はカノンに一礼し自己紹介をし始めた。

「斎藤薫です。技術開発班所属になります。貴女のメデイカルチェ

ツクを担当する事になります」

初対面のリンドウ相手に發揮していたカリスマを全開でカノンにぶつける。

「だ、台場カノンと言います。よろしくお願いします。」

四歳年下の薫に完全に圧倒され、子供に緊張感をもったまま自己紹介をする。

薫のカリスマは自覺してない分、性質たちが悪い。

現、第一部隊隊長の雨宮リンドウでさえ薫の「求心力（カリスマ性）」に抗えず、年下の薫に頭かしらを垂れなくなる感覚に陥おちいるのだから。薫としてはただ、放送の失態の照れ隠しで気持ちを切り替えとして放ったただだが、入隊したてそれも新兵のカノンにその空気に抗うのはあまりにも酷だ。

この後カノンは薫に圧倒されたままメデイカルチェックを受け、受け終わった後も放心した状態のまま基礎訓練に移り教官であるツバキに怒られるのだった。

「やあ、薫君久しぶり」

サングラスをかけた少年が薫に話しかける。

「エリックか」

薫はエリックが研究室入ってくるなり、げんなりとする。エリックの話しは、大半自分の妹エリナが華麗なる自分の戦闘術という話しかないのだ。

「聞いてくれたまえ薫君。今日はなんと美しい女性が僕と同じブラストの神機扱うを神機使いになったんだ」

（……知ってるよ。ていうか報告が真っ先に僕の所に来るよ……）

「彼女は可憐だけど僕は華麗なのさ、無論一番可憐なのはエリナだけだね！」

エリックは齒をキラーンと輝かせながら薫に親指を立て退出した。

エリックの話が終わった後、薫はツバキと馨に部屋に呼ばれ油を
たっぷり搾られた。

原作開始まで後一年。物語の幕開けはもうすぐ。

第十七喰目 偏食因子（後書き）

まずは一言。申し訳ありません。

はい、捏造回でございます。

P - 53 たんぱく質？オラクル細胞？

なんじゃらほい。活動報告で染色体の事をほざいていたのはこのためです。

今回は本当に色々と趣味に走りすぎました。

偏食因子の特徴だったりとか

神機の餌やりとか

エリックとかw

お陰で一万文字超です。orz

読みにくい量ですか？

ご意見感想お待ちしております。

P・S

執筆している最中、ノッキング・オン・ヘヴンズドアを買ってきてもらいました！

ついでに救世主の帰還（漫画）も買ってきてもらいました。
……ってアリサ出ないのかよっ！

少し残念したが、榊の名前がちよろつと出て嬉しかったです。

作者の好きなキャラは榊とアルダーノヴァ女神です。後アマテラスとヴィーナスとサリエル。ゴッドイーターに出てくる、殆どのキャラが好きです。

正し、アイテールは要りません。アイテールは詐欺だ！

初めてアイテールを狩る時の絶望感は果てしなく酷かった。

今回のダウンロードミッション楽しいですね。友達に配信されてると言われて、急いでダウンロードして執筆しながらやってましたw

追記、カノンと薫の会話を少し修正。

この表現だとカノンが薫に惚れたと取れてしまう為に説明分を追加。
この時点では薫から放たれる空気に圧倒されてるだけです。

以下コメント返し。

> 馨をヒロインにしてください

んー、感想でも言われていたんですけども。web拍手のコメントでも要望ですか……。馨が予想以上の人気を誇って嬉しい反面、自分の人気投票の拙さがありありと表していて大変に不甲斐ないです。
……本当にどうしようか。

第十八喰目 神機使い（前書き）

決して音楽に夢中で練習に没頭していたと言うわけではありません。部屋を掃除していたらヨーヨーが見つかりテクニックを身につける為に練習していたと言うわけではありません。

バレンタインでモテている奴に嫌がらせをしていただけです。

ああ、イベントは残酷だ。現実を直視させられる。

というわけで……申し訳ありませんが今回も捏造設定です。

第十八喰目 神機使い

神機使い。それは『アラガミ』に対抗する為に人工的に生みだされた新人類。

アラガミを構成する、『オラクル細胞』から抽出した『P - 53 偏食因子』を人工的に投与し、身体構造を『アラガミ』に近くする事で初めて神機と対^なと為せる。

偏食因子 それはオラクル細胞が持つ特定の物質を偏食を促す物質の事だ。『P - 53 偏食因子』は人間のP - 53 遺伝子を意図

的に捕喰させ遺伝子はオラクル細胞によって消失するが、オラクル細胞が代わりの役割を果たす事になる。これにより細胞の恒常性を司るP - 53遺伝子の代わりにオラクル細胞が神機使いの体細胞の恒常性を司る事で身体能力、新陳代謝が以前より飛躍的に上昇する。当然と言えば当然の言葉だ。アラガミと同じオラクル細胞を所持していない人間と所持している人間。腕相撲したならばどちらが勝つ等火を見るより明らかだ。

銃弾が効かない。刃物も効かない。人類に猛威を奮っている『アラガミ』の持つオラクル細胞が人間以下であった場合そもそも神機使い等生みだされていないのだ。

ディスプレイに映し出された自分の打った文字列を見て薫は背伸びをしながらあくびを一つ。

ラボラトリ区画、薫の研究室。

そこで薫は今度行こう。講義の資料を揃えていた。ヨハネスから頼まれた薫は早速部屋に籠り資料の作成をしている。

神機使いの講義は薫が行い、対アラガミ装甲壁のアップデート等は榊が行う。薫が助手になってから榊の仕事が半分薫に回ってきたのだ。

様々な資料を集める為かなり面倒な作業ではあるが薫は嫌な顔をしなかった。というのも薫には同年代の友達がソーマとエリックしかない。講義を行う事で彼らとの話しの接点が増えるのだ。

友達の少ない薫はヨハネスに頼みを即了承した。

薫の指が躍る様にキーボードを打つ。内容はディスプレイに映っている文字の続きからだ。

一週間後行つ講義が楽しみで薫は胸を膨らませた。

そして講義当日。

講義を行う場所は榊の研究室。すでに部屋にはカノンがいた。

「さて、講義を始めるよ」

声変わりのしてない少年の声。

カノンが入ってきた人物を見て、ああやっぱりと思った。

先輩神機使い　タツミにカノンは先日自分のメディカルチェックの担当した少年の話聞いた。自分よりも年下の少年が技術開発班、医務を行っている事になったのだ。話によると少年はアラガミ研究の第一人者であるペイラー・榊の秘蔵っ子らしい、幼い頃から榊博士から教育を施されていて、今では榊博士の仕事を手伝っているとの事だった。

カノンが先日の出来事を思い出していると薫がいつまにか準備を終えカノンの目の前に来ていた。

「お久しぶりです。自己紹介はメディカルチェックの時に済んだからいいですね？」

初対面にあつたカノンを圧倒する空気は薫から放たれておらず優しい空気が部屋に漂っていた。

「あっはい、大丈夫です。お願いします」

カノンの言葉が言い終え、一息置いた後薫は語り始めた。

七不思議と言う物がある。よく学校で七不思議等と騒がれ怪談となっている都市伝説である。子供が恐怖するもの。また学校の教員の扱う備品が高額な為に生徒がむやみに触らぬように怖がらせるように騙るモノ。これらの集め良く語り継がれるのは怪奇譚を七つ集めたものが『学校の七不思議』『学園七不思議』呼ばれ、七つ全てを知ってしまうとまたは隠された8つ目を知ると不幸が訪れるとされる場合が多い。

ここフェンリル極東支部 アナグラも例外ではなかった。

誰かが言い始めたのかは分からない。だがいつの間にかそれが広まっていたのである。ある者はその真偽を確かめようと、ある者は噂に脅えて耳を塞ぎ、またある者はその噂を広めた。

薫はこの事に興味を引かれる。この七不思議が彼の好奇心を刺激したのだった。七不思議の事を作業中に思い出し、現在行っている組み立て作業が一段落ついた事を確認しケースにいれる。

「っっっ！ 休憩しよう！」

大きく背伸びしゴキゴキを身体から音が鳴る。

神機の整備で汗を掻いた薫は神機の整備室内にある自動販売機にカードを押しあてスプーソドリンクのボタンを押し、出てきたジュースを飲み喉の渇きを癒す。神機整備室に用意してもらった自分専

用のパソコンデスクに向かい、デスクの引き出しから調査を纏めたレポート取り出してパソコンデスクの上に広げた。

第一の怪から順番の通りに項目を黙読し始めた。

壱の怪、神機の保管庫で人が居ないにもかかわらず、神機の拘束具の音がする。

貳の怪、受付嬢に強引な手口で口説こうとすると何処からともなく様々な種類の盥が降ってくる。

参の怪、神機の保管庫では決まった時間帯に咀嚼音がする。

肆の怪、一定間隔で同じトイレが何回も詰まる。

伍の怪、エイジスには光るヒトガタいてがその女性の容姿が大層美しくおいでおいでと誘う様は死を連想する。

陸の怪、夜中に役員区画を通ると「あいいいじゃああ、ぞーまああ」と叫ぶ怨霊の声が聞こえる。

漆の怪、ヒバリちゃんには好きな人がいる。

以上の七項目。隠された八つ目も探したがどれも証人が聞いた本人しかいない為、薫はその説を省く。他にも調べてみたが結局この七つしか出てこず諦めた。一通り調べて改めて内容に目を通した薫は冷や汗を掻く、最後の怪奇譚以外は全部自分の知っている事ばかりなのだ。

最初の怪談はタツミの神機である。薫が整備室にその神機を見かけると騒ぎ出すのだ。「あいばおおおおお、こいつだ、こいつがあああああああ」それを見聞きした薫は訳が分からなかった。何故あの神機は自分にこつても恨みらしきものを飼っているだろうかと今も首を傾げている。

次の怪談は、どうみても自分の仕業だった。アラガミ 《テストカトリポカ》のミサイル発射のメカニズムを解析し受付の防犯装置として柵と共に作り上げたのだ。ただ、欠点としてこれがアラガミの討伐装置として使えないのだ。発射と言う代物ではなく、落とすと言っだけの代物だ。

次の怪談も自分だった、何故自分にこつても接点が多いのか、薫は頭を抱え始め「うううう」と唸り始めるた。餌やりをしなければ神機とリンクしている自分もお腹が空く。文字通り死活問題である為やめられない。

肆の怪は頑張れとしか薫は思えなかった。そもそもこれ自体が怪奇現象ではない事はわかるだろうに……と薫は疑問を持たざるを得なかった。

伍の怪、薫はヒトガタ、光る。女性と来て考えられるのは神機の技術を駆使して作り上げたヒトガタ神機 《アルダーノヴァ》そのアラガミを頭に浮かべた。あのアーク計画を立てたヨハネスがこの噂を放置するわけがない。おそらく彼は意図的にこの噂を黙認していて自分の敵となる人物を見極め泳がせる為だと薫は判断した。

陸の怪の項目を読む。

「……………うん、次」

薫はページをめくり次の項目へと思考を意図的にずらし数瞬前にみた項目を見なかった事にした。最後のページを開き薫は他のページ同様証言などを読み、七不思議を纏めたレポートを机の上に置いた。

最後の七不思議の項目はどうみても怪談ではない。

「ただの噂話じゃないか………これの何処が怪談？」

所詮は噂話は噂話かと薫は肺に溜まった空気を吐き出し、再びぐつと背伸びをした。今まで明るかった趣味の範囲の思考に想定外の事体に気持ち切り替えた。

怪談と言う怪談はなかったがヨハネスのアーキ計画は進行中だという貴重な情報が得られ薫は満足する。既に前世で知っている『原作』とこのその物語りに似た現実は自分という異物で正規のルールから外れ前世の知識は当てにならなくなった今、薫は幼少期と同じように慎重に行動を起こす事に決める。すでに薫の操作する端末では神機の適合候補者 原作の『藤木コウタ』が選抜され、『原作』の時期がもう秒読みだ。これから始まるヨハネスの計画に思い薫は手汗を力強く握った。

これから起こる事に複雑な思いを抱えながら目の前の新型神機の組み立て作業に戻る為専用の神機整備用のグローブを締め、神機の組み立てに取り掛かった。

（この神機はおそらくこの極東支部初となる筈だった人物が持つんだろっな）

暫く想いに耽り時間が少し過ぎ我に返った薫はブンブンと頭を振り雑念を追い出した。再び作業を始め丁寧に神機を組み立てて神機の動作不良が無いかどうかを確認する。

この作業を一つ一つのパーツを取り付ける度に延々と繰り返して作業を行い、一週間掛け新型神機を完成させる。

後日、新型神機の適合候補者が見つかり薫の作ち上げた神機が適合試験に出されることになった。

「あーあ、デートも仕事が重なると身体が悲鳴をあげそうだ」

リンドウは薫の研究室に顔出すなり薫に言った。キーボード打っていた薫打つのを止め、クルリと周り椅子を横に向けて立つ。その仕草は子供がやる背伸びをしている風に見られるが薫の仕草は威風堂々としていて実に様になっていて見る者が目を奪われる程の美しさ。リンドウは見慣れている事もあって目を奪われず研究室にあるソファアーに座った。

「はあ、リンドウさん。何ですか？ カウンセリングの時間はまだの筈だけど……」

いつもの無表情を崩し笑った。話しかけてきたリンドウを見て、薫は打ち込んでいたデータを後回しにして話を聞く。

「ここ来るとおまえさんに労を労^{はたら}ってくれるだろう？ だからここで休ませてくれ」

身も蓋もない言い方だが薫は苦笑するだけで何も言わず、任務から疲れて部屋に入ってきたリンドウの為にいつも通りリンドウが来る度する作業に取り掛かった。薫の手作りのコーヒーマルを背伸びして上の棚から取り出し、屈んで下の棚からコーヒード豆を手に取り

コーヒーミルに三杯分入れる。

豆を入れたミルを手で回し始めると部屋に豆の独特の香りが漂い、リンドウの任務で高ぶった感情を落ち着かせた。

現在市場に出回っているコーヒーミルは豆がミルの中で引っ掛かり、ミルが空回りして豆が挽きにくい。しかし、薫の作ったミルは違い引っ掛からずしつかりと挽けるのだ。リンドウの誕生日プレゼントとして作ったこれはリンドウは大層喜ぶ。が、何故か自分の部屋には置かず薫の研究室に置きプレゼントを貰った以来薫に挽かせているのだ。

余りにも厚かましさにサクヤやツバキがリンドウに怒ったが一口薫の挽いたコーヒーを飲むとコップを差し出し悔しそうに「もう一杯」と一言を頂き、悔しそうな二人の顔を見たリンドウは何処か得意げだった。

確かにコーヒー一杯を出すのに随分と手間を掛けている。一時期リンドウは薫に淹れなくていいと進言した。薫は笑って、

『いつもアナグラを守ってくれているリンドウさんに恩返しできるからね、ささやかなお礼だよ』

決して狙って言っている訳ではないがいつも笑わない薫が笑顔で言われた一言でリンドウは堕ちた。いや、リンドウも薫が心の底からの一言だと分かったからこそ堕ちたのだった。

それ以来決まってリンドウは薫の研究室を訪れ身体を癒しているのだ。

「薫、どうだ最近は何事あるか？ 俺に手伝える事があれば手伝うぞ？」

年の離れた弟の現状を聞く。薫の幼い頃から知っているだけにリンドウの位置は今も変わらず薫の頼れる兄貴分で対人関係が弱い薫を助けてきたのだ。

「ん、アラガミの素材はまだあるから良いけど……特にないかな？」

人差し指をコメカミに当て滞っている作業を思い浮かべるが特に無く、順調に仕事が進んでいた。薫は挽き終わった豆をフィルターの上に入れ、沸かしておいたお湯を渦巻きを描くに入れ、一分ほど蒸らす。蒸らし終わった後、第二湯目を入れでき上がった。

「はい、どうぞ。リンドウさん、お疲れ様です」

薫はカノンから貰ったお菓子 《ボマークッキー》をトレイに乗せコーヒーと一緒に出した。

「おう、ありがとうございます」

と一言口にしてからコーヒーを口に含みふうと一息ついた。やはり、任務の後の癒しはこれに限るとリンドウは思う。コーヒーカップの横にある、可愛らしいお菓子に目をやり一つ摘み口に放り込む。

「美味しいなこれ。……サクヤの所でも出てなかったからこれは手作りか？」

リンドウはクッキーを深く味わいながら、次から次へと口にクッ

キーを放り込んだ。

「カノンさんから貰ったんです。研究室でブドウ糖をそのまま口にしている事を見られてからくれる様に……でもこれ本当に美味しい」

「ほう？ 薫は年上狙いだったか。こりゃ、良い事を聞いた」

リンドウは薫をからかうネタが見つかりニヤリと口元を歪ませた。だが相手は薫。良くも悪くも薫には対人関係の経験が少なく……。

「年上狙い？」

リンドウのからかいも空振りに終わってしまった。間の抜けた薫の反応にリンドウは肩透かしを貰ってしまいソファアからずり落ちる。

「あっそういえば、リンドウさん今度新しい人来ますよ？」

ふと、連絡を思い出して薫はリンドウに伝えた。ソファアからずり落ちたリンドウは這い上がり元に位置に座り直し薫に話しの続きを聞く体勢に入る。

「ん？ そうか、配属は？」

「まあ、適合試験を通じてからですけど……リンドウさんの部下になるのかな？」

適合候補が見つかった時点で粗通る事が確定している状態だが捕喰事故もあり得るのだ。今でこそ少ないが捕喰事故に備えければならない。現在は今の所的中率を外れ無しだが万が一の可能性もあり

それに備えて薫と榊は当日は忙しくなる見込みだった。

「俺の所か…… 本人の所には通達には行ってるんだろ？ 遠距離式か？ 近距離式か？ どっちなんだ？」

「実はですね…… なんとつ！ 僕と同じ新型なのです！」

「おつ、そいつは頼もしいな」

自分と一緒に仲間が出来て嬉しいのか、胸を張る薫。成長しても色んな事を見てきても変わらない薫をが微笑ましくリンドウは笑った。旧型神機については自分の扱っている神機の為大体分かるが新型については余り知らない事にリンドウは気付き薫に尋ねてみる。

「そういえば、ロシアの時気にしてなかったがな、新型って具体的に何が出来るか教えてくれないか？ 作戦を立てやすいしな」

「えっと…… 前言ったような…… もしかして…… 全部忘れて？」

「……………」

リンドウの沈黙が全てを物語っていた。沈黙の意味を悟った薫はリンドウを半目で見える。薫の視線に耐え切れず、リンドウは視線は薫から明後日の方向に向いた。

「はあ、次はないですからね？」

「…………… 悪いな」

ばつが悪そうにリンドウは頬を人差し指で搔き、二度目の神機の話しを薫から受ける。薫は抜けている兄貴分を呆れたため息を吐く。傍から見たら似たもの同士なのだが二人は気付かない。

「じゃ、初めから説明します」

「おう、頼む」

「知つての通り……新型神機は遠近切り替えできる新しいシステムの神機です。……流石にってますよね？」

「それはロシアの時、見たから分かる。」

薫の問いにリンドウは頷き続きを促した。

「新型神機は旧型と違って遠近切り替え出来る代わりに神機使いとしての耐久力が少し低くなっています」

「おお、それは確か切り替えの為にオラクル細胞の結合密度がどうたらこうたらだったな」

「はい、切り替えの為にというか二つの機能を持つ為にですね。耐久力……オラクル細胞同士の結合力を弱め遠近両立する為にです」

リンドウの説明になっていない説明を薫が補足しリンドウに理解したか目で尋ね、リンドウは頷いた。

「何故？ 結合力を弱めなければならないのか？ そもそもです。遠距離式と近距離式のオラクル細胞構成が違うんですよ」

薫の言い放った一言にリンドウは驚いた。

「は？ 聞いたことが無いが……」

「では質問です。遠距離式の代表であるツバキさん彼女は一体どうやってオラクルポイントを回復しているのでしょうか？」

この知識は薫がこの世界に来てから得た知識である。

ゲーム中では遠距離式の神機使いはオラクル自動回復と言うスキルがついている。オラクルポイントを回復していたのだ。

興味がある事には知識を貪欲に吸収する薫はその事に興味持たない訳がなかった。薫は紳と言う他の科学者と一画する講師がついている。薫自身の頭脳もあり見にならない事はなく砂漠の砂に水が垂らす如く知識を吸収していった。

旧型の神機使いは遠距離と近距離の二タイプに分かれる。同じ神機使いとは言え遠距離式の神機使いは近距離式と同じオラクル細胞構成であればオラクルポイントの回復ができない。

銃型の神機使いは剣型神機使いと似て非なるのだ。

剣型はオラクルポイントを溜めるタンクがいない為、タンク分のオラクル細胞の隙間がいらす固めれ、近距離で戦う為にオラクル細胞の結合力が遠距離式の神機使いよりも強い。一方銃型は遠距離で戦う為に細胞同士の結合力を弱め、オラクル細胞の構成がタンクとオラクルポイントの生成に当てられる。

「それはオラクルポイントを自分で生成してるんじゃないのか？」

後はアンプルとか前衛が回収したオラクル細胞を渡しやつを補充したり」

旧型遠距離式の欠点を上げるなら攻撃能力が高いがオラクルポイントが尽きると生成に時間がかかり前衛が受け渡しオラクル細胞を神機に補充したり、アンプルを飲むしか方法がない。

「では、もう一つリンドウさんに聞きます。リンドウさんはその生成は必要ですか？」

「知らないだろう？ 俺はそもそも………っ！」

リンドウはそこまで言っただけで気付いた。そこに着眼すれば何てことない簡単な事だ。ただ、多くの神機使いが勘違いしているだけで……。

遠距離型は『銃身パーツ』による銃撃が可能だが射出して減少した神機の『オラクル細胞』を回収する機能を持たない。神機の自己修復を待つ間一切攻撃ができないデメリットを持つ。自己修復にも限界量が存在する為、連続運用が見込まれる場合は補充用のオラクル細胞を携行するのが一般的である。しかし、オラクル生成や補充には時間がかかる為、任務は基本的に近距離型と組み合わせられる事が多いのだ。

「気付いたみたいですね。そうです、新型神機使いはその両方の機能を持つ為に結合力が弱めてるんです。旧遠距離式の神機使いはタスクの構成を固めればそのまま防御力ないし耐久力につながりません。しかし新型は違うんです。オラクル細胞の構成が多すぎて足りないんですよ」

一息置いて薫は冷めたコーヒーを一口飲んで話を続ける。

「まあ、このようにデメリットを挙げましたが……新型は旧銃型と違ってオラクル生成機能がいらないのでその分を耐久力に回せまして、新型ならではのリンクバーストや近接戦闘でのオラクルエネルギーの吸収が出来ます。耐久力に関しては旧型よりも少し低いって感じですのでそれほど気にしないでいいです」

「リンクバーストってあれか？ 捕喰して活性化したエネルギーを他人に回すやつか？」

「はい、そうです」

「しかし、新型ってのは凄いな……これからも増えれば俺の仕事も楽が出来るってもんだ」

リンドウの言葉に薫は少し落ち込み、話しの続ける。リンドウは薫が何故落ち込むのか分からなかったが次の言葉で理解する。

「新型のもう一つのデメリットとして挙げられるのはその適合候補者の少なさです。さっきオラクル細胞の構成の話になるんですけど……細胞の構成が多すぎて複雑になってるんです。唯でさえ神機使いは人手不足なんですが新型はそれに拍車をかけてしまうんですよね……………」

「まあ、大体分かった。で新型の名前は？」

「神薙桜です」

「うっし、分かった。コーヒー御馳走さん。いつも悪いな」

リンドウが言い終わると二人はソファから立ちあがった。リンドウは自分の胸の位置に薫の頭があり
バンドナで髪が隠れてない所をリンドウは撫でた。撫でられた薫は
眼をバンドナを深く被り照れを隠す。

幼かった薫が榊の助手をするまでに成長したのだ。リンドウは兄
貴としてやはり思う所があった。

「じゃ、俺そろそろ寝るわ」

「お疲れ様です。眠って疲れを癒してください」

リンドウは部屋を出て自室へと帰ると同時に薫は綺麗に無くなっ
たトレーを片付け始めた。

コーヒーカップを洗いながら薫は思う。

いよいよ原作が開始……か。僕も主人公に負けないよう
に頑張ろう。

新型神機の適合者は極東支部の第一部隊に配属される。ヨハネス
のアーク計画の最終調整が始まり……と同時に薫の知る物語が始ま
った。

第十八喰目 神機使い（後書き）

さて、血のバレンタインから一週間です。皆さまは貰えましたか？

貰えた人は私の敵です。義理でも敵です。

チヨコは嫌いですが、それとこれとは話しが別です。

別に悔しくないんですよ。ええチヨコとか嫌いでもん。羨ましくなんてないんですもん。バレンタインの日に一人で寂しく葬送曲とか弾いていないですよ？

くっ何故だろう、目から汗が溢れ出てくる。

同情するなら愛を愛を下さい。

……薫君爆発しないかな。

今回の話しは神機使いのお話です。

旧型でも同じ近距離式の神機を使うと捕喰される話しじゃないですか。

つまり、神機使いはそれぞれオラクル細胞の構成が違うんだと妄想してみた次第です。

知らぬ間に総合評価が千ポイント超過してまして吃驚しました。

訳の分からない捏造理論で評価が下がるかもと戦々恐々としてましたが……

皆さまに受け入れられていると勝手に解釈してよろしいでしょうかね？

ともあれ、ここまで来れたのも皆さまのお陰です。

総合、二十七万アクセス。

総合、二万八千アクセス。

お気に入り登録数、四百間近。

総合評価、千ポイント突破。

本当にありがとうございます。

これからも拙作をよろしく願います。

次より、いよいよ原作開始です！

ひゃっほー漸くだＺＥ！ここまでで十八話とかもうね馬鹿かと……。

原作主人公である、桜ちゃんの無双劇場が始まるよー！

この小説の主人公の薫君は空気です。無双なんてしません、ええ完全裏方です。

以下拍手のコメント返しです。

>おもしろいです。がんばってください。

はい、頑張らせて頂きます。

これからも面白くする為に色々としますので……生温かい目で見守ってください。

幕間 前世（前書き）

励ましの言葉を貰って頑張って書いた結果がこれだよ！
軌道修正しなきゃそのうちダークになりかねない。

暗いかもです。

苦手な人は……回れ！右っ！

幕間 前世

性善説。

人間は生来より善に属するという考え方だ。

薫も本を読みこれを信じている。それも盲信的に信じているのだ。人間の醜い感情を前世より一身に受けて尚、人は美しいと言つ事を信じている。

ある人が薫を見て言う。

『あいつは、やる事為す事俺らを潰す為だ』

無論、それはその人の被害妄想であり、黨の頭脳への嫉妬からくる発言だった。黨自身にその意図はない。子供が無邪気に遊ぶように、黨もまた無邪気に行動しているのだ。

またある人は言う。

『俺の班の課題発表が失敗したのはあいつの所為なんだぜ？俺が頑張って資料を纏めたのによ、資料を無くしやがって……あいつ直前に資料を無くしたとかほざきやがる』

実に正論だ。非の打ちどころがない程に、だ。

しかし、その証言は間違っていた。資料を集めたのは薫で課題の発表を失敗したのは彼の所為である。仮に薫が無くしたとしても、だが薫はその頭脳を以てすべて課題発表を無事終了させるだろう。

私が失敗したのはあの子が出す雰囲気の所為。あいつは人を見下して様な目で見てゐる。あいつが通りかかったら財布なくした。あいつがいたから俺は振られた。あの子は私たちの努力を嘲るように見せつけ全てこなししていく。

あいつが？あの子が？あいつが？あの子が？あいつが？
あいつが？あの子が？あいつが？あの子が？あいつが？
あいつが？あの子が？あいつが？あの子が？あいつが？

薫に襲いかかる嫉妬の感情。薫を助けられる人物はこの高等学校から遠く、薫は心を守る術も無く負の感情に晒された。

薫は理解されない事を泣きながら考える。

『僕のやり方が悪かったんだ。もっと上手くやれば……』

どう考えても薫の頭脳への嫉妬による暴言だ。それでも薫は自分が悪いと考え努力をしていた。

彼らは知らない。天才と呼ばれている薫が生まれて人と関係をもつてから、ずっと人を理解する為にずっと苦しんでいた事を……。天才とは言え努力も何も無しに全てを行えるわけではない。ただ、人よりずっと高いポテンシャルを持っていて、人より練習を行う回数が少ないだけだ。

薫の存在は高校の時のその関係者にとって実に美味しい存在だった。

何せ失敗したら押しつけければ良い。能力だけを借りて、課題を出せばいい。利用するだけして後はゴミ箱につぽいと投げ捨てればいいのだ。

高校に置いて薫の価値というのは低かった。いや、高いと言っべきか。

天才少年が所謂凡人に良い様に扱われ、他人の失敗を押しつけられる上に蔑む事ができるのだ。劣等感を感じさせる存在を、その原因を虐げれる事が出来るのだから……。

自分よりも遥かに高い人間を虐げる事は実に気分が良かった。世間知らずな天才に社会と言うものを教えてやっているのだ。何物にも代えがたい優越感。

その優越感は例えるなら麻薬だった。

一度味わったならば、次も使いたくなり……………。

より快感を得る為により使う量を増やす。その次はもっとその次さらにもっと……。

彼らの行動はエスカレートしていった。

その状況下で薫は心が壊れそうになりながらも必死に人を信じていた。

大勢の悪意に晒されても人は尊いと言った。

だが、薫の想いは踏みにじられる。

薫がどれだけ頑張っても彼らには届かなかった。その想いすらも利用して無邪気に人に役立つと言って行動する薫を彼らは都合の良い様に扱った。

日々他者から放たれる、どす黒い感情に身体が震え、心が擦り切れる。薫の心身ともに悲鳴を上げていた。

その薫に止めを刺したのは……政次だった。

最後に政次の言葉が薫の心に突き刺さる。

『お前さ、そうやって俺を見下してるんだよね？』

『そついうのってさ本当にうざいよ』

思いもしなかった政次からの言葉、薫の思考が止まる。

友人から放たれる敵意。政次から敵意を感じた他のクラスメイトも薫に敵を向け始め、薫は自身に何が起きているのか分からないまま、退学する事になった。

人間関係を理解したい薫は接客のバイトで店員を始める。

様々な客がくる為店員である薫の観察が鍛えれ、相手が何が欲しいか？どんな答えが欲しいか？

薫は相手の要望が理解できるようになった。

だが、そこには薫の求める答えはない。

薫が欲しいのは感情の解。

完全でなくても良い。不格好な答えでも良い。

薫が欲したのは他者との繋がる為の解が欲しかった。

残酷な事にもう手遅れだった。政次が薫に敵意を示した時、その

時には他者の認識は薫は道具でしかなかった。

そして……。

ある日の事だった、いつも通り薫はバイトが終わり支度をしてから帰る途中に知人 健人と出会う。

朗らかな顔で薫に近づいた彼はいつも同じく薫に頼みごとをして世間話をし時間が迫っている事を薫が伝え、二人はいつも通りに別れる筈だった。

だったのだ。

いつも通り薫は健人の要求を受け自宅へ帰ろうと背を向けた時、健人はその背を見て突発的な殺戮衝動にかられたのだ。

健人に背を向け信号が青に変わるの待っている薫の背に一突き。その後彼は何事も無かったようにその場を立ち去った。

殺したくなった。だから殺した。道具を壊して何が悪い？

彼は逮捕された時こう答えた。その時の彼の目は反省の色もなく人を殺した態度では無かった。突発的な殺意で薫を殺した。彼は別に薫が死んでも何も思わない、道具が壊れたな……。楽ができねえや。彼にとって薫は道具同等、もしくはそれ以下の存在だった。

道具が壊れただけ、薫を人として見ていないから殺したことに忌憚を持ってないのだ。

……ただ、それだけの事。

1

とある少年の話だ。

彼は日本の平凡な家庭に生まれ平凡な環境で平凡に育ち、成長していく。

平凡の彼は優等生な幼馴染を持っていた。名は溝口政次。みぞぐちまさつぐ

二人は幼いころからとても仲良く遊んでいた。

しかし、成長すると共にとある明確な差が出てくる。学力、身体能力、容姿等だ。

平凡な彼は政次の言葉が時々何を言っているのか分からなくなる学力の差。

授業や外での遊びで付いていけない 身体能力の差。

熱の籠った視線が政次に向けられる 容姿、性格の差。

幼馴染が自分よりも有能で自分は平凡だ。彼は彼になりに政次に追いつこうと付いて行った。

必死に幼馴染と肩を並べれる様に……政次も幼馴染も自分を誇れるように。政次に気を使わせないように。政次が自分の事を自慢な幼馴染と言える様にだ。

その努力は長くは続かない。幾度練習しても上手くいかず、睡眠時間を削り時間を掛けて勉強に費やしたが平凡の域を脱せ^{だっ}なかった。彼は諦めた。全てを諦める、自分は無理だ。

俺は政次みたいになれない。

彼は墮落していく。政次は彼は励まし一緒に彼と同じ高校を志望し平凡に苦しんでいる幼馴染を一緒の高校に入ろうと励まし続けた。政次の甲斐もあって彼は政次と同じ高校に入る。

中学を卒業し高等学校に入学し数カ月経った時、彼は目を疑う光景見た。

自慢な幼馴染が学力で負け、身体能力で負けたのだ。

容姿は美形とはいかないがそれでも整っていて横目で見た無表情な顔は利発さをより際立たせていた。

名を斎藤薫。

彼はその名を知らなかった。それだけ優秀ならテレビにも出て不思議ではないがその名を一切きいた事がなかったのだ。

彼が知らないのは無理もない。薫の情報は馨や薫の友達に能力の噂が渡る前に潰されていて、薫を無垢な人形に仕立てあげる為に他と関わりを断たせたのだ。薫の周りは歪んでいるがかなり優秀で見事にその目論見を果たしている。

斎藤薫を見た彼は眠っていた嫉妬が沸き立った。

決して届かないその高み。

残酷なまでに見せつけられる自分との差。

自慢な幼馴染でさえ大きく差が開いたのだ。果たして自分はどれくらい広がるのか？

無表情で佇む薫の目はこちらを見ていた。

彼はその目が気に入らなかった。哀れそうにこちらを見つめるその目が……。天才と呼ばれ平凡の自分を蔑んだ目で見られる目が気にいらぬ。

怒りで彼の全身が震える。哀れんだ目でこちらを見つめるその目が彼の琴線に触れた。

哀れんだ目と言うのは彼の被害妄想だ。今まで蓋をしていた政次への劣等感が溢れ出しそれが大きくなって薫への劣等感へと変わり、嫉妬から無表情に見つめるその目を哀れと思わせたのだ。

彼は薫を困らせる為に様々な難題を突き出すが薫はそれを次々に解いてしまい逆に彼が困る事になった。

彼にとって幸いだっただのは薫が対人関係に疎い事だった。疎いと言っよりも薫は姉や友人によって対人関係の能力を持っていない。愛玩人形　薫が自分たち以外と関係をもつ必要はない。薫は何も知らない。

彼はこの事に気付き、計画を思いつく。

以前彼が薫に難題を出した時薫は何も言わずそのままこなした事、薫は面倒な作業を全てこなしたのだ。

姉や幼い頃からの友人達以外と接したことがない薫は情報集めを欠かさなかった。難題をこなしたのも人の心を理解したいからだっ
た。

彼は自分の勘が当たっているかどうか、試しに彼は薫に自分の課題を突き出し、

「明日までにこれを終わらせなきゃいけないんだけどさ、明日用事あるから代わりにやってもらえないか？」

薫はコクリと頷き了承し、彼は自分の推測が当たっていた事に喜びこれから事を思いほくそ笑んだ。

薫は翌日に彼にノートを突き出し、彼は中身を見て戦慄した。確かにやっていた彼の言う通りに薫はすべてを終わらせ、丁寧にノートに書き込んでいた。だがそれらを全て無視して彼は目を見張る。

自分と同じ筆跡で書きこまれていたのだ。

こいつは自分と同じ生物なのか？

彼はそう思わずにいられない。それを思うと同時に自分の前に立っている壁の大きさに憎悪を抱く。八つ当たり気味に彼は薫に叫ぶ。理不尽な要求だと自分でも分かっていた。俺の成績を考えて書き込め！なんて実に馬鹿げている。彼は当然薫は何かしら言い返すだろ

うと薫に目を向けた。

「そこまで気が回らなかった。次の教訓にするよ」

感心したように薫は彼を見ていた。うんうんと頷き薫は彼をしつかりと見ていた。

彼は天才が自分のような平凡な人間を認められたようで舞い上がる。

あれだけあつた劣等感が一気に払拭されたのだ。その心地は天にも昇るよう。

しかし、再び時が経つと彼の心は再びどろどろしたもので塗りたくられていた。何やつてもぬぐい切れないそれは彼の心をさらに苛立たせる。ささくれ立った彼の心にさらに泥が引っ掛かる。

アレだ。あの手を使ってみるか……一度だけ今回限りだ。

そう自分に言い聞かせ薫を呼び出し前回と同じように要求をする。出来た代物を理不尽な理由で薫を責め、薫に自分を褒めさせる。

気付かせてやった俺に感謝しろよ？

ありがとう、よく分かった次の教訓にするよ。

再び沸き起こる心の優越感。どろどろしたものが取れた彼はこの麻薬に取り憑かれてしまった。

今度は友達を呼び薫を責め、楽をする為に呼ぶ。

罪悪感はなかった。

『世間知らずな天才様に社会って奴を教えているんだ。これは勉強代だよ。そうこれは勉強代』

暗示だ。幾度も口にした言葉彼の免罪符だった。

そう、これは天才に社会を教えている報酬だ。だから、これは罪じゃない。

彼も周りも感覚が麻痺していった。

天才を良いように扱う優越感まさに麻薬。

彼らもまた方向は違えど馨達と同じように薫の魅力に取りつかれた。

彼らの行動はエスカレートして行き、政次が薫へ敵意を見せた事で彼はさらなる快感を得た。

ああ、政次も鬱陶しかったんだ。俺と一緒に。なら、お前の幼馴染である俺が奴を追い出してやるよ。この世から……まあなんだ、俺たちは幼馴染だし礼はいらない。つかあいつは道具だしさ、ははっ

「待て、それは駄目だ。それだけは越えるなっ！」

政次は叫ぶ。おかしくなっていた友人に越えてならぬ殺人という倫理を犯そうとしている。幼馴染としても同級生としても薫の友達

としても、すでに自分の所為で高校に居づらくしたのだ。これ以上
薫に何かがあつたら自分はいつたいどう償おうというのだ。

「健人！ 絶対に早まるな！」

いつのまにか変わっていた幼馴染。薫に忠告しようにもどの面さ
げて薫に会えばいいのかわからない。

政次は薫に負い目を持っており会うに会えなかった。ならば幼馴染の健人を止めるべきだ。政次の幼馴染である健人は変わった。卒業した時に健人に零した愚痴を変なふうにつえ、頭の警告音がなりやまなかった。自分が薫に嫉妬していたのは本当だ。だからといって殺したいわけじゃなく会って謝りたかった。

平凡であつた彼 ますだけん 益田健人は狂っていた。元あつた価値観は消え失せ自分で壊した価値観を集め新しく作り上げた価値観は異常者であるソレ。

政次の嫌な予感は当たっていた。

政次の謝りたいと言つ言葉を健人は良いように捉え薫に謝らせたいと勘違いした。政次も邪魔なんだという免罪符を得た彼はいつでも薫を殺せるよう刃物を所持。

かくして健人は突発的にかられた殺人衝動で薫を殺し、その事を知つた政次は自身の行動に深く深く後悔し涙した。

パチつと薫は目が覚める。いつもよりも早く目が覚めた。この分
だと義姉 馨は起きていないだろう。

随分と懐かしい夢を見ていたような気がした。この感覚からして夢は前世に関するものだろうと薫は結論付けた。

薫は別に前世に未練がない訳ではない。

政次の事を理解しなかったし、自分の最後の結末の理由も知りなかった。

現在、榊の講義を聞いて前世の高校での扱い理由を知った時は驚いたが別段怒りは沸かず、かといって悲しみも沸かなかった。

結局は自分のミスだったのだ。

ただ、それだけの事。

薫の思考はそこに収束された。自分の能力とやらが高い所為で周りに輦轡ひんぎを買っていたのだ。榊の言うようにゆっくりと理解して行けばいい。

『薫君。君の言うように人の感情は理解しづらい。かくいう私も未だに親友であるヨハンの現在の真意がわからない。君は君で、君だけの結論を出さなければいけないんだ。君なりの答えを持った時、世界は見違えるように変わるよ』

榊は頭を撫でながら幼子おやないである薫を今に至るまで言い聞かせていた。薫はこの言葉を胸に日々を頑張つて理解しようと生きている。

思考を途中で放り投げ、ベッドから這い出て洗面場に向かいシャコシャコといつも通りに歯を磨き、顔を洗う。

これから寝ている大好きな義姉に飛び付くのだ。馨が起きるまであと三十分今のうちにだ。

タンスから服を取りだしパンキーパーカー、ハーフを取りだし服をパジャマから着替える。着替え終わった後、静かに馨を起こさないように薫は抜き足差し足忍び足で馨の寝室へと向かう。

「お姉ちゃん！ おっはよう！」

がばつと抱きつき、薫は仰向けになっている馨に馬乗りになって顔を近づける。薫が毛布を一枚挟んで馬乗りになっている馨は下着姿だったが起き上がり惜しげもなくその肢体を薫にさらけ出し、

「ああ、おはよう。今日は早いな薫」

言葉とともに薫を抱き頭を撫でる。

「お、お、お、お姉ちゃん服着て！ 何で着てないのっ？！」

薫の叫びが辺りに響いた。

幕間 前世（後書き）

今回は薫の好奇心を利用され良いように扱われた回です。ですが、薫は別にその事を何も思っちゃんないと話ですね。過ぎた事はこれからの事の判断材料になる。まさに研究者思考です。

原作前に少し閑話を挟みました。後、一話程閑話を入れます。

ところで、最近巷ではリリカルなる物が流行ってるらしいですね。にじファンで試しに読んでみた所……。

ジェイル・スカリエッティと言うキャラが気に入りました。いいじゃないですか彼。なんというかカッコいい。

ガジェットカッコいい。

と言う訳でっ少しだけ妄想が膨らんでしまった。いつか出すかもしれない。ません。

その時は宜しくお願いします。

P・S

キャラ全て見ましたが上記以外で気に入ったキャラはギンガでした。機械なのがコンプレックスみたいらしいですけど……。

現在、日本はこの子みたいなものを作るのが目標なので夢が膨らみます。

石黒教授は自分のクローンロボットなるものを作りだしているのです。そのうちに日本は滅びますね。……子供が居なくなると言う意味で。

行きすぎた技術は滅びを呼ぶ。キリッ

……情けないですねこれは。

幕間 神機と薫（前書き）

主人公らしい活躍がない薫に出番を与えてみました。

かつこよさは別としてですけど……（笑）

今回もちよびつと捏造が入ってます。

各自判断して回避お願いしますね。

幕間 神機と薫

とある平日の昼下がりに、薫は分厚い本を黙読していた。

今日、受け付ける神機使いのメディカルチェックは既に終了し今日までに提出しなければならぬ書類も既に書き終え、余った時間で本を読んでいたのだ。

一つのページを目視し過ぎて唾を飲むのを忘れ、涎が垂れる。

「おっと、危ない危ない」

薫は涎をハンカチで拭き、再び本を読み始め、本に載っている写真を薫は凝視する。

そのページ集中して凝視している為か垂れそうになる涎を引っ込め、再び唾をゴクリと唾を飲む。

「……………お腹すいた」

そう言い終わると同時に、なんとも締めまらない薫の腹の虫あ研究室に響く。

薫は机にうつ伏せになってもそのページを見続けていた。

ページにはアラガミ ヴァジュラ の写真が大きく載っていた

写真のある媒体。それを補足するように、その生態、平均的な体長、体重等のデータが詳しく乗っている分厚い本と言えば……？

そう、薫が読んでいた本は アラガミ図鑑

ペイラー榊プロデュース、フェンリル出版の図鑑である。

薫はこの図鑑の写真を見て涎を垂らしていたのだ。

何故薫が図鑑を見て涎を垂れそうになる程美味しそうに見ているのか？

その原因は薫の神機、身体、生活習慣にあった。

薫の身体は神機とリンクしており神機がお腹空けば薫もお腹空くという妙な構図になっていた。

かといって薫は神機使いとして登録されておらず、ただの研究班の一員として数えられていて《アラガミ》を研究するが、決して《アラガミ》喰らう仕事ではない。

しかし、《アラガミ》を喰べないとお腹が空き、仕事に支障が出てしまう。

妥協案としてアラガミの素材を餌として薫の神機に渡す事が決めたのだ。

薫にとって誤算だったのは神機に餌をやり続けてる内に薫はアラガミが食糧としか見れなくなった事だろう。

オウガテイル よりも ヴァジュラテイル が美味しそうに見える、ヴァジュラ よりも プリティヴィ・マータ が薫には美味しそうに見えるようになっていた。

記憶の中を探る。

五、六年前に参加したユーラシアの掃討戦を思い出し、様々な

アラガミ を捕喰に捕喰したあの大战は今思えば鴨が葱を背負って来る状況だったのではないかと思ひ始めていた。

薫に自分が変わったという自覚はあるが、そんなのはどうでもよかった。

……自分がバケモノに変わった。

薫に殊勝な感傷はなく、今薫にとって問題は《アラガミ》が喰えるか喰えないかの二択。

今の薫には、

(もっと、捕喰して置けばよかった)

という後悔が心に残っているだけだった。

後悔先に立たずとはよく言ったものである。行動した後で悔いるから後悔というのであつて結果も出さずに先に悔いる事はできない。

図鑑に載っている写真の サリエル を見た。じゅるり、薫の口元から涎が垂れそうになる。

薫は生きたアラガミを喰べたかった。

「贅沢は言わない、ディアウス・ピターなんて言わない。ヴァジュラで良い……喰べたいよ」

研究と神機の整備、アラガミ装甲壁のアップデート、メディカルチェックをこなしてもアラガミを食べれない。

「じゃ僕と一緒にいきますか？」

自分の言葉に返事が返ってくるとは思わなかった薫は言葉がした方向に目を向ける。

「レン？」

そこには神機の妖精改め神機の精神体であるレンが居た。

「はい、あなたのレンですよ。薫君、僕と一緒にデートと行きましよう」

レンが笑顔で聞き捨てならない言葉を吐いたが薫は気付かず、レンにどうしてここに居るのか聞いた。

「あれ？ リンドウさんはどうしたの？」

「今は……ちょっと取り込み中なんです」

レンは頬を染め、黙る。急に頬を染めた彼女に薫は内容を聞いてはいけないような気がしてそのまま流した。

「そっか、……一緒にアラガミを食べに行ってくれるんだよね？」

「はい、ちょうど僕も時間が空いているので僕と一緒に行きましよう」

レンの申し出に薫は感謝し予定を確認する。

「むっ、……夜しか空いていない。レンって夜大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ。夜に行きますか？ 場所はどこに？」

笑顔でレンは快諾し薫に首を傾げ場所を聞く。

「じゃ、鎮魂の廃寺かな？ 九時整備室集合で！」

「分かりました。待ってますね」

二人は別れ薫は早速準備に取り掛かった。

夕飯を食べ終えしばらくゴロゴロした後、薫は馨に一言出かけると言って家を出てまずはエントランスに向かった。

エントランスに出るとヒバリが忙しそうに大勢の男性神機使い達の相手をしていて話を掛けれる状態では無かった為薫はそのまま通り過ぎ整備室着いた。

薫はゲームと同じようにターミナルを開き神機をカスタマイズしようと思ったが自分の持っているパーツがナイフと支援シールドとファルコンしかない事に気付く。

（駄目じゃん、でも捕喰しからないから良いかもしれない……そういえばパーツ開発されていないよね。………もしかして新しく予算に組み込まれていた開発費って神機のパーツを？）

考えている内に神機の整備が終わる。いつもよりも念入りに手入れされた神機は疑問に思ったのか薫に問いかけた。

「ん？ ああ、言つてなかったっけ？ これから御馳走を喰べに行くんだ！」

薫は嬉しそうに自分の神機に話しかけ、それに釣られ神機も生きたアラガミを捕喰出来る事に歓喜する。何せ五から六年ぶりなのだ。

アラガミの素材を食べているとは言え、アラガミを生で喰らい尽くせる事に比べれば喰べる事には入らない。

薫の神機のコアが早い点滅を繰り返す。早くアラガミを喰べたくて薫を急かすように感情をぶつけた。

「いやいや、レンが来るからもう少し待ってて」

自分の半身を宥めるように言つて待ってもらい、レンを待つ事数分、

「お待たせしました。すみません遅くなってしまいました」

いつもと違う恰好をしたレンが来た。

普段の中性的な格好は何処にいったのか、今の彼女はしっかりと女の子と分かる格好をしていた。

始めてみる一面に薫は驚いた。始めて知ったレンの新しい顔に薫は喜ぶ。薫にとって人を知るといふのは好きな事に入る。

新しい一面を知るといふのはそれだけ仲良くなった事、薫はそれが嬉しくたまらない。

レンがスカートを着てきたのだ。性別が分かりにくかったレンがボーイッシュな女の子といった風に女性的な面を現したのだ。

レンが何か気合の入った感じで薫を見つめているが当の本人は「おおーレン女の子バージョンだ」と呑気に考えていた。

普段しない格好で来たのだ。何か言うのが筋だろう……残念ながらそこは薫だった。レンの格好に何も言わずただ時間を確認して上機嫌に言った。

「じゃ、行こっか？」

「はいっ！」

(……薫君はまだ早かったみたいだね)

薫の言葉にガックシと来たが驚いた顔と楽しそうな顔が見れただけでなくレンは良しとする。

レンは苦笑して薫の後を付いていった。

鎮魂の廃寺。

神仏に人々が静かに暮らしていた隠れ里。

生活の中心に合った御堂は《アラガミ》の襲撃によって半壊し屋内には雪が積もっている。

入り組んだ地形に吹き荒れる冷たい風音は、《アラガミ》によって命を落としていった人々の悲痛なる叫びなのか……。

鈍い月明かりが彷徨える魂達の嘆きを癒す。

事前にあつた資料を読んだ薫はその内容に頷く、確かに自分の目に映っている幻想的な風景はそう思わせる。

雪を踏みしめる音が御堂の外から聞こえた。

御堂の外を見てみるとコンゴウ二体が闊歩していた。

一匹は御堂の中に向かいもう一匹は反対側に降りて行った。

薫は頭に地図を思い浮かべコンゴウが向かう先を記憶する。

もう一匹のコンゴウが向かったのは鐘の場所だった。

完全に一匹が見えなくなった事を確認し薫はコンゴウに攻撃を仕掛ける事を決める。

息を殺してレンに問いかける。

「レン、大丈夫？」

「はい、何時でも行けます」

頼もしくレンは頷き戦闘態勢に入った。

「じゃ、行くよ？ 3、2、1」

近づいてくるコンゴウ、薫は一度戦った相手だがその目には油断はない。あるのは《アラガミ》を喰^{しょく}せる歓喜だけだった。

「GO！」

その言葉を合図に二人は御堂から飛び出した。

御堂から表した影に《コンゴウ》は叫びをあげ、薫とレンのいた場所に空気を震えさせ、激しい旋風が巻き起こる。

レンはまずは牽制に雷属性の《バレット》を装填しレーザーを放つ。

その攻撃に《コンゴウ》がよろめくが隙といった隙は現さず、《コンゴウ》は再びレンの場所に旋風を巻き起こす、その事に気付いたレンは次の《バレット》を転がりながら放つ。しっかりと狙われてなかった為、放たれたレーザーは《コンゴウ》に当たらず空へと消えた。

《コンゴウ》は転がりレンを角に追い詰める。捕喰対象追い詰めた事で《コンゴウ》は気付かなかった。舌なめずりしながら近づいてくる少年に……。

「いったただきまーすっ！」

ブレデターフォーム

《捕喰形態》を展開し神機をレンを追い詰めている《コンゴウ》に向け背中からガブリ。

捕喰した事で身体の底から湧きあがる活力。薫の神機は《アラガミ》喰べることができたことに歓喜する。

捕喰された《コンゴウ》はたまったものじゃない。自身を捕喰さ

れた怒りで息が荒くなり、叫び、仲間を呼んだ。

「薫君！　まずいです。コンゴウが仲間を呼びました。残り三体がここに来ます。一旦ここは退いて態勢を立て直しましょう！」

レンが薫に撤退し体勢を立て直す事を提案する。

「うん、分かった」

レンの言葉に頷いたが薫には撤退は必要ない。かの掃討戦に置いて薫は《コンゴウ》を含める、数百、数千の《アラガミ》郡を捕喰のみで生き残ったのだ。

スタングレネードを投げ他の《コンゴウ》が来る前に泉のある方面　地点Dへと走る。

二人は運良く他のコンゴウに出会わずD地点の建物に入り態勢を整えることができ、コンゴウに対して作戦を考えるが二人の思考は別々だった。

（コンゴウ……………美味しかった）

レンが状況を憂いでいるの対し薫は捕喰した感覚に浸っていたのだ。

状況が悪い中薫はレンに提案する。

「……………ん〜レンはここに居てよ。僕ちよつと様子見に行ってくる」

「すみません。手助けするつもりが逆に助けられてしまって……………」

しょぼんとするレンを薫は笑顔で慰めた。

「一緒に来てくれただけでも僕は嬉しいんだ」

トラウマとなった人間関係と洗脳によって感情に執着している薫にレンの申し出は嬉しいのだ。何より人に役に立てるとというのが薫の嬉しい事だった。

「ここで休んで。じゃ、様子見に行ってくるよ」

唇を噛みながらレンは建物から出ていく薫に声を掛ける。

「もし、何かある前に早めに信号弾で呼んでください！ 僕直ぐに駆けつけますからっ！」

「うん分かった！ 行ってくるよ」

薫は小さい建物から出て《コンゴウ》を偵察しに行った。

小屋を出てすぐに《コンゴウ》を発見。

鐘の近くで食事に集中していて薫に気付いていない。

じゅるり、溢れだす唾をのみ込み息を殺しながら《コンゴウ》の背後を取り捕喰。

薫の神機は短時間で二回も食べられた事に歓喜しコアが激しく点滅した。

再び沸きあがる活力。そして身体が作り変えられ、薫はコンゴウに対して上位に立った。

《P - 63 偏食因子》が作用したのだ。

六年前の《コンゴウ》と現在の《コンゴウ》は違う。

薫は元々あった《コンゴウ》に対する耐性を高め、自身を^{コンゴウ}現在の天敵と化した。

《アラガミ》は常に捕喰して身体の構造が変わる為、装甲壁を喰い破る。その為アラガミ装甲壁は常に最新の状態にしなければならぬ。

薫の《偏食因子》はアラガミ装甲壁の上位互換なのだ。だからこそ榊が熱心に研究している。

捕喰した因子を取り込み耐性をつけ、自身を強化し《アラガミ》に適応する。

無論、その恩恵を受けるにはアラガミと対峙しなければならないと言っリスクがあるがそれを差し引いてもリターンが大きい。

捕喰した事で体内のオラクル細胞が活性化し薫の動きは普段以上の動きを見せる。

（むむっ？ 何かいつもより思考しやすいな……これも活性化の影響？ 徹夜するんだったらこれから栄養ドリンク剤じゃなくて強制解放剤を飲もうかな）

戦闘中で思いがけない発見をした薫は日常で強制解放剤等まとめ買いをする事決める。

三体同時に集まる《コンゴウ》それらの視線の先には薫を見ていた。

思考を切り替え目の前の《アラガミ》に集中する。

四体の《コンゴウ》は連携して薫に襲いかかる。一体は目の前で空気の塊を薫に放出させ、一体は旋風を巻き起こし一体は、横から殴り掛りに来て、最後の一体は薫の後ろから転がり込んできた。

囲まれている中、全ての状況が把握しているかのように薫は回避しつつ後ろから転がり込んできた《コンゴウ》を喰らう。

「さあ、晩御飯の時間だ！」

薫の神機が震える。恐怖ではない歓喜の震え、その感情の震えは薫の心に直に伝わり薫も喜び震えた。

一体の《コンゴウ》は目の前の少年に恐怖を覚えたのかその場から立ち去ろうとした。

だが、そうは問屋がとおさない。

捕喰したばかりなのだが再び薫は神機を《捕喰形態》プレデターフォームを展開しその神機の口を逃げ出そうとする《コンゴウ》に喰らいつかせ、コンゴウの肉を引き千切りナイフで止めを刺した。

その光景を見た他の《コンゴウ》は仲間を殺された怒りで今まで

以上に連携で薫に攻撃を浴びせ続ける。

彼らは分かっていたいなかった。

目の前に居るのは唯の少年ではない。

お腹を空かせた《アラガミ》を捕喰する真正正銘の《捕食者》ゴッドイーターなのだ。

薫は眼を爛々らんらんと光らせながら《コンゴウ》達に近づいていく、数分後コアを抜かれた四体の《アラガミ》と返り血も浴びず少年だけがその場に居た。

（満足した？）

神機を握り問いかける。

（ま……………で……………ね）

（っ?! 声が聞こえた今の君？）

薫は再び問いかけたが、今度はいつも通りコアを点滅して腕輪を介しての意思疎通だった。

（……………後一体分のエネルギーで喋れるようになるのか）

後一体と言われてもこのあたりにはすでに薫が捕喰し終わった《コンゴウ》の残骸が転がっているだけだった。

薫の目の端に金色の物体が映った。

「食べ物見つけたよ？ 食べに行こうか」

金色の生物も薫に気付き向かってくる。

金色の生物 《ハガンコンゴウ》と言われる《アラガミ》で《コンゴウ》の上位種であり、かつて人間が崇めていた神に似た容姿をした《アラガミ》でもある。

第二接触禁忌種に指定され、凄腕の神機使い出なければ遭遇する事すら禁忌とされている強力な個体である。

鎮魂の廃寺を彷徨っていた《ハガンコンゴウ》は漸く見つけた獲物を逃がさないように電気を纏いながら薫に転がり込んでくる。

だが、薫はいとも簡単に避け目の前の《アラガミ》を見つめる。

接触すら禁忌とされているのだ、その威圧感は通常の神機使いには重く恐怖をを煽られ、思考が定まらないだろう。

《ハガンコンゴウ》を目の前にしても何も動かない薫に向かって腕を振り上げ振りおろされる。

響いた音は金属音ではなく水気を含んだ音が響く。

薫は盾を展開するのではなく捕喰形態を展開し《ハガンコンゴウ》の腕を喰い千切っていた。遅れて《ハガンコンゴウ》から血飛沫が飛んだ。

血飛沫を避け、激しくなる胸の動悸を抑え、目の前の《ハガンコ

ンゴウ》を見据える。

活性化した薫の体細胞は《ハガンコンゴウ》に適応し薫はその適応力の猛威を奮った。薫の目に映っているのは《ハガンコンゴウ》という接触禁忌種ではなく《極上の餌》としてしか映っていない。

(……コンゴウより美味しそう)

じゅるり、と垂れそうになる涎をハンカチで拭き、目の前の餌を狩り始める。相手が接触禁忌にも関わらず薫は《コンゴウ》と同じように《ハガンコンゴウ》を喰らい尽し沈黙させた。

グチャグチャ、水気を含んだ音を響かせながら、ゆっくりと《ハガンコンゴウ》の鳴り果てを喰べていた。喰べている途中ドンドンコアの点滅が早くなり、最後に薫の神機のコアが少し遠慮しがちに光った後レンがいる建物に向かう途中で薫の神機が自己紹介をし始めたのだ。

「この状態では初めまして、マスター。私の名前はナデシコって言います。やっと伝えれました！」

快活な声が薫の耳に届く。薫は自分の神機　ナデシコに目をやると、ナデシコのコアが光り「そうですよ、あなたの神機です」と言う。

聞き間違えではないのだ。

「っ？　初めまして！　僕は薫。相棒だから、マスターじゃなくて薫と呼んでよ！　ナデシコこれからもよろしくね！」

元々意思疎通が出来たのだが、他の神機達と同じく声が聞こえるようになっていた。薫嬉しくてナデシコを抱く。

今まで意思疎通が出来たのにナデシコが自分の名前を言わなかったのは自分の声で伝えたかったのだ。

話し声が聞こえたのか建物からレンが出てきた。

「薫君、大丈夫でしたか？ ……もしかして」

「うん、大丈夫だよ」

最後の方は薫は聞こえなかったが、心配していたレンに薫は自分がピンピンとしている事を見せ安心させた。

「薫君、つかぬ事聞くけど……神機の声って聞こえているの？」

レンはナデシコの方に目を向けた後に薫に向き直る。

「えっ？ 聞こえるけど？」

恐る恐る聞くレンにあっけらかんと薫は答えた。

「まさかとは思いますが……僕とタツミさん達との会話も聞こえてました？」

「えっ？ 聞こえないと思ってたの？」

「……………」

薫の言葉に沈黙するレン。

「……………ナデシコ？ 聞こえないのが普通だっけ？」

レンは何も喋らない為に薫はナデシコに聞く。

「えっ聞こえないのが普通でしたっけ？」

ナデシコも知らなかった。それもそうだ。彼女は他の神機と一画した場所に保管されており他の整備士が触らないようにしている。

文字通りナデシコは箱入り娘だった。

他の神機達の声は聞こえるが自分は喋れない為、ずっと黙って聞いていただけである。

普通の神機使いは聞こえないのが普通で神機は喋れないのが普通なのだ。神機使いが一定以上の《アラガミ》を狩る前に命を落とし、神機は適合者が見つかるまで倉庫で眠る事になるのだ。

「……………とりあえず、帰ろっか？」

渴いた声を発し薫はアナグラへと帰る。

予定通りに十時に家に帰り、お腹一杯に食べた薫は満足し笑顔で馨におやすみの挨拶をした後、ベッドに入る。

「僕の神機が喋れるようになったんだ……………ナデシコっていうのかぁ。いっぱい話したいなぁ」

（うーん、レンは僕が神機の声が聞こえると知らなかったみたいだね。何でだろう？）

薫はベッドで仰向けのまま考える。

単に薫のケースが特殊なだけであり、レンは余りにの事実吃驚して思考が止まっただけである。

神機と意思疎通が出来るというのは動物と話せる事が出来ると同義であるのだ。

誰が、思うだろうか？ 動物の言葉が分かる人間が居ると……。

（まあ、後で聞けばいいかな？ 明後日はコウタの適合試験だね。頑張らなきゃ……）

薫はそのまま眠りついた。

薫が眠りについた頃、神機達はわいわいと騒いでいた。

「初めまして、ナデシコと言います！ よろしくお願いします」

ナデシコが他の神機達の前で自己紹介をする。

「彼女は僕と一緒にこのまま成長すれば精神体になれるんですよ。僕の同種なので僕からもよろしくお願いします」

レンがナデシコに続いて言う。その視線は若干嫉妬も含まれていた。

「おいおい、マジかよ？ と言う事はアラガミを喰った数は数千体超えるのか！」

タツミ（の神機）が言う。興奮していてガタガタと拘束具を揺らし周りのジーナ（神機）やソーマ（の神機）が迷惑そうにしていた。

「とりあえず、タツミ落ち着け。他が迷惑している。話を戻すがナ

デシコの相棒は中々の奴ではないか？ 相棒は誰だ？」

タツミ（の神機）の反対側に居るツバキ（の神機）はタツミ（の神機）を注意をする。反対側に居るとはいえ他が迷惑しているのだ。上官（神機の）として注意しない訳にはいかなかった。

「薫君です」

ナデシコの代わりにレンが答える。

「は？」

ソーマ（の神機）がレンの言った言葉を信じられなかった。それもそうだ、薫はあれ以来任務に出ていない筈なのだ。

「誰だよ？ そいつ？」

「誰なの？」

「そいつ聞いた事ないけど？」

カレル（の神機）、ジーナ、（の神機）シュン（の神機）は言われた名前が誰かは分からず無い首を傾げた。

「なんだと？」

ツバキ（の神機）は出てきた名前に驚く。確かにあの掃討戦では一人だけは《捕喰形態^{ブレターフォーム}》のみで戦っていたとレンから聞いていたがまさかそれほど捕喰していたとは思わなかったのだ。

「それは本当か？ カレル、ジーナ、シュン。薫と言う奴は俺達相棒のメディカルチェック担当の人の筈だ」

とブレンダン（の神機）は驚きを表しながらも冷静にジーナ達に答える。

「おいおい、マジかよ。あいつが？」

タツミ（の神機）は相棒の敵の名前が挙がった事に驚く。しかし彼が驚くのはレンの次の発言だった。

「あの子が？」

サクヤ（の神機）は相棒に年下の弟分がいる事を思い出す。時々自分もメンテナンスをしてもらっている。薫の手入れは痒いところに手が届く仕事ぶりで大変に満足した。

「ふえ？ 薫君？」

カノン（の神機）は相棒が年下ながらもフェンリルの先輩として慕っている子供を思い浮かべる。一度相棒が出撃前に薫が「誤射しないように誤射しないように」と奇妙にも神機である自分に願掛けしていた事を思い出す。

「華麗なる僕の相棒の親友かい？ 彼なら当然だろう？ なんとって華麗なる相棒の親友だからね」

エリック（の神機）だけは驚かず、ただそれが当然であるように振る舞った。

「その理屈はおかしい、エリック」

「レンそれだけではないんだろう？ さあ、続きを話し給え！」

ソーマ（の神機）はエリックに突っ込むがエリックはその突っ込みを華麗にスルーをしてレンに話を続けさせた。

レンは言いづらいのか少し、間を置いてから話した。

「どうも、薫君。僕たちの声が聞こえるみたいです、ナデシコに至っては腕輪をかいして意思を伝えていたみたいです……」

はあああああああああああああ？！

流石にこの事実には神機達は声を上げざるを得なかった。

「おいおい、もしかして俺があいつを見た時に喋っている声も聞こえていたと言う事か？」

当然、揶揄だがタツミ（の神機）は冷や汗を背中に掻きながらレンに聞く。

「……………みたいです。薫君はそれでも普通にメンテナンスしていたみたいですけど…………」

予想が当たらないでくれと願ったタツミ（の神機）の想いも空しく散り、レンは現実を突き付けた。

「…………マジかよ、今度どう顔を合わせればいいんだよ」

タツミ（の神機）はズーンと落ち込みナイフの先端が少し曲がる。薫が見ればタツミの神機に縦線が入っていると云っているだろう。

「薫君は意味が分かっているみたいなので普通に接してみたらどうです？ 皆さんこれを機に薫君と話してみてはいかがでしょう？」

落ち込むタツミ（の神機）にレンが救いの言葉がかかり、タツミ（の神機）は少し立ち直る事が出来、次回薫に整備してもらう時、感謝の気持ちでも伝える事を決める。

そして翌日、薫が神機を整備する時、タツミ（の神機）は肝を座らせ薫に話しかけた。

「……あのよ、いつもありがとよ」

「うんっ！ どういたしまして！ じゃ、始めるよ？ 何処か感覚がおかしい所ある？」

勇氣出して言った言葉は薫に伝わり、本人から笑顔を向けられた。

「そうだな……」

以前よりも親身に整備してくれる薫に感謝しながら、神機は相棒の癖を思い出し薫に伝え、薫はそれに合わせ調整を施す。

後日、タツミの討伐成績が跳ねあがり、自慢げにエントランスでヒバリに話している事が見られるようになった。最もヒバリは苦笑しながらタツミの相手をしていて以前進歩はない。

嬉しそうに話すタツミを見て薫もタツミの神機も嬉しくなり一人

と一体（？）は喜びを分かち合った。

薫と喜びを分かち合う中、タツミ（の神機）は思考の片隅でヒバリと相棒の進歩が相変わらず無い事が残念だった。だが相棒が喜んでいたので良しとした。

幕間 神機と薫（後書き）

まず、遅れてすみません。

現在、リアルが多忙でございます。（バイトを増やされました。ちくせう。

空いた時間を見つけては書くの繰り返しでやっと投稿出来ました。

お忙しい中、連日更新されている。

他の作家様はどう書いているのか知りたい所です。

さて、今回の話ですが……………。

神機達のお話と薫君初めての無双です。

ひょっとしたら、これが最後かも知れません（笑）

薫君の目にはアラガミ達が食料にしかもう見えません。

ちなみに薫君が一番美味しそうに見えるのはアルダーノヴァの女神です。

ゲームをやった記憶を掘り返し美味しそうに思い出しています。

数千体捕喰したらと言うのは捏造です。

そもそも、謎の塊であるレンにどう考察しろと？（笑）

さてさて薫の神機は喋れるようになりました。

彼女には突っ込みを頑張らせてみようかな……。

今回はボケてましたけど（笑）

以下コメント返します。

> 馨の愛が届けーーーーー

…… 人気がありますね、馨。

馨の愛は刻まれてますよ？ 薫に洗脳と言う形ですけど（苦笑）

追記、 三月十六日

ら抜き御指摘により文体を少し修正。

他に気になる点がございましたら連絡をくれると助かります。

幕間 とある世界の観測結果（前書き）

修正完了です。

ですが、更新が……

と言うわけではい、苦し紛れの短編集です。

タイトルが禁書みたいですが全く関係ありませんのでご注意。

これは気紛れに書いた 応援のお礼小説です。

以下の内容は性転換を含みます。

不快になられる方は回避をお願いします。

短編集ですので非常に短いですがどうぞ……。

幕間 とある世界の観測結果

《新型に成り立ったばかりの頃》

薫の生活は著しく変わった。榊の講義の時間が訓練になるのは言うまでもない。

そこまでならば薫は苦勞しなかった。

薫が苦勞したのは力の制御だった。

普通なら筋力が一倍から二倍まで上がるのだが……。

薫の場合は五倍近く、身体能力が跳ねあがっていた。それに伴いカロリーの消費量が半端ではない。

適合率がソーマと肩を並べる程高いのでその影響ではないかと榊は指摘し薫に日常生活において力の制御訓練を言い渡していた。

ソーマは幼少時代より変わらない為、薫みたいな事例はない。

薫はレンにより身体が作り変わった上、止めだと言わんばかりに新型神機の適合である。

もとより身体にある偏食因子でオラクル細胞と親和していたのがさらに結合を強めたのである。

この事をヨハネスは知らず、ただ息子　ソーマに同族が出来たと喜ぶ。

自分のエゴによりソーマを半アラガミという孤独を感じているソーマを心配していたのだ。実に傲慢だが何よりも親らしい一面を見せていた。

ヨハネスは薫にソーマをよろしく頼むと言ってフェンリル本部へと出かけた。

ヨハネスが去った後、薫は四苦八苦しながら家に帰り夕飯を食べていた。

ここでも薫は力の制御に苦労していた。

意識してやれば問題ない。しかし、不意に気を抜くと、

割り箸がバキッと音を立て、薫の手の中で折れた箸はその役目を終えてしまう。

「あつ……。」

薫の傍のゴミ箱には無残にも散っていた割り箸が大量に捨てられていた。それを見て薫はため息をつく。

「大丈夫だ。私が食べさせてあげるぞ？」

そんな薫を見た、馨は嬉々とした表情でおかずを箸で取り薫の口元に運び、薫が口を開くのを待った。

このやり取りは薫が力の制御が出来るまで続く。

IF 十五喰目《ヤンデレ覚醒ver》

薫は目の前で伸びている神機使いを米俵のを扱つように抱え医務室へと連れて行った。

「えっ？ 何？ これって薫君なの？」

さつと目の前に現れて行き成り去る薫にリツカは混乱する。

「えっと……これは薫君の仕業でしょうか？」

ヒバリの眩きにリツカは目をヒバリに向けた。

「あれ？ 薫君、知ってるの？」

リツカは生じた疑問そのままぶつける。

「リツカさんも知り合いなんですか？」

「私は整備班にいるから、薫君と神機について話す事があるけど……私たちみたいと一緒にフェンリルに来る事ってないよね？」

「小さい時にちょっと……ありまして……。」

薫の笑顔を思い出しヒバリの心臓が不整脈を起こし鼓動が速くなる。速くなるに連れて顔が赤くなった。

「……………嘘。」

リツカはヒバリの様子を見てそれが何かを表しているのか分かってしまった。羞恥心から来る顔の赤みではない、ヒバリは薫に恋情を抱いているのだ。

リツカは自分の身体が焼かれる錯覚に陥る。それは錯覚ではあったが彼女は気付いていない。その感覚は嫉妬から巻き起こる感覚だと……。

一方のヒバリもリツカの様子に気付いた。女の勘である。ヒバリは勘で彼女は間違いなく自身の敵になるだろうと気付いたのだ。

これがきっかけで彼女たちは水面上は笑顔で語り合い、水面下では女の醜い感情をむき出しにして敵対する事になる。

しかし、その中心人物は何も知らず前世と同じように、日々を過

ごしていた。

いつ、その均衡が崩れても可笑しくない状況を……。

i f 十七喰目《もしあの時点でエネルギーが足りていたら？》

薫の神機は再び点滅し薫にアラガミが喰べたいを意を伝える。

「と言ってもね。今の僕はしがない研究員だし……というか他の神機見たいに喋ってよ。その方が楽しさ」

少し弱めに点滅し神機の拘束具が震え、

「多種多様のアラガミの素材を喰べた事で喋れる事は出来る様になったけどね？ でもマスターは神機の声聞こえないでしょ？」

神機が薫に仕方ないと言わんばかりに薫に語りかける。

「本当に喋った……神機って喋れるんだ……」

薫は心の底から驚き自分の神機を見た。

「えっ？」

薫の神機は少し驚く、自分の声が聞こえたように自分の相棒が言葉を発したからだ。彼女の驚きはそれだけで収まらない。

「はろはろ？ 初めまして僕薫です。」

薫は未だに啞然としている自分の神機に話しかけ、自己紹介をした。

「マスター？ もしかして言葉聞こえるの？」

「聞こえるよ？ マスターか……なんかカッコいいなっ！ やっぱり半年前の神機の自慢大会は夢じゃなかったんだ！」

興奮した薫は神機を両手で持ち掲げ、すごいすごい！と掲げながら走り回った。

「えっ嘘。本当にマスター聞こえるの？」

「聞こえるよ？ 自己紹介してもらってもいい？」

薫の神機は本当に薫に自分の声が届いた事に驚いてた。薫の呼び

声に意識を自分の主人に戻す。

「ナデシコです。私の名前はナデシコ。マスターの名をもう一度お願いできますか？」

薫の神機 ナデシコは声高らかに自分の名前を薫に伝える。

「僕の名前は薫。斎藤薫だよ。これからよろしくナデシコ」

薫は笑顔でナデシコに挨拶し自分の神機を愛しそうに抱く。薫はこの上無く嬉しかった。ユーラシア以来自分の神機で戦っていないがそれでも相棒なのだ。戦いに出ないとはいえ自分の神機は自分で整備していた。あの自慢大会の時、自分の神機は喋らない事にほっとしたが、いざ自分と対話してくれると言いつゆのない感情が沸きあがった。あの時ほっとしたのは、もしかして本心を誤魔化していただけかもしれない。今はこんなにも嬉しいのだから。

嬉しそうにナデシコを抱く薫。釣られて嬉しそうにナデシコのコアが光り、薫の腕輪を通してナデシコの感情が直に薫へと伝わる。

ナデシコは自分が精神体になれない事を悔やんだ。もしなれたら自分の主人に自分を見てもええ、四六時中一緒に居られるのだから。

だが、その雰囲気は長くは続かなかった。

しょうがない、相手は対人関係能力が低い薫なのだ。友人関係で躓いている薫にピンク色の空気が理解できる筈がない。

「ナデシコ？ 次、何喰べたい？」

ものの見事み叩き割った。ピンク色の空気。

一体と一人の間に漂い始めた。ピンク色は見る影もなくこれでもかっ！という具合に薫は叩き割った。

「……薫」

ナデシコは悲しそうに点滅し悲しみを伝えた。だが薫は何故ナデシコが悲しんでいるのか分からなかった。薫はどこまで薫だった。

空気を理解しない薫は空気と言う空気をぶち壊す。

「ん？ 聞こえてないのかな？ なでしここ？ 次々何喰べた？ い？」

大きく間延びした声でナデシコ聞く薫。空気を読まなかった薫にちよつと報復の意味を込めて言葉を返す事に決め、

「硬神丹」

と一言。

「えっ」

彼女の要求は無駄に難易度が高かった。

IF 《万能型主人公》

すると、少女 アイシャがちょうど部屋から出てきた所で薫は都合が良いとばかりにアイシャに近づいた。

「アイシャ！ 良い所に！ はい！ これあげる。」

滅多に見せない笑顔をアイシャに向け手に持っている。『初恋ジュース』の失敗作を渡す。

「それ飲んで元気になってね！ じゃ、バイバイ！」

薫はアイシャに何も言わず去って行った。

残されたアイシャは薫に渡された缶を見る。綺麗に印刷されており、ピンク色の文字で初恋ジュースと書かれてあった。

「薫に慰められるとはね……。」

『死神』その言葉思い出し胸がチクリと痛んだ。

貰った缶のプルタブを開け一気に飲む干す。

「美味しいな。これ……っ!？」

飲み干した後、アイシャは自身の目から涙が込み上げてくるのを感じ自室に再び戻った。

涙は止まる事なく、涙は際限なく溢れ出てきた。

ポロポロとアイシャの目から涙が零れおち床へ落ちる。

薫の優しさに直に触れたアイシャは心の防壁を崩され丸裸にされる。

アイシャの心を覆ってた鎧は砕け、感情が吐き出される。決壊したダムのように心の防壁は役目を放棄した。

「あれ？ あれ？ 薫が渡すからっ！ 止まないよ……………止ま
ってよ……………」

薫に毒づくアイシャの顔は怒りで歪んだ顔ではなく泣き笑いで顔を歪んでいた。

抑えきれない嬉しさで涙腺は締まる事はなく顔は破顔したままだった。

「薫のばかつ!」

少女は泣きながら笑う。

幕間 とある世界の観測結果（後書き）

作者は生きてます。

大丈夫ですが……非常に忙しいです。

地震の影響でさらに忙殺されそうです。生きてるだけでもありがたいですが……

活動報告にも書きましたが、皆さまは大丈夫でしょうか？

今回の地震はかなりの被害出ました。

多くの方が亡くなっています。

それだけでも心を痛める内容ですが生き残った人はさらに大変です。知人や親戚が亡くなったでしょう。その悲しい中で停電も起こり水道が使えない状況です。

作者は被災者の方々に対して雀の涙程度の協力しか出来ませんが皆様もお気をつけて過ごしてください。

一つ言い忘れてました。

放射能に関する話ですが、ヨウ素を含む食べ物を取りましょう。

例を上げるならば昆布、とろろですね。

味噌汁にワカメととろろ昆布を入れれば完璧です。

一番いいのは乾燥昆布です。

一刻も早く復興できるよう心から祈ってます。

今回の話はたいぶ前に書いた短編なので……

採用しなかった理由でも書きます。

薫と馨の日常ですが……

単に作者が入れ忘れてました。ふと思いついて書いた後ほったらかしにしていまして……orz

ヤンデレverですがヤンデレが増えるのもあれなので没になった奴をお礼として書きました。

没になった理由としてリツカに関しては恋愛感情になるまでの好感

はいただいていないのと

一人でも大変なのにこれ以上ヤンデレが増えたら薫君が死んじゃいます。

薫君は一種のハムスターなのです。

ナデシコは実は餌やりの時に実はすでに名前が決まっていました。

この時点でもう彼女だったんです。

本当は漢にしようとおもったんですが……モノガタリが暴走するのを止めに……。

漢女でもいいですがね？ その場合も暴走するので却下でした。

最後にソーマ君。

名前に関して何も言わないでください。

この話、書いた時ソーマ君は万能過ぎると思いました。

主人公も出来て、ヒロインも出来て、ゲームではしっかりとアラガミをぶっ殺せる子です。

非常に良い子です。

彼女の容姿は各自脳内保管をお願いします。

以下コメント返します

>是非これで短編を！！

?　もしかしてこの閑話集ですか？

第十九喰目 物語開始（前書き）

えゝこの度は遅れてしまひましてすみません。

少し少しずつ書いて頑張りました。

免許も取らなきゃいけないですし、勉強もしなければいけない。
極めつけが仕事の残業です。

今回ようやくの原作開始となります。

短いですがどうぞ……。

第十九喰目 物語開始

静かな支部長室に鳴り響く電子音。

部屋の主であるヨハネスは端末に手を伸ばし、キーを押し応答した。

「支部長、照合中のデータベースから新型神機の適合候補者が見つかりました」

ヒバリの言葉にヨハネスは驚き、「ようやく……か」と小声で呟いて少し想いに耽る。

ようやく薫に次ぐ極東支部での新型適合候補者が見つかったのだ。開発から八年、候補者はこの二人しか見つかっていなかった。ロシア支部に一人そして新しく配属される極東支部に一人。

「そうか、名前はなんと言っ？」

「神薙、桜です」

「ふむ……さつそく適合試験を受けてもらう事にしよう」

舞台が整い、役者が揃った。

後は実行のみ……だ。

ヨハネスは机に両肘を立て両手を組み、抑えきれない笑みを隠した。

（後継も見つかった。もう用はない老いた犬にはさつさと引退してもらおうか……）

ヨハネスの目に映つるのは……暗い感情と次代への明るい未来。

1

450

場所はホール前。

少女は突如フェンリルに自身が新型神機の適合候補だと告げられフェンリルに来た。

待つ事数分目の前の扉が開く。

中の準備が出来たと言う事なのだろう。少女は案内の係に従い入室した。

ホールに入ると少女の頭上のスピーカーから声が少女に掛けられる。

「長く待たせてすまない神薙桜君」

少女　サクラは呼び出された場所を見渡し、声の主にその視線を合わせた。

「さて、ようこそ……人類最後の砦《フェンリル》へ」

ヨハネスの目に映るのは息子と同じ年の少女。

その少女は長年待っていた新型神機の適合候補者である。研究班である薫が出来なかった役割を代わりに果たす事が出来る存在。

新型神機使いの有用性はユーラシアの掃討戦で実証済みだ。ロシアで新しく躰けている犬も実にいい結果を残している。

「今から対アラガミ討伐部隊《ゴッドイーター》としての適合試験を始める」

《ゴッドイーター》その言葉にサクラは美しい顔を引き締めより一層美しさを際立たせた。

サクラやヨハネスが緊張に包まれる中、好奇心が隠し切れていない者が居た。

（……自分がこっち側いるのはなんか新鮮だな。データーはどうなんだろう？ やっぱ自分と違うのかな？）

薫である。

前回の新型適合試験は自分が受ける側だった。今回は自分が試験監督側なのだ。先ほど、後に主人公の友人となる藤木コウタの試験を終えたが今度は本命の主人公なのだ。元より旺盛だった好奇心がさらに盛んになるのは薫の性格からして必然と言えよう。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい」

サクラは、深呼吸を数回繰り返し目を吊り上げ奥にあるケースに視線を注いだ。

「心の準備が出来たら、中央のケースの前に立ってくれ」

もう既に心の準備は終えていたのか、ヨハネスが言い終わって数秒後ケースの前に立っていた。

目の前のケースを見る。ケースの両端に神機使い特有の腕輪があ

る事確認したサクラは上のケースが自身の腕を押し潰すのだろうと推測した。

（これを握ったら僕も《ゴッドイーター》の仲間入りかの……）

既に心の準備は出来ていたサクラは、軽く神機の柄を握り、これから来るだろう苦痛の時を待つ。

サクラの推測通りに数秒後、ケースがガシャンと音を立て華奢なサクラの腕を押し潰すかのように落ちて腕を挟んだ。

（なんじゃ?! これは?! 身体の中にナニ力が入って来よる? !）

激しい痛みが腕から伝わり全身に広がっていく。

腕から入ってくる異物にサクラは耐え切れず声を上げた。

当然だ、ソーマや薫の様な場合を除いて体内にオラクル細胞を飼っている人間等居ない。

人間である以上はオラクル細胞は異物にしか過ぎず、候補者は異物であるそれを受け入れ、そして腕輪内と肉体の神経接続である。

まさに異物受け入れのオンパレード。

投入されたP-53偏食因子持つオラクル細胞が全身に行き渡った後、最後の仕上げとばかりに神薙桜のP-53遺伝子を喰らい尽し空いた席にオラクル細胞が居座った。

正しくサクラの身体の造りが変わった。

オラクル細胞を身に宿した者は他の人間とは別の存在になる。

人間 神薙サクラではなく、ゴッドイーター神機使い 神薙サクラとして生まれ変わったのだ。

オラクル細胞が遺伝子P-53偏食因子を喰らい尽した後サクラは全身を襲う脱力感に息を荒げながら床に右手で神機を持ちながら両手を着いた。

「おろ？」

片腕は台に挟まれていた筈じゃなかったかのう……？と疑問を浮かびあげた所でヨハネスから声が掛けられた。

「おめでとう。君は極東支部が待ちかねた『新型』ゴッドイーターだ」

ヨハネスは極東支部に新型神機使いが漸く配備された事に笑みを隠しきれず口元を釣り上げながらサクラに今後の予定を告げる。

「これで適性試験は終了だ、次は適合後のメディカルチェックが予定されている。指示があるまでエントランスで待機するように」

サクラは頷きながら漸く慣れた造り変わった身体を動かし、神機を持ち上げた。

思いのほか軽く持ち上がった神機は生来より使用していたかのよ

うに身体に馴染んでいて何とも言えない違和感のない違和感という矛盾を感じた。

ゆっくりと手に馴染む神機を見てみると神機のコアの部分より黒い触手の様なものが飛び出し腕輪に穴入る。

奇怪な光景に驚いているとヨハネスから再び声が掛った。

「ふむ、大分馴染んでいるようで結構。気分が悪い等の症状が出た場合、直ぐに申し出るように。以上だ、サクラ君……君には期待しているよ」

その言葉にサクラは疑問を持った、何せ自分は会ったばかりの神機使い成り立てほやほやの神機使い。演習も無しに何故そんな言葉が掛けられるのが分からなかった。

（やはり、この新型神機の適合者だからかのう？）

ヨハネスはホールのガラス部屋から去り、サクラは係に案内されながらエントランスに向かった。

ホールから係に案内されながらエントランスに出るとニット帽を被った少年が椅子に座り足をぶらぶらさせていた。

サクラはその少年の隣に座り大人しく指示が出るまでこれからの事について考える事にした。

「ねえ……ガム食べる？」

人懐っこそうな笑みを浮かべながらサクラに聞く。隣に居る少年

の言葉が自分に向けられた事に気付くのにサクラは数秒かった。

あっけにとられていたサクラだった。気が取り直し、少年に聞き直す。

「何じゃ？ 儂に言っておるのか？」

「そうだけど……あっきれた。ごめんごめん、今ので丁度最後だったみたい」

「ガムみたいなハイカラなお菓子は好かんからいいのじゃが……」

会話が数瞬途切れ、二人の間に静寂の空気が生まれた。その空気が嫌だったのか、静寂を払拭するように少年がサクラに話しかけた。

「アンタも適合者なの？」

「つい先ほどなったばかりじゃがのう」

「へえ……オレと同じか、少し年上っぽいけど……まあ、一瞬とはいえ、オレの方が先輩ってことで！」

「いや……同期じゃろ」

不満の声を上げようとする少年の言葉を遮る成熟した女性。

「何を騒いでいる。立て」

急に目の前に現れた女性に訳も分からず口を開く少年。その一方でサクラ言われた事を理解しは少年を見捨てて立つ。

「え？」

少年が現れた女性 ツバキに対してようやく反応を示した。

ツバキは少年 藤木コウタに対して少し憤りを感じる。自分の神機の後継なのだ。しっかりして貰うわなければならない。

長年連れ添った相棒をしようもないことで壊したくない。その思いがツバキにはあった。

「立てと言っている！ 早く立たんか！」

ようやく理解したのか遅れてコウタが立ちあがるとツバキは話し始めた。

「これから予定が詰まっているので完結に話すぞ。私の名前は雨宮ツバキ。お前達の教練担当官だ。が、神薙サクラはもう一人新型の担当の教官がいる」

一息で言い終わらせ、再び口を開く。

「これからの予定はメディカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱い等のカリキュラムをこなしてもらう」

ツバキがこれからの予定について話しているがサクラは耳に入らなかった。視覚から入る情報が信じられなく、目を見開く。

（なんじゃとっ？！ あの大きさはっ！ 儂は……）

自分の胸を見て再びツバキの胸を凝視。

（なんとという格差社会じゃ……儂は平均より上の筈じゃ……じゃがあの胸は……）

サクラの心境を例えるなら自分は富士山級だが、ツバキのエベレスト級という差に絶望していた。

ツバキの胸の事しか頭にない状況下でも話はどんどん進んで行く。

「つまらない事で死にたくなければ、私の言う事には全てYESで答える。いいな？」

「はい！」

器用にもサクラは脳裏で別の事考えながらも返事をし、事を進ませる。

「さっそくメディカルチェックを始めるぞ。まずはお前だ」

「はい」

「斎藤・薫修士の部屋に、一五〇〇までに集まるよう。それまで、この施設を見回っておけ、今日からお前達が世話になるフェンリル極東支部、通称――アナグラだ。メンバーに挨拶の一つでもしておく様に」

言葉を最後に身を翻し他の用事を済ませにこの場を去っていった。

（くっその歩き方は儼に見せつける為なのかっ?! そっじゃろ?
! 絶対にそうじゃろっ?!）

見事なまでの肢体、分かり易い言葉をあげるならば、ボンツキュ
ッボンツの言葉がツバキのスタイルを表せるだろう。

しかし、そのツバキを見てサクラはギリギリと齒を噛みしめ、悔
しさを口の中で砕き、感情が表に出るのを抑えた。

女の嫉妬を垂れ流しにしているサクラに話しかける勇者が居た。

「ねえ、アンタ行かないの?」

「おお! そっじゃった。すまんすまん、さて、行くとするかの」

コウタは得体の知れない悪寒に身が震えるが抑えてサクラに話か
ける。すると、今まで感じていた悪寒は引っ込み何事も無かったよ
うにサクラはその場を去った。

「うわぁーマジおっかねえ」

コウタの独り言がエントランスに響く。

当然、返事は返ってこないのだが、エントランスの沈黙こそがコ
ウタの言葉への代弁しているようだった。

2

460

斎藤薫の研究室。

その場所には三人の人物がこれから来る人物を待っていた。

一人はこの部屋の主、斎藤薫。

一人は薫の恩師であるペイラー榊。

そして最後の一人はこの極東支部を束ねる人物、ヨハネス・フオン・シックザールである。

メディカルチェック担当の薫はともかく他二人がこの部屋に居るのは、これから行うメディカルチェックのデータが見たいのだ。

扉が開く。

「ふむ……予想よりも726秒も早い、良く来たね《新型》君」

そう言っただけで薫の傍を離れサクラに近づく。

「私ははペイラー・榊。アラガミ技術開発の統括責任者だ。以後、キミとはよく顔を合わせることになると思うけど、よろしく頼むよ」

「神薙サクラです。よろしくお願ひします」

「メディカルチェックと行きたいけど……薫君、後？」

「五分ぐらいです」

「さて……と見ての通り、まだ準備中なんだ。ヨハン、先にキミの用事を済ませたらどうだい？」

榊がキーボードをカタカタと小刻み打っている薫に聞いてからサクラに現状を伝え、プライベート時間のようにヨハネスに声をかけた。

「……榊博士。そろそろ公私のけじめをつけて頂きたい」

これまで何度言っても直さない自分の親友にヨハネスがため息を吐く。

おそらく、このやりとりは私が死ぬまで続くだろうとヨハネスは思い、会った時から変わらない親友に内心苦笑した。

「適合テストではご苦労だった。私はヨハネス・フォン・シッケザール。この地域のフェンリル支部を統括している」

「わし……私の名前は知っているようですが、神薙サクラです。よろしく願います」

「ああ、よろしく頼む。君には期待しているよ」

何て答えていいかわからないサクラに助け舟が出される。

「彼も元技術屋なんだよ。ヨハンも――《新型》のメディカルチェックに興味津々なんだよね？」

（ああ、そう言う事じゃったのか）

榊の言葉聞いてサクラは納得する。新しく入ってきた神機使いが新型という希少種だからかと。

「貴方が居るから技術屋を廃業する事にしたんだ。後継も居る事も含めてね。自覚したまえ」

ヨハネスは眼に榊を映した後、次にキーボードで作業している薫を目に映す。

「本当に廃業しちゃったのかい？」

その様子を見て榊は何か感じ取ったのか何時になく突っ込んで聞いた。

「……ふっ」

が、ヨハネスは薄く笑っただけで何も返さない。

「さて、ここから本題だ」

ヨハネスはサクラの正面に立つと、室内の空気が変わった。

その空気に当てられたサクラは背筋が自然と伸びヨハネスの話を聞く体勢になる。

「キミの直接の任務は、ここ極東地域一帯の《アラガミ》の撃退と素材の回収だが……それらはすべてここ前線基地と、来るべき《エイジス計画》を成就するための資源となる」

（ふむふむ、なるほどのう）

「おお、すごい！」

「こ、この数値は……？！」

「エイジス計画とは……簡単に言うと、この極東支部沖合 旧日本海溝付近に、アラガミの脅威から完全に守られた《楽園》を作るという計画なのだ」

（ほうほう）

「ほほ、ー！」

「これがP・53の新型か」

（P・53とな？ なんじゃそれは？）

薫の口から零れたP・53という言葉にサクラ興味を覚えるが今はヨハネスの話しを聞く。

「……この計画が完遂されれば、少なくとも人類は、当面の間絶滅の危機を遠ざけることができるはず」

「すごい！ これが新型か！」

「吃驚だね！」

（……集中できん）

「ペイラー、薫君……説明の邪魔だ」

気持ちは分からなくもないが……と言葉続ける。

ヨハネスは二人の気持ちに共感できていた。何せ普通の新型のデーターを見るのがヨハネスも含めて初めてなのだ。

薫は偏食因子という根本的な部分で違い。

ここには居ないヨハネスがロシアで立ち会った老いた犬代わる新型の少女　アリサは精神が不安定の上洗脳を施している。

洗脳……この単語は薫も無関係ではない事を櫛を除いて知らない。

少しばかり、考え事をしたヨハネスを怪訝に思ったのかサクラが声をかけようとすると、

「ともあえ、人類の未来の為だ。尽力してくれ」

「あっはい」

「じゃあ私は失礼するよ。……薫君、終わったらデータを送っておいてくれ」

「わかりました」

言うべき事を言い終えたヨハネスは部屋から去り自分の仕事を片付けに向かう。

「よし……博士！ 準備できました！」

「そのまえに薫君自己紹介してきなさい」

榊に言われるがままに薫は椅子から立ち上がりサクラの前に立つ、まだ成長期に入っていないのか身長差が大きい。

その事実にしよぼーんとしながらも薫は自己紹介を始める。

「どうも、初めまして技術開発班所属の斎藤薫です。よろしく願います。神機使いメディカルチェックを担当してます、貴女の教練担当でもあります」

にやはははと笑う薫。

「もう一人の教官というのはお主じゃったのか、儂の名前は神薙サクラじゃ。さんづけなしでサクラで呼んでくれんかのう？」

「えっと、あの……」

自分のパーソナルスペースに入られて狼狽する薫。

「薫君、許可を貰っているんだから、呼んでいいんだよ。でも、普通は敬語やさんづけだからね？」

困っている薫に榊が落ち着かせ助言を与えサクラに向き直させた。最もパーソナルスペースに対しての助言はなかったが。

「はい！ サクラさん！」

「いやいや、取れとらん、取れとらん」

「あつ……サクラ」

恥ずかしながらサクラの名前を呼ぶ。まるで初恋の人の名前をを呼ぶような初々しさ。

薫の知り合いには女性がの名前が良く挙げられるが、薫に女性に對して免疫と言つものがない。

何かしら心に防壁を張っているのだ。

例外としてツバキと馨が挙げられるが二人以外は心に壁を張って壁越しに会話をしている。

ヒバリには幼少期の知り合いという壁。

リツカには技術班の先輩という壁。

カノンにはフェンリルの先輩という壁。

レンには恩人という壁。

サクヤには年上という壁。

今回、サクラもサクヤと同じ年上という壁を張って接しようとしたがサクラが薫の心の壁を壊した。

薫の様子を見たサクラ頬を緩めます。

（ようやく、壁を取り払ってくれたか……）

柵は感慨に浸っていると、時間がせまっている事を思い出し言葉を二人に掛ける。

「じゃ、始めるよ。そのベッドに横になつて」

指示に従いサクラは横になる。

「少しの間眠くなると思うが、心配しないでいいよ。次目が覚めるときは自分の部屋だ」

その言葉に薫は疑問に思う。ワープなんてあったっけ？

ワープに似た技術は墜落としに使われているがあれは人体移動はできない。

「戦士のつかの間の休息、というやつだね。予定では、一万八百万秒だ。ゆっくりおやすみ」

急に眠気がきたサクラはその睡魔に身を委ねて眠りに入った。

眠りに入ったサクラの身体に薫がせつせと機器を取り付けていく。

「あっそうそう。これ終わったら薫君がサクラ君を部屋に送って行つてね？」

急に柵が爆弾を落とす。

「え？ いや、目が覚めたらというのは……」

「ん、そう薫君が送って行ってね？」

「あっはい」

メデイカルチェック後、薫がサクラを御姫様だっこして……なんて運ぶ事はなく、いつぞやの神機使いと同じように薫はサクラを担いで部屋に運ぶ姿が見られた。

第十九喰目 物語開始（後書き）

はい、この度は遅れて申し訳ないです。

申し訳ないと言ったときながらもここで愚痴らせて下さい。

週の労働時間が四十八時間超えています。

ええ、殆ど休みなしです。

まだ、学生の身分じゃ！ 親の脛齧りたいんじゃない！

ピアノもつと弾く時間欲しい！

蠟火練習したい！

だらけたい！（一番の本音

一頻り、愚痴った所で今回の話について……行きます。

今回は皆さんもご存じの通り原作開始の項です。

主人公が適合試験を受ける前のシーンから始まりました。

はい、漸くこの話まで辿り着けました。

話の進みが遅いからと以前悩み、妙技様より助言を受け年表の様に書こうと思いましたが、肌に合わず挫折。遅筆ながらも頑張って更新できたのは皆さまの応援のおかげです。ありがとうございます。

さてさて、話を戻しまして今回の話しメインを張ったのは薫君ではなくサクラちゃんです。

本編でも言っていたように三人にとっては普通の新型というのは貴重なデータです。

そして、今回はしょうもない伏線を回収しました。

以前ソーマが博士に似てきたなと言う言葉を覚えている方がいるでしょうか？

そう、薫君をここで榊博士といっしょに騒がせたのです。（笑）

P・S

低い声が出ないです。男らしい低い声で男性ボーカルの曲を歌いたい。

カラオケだとキーあげなきゃ歌えないんですorz
女性ボーカルしか歌えない私はいたい……。

さらにP・S

自分の選曲がカオスと言われました。
意外に普通と思いますが……。

（例

かもめが飛んだ日（渡辺真知子）

trick star（水樹奈々）

凜として咲く花の如く（虹色リトマス）

地上の星（中島みゆき）

君の瞳は一万ボルト（アリス）

浪漫飛行（米米CLUB）

カオスでしょうか？ 私は普通だと思います。
以下コメント返します。

>地震で大変でしょうが頑張ってください。

頑張ります。発注しても発注通りこなくとも頑張ります。

……売り場考えなきゃ。

第二十喰目 中途現実（前書き）

.....現実から目を背けたい。

同情するなら愛を下さい。（切実）

第二十喰目 中途現実

場所は訓練場 そこには一組の男女がいた。

「まあ、神機の詳しい説明は後にしますので……サ、サクラが思うように適当に動いてみて下さい」

呼び慣れないのか薫はサクラの名前を言う時いつもの滑舌の良さは何処にいったのか、かなりの頻度で躓いていた。

薫にとって人間関係は鬼門である。今でこそ、人間関係は限られた人物しか接触していない為、特に問題にならなかった。薫の心に踏み込んでくる人物はいなかったのだ。

だが、サクラの来訪によって薫の心の平穏は唐突に終わりを告げた。

薫がサクラとの距離を取る前にサクラが薫の心の領域デトリリーに入ってきたのだ。それでも薫は心の扉を閉めようとしたが、御丁寧にもサクラは呼び名と言う、つかえ棒を使用し強引に入ってきた。

中でも薫を困惑させたのはサクラが義姉 馨と同じように薫を構う点。馨と同じように薫を構うというのは薫の心に入り込むと言

う事と同じ意味である。義姉　である馨はともかく、サクラは薫にとって主人公という枠に含まれ、ヒバリと同様に一歩離れて接する予定の人物だったのだ。だが、サクラは合い鍵でも作ったかのように頻繁に薫の心に入りしめて薫を困惑させていた。

本質が傍観者、観察者である薫にとっては前世も含め初めての出来事だった。

前世にしろ現世にしろ薫の世界は知識だけが漂う酷く閉鎖的なモノ。

人と接するにしても何かしらクッションを置き心の動揺を抑える。外界で得た情報は一自身の世界（心）で整理する。

それが薫の前世からの交流の仕方である。榊によりその交流の幅は広がったが本質が榊と同じ観察者である以上そのスタンスは崩せない。

榊と薫の違いは一他者の存在（外界）に対して耐性を持っているか否かにある。榊は自身の観察者という本質を存分に活用して人生を謳歌している。外界にも対しても恐怖はなく、むしろ興味がある。情報は外界に溢れている事を知っているのだ。が、薫は違う。

本質こそは榊と同じであるが、心に楔が打たれ外界に恐怖心を持ちヤマアラシのジレンマの様に薫は自身の感情を持て余している。感情から距離を置いている為に自身の感情を置き去りに物事を思考する。

だからこそ、他者の感情^{ヒト}を理解できない。自分の感情を理解できない者にどうして他者の感情を理解できるというのだ。

自身の能力と他者の能力に疑問を持たない限り、胸に打ちつけられた楔を外せることは決してない。

閉鎖的な世界では自分の価値観しか触れない。他者の価値観に触れない限り薫は譬に首輪をつけられたままである。

最も、薫に着けられているのは首輪みたく生易しいモノではないが……。

薫が自身の心の海に深く沈んでいる最中、サクラは自身の神機をブンブンと振り回していた。大幅に上がった身体能力で遊んでいた。

「ほうほう、これは中々癖になるのう？」

サクラの声に気付き、思考を現実に戻す。

そこには神機を軽々と振り回し、壁を走り回ってはしゃぎ回るサクラが居た。

銃形態、剣形態を器用に切り替え飛びまわる。

同期であるコウタがこの場面を見たら卒倒する事は確かであろう。

何せ神機使い一丁目にして、既に神機を自分の体の延長線上として扱い、その上息切れする事も無く訓練場を全力で走りまわっているのだから。

だが、良くも悪くも教官は薫であつた。

異常な光景を正常と捉え次の指示を出す。閉鎖的な世界の弊害である。自身もそうであつたからこそ、異常を異常と捉えれない。他の神機使いのメデイカルチェックを見てもその練度は見えない。薫が視るのは肉体のポテンシャル、数値だけである。技術は数字ではない。薫が認識しているのはサクラの神機との適合率の高さのみである。

「大分、身体に馴染んできているね。これなら次に行こうかな？
サ、サクラこっち来て下さい！」

壁を走りはしゃぎ回っているサクラを大きな声で呼ぶ。

「ほいほい、呼んだかの？」

訓練場の壁を走るのを止めるとサクラの身体宙に投げだされる身を翻し着地して薫の傍による。

とてもではないが昨日神機使いになつたと思えない、体捌き。

「体力は十分なので次のステップに行きたいと思います。今はショートブレード/バックラー/アサルトを装備していますが、他にもロング、バスターと種類があり、銃にもスナイパー、ブラスト、盾にはシールド、タワーシールドとあります」

指を折り、神機の種類をサクラに伝える。興味深そうにサクラは自分の神機を見つめる。心なしか神機のコアがうねった気がした。

「ほうほう。それで儂にその装備も試せとな？」

サクラは自分の白昼夢はにおいて目の前の薫の説明の続きを要求する。

「現在、サクラが装備している武器は斬撃速度、連射速度、装甲展開速度、各種速度の極めたものです」

薫がサクラの装備について詳しく説明する。ショートの特徴であるアドバンスドステップや現兵装の各種メリットデメリットを。

サクラの装備は手数を主に置いた兵装である。手数で攻め、危険とあらば敵の範囲外へとワンステップで距離を取る。そして隙あらばまた敵の懐へとワンステップで攻め入るのだ。

説明だけでは、簡単に聞こえるがいざ実行となると急に難易度が跳ねあがる。だが、サクラはその領域にすでに達していた。異常も異常だった。

しかし、その事を指摘する人物がいらない為彼らの異常性は助長する。

「他の装備とはどういふのじゃ？」

「ロングはインパルスエッジ 通称IEを搭載していて攻撃的な立ち回りをする人にオススメ装備です。バスターソードはチャージクラッシュといって力をためて攻撃を放つ一撃必殺できる武器です。ただ他の武器と比べて攻撃速度がかなり落ちるので戦術的な立ち回りや周囲の状況を感じ取れる感覚が必要となります」

次から次へと薫に質問を浴びせるサクラ。アラガミの硬さや神機使いの怪我はどの程度までなら任務を続行できるのか？ 様々な質問をし終えた後サクラは一先ず自分の兵装を整える事にした。

「ふむ、ではとりあえず、ロング、アサルト、バックラーで行こうと思うじゃが？」

「はい、分かりました。調整は直ぐに終わるので待って下さいね？」

薫が訓練場を出ていき、サクラは再び壁を走る。

「そにつくと言ったのになった気分じゃな、スピンはできんが？」

台の上に駆け上がり、助走をつけてそこからまた飛ぶ。

新しいおもちゃを手に入れた子供同じような反応でサクラは身体を動かしては考え込む、その繰り返し。

「次は、何をやるのかの？」

ガチャリ、とドアが開く金属音が鳴り響く。

その音に反応してサクラは薫に近寄る。神機の準備が出来たのだ。

「はい、オーダーの物です」

「おお、これがロングというものなんじゃな？！」

サクラは眼をキラキラと輝かせて、早速神機を振り回し始めた。

「先ほど言ったロングの特徴を放ってみましょうか」

「おお？！ 必殺技じゃなっ！！」

「《インパルスエッジ》はロングの銃身から射出されます。剣形態からのオラクル直接射出ですので威力は絶大ですが反動が大きく、多くのスタミナを奪いますので自身の持久力との相談しながら使用してください。では《インパルスエッジ》の使用方法に移ります。まずは剣形態で銃身を相手に向け神機を操作して銃形態のトリガーだけ神機の柄に持つてくようにしてトリガーを引いて下さい」

薫の言葉通りに神機の操作しながらサクラは剣形態でトリガーを取り出しトリガーを引く。すると神機の仕舞っている筈の銃身から近距離爆発が起きた。

「おお！！」

再び目を輝かせるサクラ。それを苦笑しながら見守る薫。今のサクラは過去の薫に重なるのだ。自分もあのように目を輝やかせながら神機を振りまわしていたのだろう。

（これがゲームだったらR+でインパルスエッジと言えるんだけどな）

ゲームでの操作方法の説明を思い出し、苦笑しながら改めて自分が奇妙な存在と理解する。

しばらくたってからはしゃぐサクラに声をかけた。

「特に問題ないみたいです。サクラ、今日はここまでしましょうか」

サクラの神機に触れてから三日。

既にサクラは全てのカリキュラムを消化していた。

その事を告げた。薫の言葉を信じられなかった榊は声を上げる。

「もっもっ？！ 終わったのかい？！」

椅子に座っていた榊はすぐに立ちあがり勢いで椅子を倒してしま
うが、気にも留めずにマジマジと薫の顔を見た。

「はい、全部終わりましたよ？　僕よりも早いですね、ちょっぴり悔しいかも？」

うんうん、と頷きながら薫は再度事実を告げた。ちょっぴりサクラに対抗心を抱く薫を見て榊は思わず、心の中で柄にもなく突っ込んだ。

（違う、着眼点が違うよ薫君。悔しがらんじゃなくて三日でカリキユラムを終わらせた事に……）

ふと、薫の資料を思い出す。

斎藤薫は能力と精神が致命的にまでズレている。

それに気付いたのはアナグラ内に《アラガミ》が侵入してきた時だ。一週間かかると見た書類を三日で終わらせ、さらにはその三日後、オラクル細胞による耐震構造を榊に提出してきたのだ。

書類はまだ良い。問題はその後だった。

間違いなく薫は《アラガミ》の侵入による震動で耐震構造を提案してきたのだろう。聞くと義姉　馨が作ってくれたラーメンのスープが零れたから、今回その提案を提出しに来たのだと言う。

度が過ぎている。

榊が絶句し、薫に洗脳を施した人物に恐怖を抱いた。何が彼らを駆り立てたのだろうか？　薄々榊は気付いていた、馨がその施した人物の一人なのだろうと。

しかし、犯人は複数班である事は薫の精神状況が物語っている。

馨が薫に洗脳を施したのは間違いないだろう。柊は馨を被疑者として扱っていた。

間違いないのだが、決定的な状況的証拠がない。環境がないのだ。いくらアナグラが閉鎖的と言っても薫の精神を閉鎖的にさせるのは監禁と言った状況が必要なのだ。

薫の比較対象を限定もしくは無くす程の監禁的状况が必要になってくる。

薫の自覚の無さというのはそこから来ている。比較対象がいなければ自分の能力が基準となるからだ。世間の基準など知っていれば、気軽ではられない。

今回の件に関してもそうだ。薫は自分の能力というものを知らない。

知らないからこそ起きた事例だ。

監禁ができる環境を作り上げる事ができるのは外部居住区の廃墟ぐらいであろう。

故に柊は馨を問えない。問える事が出来ない。

ましてや、馨は間違はなく薫に対して深い愛情を持っているのだ。彼女行動の節々で理解できる。さり気無い動作の中に薫の身の安

全やメンタルケアを行っている。思う存分に薫に甘えさせているのだ。

榊が自分の推理を疑うほど馨が薫に愛情を注いでいるのが分かるだけに榊を混乱させた。

薫の能力が目当てではない、それは確かだ。

施された年月も合わない。複数犯だが被疑者は一人。

他に疑うべきはリンドウ、ツバキだ。しかし、彼らは神機使い、薫に出会う前から神機使いだったツバキが監禁と言う状況が作れない為、被疑者から外れる。同じくしてリンドウも外れる。

薫の交流は酷く狭い。被疑者を搾りやすい筈だが一向に定まらない。

施された年月を加味すると馨は完全に外れる。元より証拠が無い為、疑わしいだけであるが……榊は馨から目を離せなかった。

「……博士？」

薫の声に意識を呼び戻され榊は目の前の手続きの書類を受け取った。

「ごめん、ごめん。ちょっと吃驚して放心しちゃってたよ。凄いなー彼女」

カラカラ笑い、細い目をさらに細めて言う。

「本当に凄いですよ？ 身体能力がどれだけ上がったか確かめる為に壁を走ってましたもん。すぐにアドバンスステップを把握してたりして……やっぱり《ダミーオウガ》君一人だけじゃ駄目だったので僕の時と同じかそれ以上の《ダミーオウガ》君を出して模擬訓練しました」

茫然、開いた口が塞がらない榊。

ポテンシャルが高いだけの娘だと思ってたのは間違いらしい。着目するべきはその中身にあった。

薫だけだと思っていた。本人の自覚は無いが他者の追隨を許さない程、薫の才能は抜きんでいた。

どの分野でも、無理だろうと思われた薫の能力に追隨できる者が存在した事に茫然とするほかなかった。事実薫はすべての分野で暴力的才能を奮っていた。余りにも暴力的な才能は同年代と同じ環境で過ごさせると未来ある少年少女が潰れる様が目に見えていたからこそ、隔離したのだ。

神機使いとしても薫はその能力を発揮していた。でなければ、研修が一週間も無い状態で件の掃討戦に置いて薫は息絶えている。何百、何千と《アラガミ》を神機で食い千切り屠る様は皮肉にも《アラガミ》を殲滅する為に生まれてきたソーマに重なって見えた。

しかし、その薫を追隨できる者がここ《アナグラ》に現れたのだ。神薙サクラの全ての情報を把握してないが一部分とは言え薫に追隨できる者が現れた。

サクラの存在は榊にとってありがたかった。

何せ薫とタメ張れるのだ。その事実が榊は嬉しく思う、何れは薫の洗脳が解かれ価値観が開放される時薫は能力が故に孤独になるだろうと分かっていた。

その榊の杞憂を消したのは薫から告げられた事実。

サクラは神機使いとして歴代最高のモノを持っている。サクラは世界を知った薫の心の寄る辺になれるだろう。幸いにしてサクラは薫に対して好意的である。

漸く長年悩んでいた問題に一筋の光が見えてきた。

「こりゃ、本当に凄いね。彼女一人で全種アラガミ倒せるようになるかもね」

流石にこれはできないだろうと思っている榊は冗談交じりで言う。いくら薫に匹敵する能力だからといって無理だろうと思っていた。しかし、成し遂げたサクラの事知って驚愕するのはまた別の話である。考えてみれば薫は全種の《アラガミ》を掃討戦で食い千切っていたのだ。冷静に考えれば何れはサクラが出来るだろうと推測できるのは当然の事。余程、当時の自分は薫に匹敵する能力の持ち主が現れたという事に動揺していた事が窺えるなと榊は未来に置いて過去の自分をそう評価した。

「んー、大体半年経てばできるように……成るかな？」

「そうだといいね。ヨハンもリンドウ君もツバキ君もタツミ君もみんなハッピーさ」

最後に数度言葉を交わし薫は次の仕事に取りかかる為、榊の研究室を出た。

「じゃ、僕もそろそろ休憩いれるとかな……ふう、今日は本当に色々と吃驚だよ」

榊は電源入れっぱなしのままその場を去った。

「さて、拾った犬の状況はどうなっている？ まさかとは思うが
飼い主以外に懐いてしまったままではあるまい」

『既に新たな教育プログラムを施しまして、新しく渡された犬の散歩のコースも踏破しました』

「どうやらしっかりと育ててくれているみたいだね。で、現在の状況は？」

『散歩のコースが予想以上の効果を齎したみたいでして、残るは最終調整のみとなります』

「そうか、なら良い。犬は忠実でなければならないからね。うちの老いた犬みたいになっけてくれば困るのだよ」

『……お任せ下さい。異動の時には優秀な忠犬ができ上がっているでしょう』

「ヒトに残された時間は少ないのだ、計画は速やかに為さねばならない」

『ええ、まったくもって……』

第二十喰目 中途現実（後書き）

まずは、遅れて申し訳ありません。

仕事の量が半端ではなく多かったのと時間がなかったのが原因であります。

今回のサブタイトルは思いつかなかったものですので駄洒落になりました。

ちゅうとげんじつ　ちゅうとりある　チュートリアル

はい、面白くもなんともない馬鹿な作者ですね。

次回はなるべく時間を取れるよう頑張ります。

ちょっと見ない間に五十万アクセス突破してましてびっくりです。
総合評価も何か恐ろしい状態になってますし……私は矮小な人間ですよ？

これで私は人生の運を全部使ってしまったかもしれません。

感想、批判、誤字脱字指摘お待ちしております。

以下コメント返しです。

> 馨をヒロインにしてほしい

馨の人気は何が原因だろうと作者は頭を悩ませます。みなさん洗脳されたいのですかね？

第二十一喰目 ヘンカノチテイタイ（前書き）

とある一名がとても爽やかです。

キャラが崩壊しています。

それでも良いって方は短いですが、どうぞ

第二十一喰目 ヘンカノチテイタイ

薫の精神が安定した。

だが事情を知る人間ならば、膠着状態である。と答えるだろう。

事情を知る人間　榊、馨にとって好ましいものではなかった。安定している、と言う言葉はこの場面においては言葉の意味は真逆の意味になり膠着に置き換わる。

事の発端はとある人物の介入により薫の精神は安定期に入ってしまった。

この安定期は事情を知らない他者からすれば良いものであるが、事情を知る両者にとって酷く頭を悩ませるものである。

元々薫の精神は歪んでいる状態なのだ。歪んだ状態で安定してしまえばまずい事になる。榊のにとっての懸念はそれである。しかし、介入により彼女は薫に対しての有効打となりえる事が分かった。

一方の馨はというと、薫の安定は好ましいものではあるが完全に安定してしまえば薫の精神を殺す事になりかねなく、本末転倒になってしまう。

薫へのキーワードは安定して使っているが、文字通り薫の心を奪うには深く掘り下げなければならない。しかし、それを短期間で行うには環境や時間、協力者が足りず行えない。

互いに動こうにも動けない。膠着状態であつた。

長く続くと思われた状況が突如終止符が打たれる。

『斎藤薫のフェンリル本部への異動辞令』の通達がフィンランド本部より届いたのだ。

極東支部 支部長室を包む重い空気。

突如、己の弟子である。斎藤薫の異動を聞き榊は腕を組み低く唸った。

同じ部屋の主、ヨハネスも本部の要請に怪訝に思う。一体何故この時期になつて斎藤薫を呼び出すのか……？

新型神機の開発直後、新型になつた直後であるならば、まだ理解できる。だが、今の薫は何も開発をしていない。いや、神機のパーツ等のパーツ開発をしているが、新型神機程の大規模の開発はしていないのだ。

薫の詳細データは当の昔に送っている。そのお陰で各支部に少しずつではあるが新型適合者が見つかつている。

「ヨハン、見当がつくかい？」

「いや、私にもわからない。本部は一体何を薫君に……？」

「……そうか」

再び、重い空気が漂う。

ヨハネスがここまで悩むのは薫を計画に入れていたからだ。アークに薫とソーマを乗せ全てが破壊され再生した後の地球の為に。

それだけではない、親として不器用なヨハネスはソーマが孤独にさせぬ為の計らいだった。気の置けない友人は何よりも代え難い。

支部長としての業務をこなしている今、それが大層実感できる。

取り入る者、寝首を掻こうとする者、足を引っ張る者、様々な思惑で近づいてくる者たち。

だが、そこに友人が居れば多少なりとも辛くともやっていける。

現に今のソーマは薫やエリックだけにはやわらかい表情を出している。エリックはそうでもないが薫も普段は無表情。外面用の張りつけた笑みではない無邪気に笑う表情を二人には向ける事から気を許している事が窺える。

ソーマに肉親に近い友人が現れたのは実に僥倖。

薫が息子と同種特異な偏食因子所持の神機使いである事もソーマの劣等感を和らげる事も無自覚だが一役買っている。

そして薫は大概事務的に話す、息子や件の御曹司の前では無邪気に子供になるのは三人の中が良好な証だ。

だからこそ、ヨハネスは真剣に本部の狙いを考察しなくてはならない。

脳裏に思い描く人類救済の為の計画を成功させる為に。

（未来に私は居ない……いや、居なくとも……）

そこには息子と息子を支える友人達の輝かしい未来を幻視して目を細めながら己の思考に埋没していく。

うん、訳が分からない。

目の前に広がる光景に逃避しながら薫は心の中で呟いた。

制御ユニットの開発から帰ってきて即座にベッドに眠ったら飛行機の中だった。

一体自分の身に何が起こったのが分からない。

自宅のベッドで寝ていた筈だが、気がつけば広い大空の雲の上という笑うに笑えない状況。

（再度思う。訳が分からない。何で、僕はここに？パイロットは

フェンリルの人だからアブダクションじゃないし……）

薫が表情を変える事なく自身に起きた事を整理しようとする。飛行機が着陸準備を始めた。それに合わせ薫も衝撃に備えしつかりとシートベルトの確認をし衝撃に耐えられるよう体勢を整える。

特に何の問題も無く着陸を終え、薫は一先ず自分以外に乗客がいない飛行機から降りた。

飛行機から降りると顔の左側に火傷を負った傷の女性が出迎える。

「ようこそ、斎藤薫君。フェンリル、フィンランド本部へ」

見る者が凍りつく様な冷たい笑みを浮かべながら薫に相対し手を差し出す。

ここで普通 of 精神を持つ者なら彼女の差し出した手を戸惑うのだが、価値観が致命的にズレている薫は流れるような動作で女性に手を差し出した。

薫の行動に驚きながらも女性は薫を観察する。何せ薫をここフェンリル本部に呼んだのは他でもない彼女だからである。

（ふむ、報告通るか。まるで機械的に人と接しているみたいだなあ。あの榊の弟子と呼ばれているが、胆力がある唯の子供か……）

一通り、薫を観察し人物評価を済ました後改めて薫を見た。

「初めまして、ご存じみたいですが斎藤薫です。よろしく願います」

「ああ、初めまして。私の名前はアドルフイーネ・ビューラーだ。榊博士と同じ職に就いている……フェンリル本部の……君と同じように研究班に所属している」

女性 アドルフィーネは一息吸い、

「君には少しの間、ここフェンリル本部の研究班に所属してもらう。同じ班同士仲良くこうじゃないか」

冷たい笑みを再び浮かべた。

「はい、よろしく願います」

その笑みを見ても薫は動じず、ただ機械的、事務的に言葉を返した。

（やはり、機械的。漂う雰囲気も凡人と変わらない、あの榊が弟子を取った。その優秀さを利用し救世主計画の足しにしようと思っていたが、これは飛んだ無駄骨だったようだ。さつさと特異な偏食因子だけデータを取らせてもらうか）

「やあ、薫君。これを見てくれたまえ……アレ？」

赤髪に特徴的なタトゥーを身体に施した少年 エリックが誰も居ない薫の資料室に飛び込み薫に話しようと思っていたが当の本人がいない。

部屋に入りソファーの下に視線を向け薫を探そうとすると、エリックに声が掛る。

「……薫なら本部に呼ばれフィンランドへ向かった」

フード被った少年 ソーマがエリックを呆れた目で見ながら薫の居場所を伝えた。

「えっ？ 何で？」

「知らん。本部が直接呼んだらしい」

「せっかく、新作のゲームを持ってきたんだが……三人でやりたかった」

「……フツ薫が来るまでお預けだな」

「まあ、良しとしよう。ソーマ今日の任務は一緒だったね。確か例の新人君だっけ？」

「そうだったな。だが、これだけは言っとく。戦闘中のセリフ。アしをどうにかしろ。鬱陶しい」

ソーマが苦虫を噛み潰した顔をしてエリックに言う。

「いくら、ソーマの頼みでもそれは聞けないね。あれは僕のアイデンティティだよ！」

言われた本人 エリックは爽やかにソーマに返した。

「……ちっ」

余りにも自己同一性と云う言葉のエリックの返しがしつくり来た
ソーマは舌打ちしてその場を離れる。

「おい、ソーマ！ 置いてくなんて酷いじゃないか。僕たち親友
だろ？」

「……ハッ」

鼻で笑い。ソーマは少し早目の速度で整備室へ向かった。

「相変わらず、ソーマは照れ屋だね。これが薫の言っていたツン
デレは何度見ても面白いよ」

エリックはソーマを微笑ましそうに見る。鼻で笑われたエリック。
しかし、特に気にした様子もない。

三人が出会って二年。それ以来、エリックたちはずっと付き合っ
て来て親友と呼べる程の仲になった。

色モノ扱いを受けているエリックたちだが、それに関して何も思
う事はない。

薫にしろ、ソーマにしろ、エリックにしろ、自分たちは友達なの
だ。

能力がどうであれ、出自がどうであれ、家柄がどうであれ、それ
らとは関係のないただの個人として付き合っている。

エリックは思い出に浸りながら照れた親友を追いかけた。

第二十一喰目 ヘンカノチタイタイ（後書き）

どうも、遅くなりました。モンテス級です。

漸く、バイトと言う名の仕事から復帰できました。

これで、通常運営が出来るかと思います。

これで気ままに更新できると思うと胸が熱くなります。

さてさて、前書きで書いたように若干一名が眩しいですね。

はい、エリック君です。書いている内にナルシストキャラがいつの間にか爽やかキャラになっていたと言う……。

今回の話しの変化部分ですが……皆さん覚えているでしょうか？

アドルフイーネ博士

本当にちよろつとしか出てない彼女を出しました。

多分、GEの小説の中で彼女を出したのは私が一番に違いない。
いや、わからないけども……。

さてさて、話を戻しまして彼女ですが、読んでの通りですね。

彼女の身には狂気が宿っています。

しかし、狂気は薫にとって身近なモノなんですよね。

身近な狂気とはいえば……？

おっと誰かきたy（ry

以下コメント返します。

> 自分も馨さんがヒロインでいいんじゃない？ と思いました。個別エンドがあってもいいと思うとても面白かったです

安定の馨コメント率。作者は訳が分からな過ぎて言葉を失うばかりです。

個別エンドというあれですか？ ヒロイン別にと？

皆さんのご意見、感想、批判お待ちしております。

第二十二 喰目 コワレタモノ（前書き）

友人「もうかりまつか？」

私「ぼちぼちでんなー」

第二十二喰目 コワレタモノ

サクラが今回の任務 鉄塔の森に着くと既に二人の少年が待っていた。その内一人がサクラに近づく。

「やあ、君が例の新人君かい？ 噂は聞いているよ。僕はエリック・デア」フォーゲルヴァイデ」

腕を指揮する様に上下左右動かし髪を梳かしながら自己紹介。

「君も精々僕を見習って、人類の為に華麗に戦ってくれたまえよ？」

「エリック！ 上だ！」

エリックは身を翻し、上から降ってきたオウガテイルを避け、

鈍い音を立てて銃身《20型ガット銃》を構え《アラガミ》に照準を合わせる。

「華麗なるエリックシュートっ！」

何処が華麗なのかサクラは疑問に思うが、エリックから離れるサクラ。

身を翻し体勢を整えたエリックは放射バレットを《オウガテイル》に放ち、《オウガテイル》はそのまま沈んだ。

「ようこそ、糞つたれの職場へ、こんな事は日常茶飯事だ。ここに来たら何時でも何処でも襲われる」

「ふっ華麗だ」

ちゃっかり、後ろに避けていたサクラは二人を見て言う。

「お主ら、濃ゆいな……」

「なっ」

「華麗と言ってくれたまえっ！」

サクラの言葉にソーマ絶句し、エリックは憤慨した。

（厨二病とナルシストか。この職場は本当に濃ゆいのう）

薫がフィンランド本部 アドルフィーネに召集され既に三日。

たった三日だが薫が周囲の認識を変えるのに十分な時間だった。

当初は極東支部から召集された十五歳の少年に対して本部の人間は何の関心も持てなかったが、この三日で関心を持たざるを得なかった。

ただの特異な偏食因子を持つ凡庸な少年から榊の弟子と言う肩書を領くようになっていた。

雰囲気は平凡そのものただ事務的に仕事をこなす様はお世辞にも天才少年とは言えない。精々、多少は仕事が出来る少年。というのが薫の評価である。

しかし、書類仕事を終えた後の実験。神機のパーツの開発速度、

柔軟な発想力、単純な演算能力、カリスマ性を見せつけると評価は途端に変わった。

誰もが無視していた極東支部の少年は『流石、ペイラー博士の弟子』と称賛されるようになる。

本部の人間は分かっていた。こう口にでもしないと今まで積み上げてきたモノが崩される気がしてならなかった。

『榊の弟子だから敵わない』

『あの博士の弟子だからな……』

関わった人間は次々とそう口にする。感染する様に薫に関わった人間は言う。

もはや、止められない。

圧倒的に違う。その様をむざむざと間近で見せられ心が折れそうになる。

暴力的なまでの有能さを持ちそのカリスマ性で惹きつけられる。心を保つために自身を薫の下に置く事であたかも自身が大きくなった事を評価する。自分の誇りを守る為に必要以上に薫に対して敵意を持ち誇りを保つ。

自分はあの薫バケモノの部下なのだ。

自分はあのバケモノである薫に近づけるのだ。

自分は凄いのだ。

ただの子供じゃないか何が神の弟子だ。

気味の悪い餓鬼だ、流石極東から来るだけはあるな猿め。

まるで、甘美な悪夢。

どちらに転んでも破滅しかない選択肢。

このまま何も考えず堕ちてしまいたい、大多数の人間が薫に対して呪詛に似た感情を抱いている中、一人だけ綺麗に嗤った人物が居た。

(ハツハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！面白
い、面白い、実に面白いじゃないかっ！！！！！！！！)

自室で狂氣の笑みを浮かべるアドルフ・イーネ。

深淵に引きずり込まれそんな笑みを浮かべながら過去の自身に叱咤する。

（私も見る目がなかったようだ……、いやいや、参った。アレは確かに榊の弟子だ、アレは紛うこと無き本物の天才だ……）

くつくくつと嗤い声を洩らし、諦めていた救世主メシアを作り出せる
と心の中で歓喜した。

「何よりも興味深いのはアレの精神……一体誰に歪められた？ あれ程綺麗な歪み方は初めて見たぞ？」 寄って集って楔を施している

とは……私も他人の事はとやかく言えんが実に狂気じみているなっ
！」

自身の同類を薫を通して見れた無意識にアドルフィーネは舌舐め
ずりする。

「さて、アレがこの場所にいる時間はあと一週間……有効活用する
べきだな」

アドルフィーネ・ビューラー。

ペイラー榊博士に並ぶ狂気を宿す『北の賢者』と呼ばれる人物。

救世主^{メシア}を創ったその人である。

2

まただ。

この感覚は前と同じだ。

研究室に入った途端に薫はピクツと表情を少し悲しそうに目じりを潤ませた。

ヒソヒソと話し声。突き刺さる二つの視線、羨望と嫉妬。

この状況は正しく薫の前世と同じ状況だった。

ある程度は自分の対人関係が良くなったとでも思っていた薫は下唇を噛み締めた。

（ただ、仕事をしただけじゃないか……何で皆そんな目で僕を見るの？）

ピシッ

ナニカに罫が入る。

感情が重くなった……。

薫は無意識の中、重荷になった感情を自身から遠ざけ今回の仕事に取り掛かろうとしたが、薫に近づいたアドルフィーネが作業を中断させた。

「ああ、薫君。今日の午後は神機パーツの開発辞めてもらっていいか？ 以前取った『P-63 偏食因子』のデータについて色々聞

きたい事がある」

その言葉を聞いて薫は作業を中断しアドルフイーネについていく。

場所は変わってアドルフイーネの研究室。

両者 薫とアドルフイーネは白衣を着たまま机を挟んで向かい合っていた。

机の上には両者の前に温かいコーヒーが置いてあったが、両者に流れる空気は反対に酷く冷たい。

最初は仕事の進み具合を互いに聞き問題点を指摘し合った後、互いに一口コーヒーを口に含み、飲む。

数秒置いてアドルフイーネが口を開いた。

「さて、本題に入ろうか。今回聞きたいのは他でもない。かの有名なマーナガラム計画の偏食因子にも並ぶ、特異な偏食因子 『P-63 偏食因子』 については君自身の事だ」

アドルフイーネが目をつけているのはかの掃討戦において斎藤薫の戦闘方法であった。

以前目を通した資料 マーナガラムの被験者の子 ソーマ・シクザールと目の前の症例を見てみると彼女にとって無視できない共通点があった。

アラガミに対する優位性。

ソーマと薫はアラガミに対しては絶対的と言っていい程、アラガミに対して優位に立てるのだ。

人間は『P-53 偏食因子』を投与して自らをアラガミに近づけ、神機を持つ事で漸くアラガミと対等な関係に至るのだ。

しかし、現在確認されている。この二つの偏食因子は違う。

その偏食因子を持っているだけアラガミに優位なのだ。

ソーマの特異な偏食因子が持つ多種多様な圧倒するオラクルエネルギー、その膂力。

薫の特異な偏食因子が持つ多種多様なアラガミに適応するオラクルエネルギー、その対応力。

この両者をアドルフィーネは自身の 救世主計画メシアの被検体に入りたいと何度思った事が……。

実際アドルフィーネは両者とも計画に入れようとしていた。

だが、ヨハネスがその行動を許す筈がない。様々なアプローチをアドルフィーネは掛けたがヨハネスはそれら目的を見抜き全て一蹴した。

アドルフィーネも他者の上に立つ存在ではあるが、ヨハネスの前では路傍の小石同然である。

確かにアドルフィーネの計画は世界に多少の変化を齎す。

だが、あくまで多少に過ぎない。

ヨハネスの計画は違う。

世界を文字通り再起動させるのだ。世界全てに変化を齎す計画をおくびにも出さずに虎視眈眈をその時を待っている。

ヨハネスは役者が違っていた。

今回は違う。アドルフ・フィーネは自身の欲する特異な偏食因子の片割れをそばに寄せる機会に恵まれた。

名目は新型神機使いの能力向上の研究について薫を呼び寄せる事に成功した。

もし、ここでヨハネスが断ろうものならヨハネスに監視が着き喰^{ディバ}神教の疑いが掛けられ計画通りに動けなくなっていた。しかし、ヨハネスはそう簡単に薫を渡さずアドルフ・フィーネに監視をつけたのだ。

一方のフェンリル本部もヨハネスの意見に賛成し貴重な人材をアドルフ・フィーネの救世主計画に組み込むのに猛反発を出したが、データーだけなら特に何も言われない、アドルフ・フィーネは計画を惜しみながら薫を研究者として本部に呼べた。

少々、監視の視線が鬱陶しいがアドルフ・フィーネは現状に満足していた。

そして、その存在が目の前にいる。

（この両者こそが私の理想とする全てを喰らう救世主の姿だっ！！

!!!!!!!!!!)

アドルフ・フィーネは嗤いが堪え切れない。

「くくく、じゃあ聞こうか。君が戦場に出たのは掃討戦の時一回のみだな？」

薫は何も言わずただ頷く。

「ふむ、そうか。しかし、この間のことたデータと掃討戦のデータでいくつか違う所がある。君の成長期と言ってしまえばそこで済むが君の場合まだ迎えていないだろう？ この差異について心当たりがあるなら教えてくれ」

当然ながら薫には心当たりがある。

神機使いになってから全ての感覚が鋭くなったが、ナデシコの存在、神機達の意味が感じ取れる様になってから感覚がさらに鋭敏になっているのだ。

「多分、オラクル細胞がより馴染んだと思います」

「ほう、これまた……では一体何をして馴染んだか分かるか？」

興味深い回答を繰り出した薫にアドルフ・フィーネは前へ乗り出した。

「原因は分かりません……しかし、ある時から急激に新陳代謝が良くなり、神機の意味を確認できました」

待て、ナンダソレハ。

アドルフ・イーネは目の前の少年が口にした言葉をそのまま鵜呑みに出来なかった。

「それからでしょうか？ 食欲がかなり結構増えたのは……副次的に作業も良くなった気がします」

言葉が良い終わると同時に目の前の少年の目が無機質なモノへと変わった。

ここに来て薫の癖が出た。

作業と言ってから自分の今の環境を思い出してしまった。

（前世の自分と今の自分何も……何も変わらないじゃないか……結局、僕は友達に甘えてただけだね……っ?!）

突如、脳裏に映った。友達が自分を囲ってナニカしている様子。

しかし、薫の記憶にはそんな記憶に心当たりがない。

再び思考し始めた薫の無機質な目が人間のソレと戻った。

（……しまった、今はアドルフ・イーネ博士との会話中だった）

「すみません。少し考え事をしてしまって……」

「ああ、気にする事ないさ。これは私たち研究者の癖だから……君も疲れているだろうし、詳しい話しはまた後日にしようか」

アドルフィーネは薫を残して部屋を足早に出た。

(……ちっ、アレの目は流石の私でもキツイ)

吐き捨てるようアドルフィーネは心の中で毒づいた。

アドルフィーネの言う、後日は訪れることなく、薫は極東支部へと帰る事になった。

第二十二喰目 コワレタモノ（後書き）

どうも、モンテス級です。

斎藤薫で愛人メーカーやってみたら爆笑しました。

XXX系らしいです。当たっているなあ（笑）

気になる方は是非やってみてください。

ちなみにモンテス級でやってみたら……？

これは作者ではなく作品だったら実に嬉しいですね（笑）

まずは、一言。エリックおめでとう。生き残れたね。

タイトルあれですが……コワレタモノ分かりました？

態と漢字にしなかったのはあれですねふいんき（なぜか変換できない）です。

と冗談は置いて

今回の話は壊れた物と乞われた者です。

ですから、コワレタモノですね。

最初に壊れたのは御存知の通りエリックの死亡フラグですね。

次に乞われた者は薫君自身です。

最後に壊れたのは……………記憶です。

大事な事だから二度言います。エリック生存おめでとう！
やったね！！

以下拍手返信

>これからもがんばってください。

その言葉だけでご飯三杯行けます。ありがたや、ありがたや。

第二十三喰目 首輪の犬（前書き）

神話から続くリア充の日だよ！

爆発すればいいのになっ！

第二十三喰目 首輪の犬

洗脳

それは、その人物の本来の人格を崩す。その手法のことである。

マインドコントロール

それは、その人物に対し幼少期から偏った情報を与え成長を固定

するものである。

極東支部には奇遇にも似た境遇の人物が二人居た。

一人は技術開発班の修士。

一人はロシアより来た新人、新型神機使い。

技術開発班の修士が本部より帰ってきた時　それは起きた。

ロシアより来た少女　アリサ・イリーニチナ・アミエーラはイラついていた。

この極東支部の平和ボケた雰囲気^{フキ}に当てられ神経が逆撫でされている気分になるのだ。

今も世界はアラガミによる被害を受けているのだ。何故呑気していられる？

極東支部の神機使いに対してアリサはイラつく。

何よりもイラついたのは目の前の少年にである。

綺麗な銀色の髪に黒と赤のバンダナを着け、夕日を想わせる紅^{ベにいろ}色の瞳。

感情と言う感情が抜け落ちた表情で淡々とアリサにメディカルチェックの結果を言う様は実に有能なイメージを抱かせる。

事実、有能なのだろう。アリサはそう判断した。

だが、アリサは目の前の少年に無性に苛立った。

「

（特に異常は見当たらないので問題ないですね）」

「
ありがとう

……

」

目の前の少年はアリサに状態を告げ、アリサが礼を言い終わると同時にその場から去った。

これまで、アリサと少年の会話はすべてアリサの母国語で会話されておりました。アリサにとって好感を抱かせるものであった。

アリサは自分と同じ年の少年。薫を一目見た印象は拭い切れない嫌悪感と恐怖が沸き起こったのだ。

実際に薫はアリサに対して何も思う所もない、別段と言って何もしていない。

むしろ、薫の行動は褒められたものだろう。アリサ本人に対する丁寧な対応は非が無い。

ロシアより異動したアリサに薫は戸惑いもなくロシア語で挨拶。神機に対する深い知識と本人に合わせた調整。

《アラガミ》が憎い彼女はその対応は実に嬉しいものである。多くの神を屠る事が出来る文句はない。

しかし、アリサは薫の事を好きになれそうではなかった。

しばらく医務室の外で佇んでいたアリサは途中で迎えに来たオオグルマに連れられ訓練場に向かった。

アリサは薫の昏い昏い紅い瞳を忘れようとナニカに取り憑かれたように演習をこなす。

少女の身体は未だに震えていた。

馨と柊は其々動揺していた。

フエンリル本部より帰ってきた薫の精神が非常にまずい事態になっている。

今まで、上手く行き過ぎていた。だからこそ、今回は薫の精神に致命的な動揺を与えてしまった。

柊は考える。恐らく、薫の精神を乱したのは人間関係……嫉妬や羨望の感情だろう。

元より柊や薫のニアグラムは思考中枢を好んで使うが感情中枢が隣接している為感情中枢も使えるのだ。が、感情中枢を使うと感情が乱されるので余り使わないだけだ。

薫の能力の高さは他者の感情の機微を察知できる程高い。今回は薫の自身の能力の高さが仇になる。

大勢から薫へと押し寄せる感情に精神が未熟な薫は耐え切れず感情を思考から切り離してしまった。

馨は家に帰ってきた薫を見て酷く動揺する。

良い意味でも悪い意味でも安定していた薫の精神が明らかに不安

定になっているのだ。

ここまでの動揺は今まで一度もなかった。

……馨は思い出す、この状態は前回に一度だけ見た事。

薫が学校を辞めるその時の精神。その精神状態に近い。

恐らくは薫の呪いとも言える求心力に酔ったのだろう。と馨は推察した

「身の程を弁えない人間が薫に近づこうとするからだ」

馨は自身の膝に頭寝かせている薫を撫でる。

薫は切り離れた感情を馨によって再び繋ぎ直した。

薫にとって馨は感情の落とし所だった。切り離れた感情を取り戻しても動揺しない居場所。

安らかに眠っている薫を見て馨は思った。

（今回は私の勝ちだ博士。……薫は譲れないさ、誰にもな）

熱い感情を唇に乗せて薫の頬に落とす。

「……何よりも愛しい、私の薫」

医務室。

その場所にオオグルマは居た。医務室のベッドには新型神機使用の少女が眠っている。

ふと、オオグルマは思う。

今回の暗示は非常に効きづらかった。思い当るのはバンダナの少年だけだ。

オオグルマは携帯電話を取り出しヨハネスに掛ける。

数回電子音が鳴り響いた後にヨハネスは出た。

「お忙しい所、申し訳ありません。ちょっとお聞きしたい事が……」

「なんだ？ 老いた犬が煩わしいのか？」

「い、いえ、その事ではなく。とある少年についてお聞きしたいのですが……」

オオグルマより少年と口にした瞬間ヨハネスの脳裏には唯一人しか思い浮かばない。と言うよりそれ以外にいないだろう。

「メディカルチェック担当の少年だな？」

「はい、その少年ですが……新しい犬に影響を与えているのです。できれば少年の情報を頂ければと思ひまして」

ふむ……薫君が影響を与えていたのか、と心の中で思い。影響を与えただろう要素をオオグルマに告げる。

「その少年だが、斎藤薫と言って最初の新型神機使いだ。恐らく影響を与えているのは愚息と同様な特異な偏食因子あたりだろうか、何せ新型だ分らない方が多い……」

「はあ、あの少年がですか……」

あっさり情報を開示するヨハネス。元より薫については隠している訳ではなかった。

オオグルマは少々拍子抜けした様子で返事を返した。

が、次のヨハネスの言葉で引き締められた。

『斎藤薫についての資料は後日榊博士に伝えておく彼から貰いたまえ……不確定要素もあるがそれ込みで賡けてもらわないとね。予想外の事でした、では済まないからね』

「はっ 勿論です」

第二十三喰目 首輪の犬（後書き）

前世

七月七日、そう七夕の日である。

来年はもう十七才になるのに薫は七夕の短冊に願い事を書いて
いた。

『友達が出来ますように……』

登場人物紹介の巻

斎藤薫：

この物語りの主人公。オリ主にあるまじき名前の平凡さは決して作者が名前を考えるのが面倒だからではない。

所謂天才少年で暴力的な才能は他者を押し潰すほど……。

正に作って歌って踊って描ける万能型。しかし、社会負適合者。洗脳されているが認識出来ない為本人は普通に過ごしている。結構無表情でいるが、中身はネタも詰まっている自称一般人。これも洗脳の効果？ 無自覚なカリスマで相手惹きつける為、意外にやっかない奴でもある。別名ヤンデレホイホイ。逸般人。

ペイラー榊：

第二主人公とも言える人物。賢者と言われるだけあって彼は凄く頭がいい。が、努力の方向音痴なのでその能力を間違った方向に使う。例をあげるなら初恋ジューズ。雛鳥である薫を育てる事に新しい観察視点を見出した。今日も彼は弟子の為に併走して対人関係を教える。

ソーマ・シツクザール：

薫とエリックの親友。前回のヒロイン投票に選択肢を追加されるあたり彼の人気が見える。原作では自身の生まれがコンプレックスだったが薫も同じだと知りコンプレックスが解消される。『みんな

なで渡れば怖くない赤信号』な心境である。単純な戦闘能力ならリンドウを超す。主人公が似合うだけある。短編ではヒロインとして活躍し万能な子と判明。好きな物に初恋ジューズ『失敗作』が挙げられる。

エリック・デア「フォーゲルバイデ」:

一言で言えば憎めないナルシスト。彼は良くも悪くもゴツドイーターにおけるネタキャラとして重宝されている。原作ではたった二十秒弱しか出ていないにも関わらず、プレイヤーに与えた影響はでかい。後にバーストではスタッフの暴s(ryスタッフの心温まる提案で特典キャラが追加されムービーが彼に差し替えられる程愛されているキャラ。この作品でも例外なく彼を重宝している。

斎藤馨:

こちらも薫と同じく天才。その上美女である。前世の幼少期から薫を既に狙っており、血が繋がってなければ、すぐにでも事を起こしそうだった。もうすぐクリスマス過ぎてしまいが本人は薫さえいれば良いので何もしない。洗脳を施す程ヤンデレでなければ一番の安全圏ではある。彼女のキャッチフレーズは『綺麗なお姉さんに身を任せませんか?』

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ:

御存知、正統派ヒロイン。髪の色や好きな色まで薫と類似している。天然のペア。薫に恐怖を抱きながらも礼は言う。ツンデレな人ちゃっかり、洗脳という環境まで薫と一緒になので苦難を乗り越えたら一番のペアとして良いかもしれない。お互いが理解しているが為

に……おしどりのなんたら関係になりそう。

楠リツカ：

整備士仲間つながり薫と出会う。年齢は二歳上だが学年としては一個上。整備士としては薫が先輩。彼女の性格は亡き父の血を色濃く継いでいる。主に性格面で気軽に薫について行ける辺り彼女は親友感覚でも恋愛に持ちこめる。

竹田ヒバリ：

大森タツミが一目惚れした人。が、薫が幼児期に不格好ながらも彼女にとってヒーローになった為、彼女の視界にはタツミは入る事はないだろう。幼少期におけるインパクトのある出会いはある意味洗脳と同義だろうか？ 彼女と恋仲になるともれなく花が咲く様な笑顔でおかえりっと言ってくれるに違いない。そして一人漢が泣くだろう。

神薙サクラ：

ロリババアそれがしつくりくる人。神機使いとしては人外の性能を持ちチュートリアルというチュートリアルをスルーし実践に出た。良くも悪くも何気に薫が一番気になっている人でもある。自称常識人。だが、壁を走る。チート少女、一般の偏食因子だが薫やソーマに迫るほど適合率が高い御仁。極東支部はキャラが濃いと言っているがそれは自分も入る事を彼女は気付かない。恋愛を絡めせると薫とはジジババみたいな関係になりそうである。居て当たり前的な……。

台場カノン：

通称誤射姫。観賞用。バーストより急に人気が跳ねあがった人である。彼女の見た目に釣られ始めてミツシヨンに連れて行った時の衝撃は忘れない程インパクトがある。射線上に立つなって私言わなかったつけ？ 聞いてません！ 薫に対する印象は頭を下げたくなる男の子。二重人格的を考慮すれば賢母はともかくそれなり優しい母になり良妻にはなるだろう。

雨宮ツバキ：

薫があつた最初の原作キャラ。原作より少し若い。薫を手の掛る弟その二号と認識しており、容赦なく薫を怒るあたり義姉の譬よりしっかり保護者をしている。薫の第二の義姉。ちゃっかり薫の義姉の位置に付いている辺り油断ならない。最も譬はその事実気付いているがツバキならいいかと思っている。極東支部 叱られたい人No.1に輝いた成績を持つ。

雨宮リンドウ：

薫とソーマの頼れる兄貴。薫とソーマは否定しているが、二人は親鳥についていく雛鳥の図そのまんまである。また、直感的に薫の能力の高さに気付いた最初の人物である。現在はその直感力の高さにヨハネスに目をつけられ死亡フラグが立ってしまった。好物は任務後薫の入れたコーヒ一杯。

ヨハネス・フォン・シックザール：

極東支部の支部長。もしくは宣伝部長。アーク計画を遂行する為に多少の犠牲を厭わない人。その犠牲には自分も含まれており他者にも自分にも厳しい人物である。仕事上では理想的な人物だが、その反面家族に関しては非常に不器用な人物である。息子ソーマには目に見える所では厳しくしているが、見えない所では泣きながらソーマの一つ一つの行動を亡き妻アイーシャに報告する面も……。本編には直接書いてないがソーマの成長記録なるものがヨハネスの部屋に厳重に保管されている。

レン：

神機の妖精。何気に薫を捕喰から救った人物でもある。容姿はどちらなのか分からない程中性的。色々薫に話しかけているがコミュニケーションがない薫はただ頷くだけである。それでも話しかける辺り神機使いの話し相手が欲しかったかも知れない。また彼女は周りからは見えない為薫が幽霊と話しているとみられる。似た様なものだが……。薫に好き勝手に身体を弄られている。こういうと卑猥に聞こえるが断じてそんな事はない、あくまで神機であるレンを弄ったのである。が、彼女はそんな事関係ないようだ。人間と神機の価値観の差だろうか？

ナデシコ：

こちら神機の妖精。薫の相棒である。結構燃費が悪い為、食事が少ないと捕喰形態になって薫に甘噛みする可愛い奴。アラガミ千

匹喰ったらって喋れるようになった。どこの沙悟浄だろうか。名前は花にちなんで花の名前に……花言葉は『いつも私を愛して、純愛、思慕、お見舞い、慕う気持ち、快活、女性の愛』理離刈る魔除刈るのインテリジエントデバイスに似たナニカ存在。

大森タツミ：

頼れる兄貴。ゲームでは無難に彼を連れて行った人もいるだろう。まあ、大抵はアリサやカノン等女性キャラやアバターで埋まってしまうが……。この作中ではタツミさんはかなり優秀な人物である。入って一年で隊長に任命されるほど。現在一人少女に心を奪われているが脈という脈すらない。漢とは彼の為にある言葉だろう。相棒の神機は切れ味他と一味違う事から彼に対する熱い信頼が窺える。

アドルフイーネ・ビューラー：

ゴッドイーター本編ではなく『救世主の帰還』というゴットイーターの漫画出てくる人物。榊と並んで北の賢者と呼ばれるほど賢い。身に宿す狂気が故に様々な実験を行ってきた。遺体を研究材料と認識するほど道徳に真っ向から対峙している。

登場人物紹介の巻き（後書き）

ヒロイン投票をしています。よろしければどうぞ！

現在はアリサが圧倒的優勢ですね。

（一級建築士資格修得）についてですが……

必要ないと思いましたが複数ヒロイン票です。

前回複数ヒロインの希望が多かったみたいなので追加しておきました。

期限は一ヶ月、さてさてどうなる事やら……。

第二十四喰目 廃スペース（前書き）

タイトル通りです。

儂TUEEEEEEE

第二十四喰目 廃スベック

物心ついた時、僕の見える世界は広いと錯覚した。

子供の頃の記憶だけど今でも覚えている。その時は世界は広かつ

たのだと。

目に映る様々な物が眩しかった。実際に手に取って楽しむ。知らない人を見ると付いて行ってまだ見てない世界をみるのが楽しかった。

知識が増える。知っている事が増える。僕の知識は増えるだけ幸せいっぱいになった。

それだけ世界を知って世界を冒険したのだから。

知らないモノを知る。数字を見るだけで、身体を動かすのが楽しい。音楽を聞いて、真似して弾くそれが楽しかった。

雪が積もる中、自分が一番最初に足を踏み入れるような感覚。それを味わうのが子供の頃楽しかった。

だけど、年を経るにつれて世界が狭く感じた。

身体が大きくなっただけじゃない。本当に世界が狭く感じたのだ。

知識が増えれば増える程に世界が狭くなる。

それだけじゃない、冒険する度に僕に向けられる感情が分からないのだ。

知りたかった、ずっとしりたかった。

だけど、分からない。知ろうとする度に襲いかかる負の感情の嵐。

だから僕は冒険をやめた。世界は知^{そと}っているもので溢れている。感情に溺れるくらいならやめた。

自分の世界を作^{つて}外の世界に溢れる感情に自身を晒さない為、外に出なくなった。

……外は怖いもので溢れている。

いつからだろうか？ 僕の記憶が時折途切れ始めたのは……。

普通に過ごしていたら記憶が途切れる。フィルムを切り落としたようにその先が分からないのだ。

医者に行こうと思ったけども……何故か行く気になれない。

もしかしたら身体が行かなくても大丈夫と判断してるのかもしれない。

記憶が途切れるのは怖い。その時の記憶が一切無いのだから。

ピアノを弾こうとしてたのにいつのまにか友達部屋に居る。友達達は記憶のない僕を気遣いながら遊ぶ。

学校から帰る途中なのにいつの間にかお姉ちゃんの部屋で寝てた。

皆、僕を気遣^{つて}記憶がなかった時みんな助けてくれる。

みんな笑顔で助けてくれて、迷惑なんかじゃないって分かったの

は僥倖。

最近、違和感に気付いた。

はたして、それは錯覚だったのだろうか、と。 何故、その判断を下したのだ、と。

本当に世界は狭かったのか？ その判断は本当に正しかったのか？
行き成り表れた違和感に混乱する。

原因は何なんだ。

思い出そうとすると鋭い頭痛が襲いかかる。

訳が分からない。

ただ、奥歯を噛み締め襲いかかる痛みに耐える事しか僕に出来る術はなかった。

心と頭の悲鳴を聞きながら強く強く奥歯を噛み締める。

1

任務名『グリーンサラブレット』

シユウ二体。それがリンドウが請け負った今回の任務の討伐対象だった。

「姉上にも言ったが、何でレアものの新型が三人もこの支部にいるのかねえ？」

一人寂しく空を見上げ気分を切り替えようとするがどうも気分が浮かない。

「……コーヒー。……薫忙しいからなあ。こつもデートばっかだと心が休まらないな」

ぼんやりと地面に視線を落とし新型二人を待つ。

リンドウは再び空を見上げ先日ロシアより赴任してきた三人目の新型を思い出す。

「聞いた？ 『新型』がまた配属されるって」

「あ、それ薫君から聞いたよ。ここに来て『新型』ラッシュだね」

「ロシア支部から支部長が連れてきたらしいね」

「あ、噂をすればかな……」

リツカがエントランスの奥に目を向けるとツバキが一步前に出て言葉を発した。

「紹介するぞ、今日からお前たちの仲間になる新型の適合者だ」

「初めまして、アリサ・イリーニチナ・アミエーラと申します。本日一二〇〇付けでロシア支部から、こちらの支部に配属になりました。よろしくお願いします」

「女の子ならいつでも大歓迎だよ！」

新しく配属された少女　アリサを見てコウタは少し興奮して喋るが、アリサの言葉に凍りついた。

「よく、そんな浮ついた考えでここまで生きながらえてきましたね

……」

「……へ？」

「彼女は実戦経験こそ少ないが演習では抜群の成績を残している……」

チラッとサクラに視線を向けるがサクラは向けられた意味が分からない。頭上に疑問を浮かべるように首を傾げた。

（はて？ なんじゃろうか？）

「追い抜かれぬよう精進するんだな……」

「……了解です」

顔を引き攣らせながら何とかツバキに答える。その答え方に特に何も思うわけでもなく、続いてアリサに視線を合わせた。

「アリサは以後リンドウに付いて行動するように、いいな？」

「了解しました」

「リンドウ、資料等の引き継ぎがあるのでこの後私と来るように。そのほかの者は持ち場に戻れ、以上だ」

そう言うリンドウはツバキと共にエントランスから去った。

「ね、ねえ君。ロシアから来たんだって？ あそこってすげえ寒いんだよ。あつても最近は異常気象で温度が高くなつたきたいって たっけ……」

エレベーター内。

ツバキとリンドウは薫の研究室へ向かっていた。

「期待の新人ですねえ……レアモノの新型が三つも揃ってる支部ははここくらいじゃないですかね？」

「ああ、そうだな。だが、薫は使えんぞ？ 忌々しいが本部は薫を

ソーマのスペアと考えているみたいだ。実戦に出ているソーマとは違って研究職だからな。大方、大事に研究したいのだろうよ。アラガミ装甲壁の上位互換である存在を。それに、新型の偏食因子は薫を参考にして新型神機が作られている。本部は掃討戦で活躍した新型に期待しているみたいだ。今後は新型の適合者発掘が優先されるらしい。」

リンドウはその言葉に大きく頷く自身それはかねがね思っていたようだ。

「……ただ、今回配属された彼女の場合、適合はしているものの若干精神的に不安定なようだな。定期的に主治医によるメンタルケアプログラムが組まれているようだ……まあ、とにかく注意を払ってやってくれ」

「了解です姉上」

「リンドウ、二度とここで姉上と呼ぶな……いいな？」

ツバキに叱られボリボリと頭を掻いた。

ザッザッザッ連続して砂利を踏みしめる音が近づいてくると、リンドウは回想に耽るのを止めもうじき来る新型二人に意識を移した。

「今日は新型二人とお仕事だな。……足を引っ張らないように気をつけるんで、よろしく頼むわ」

チラリ、とサクラに目を向けるリンドウ。

（こいつの場合は本当に近々足を引つ張る事になりかねないからなあ）

（なんじゃ？ 最近視線をよう受けるのう……）

「旧型は旧型なりの仕事して頂けたらいいと思います」

「とにかく儂はいつも通りでいけばいいかのう？」

「ハッハッ、まあ、精々期待に沿えるよう頑張ってみるさ」

と、笑いながらアリサの肩に手を置いた瞬間。

「きゃあああ！！」

とつさにリンドウから後ろに飛び離れた。

「これはせくはらになるのかの？ むっそれともばわはらってやつかの？」

とアリサと同様にリンドウから遠ざかるサクラ。

二人の反応にリンドウは肩を落とした。

「おーおー、随分と嫌われたもんだなー」

「あ……す……すみません。何でもありません、大丈夫です」

頭抱え、自身に戸惑うアリサを見てリンドウはツバキに言われていた事を思いだした。

「フツ……冗談だ。ん……そうだなあ、よしアリサ。混乱しちまった時はな空を見るんだ、そこで動物に似た雲を見つけてみる。落ち着くぞ？ それまで、ここを動くな命令だ。その後でこっち合流してくれ、いいな」

「なっ何で私がそ、そんなこと」

「おっアレは《オウガテイル》に似ているのう。おっナニカ喰うとる」

アリサが反論する前にサクラが遮り、サクラが空を見上げていた。

「むっ気の所為かの？ 心なしか喰われているのがエリックに似ている気がするんじゃが……」

ちょっと興味が沸いたリンドウ。不謹慎かもしれないがエリックは何故か《オウガテイル》に遭遇する事が多い。

「おっそうなのか、サクラどれだ？」

「ほれ、あそこじゃ。心なしかエリックに似とらんか？」

《オウガテイル》に喰われているエリックの雲を指でさす。

「ハハハハ、こりゃ傑作だ。確かにエリックに良く似てるわ！
アリサ、サクラみたいに探せ、な？ うっし、先に行くぞ」

十メートルの高さの壁を飛びおり贖罪の街のエリアに入る。

少し歩くとリンドウは唐突にサクラに話を切りだした。

「あいつのことなんだが……どうもワケありらしい」

「訳ありとな？」

「まあ、こんな御時世……みんな色んな悲劇を背負ってるっちゃ背負ってるんだが……同じ新型のよしみだ。あの子の力になってやれ、いいな」

「任せとれい！」

サクラは胸を叩いてリンドウに返す。

「頼りにしてるぞ？」

しばらくして、アリサが落ち着いた事を確認したリンドウは作戦の開始を告げ各場所に二人を待機させる。

アリサは自分以外で初めて見る新型を見て、あの少年　コウタよりは足手まといにならないだろうと確信した。

演習で優秀な成績を収めただけにアリサの自信はあった。

だが任務が始まってアリサはもう一人の新型に視線が釘付けだった。

「それ、ここが喰い所じゃ！　ほれ、渡すぞ！」

「おう、任せな！」

「任せて下さい」

シユウが持つ鋼鉄の翼を喰い千切り、アリサ、リンドウにリンクバーストさせ戦場を縦横無尽走っていた。

壁を蹴って跳ね返り飛翔して通り間際に一閃。

斬りつけた《シユウ》の離れた所に着地し後ろを振り返りながらアラガミバレットを発射する。

皮肉にもサクラの攻撃方法は《シユウ》と同様。

自らの攻撃方法を模倣された挙げ句の果てに自ら得意とする熱球を打ちこまれ《シユウ》は地に沈む。

数秒で行われた一連の動作にアリサは無性に悔しくなり、サクラの後を追うようにもう一匹の《シユウ》を切り刻む

アリサが切り刻んだ《シユウ》にサクラは止め言わんばかりに《チャージクラッシユ》を放ち、獣と人が混ざった悲鳴が響きビルの残骸揺れ、《シユウ》は倒れた。

あっさり、終わった任務にアリサは釈然としないがアリサ以外の二人はもうお気楽気分である。

「ははっどうじゃっ！ 儼に掛ればこんなもんよっ！」

「おっ今回は楽勝だったな」

「この程度なら楽勝です」

二人の気楽気分呆れながらアリサは返す。

「さーで、帰って何をするかのぉ」

「だらけしないで下さいよ」

「おう、家に帰るまでがミッションだぞ」

気楽になっていいがあまりにもだらけているサクラにリンドウは注意を促した。

「むう、わかつとる！　がこの街にはもうアラガミがおらんのじゃからだらけてもよかるう！　分かるじやろう？　この気持ち」

反論してきたサクラに子供だなと思ったが、後半のセリフにリンドウは聞き逃せなかった。

アリサもリンドウと同様鋭い目つきになる。

「サクラ、それいつからだ？」

「ほっ？　いつからというとな何の事じゃ？」

だが、本人は惚けた顔で聞き返す。その反応でリンドウは大体分かった。

似たような事ができる少年二人を思い浮かべる。ぶすつとしながらも圧倒的な膂力で《アラガミ》をぶっ飛ばす少年。

ただ只管アラガミ（ひたすら）一喰し笑顔でリンクバーストや《アラガミバレット》ばら撒く少年。

アリサはリンドウと同じくサクラの人柄が分かったが、納得できず。サクラを人外でも見るような眼でリンドウに問うた。

「……リンドウさん、この人アラガミの索敵できる範囲が広くないですか？」

半ば疑っているがリンドウとサクラのやりとりで嘘じゃないと分かったのだろう。だが確証が欲しくリンドウ聞く。

「ああ、出来るっと言ったら出来るんだろうよ。こいつは……」

先を歩いているサクラを見ながらリンドウは答えた。

「そういえば、最近装備替えてなかったのお。そろそろ装備を替えてみようかのお」

自身の神機片手で持ち刀身　バスターソードを眺めながらサクラは、「うむ、そうしよう」と頷いた。

「……そういえば、何故皆装備を替えんのかのお？」

余りにも規格外のセリフにアリサとリンドウは頭を抱えた。それは慣れたエモノを手放すのは愚の骨頂である。

おいそれ、ポンポンと武器を変えるのは死に急ぐだけだ。だが、

サクラは関係なしに各パーツを替えていた。

リンドウはため息をついてアリサに言う。

「……まあ、あいつは気にするな。真似する必要はない」

「……そうする事にします」

先を歩く少女を見て二人は遠い目した。

第二十四喰目 廃スペック（後書き）

ふっ作者はプロポーズされてしまった。

……幼女にだけでもorz

「御嫁さんになってあげる」

クリティカルに心にグサツと来ましたよ。

ああ、願わくばそのまま純粹に育っておくれ。

リア充の仲間入りと思いきや。そうは問屋が卸さなかったか、くつ所詮はイケメンが覇者なのか……。

小説では私みたいな奴が主人公ではないか！（イケメンの幼馴染みを持つている主人公のポジション）

現実はいケメン>>>>>>超えられない壁>>>>フツメン>>>>私（変人）の方式は崩せないのか。

……緑色の汚染物質でも発見してみようかな。ばら撒く為に……。

ヒロイン投票のコメント返し

神薙サクラ

> 孫を見守る祖母と孫で天然オツトリ実は凄いコンビ

一見すると普通なのに中身は化け物ですからね二人とも。

雨宮ツバキ

> なんとなくですけどなにか??

以外にこの人、人気ありますよね。ババア結婚してく(テレッテー

斎藤馨

> 懲りずに馨に投票します、ヤンデレ? いいえ純愛です

一途な思いと言えば純愛。ヤンデレを受け入れるそんな懐の大きい貴方は背中刺されないでしょう。

> 「お姉さんは好きですか?」 大好きです!!

.....こやつ出来るなっ! 素直に感動しました。

ハーレム

> GEキャラはどれも好きだし

作者はとある星の観察者を鼻屑にするほど好きなキャラがいますので大いに分かります。

ソーマ&エリック

>互いに心を許し合える仲って貴重ですよ。薫君には

天然記念物並みに貴重です。それはもう……これ以上ないくらいに。

>マミられフラゲクラッシュ記念に 今後の活躍に超期待

ソーマは主人公らしく活躍しますがエリックは戦隊モノとして活躍する……かも……

第二十五喰目 論文（前書き）

発売日でやる気が……Ⅴエ

第二十五喰目 論文

生物は進化の先に高度な死を獲得した。かくとく

生も進化する様に死もまた進化するのだ。

生物は多様化し様々な形をもった。

兎は耳、象は大きさ。鯨クジラは海に戻る事で進化した。

では、何をもって人は進化したのか？

それは《感情》である。

これは薫が下したずっと変わらない答え。

その答えが余りにも自分にしっくり来た薫はその答えである人の感情に興味を持った。

それが、自身を苦しめると知らずに……………

寿命と言つものがある。

それはどんなモノにも宿るその存在期間を指す。無論、同一の環境、同一の種族、同一の物質であっても個体差がある。

寿命を迎えると全てのモノは役目を終え、その存在としての幕を閉じる事になる。

最も、身近な例として人の死がある。

これは人間が持ち続けた恐怖の根源と言ってもかまわない。

物理学、生物学、哲学等と様々な観点から考察されてきた。

物理学から見た死。

ただ物理学において死は曖昧^{あいまい}である。

著名な実験名を上げるならば最も有名なのはシュレーディンガーの猫ではないだろうか。

御存知、エルヴィン・シュレーディンガーは思考実験で量子論に指摘した。

どういった実験が説明すると

まず、蓋のある箱を用意し、この箱の中に猫を一匹入れる。

その他にも箱に放射性物質のラジウムを一定量と、GM計数管^{ガイガーカウンター}を1台、青酸ガスの発生装置を1台入れておく。

ここで実験準備は完了。

ここから、実験の内容に移る。

箱の中にあるラジウムがアルファ粒子を出すと、これをガイガーカウンターが感知し、その先についた青酸ガスの発生装置が作動し、青酸ガスを吸った猫は死ぬ。

しかし、だ。

ラジウムからアルファ粒子が出なければ、青酸ガスの発生装置は作動せず、猫は生き残ってしまう。

では一定時間経過後、果たして猫は生きているか死んでいるか？

このようには箱の中には死んでいる状態の猫と生きている状態の猫が二つ存在し重なりあっている状態である。

しかし、現実になんな現象は起こらない。

単純に生か死の二択のみ。重なりあっている状態等^{など}ありえない。

これが物事をマクロ的にミクロ的に見た時に起こる現象の差異
奇妙な生死の図である。

観測されない事象というモノは《存在しない》と同義なのだから。

では生物学的に見た死とは？

一般的に見た死とはその状態を指す。

寿命とは個体の《誕生》から《死》に至るまでとされている。

では、ここで疑問が一つ残る。

どの時点を持って始点と為しどの時点を持って終点を為すのか？。

一般的にはその生命活動を止まると死と見なされる。

だが、細胞の一つ一つに注目して頂きたい。例え、その人物が死を迎えたとしても、その細胞はまだ生きている。無論、これは極端な例である事を否定しない。

しかし、ここで疑問を持ってほしい。

何時から生命は《高度^死な終わり》を知る事が出来たのだ？

死を感じ取れる様になったのは生物が寿命を持ち始めてから。

唯の細胞が死を感じ取る？ それは無理な話だ。

死を感じ取るというのはそれだけ高度な感情を得た生命体のみ。

無論、感じたりするだけならば、犬や猫でも死期を悟ったりできる。

生物の範疇であるなら死を知り得る。

だが、死んだ者を弔う事ができるのは象やゴリラそして人間だ。

感情は細胞一つだけでは為し得ない。複数の細胞それも膨大な数の細胞によって事象を感じ取り、個人で完結させる。故に感情を持つというのはそれだけで高度な生命体と言えるのだ。

最初の生命は単細胞から始まりやがて多細胞となり……細胞が何千億、何兆と集まって生物が生まれた。

様々な生存競争の結果

哺乳類が生き残り、気の遠くなるような時を経て、原人が生まれそして人間が誕生する。

フェンリル全体がとある論文に注目した。

1

極東の賢者 ペイラー榊の弟子が書いたものである。

榊の弟子と言えば、知らない者は何も知らず興味も微塵も沸かない。が、知っている者からすると大変に興味の沸く人物である。

『生命論』

その論文は大変興味深い内容で綴られていた。

オラクル細胞は捕喰によって知識を得る細胞である。

彼らの捕喰は留^{とど}まる事を知らない。近い内、感情を知る所になる。

何れは感情を持つ《アラガミ》種が発見され、場合によっては共存を図る事も可能だ。

高度な感情を持つ事は即ち死を感じる事と同義である。感情によって進化した人類と肩を並べると言う事だ。

これは極めて不利な生存競争と言わざるを得ない。

なぜならば、『オラクル細胞』には寿命がないのだ。

生物が持つ寿命を『オラクル細胞』は持っていないのだ。

それもその筈、寿命の発現不死性の喪失は有性生殖と引き換えに獲得したのだ。

オラクル細胞はそれを無視して存在している。

このままでは、人類の死滅は免れないだろう。

これらを回避するならば……………。

オラクル細胞と人類種の関係を説明した論文は学者達は好奇心を刺激させられていた。

この論文を読んだ学者は大きく二つの反応に分かれる。

一つは、矯正進化による《アラガミ》との共存を図る者。

もう一つは矯正進化による《アラガミ》の殲滅を図る者。

論文の最後には矯正進化による《アラガミ》へ対応が書かれてあったのだ。

これらの回避するならば

『オラクル細胞』に死の知識を植えるしかない。

元より高度の生命体になれば成るほど、『死』という寿命システムが生命の根本に強く刻まれている。『オラクル細胞』が『死のシステム』を知らなければ、知識を与えてやればいい。

すなわち、^{ジャーム}原核細胞から^{ソーマ}真核細胞へと進化するよう促してやればいいのだ。

さすれば、人類は助かるだろう。

《オラクル細胞》を分裂性細胞から非分裂性細胞へと変化させる。

環境に余計に適応しやすくなるが、格段に《オラクル細胞》の増殖は格段に落ちる。

確かに『死のシステム』を得れば、死と引き換えに有性生殖を獲得し一定まで繁殖する。

が、効率はかなり落ちる。

オラクル細胞は知識を蓄え生き残る為に『オラクル細胞』は文明を持つ人類に興味を持つ。

その時生まれるであろう、ヒトガタの《アラガミ》にコンタクトを取るなり、隔離するなりだ。

2

576

暗闇の中、一人の男が拳を握っていた。

その目に映るのは一人の少年。

幼くして、新型神機の提案した榊博士の秘蔵っ子。

余り存在を知られていなかった少年がたった一つの論文で世間の目を少年に向けさせた。

何故、あいつの研究は認められるんだ？

男は世界に対する理不尽さを恨む。何故、自分の研究は駄目である少年の研究は認められるのだ、と。

だが、男はその激情を拳を握り歯を食い縛って抑えた。

今はその時ではない。自分が舞台にあがるのはその先だ。

今の内にその栄光を誇っているがいい。直に世界は終わる。生き残るのは私だ。それに……

男はその少年の目の光を知っていた。精神医学を学んでいた彼にはその光が何の意味を持つのか。

暗闇の中で男は嗤^{わら}う。

嗤っている男は少年の精神状況を少年の師匠である榊よりも詳しく把握していた。この男もまた洗脳を施した人物だからだ。少女に

暗示をかけた男には少年の精神状態に口元を吊り上げ、舌舐めずりした。

アレは縛られている。なら、操っている人間に取り入るべきだ。アレは使える。

下卑た笑みを浮かべ、これからの少年が自分に良いように操られる様を想うと笑いが止まらなかった。

第二十五喰目 論文（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

再ヒロイン投票により読者の皆さまの手を煩わせた事をお詫びします。

本当ありがとうございました。

馨の票が作者として意外でした、コメントでは色々言われただけに驚きです。

ヒロインはアリサ確定ですね。以後変わりません。

ハーレムを望む声があった事も前回に引き続き驚きましたがアリサに迫る勢いですか。

……最後にエリナ増え過ぎワロタ。三位ってお前……三位って……
皆さまはロリコンですかっ?!

この結果は驚きの以外のナニモノでもないです。

作中の論文ですが、私がまた馬鹿な方向に暴走したので日常に要らない知識が増え……執筆が遅くなりました。申し訳ありません。

言い訳をさせてもらえるなら、リアル関係で忙しかったんです。現実逃避に図書館に通ってました。人間関係で胃が……修羅場は他でやってください、私は関係ない。

……心の支えが一月って。

追記、感想にて御指摘があつた為内容を付け足しました。

御意見やアドバイスがありましたら何卒御指摘をお願いします。

一応この話は四喰目薫の考察を参照下さい。
あれらをじっくり見てみてから見て下さるとより楽しめると思います。

コメント返信

> 内容が面白い！

ありがとうございます。これからもそう言って貰えるよう執筆をします！

>ろりこんですが何か？

……いいえ、何も。大変紳士的な趣向ですね。

ひょっとして私がおかしいのだろうか……。

第二十六喰目 蒼穹の月（前書き）

本当に不定期更新で申し訳ないです。

今回は若干R指定入るかもしれませんが。ヤンデレが嫌いな人は注意。
エグイかもしれません。

第二十六喰目 蒼穹の月

夕暮れ時、空の色に朱が入り始める頃。学校に残っている生徒たちは部活に精を出す。

中学生と言うものは大人への階段を上り始める。だが、やはり子供の純真さは残っているのか大人とも子供とも言えない思春期特有の活気があった。運動部は汗を掻き先日引退した先輩から意思を受け継ぎ、文化部は各々の練習をしこれから始まる秋の大会に向けて力を振り絞る。帰宅部の生徒はいないがそれでも学校は活気で満ちていた。

しかし、一ヶ所。

その場所だけはポツンと穴が空いたように活気を飲みこんでいた。

教室に一つのグループが集まり黒髪の少年を囲んでいる。

少年の前に机の上に時計が置かれ秒針が忙^{せわ}しなく動いている。時計の大きさは机の四分の一程度で今では余り見かけない秒針が動く度に音になるものだった。

虚ろな目で少年はそれを見ていた。

「一」

輪の一人が紡ぐ。

「二」

輪の一人が紡ぐ。

「三」

輪の一人が紡ぐ。

「四」

輪の一人が紡ぐ。

「五」

輪の一人が紡ぐ。

「六」

また輪の一人が紡いだ。

秒針が動く度、少年の周りから言葉が発せられる。言葉を発する人物が一周したらその続きを、延々と延々とくり返す。

カチツカチツカチツ

秒針を動かす歯車の音が物静かな教室に木魂して言葉と共に宙に溶ける。

教室の時計の長針が一回りする。長針が一回りするまで、ただ淡々と数を輪の中心にいる少年に告げるだけの作業。酷くつまらない作業だが告げる人物たちはどこか悦びの感情を浮かべていた。

輪の内一人、少女が前に出て言葉を紡ぐ。

「……薫」

水気を帯びた艶めかしい声で少年の名が呼ばれる。中学生とは思えない色気が言葉に含まれていた。

その声で漸く時計から目を離し少年　薫は呼ばれた方向に目を向ける。

秒針が三回動いたところで返答が返ってきた。

「……お姉ちゃん」

目を潤ませ自分と呼んだ人物の名を呼ぶ。

それを見た友人たちと姉　馨は壮絶な笑みを浮かべて薫を招き寄せた。一人状況に流されるまま薫は招かれ為すがままにされた。斎藤薫と言うエモノを骨の髄まで味わいたい。抱き寄せ、口付け、弄られる。ここぞといわんばかりに薫に押し掛かった。

彼女たち
猛獣が餌に群がる。

貪る。

感情を圧壊し圧潰され、自身と言う自身を蹂躪され、目が虚ろになる。ギシギシ、と軋みが脳内に鳴り響き感情が悲鳴を上げるが届かない。見事なまでに綺麗に蓋をされている。

感情ごと雁字搦めになった薫は動けない。心に楔を打たれ彼女たちからは逃れられず、為すがままにされる他ない。

また一つ、ピシリと罅が入った。

その罅から感情が少し零れ、

『……悲しい』……薫』

その感情と共に出てきた自分を呼ぶ少女は誰だったのだろうか。

朝。

ゆっくりと目が覚める。外を見てみると夜に雪が降っていたのか外は雪で銀色に化粧が施されていて眩く美しい。空に雲はなく、一点の曇りもない鮮やかな儂い空色が広がり月も淡く青く染まっていた。

余りの眩さに目が一瞬眩み、腕で目を庇った。庇い初めて気付いた、パジャマの袖が濡れていた事に。

確かめてみる自分の頬には涙が流れた後があり、目が覚め早々訳も分からない喪失感に悩まされた。薫は気付かず自身の知覚範囲外で大切なものたちを失っていた。

しかし、薫は理解できない。確かに何かない。何かないのだ。

外の冷たい風が窓に強く吹きつける。

今まで感じた事のない違和感に涙を流す。忸怩の思いも忘れ、母とはぐれた子供と同様に泣く。嗚咽が出るのを抑えきれず泣きじゃくった。

ひとしきり泣いた薫は鏡の前に立ち自身の顔を見て苦笑する。

酷い顔だ。目元が腫れるほど子供のように泣き……いや、実際にあれは子供だなと思い直し自嘲した。

この可笑しな生を受けもう十四年。

濡れ烏色の黒髪はプラチナブロンドに、黒耀石の瞳は紅い瞳に変わった自分。最初は前世の２Ｐキヤラクター状態に慣れなかったが今ではこれが今の自分だと理解できる。

ピピッと無機質な音。

ポケットを弄り携帯端末を開き内容を確認する。

『緊急要請、贖罪の街にてヴァジュラ種ヴァジュラの出現。各職員集合されたし』

急いで顔を洗い、着替え職場に向かう。

窓を強く吹きつける風は空に吸い込まれていく。

目に光は宿らなかった。

1

590

《ヴァジュラ》

トラにもしくはライオンに似た容姿を持つアラガミ。

俊敏な動きで翻弄しマント状の器官で強力な雷撃を放つ。発生地はユーラシア大陸南東地域だが現在ユーラシア大陸全土で確認されており極東まで生息地を広げている。また、《アラガミ》としては珍しく墮天種が存在しない。《ヴァジュラ》という《アラガミ》になった時点であらゆる環境に対応できる状態になった強靱な《アラガミ》である。

この強靱な《アラガミ》を一人で討伐できるようになれば、ほぼ一流のゴッドイーターと過言ではない。《ヴァジュラ》の討伐は一種の神機使いランクであり目標だろう。

放送や端末の連絡を受けた職員が会議室に集合しがやがやと今回の案件に恐怖の感情が煽られる。

「くっこんな時に限って」

会議室に集まった職員が状況に歯噛みし感情を露わにする。

「リンドウさんは出れないのか?！」

「兩宮第一部隊隊長はロシアの新型神機使いと共に任務に出立します」

「じゃあ！ 呼び戻せ！ 早くしろっ！！ 死にたいのか?！」

「できません」

「そうだ！ 今から各職員に連絡をっ！」

「駄目ですっ！！ 他の神機使いも既に任務に出払って現在残るのは……」

「くそったれ！」

「おいっ落ち着け！ それが出来たら最初からしてるだろうよ。何の為に集まったんだか……で、これは何のために集まったんだ?」

中年の男性職員が若い男性職員を窘める。年下を落ち着かせるのは人生の先輩として常、特にこの職場では。

女性職員が口を開こうとした時、錯乱してた男性職員が気付く。

「おい、まさか……」

「改めて、ヴァジユラ種ヴァジユラの討伐班を選定会議を始めます」

《ヴァジユラ》の討伐は一流神機使いとして壁である。二流は決して一人で戦いを挑んではならない、無駄死にするだけだ。挑んでいいのは一流と判断された時、他の一流神機使いと同行して挑む場合だ。その判断も慎重に判断されるのだ。《ヴァジユラ^{アラガミ}》というには慎重にならざるえない。

無論、《ヴァジユラ》を討伐するだけなら問題ない。

そこに討伐メンバーの生死が考慮されていなければならないが。そう、討伐なら出来るのだ。人命を無視すれば……。

「今、現在アナグラにいる神機使いの名簿とその所属班がプリントされたものがこちらです」

女性職員は行きわたった名簿がプリントアウトされたファイルを見て職員に告げる。

「今後を吟味して各員選定にあたって下さい」

苦渋の決断を迫られる職員。

淡々と告げる女性職員も顔が青く血の気が引いている。

《ヴァジュラ》を確実に討伐でき、そして今後アナグラの運営に影響が無い人物の選定。一応メンバーが生き残る為のパワーバランスを配慮。

実質、スケープゴートの選定だった。

「斎藤博士……？」

呼ばれて振り返る。そうだ、博士になってたっけ。自身の役職を思い出し、振りかえる。

「ああ、何かな？」

「メンバーが選定されました。討伐メンバーの神機調節指示と討伐地点の観測データをお持ちしました」

顔が未だに青い女性職員が立っていた。薫が少し視線をあげるとその血の気が引いた様子がありありとわかった。

「……きっと大丈夫ですよ。彼らは生き残ります」

なるべく女性職員を安心させるように言う。笑顔も浮かべてみるが苦笑しかでない。遠ざけていた感情が再び悲鳴を上げ、頭痛が走り苦虫を噛みつぶした表情になった。また、知らない少女が脳裏に浮かぶ。

『……薫』

年下の少年に不器用ながら気遣われ、少し気持ちが落ち着く。

「……はい、きっと大丈夫ですよね」

もう既に賽は投げられたのだ。待つ身として信じる他ない。

「……………」

彼女の問いに無言で肯定する。

これほど薫は自身が出れない神機使いとして悔やんだ事はなかった。

袖に隠れて見えない腕輪が鈍く光る。

ミッション名 《蒼穹の月》

討伐メンバー

《ソーマ・シックザール》

《橘サクヤ》

《藤木コウタ》

《神薙サクラ》

荒ぶる神に第一部隊の羊たちが奉げられ、蒼に染められた月が見守る。

第二十六喰目 蒼穹の月（後書き）

ゴッドイーター続編きましたねー。楽しみです。
ミSSION名はここで使うと決めていました。
漸く折り返し地点です。

少しずつ回収していききたいですね。

以下コメント返し。

> カノンをヒロインにしてくれい！

すみません！

ヒロインはアリサさんです（滝汗）

カノンちゃんさんは……またいずれ

フラグは立てるかもしれませんが回収はしません。

> ゴットイーター大好きの高二だよこの話なかなかおもしろいいい！
カノンをヒロインに所望する（¥^o^ノ）

流石誤射姫。人気だなー。しかし、残念アリサさんがヒロインです。
天然ペアになりました。

> 人は何かを成すためには何かを犠牲にしなくては成らない

等価交換の法則の流用ですね。哲学語となると私は止まりません

よ？

その言葉は実際にそうですよね。

私が言葉を創るとするならば……

努力と才能は表裏ひょうりである。

結局はすべて紙一重なんだと思います。

ヒトの才の総量は多少の誤差はありますが同じです。

>早く続き見たいです

本当に申し訳ないです（´；；´）

第二十七喰目 記憶と感情（前書き）

久々にボリュームがある文章が書けました。

次回もこうだといいなあ。

第二十七 喰目 記憶と感情

このデーターは一体何？

薫が女性職員に渡された資料 討伐地点の観測データーを読んだ感想だった。

討伐地点周囲の《オラクルエネルギー》が異様に少ないことに気づき、詳しく調べたところ生息している筈の《アラガミ》までもがない事に気付いた。

何が……一体何が原因なんだ？

気候が原因

違う

気圧

違う

温度

違う

《ヴァジュラ》種の捕喰が原因

違う、《ヴァジュラ》一体では無理だ。

アナグラの討伐数

違う、オラクル細胞には通用しない。討伐と言っても霧散した一《オラクル細胞》が再度《アラガミ》を形成する。実質時間稼ぎぐらいしかできない。

建造物

特に関係なし

（何かが引っ掛かる。……余りにも静か過ぎるんだ。まるでユーラシアみたいに……）

「ユーラシアみたいに……？」

モニターのグラフィターを切り替えユーラシア掃討戦に切り替え、今回の討伐地点と比較する。

「一体何が違うんだ？ 《アラガミ》の数でもない、気候でもない、地形でもない、原子力でもない……何が《アラガミ》たちを動かすんだ？」

《アラガミ》の執着するナニカがあつたの？

「……執着？！ つまり《アラガミ》の求めるモノ、行き着く先《ノヴァ》？！ あの時点もう存在していたんだ！！」

《ノヴァ》

確かにそれならば、理解できる。捕喰の果てにあるのは星を飲みこむ存在となる《アラガミ》。その終着点である《ノヴァ》はこの地球に棲む全ての《アラガミ》にとって極上の餌とも言える存在だ。

つまり、《アラガミ》が好むものを撒かれている。

薫はすぐさま、《対アラガミ装甲壁》に使われている偏食因子を加工しカプセルに入れた。それを五つ程作り、現場に行つて撒いてもらう為にエリックを呼び出した。

バラ撒かれているのが《アラガミ》たちにとって好むものであるなら、嫌うものを撒けばいい。

数分後、エリックが薫のラボに到着しカプセルを渡した後、記憶が途切れた。

遠い記憶の中、教室で姉が言った言葉を思い出す。

《Need to know, Need to share》

『薫……知ってる？ 感情は忘れないんだよ？ 記憶がなくても心が覚えているんだ』

知らない少女と姉が脳裏に浮かび上がりそのまま沈んだ。

寂しい

ふと、沈みゆく意識の中そう思った。

1

605

それは噂に違^{たが}わぬ強さだった。

と、奇跡的にも全員無事に五体満足で生還できた、ソーマと後の
第一部隊の隊長　サクラを除く第一部隊は語った。

贖罪の街についたメンバーは任務のターゲット見て引き攀った。

最も引き攀ったのはソーマを除くメンバーで、ソーマは悪態をつく。

(……どれだけ喰らえばでかくなるんじや)

(……おいおい、これを相手にしろってか?)

サクラは目に映る、標的を見て顔が引き攣る。サクラと同様にコウタも引き攣らせていた。だが、二人よりも事態を深刻に見ていた人物がいる。

あ、あれがヴァジユラ？ 私の記憶にある《ヴァジユラ》はもっと小さかった筈

《ヴァジユラ》と交戦経験があるサクヤは新人二人よりも顔色が悪くなる。

何せ、その《ヴァジユラ》は記憶の中のモノと大きさが違っていたのだから……。

なににせよ。

このまま、傍観しているだけではアナグラ、外部居住区へ影響が出る。ずっと、立っているままというのは却下だった。

「三人とも準備いいわね？」

四人はターゲットに向かう。

オラクルポイントをガリガリと消費しバレットを撃つが効き目が著しくなく。擲揄ではなく文字通り身を削って刀身を叩きこみ怯ませるところまでいくが決定打がない。

ジリ貧になるのは間違いない。とサクラは思った。全員の疲労具合を見て、後でお叱りがあるだろうが作戦を中断する事に勝手に決めた。

ソーマを執拗に襲いかかっていた《ヴァジユラ》は突如向きを変えサクヤの方向に走り出す。丁度オラクルポイントを補充とバレットの入れ替えをしようと銃身を空けていた時だった。

サクヤに襲いかかろうとした《ヴァジユラ》にスタングレネードを使い。感覚器官を狂わせ、視線で一時撤退を部隊全員に促す。

「地点じゃ！ 遅れるでないぞ！」

「サクラ、ありがとう」

「気にするでない！ ……そら、コウター！ 気付かれる前にいくぞ！」

「お、おう」

地点しその建物内。第一部隊はそこで作戦会議を開いていた。

以前に《ヴァジユラ》と交戦したことがあるサクヤの表情は優れない。やはり、リンドウの影響はでかいのだろう。いくら自身が実戦経験豊富と言っても後方支援だ。頼りになる前衛がいないと話にならない。

「さて、階級の低い儂がいうのもなんじゃが何か意見はあるかの？」

「……この任務はお前が仕切れ」

ソーマがボソツと呟いた一言に俯いた顔をあげるサクヤ。徐々に目に希望の光が見え始めた。

「（……あのソーマが認めた？）」

マジマジとサクラの顔を見るサクヤ。

「なっなんじゃっ?! 儂にそんな趣味はないぞ! 見つめるでない!」

思いのほか見入っていたのようでサクヤはサクラに謝る。

「ごめん、ごめん。ソーマがもうあなたを認めてるなんて思わなかったから……」

「ほ? なんじゃ?」

「ちつ余計な事を言うんじゃないやねえ」

「というより、俺ら本当にやばいよ? 作戦はどうする?」

「……作戦? 作戦というか方針はいつもと同じでよかる?」

「は? いつもと同じって……何だよ?」

「……」

「?」

この絶望と言える状況下でサクラはいつもと同じ調子でいつもと同じようにやればいい、と皆に同意を得ようと相槌を促すがどうも三人とも何のことかわからない。

「お主ら……リンドウのこと実は嫌いじゃろ？」

「……?!」

「……ちっ」

「すっかり、頭から抜け落ちていたわ……サクラ、あなた凄いのね……」

「……リンドウエ」

何度も繰り返しの言われている筈だが、リンドウ自身が率いている部隊のメンバーが右から左へと流していたことに驚愕し思わず同情した。

同情で目頭が熱くなり、空を見上げる。心なしかサクラには雲の影から笑っているリンドウが見えた気がした。

「リンドウ……僕はちゃんと聞いておったからな……」

ズシン、ズシン

街全体に轟かせる。堂々とした足音が四人の耳に入る。

それだけで和んでいた空気は瞬時に成り潜め、緊迫した空気が漂わせるのは十分な出来事だった。

サクラがメンバーに視線を配る。

大丈夫か？

ああ

私も大丈夫よ

俺も大丈夫だぜ

力強い視線と相槌が返ってくる。つい先ほどまで《ヴァジュラ》戦の士気と大違いだ。

「作戦は四つ」

サクラが今ここにいないリンドウの代弁をする。

「死ぬな」

頷く三人。

「死にそうになったら逃げろ」

再び頷く。

「それで、隠れろ」

新入りの少女は隊長の代わりを果たす。

「運が良ければ不意をついてぶっ殺せ」

再度、視線を全員配り、

「……じゃ、行こうかの」

告げる。

3

2

1

四人とも勢いよく飛び出し《ヴァジュラ》に不意を突く形で攻撃を加えた。

サクラが《ヴァジュラ》を喰らいソーマにリンクバーストを放つ。すると、どういうわけか突如《ヴァジュラ》の動きが変わった。

無論、その隙を逃すソーマではない。

サクラから受け渡されたバーストエネルギーを持ち前の偏食因子

が活性化させ脅力じようりきが跳ねあがることを確認し、《ヴァジユラ》を引きつけ、後方支援に向かわないように押さえつける。

この機を逃すわけにはいかない。

前衛二人が作ってくれた機会。後衛の二人はしっかりと掴み、溜めに溜めたオラクルエネルギーを開放した。

通常の《ヴァジユラ》よりも大きい身体が地に沈む。最後の力を振り絞って立ちあがろうとするがサクラが《ヴァジユラ》の頭蓋にロングブレードの刃を突き立て、止めを刺した。

脅えていたのはあの少年の影。

自分達が突如出現した様にその少年たちは突如出現した。ある日、魅力的な餌があると本能が感知しそこへ向かい、いつもと同じように喰らう筈だった。だが、そこに居たのはこの地球で食物連鎖の頂点に立つ捕喰者自分達を捕喰する者だった。

己おのが喰らう度に知識を得るがように、そいつも自分達を喰らう度に自分達の知識を得る。

己おのが喰らう度に猛威を奮うように、そいつも自分達を喰らう度に

猛威を奮う。

その少年と出会うのは危険と身体が覚えていた。細胞だから、自分達を喰らい他者に分け与える少年に似た存在に脅えた。サクラ

少年の様に自身が得た知識を他者に適応させるわけでもない。しかし、少女の戦闘方法は少年に瓜二つなのだ。

当然、第一部隊に《アラガミ》の心境を理解できるものはいない。突如、《ヴァジュラ》の動きが変わったことについて誰も知るよしもなかった。

《ヴァジュラ》の変異種を無事討伐を完了する。

コウタが緊張を解こうとした時、サクラは静かに^{すこ}凄む。

「たわけっ！！！」

「なっなんだよ?!」

突如の^{すこ}凄みにコウタは脅える、討伐し終わった後だがコウタ以外の三人は厳しい顔をしたままであった。当然、疑問に思い目の前の少女に脅えながらも聞く。

が、代わりに返事を返したのは意外にもソーマであった。

「いるぞ……別の《アラガミ》」

己^{おのれ}が持つ偏食因子が警笛を鳴らしている。と言うことは、まだ《アラガミ》が健在ということを示している。

「はあ?! なんの為の偵察班だよ?! 可笑しくないか?」

「そうね、おかしいわね……でも、何故?」

「脅えさせてスマンかった。じゃが、これも任務故じゃ……再度、気を引き締めようぞ」

「いや、気を抜いた俺が悪いんだし……」

サクラたちは贖罪の街を見回る為息を殺し警戒のレベルを上げる。

こちらM地点異常無しだぜ、引き続いてN地点異常無し、どうぞ

I地点異常無し、どうぞ

地点C、D異常無しだ、送れ

L地点異常無しよ、どうぞ

H地点……異常は無いのじゃが恐らく周辺に……どうぞ

了解、そこには最後に行きましょうか、どうぞ

警戒して教会に近づこうとし、反対側からリンドウとアリサと鉢合わせした。

「……何？」

「お前ら？」

流石のベテラン男二人もこの事態は想定してないのか、驚きの声上がる。

「あれ？ リンドウさん、何でここに！？」

「……」

「（ん？ アリサの様子がナニカおかしくないかのう？）」

「どうして、同一区画に二つのチームが……どういうこと？」

あまりの事態にサクヤはリンドウに近寄る。がリンドウは手で制しサクヤの歩みを止めさせた。

「考えるのは後にしよう、さっさと仕事を終わらせて帰るぞ。俺たちは中を確認、お前たちは外を警戒いいな？」

想定外の事態にも培った経験でメンバーに指示を出すリンドウ。しかし、その顔色は訝^{いぶか}しげで……。

リンドウ、アリサと続いて教会内部へと入る。

教会の中へ入り確認すると外から《ヴァジュラ》の上位種である《プリティヴィ・マータ》が現れた。

冷酷さが浮き出ている女神像の顔がリンドウ、アリサの二人に向けられる。《プリティヴィ・マータ》が飛びかかる事を想定してリンドウはアリサに指示を飛ばし自身は戦闘態勢に入った。

「下がれ！！ 後方支援を頼む！」

《プリティヴィ・マータ》がまるで自らを鼓舞するかのよう^{こほ}に吼えた。

教会の高台から飛び降り、冷酷な女神の顔で再び吼える。

「……………?!」

それがアリサのトラウマを刺激したのだろう。アリサには目の前の《アラガミ》が脳裏^{のうり}に映る漆黒の顔と重なって見えた。

アリサの目にはリンドウや《プリティヴィ・マータ》は映っておらず、目から戦意と光が失われただ記憶^{トラウマ}に脅えていた。

「パパ……………?! ママ……………?! やめて…………… 食べないで……………」

目の前の《プリティヴィ・マータ》からジリジリと後退して、遠ざかっていく。

アリサがそうしている間でも《アラガミ》は止まってくれない。

いつまでもたっても来ない後方支援にリンドウは目の前の《プリティヴィ・マータ》から目を離さずアリサに問いかけた。

「アリサあ！！ どうしたあ！」

《プリティヴィ・マータ》は前足二本使いリンドウの身体を引き裂こうと攻撃を繰り返す。だが、リンドウはこの《アラガミ》の相手が手があるのか、ステップを踏み軽やかに回避し、空振った《プリティヴィ・マータ》に斬撃を加える。

脳裏に映る映像が切り替わる。

『そうだ！ 戦え！ 打ち勝て！』

スタミナを切らしたリンドウに《プリティヴィ・マータ》の斬撃が直撃。すぐさま起き上がり戦闘態勢を整え回復錠を飲み、体内オラクルを活性化させ即座に治癒させ、再び《プリティヴィ・マータ》に斬りかかる。

再び映る光景が変わる。

え！」

瞬間、暗示から解き放たれ、身体が自由が許されるが暗示は解けてはいない。最後の言葉の通りアリサは空を見上げ、そして暗示の通りに引き金を引いた。

銃身から炎属性の高威力バレットが飛び出し教会の天井へと突き刺さる。天井はそのエネルギーを受け止められず崩壊し、瓦礫が教会内部への道を塞いだ。

突如の爆音と落下音に様子を見に来た外を警戒していたメンバーがアリサの元へやってくる。

内部からは戦闘中というのが分かる音が連綿と続いている。援護しようにも瓦礫が内部への侵入を拒み、援護に向かえない。この最悪な状況を作りあげた少女に詰問しようと迫った。

「あなた……！！ いったいなにを！！」

茫然自失としているアリサ。しかし、耳を澄ませてみると延々と同じ言葉を繰り返していた。

「違う　違うの…… パパ…… ママ…… 私、そんなつもりじゃ……」

「（何？　何が起きているの？　この状況は一体どういうこと？　！）」

「アリサ！　しっかりせい！！」

連続して起こる不可解な出来事に苛立ちで感情が高ぶる。アリサに問い詰めても何の情報も得られない。あまりの齒がゆい状況、サクヤは感情任せにバレットは瓦礫に打ち込んだ。

しかし、瓦礫の一部を抉っただけだった。

外の警戒を行っていたソーマとコウタ焦りの感情を抱く。

「まずいな……こつちも囲まれてやがる……」

三体の《プリティヴィ・マータ》が二人を教会へと追い詰めるように囲んでいた。

「くそつ当たれ!!」

サクヤとコウタが銃で牽制し退路を確保する。

「早くしろ!! 囲まれるぞ!!」

「この……!! 大勢で来よって!! か弱い儂を^{いた}労わらんかい!!」

ソーマが牽制の為に大剣 《イーブルワン》を振りまわし、続いてサクラが目の前の《プリティヴィ・マータ》を教会の外へと追いやる。

ソーマとサクラの声で外の状況に気付いたのかリンドウが声を張り上げメンバーに命令を下す。

「命令だ!! アリサ連れて、アナグラに戻れ!!」

「でも……」

リンドウの言葉が信じられない、サクヤはもう一度リンドウに問
いかける。

「聞こえないのか!! アリサを連れて、とつとアナグラに戻れ
!」

聞きわけのないサクヤを怒鳴り、第一部隊の隊長として声を張り
上げ、命令を下す。

「サクヤ! 全員を統率! ソーマ、退路を開け!」

「パパ……ママ……そんな……つもりじゃ……」

「リンドウも早く!!」

サクヤの切羽詰まる声、対してリンドウはいつもと同じように飄
々とした声で返事が返ってきた。

「わりいが、俺はちょっとこいつらの相手して帰るわ……配給ビ
ル、とつておいてくれよ」

「ダメよ! ……私も残って戦うわ!!」

それでも諦められないサクヤはもう一度リンドウに問いかける。

「サクヤ……これは命令だ!! 全員必ず生きて帰れ!!」

サクヤを諭すように再度命令だ、と言い。それ以後、こちらの言葉にリンドウから返事は届かず。内部から相変わらず戦闘音を響かせていた。

「いやあああああ……！！！！！！」

認められない現実にサクヤが取り乱す。

「サクヤさん！ いこう……このままじゃ全員共倒れだよ！」

駄々をこねるサクヤの腕を掴みアナグラへ連れて帰ろうとコウタが腕を引く。

「いやよ！！ リンドウうつうつうつ……！！！！！！」

最後まで取り乱しながらコウタに引きずられる。

「クソッ、サクヤの奴取り乱してやがる……………多すぎる」

ソーマが疑贖罪の街に多く《アラガミ》が集まってる現状を毒づく。

が突如、目の前の《オウガテイル》が炎に焼かれ霧散した。

「なっとなんで《オウガテイル》がこんなに贖罪の街にいるんだい！！ 僕は聞いてないよ！ 薫！ 全く美しくないよ！！ こんなの……！！」

「…………エリック、どうしてここにいる…………」

「ひいっ!! 《オウガテイル》がつ!!」

「落ち着け……」

サクラはアリサのフォロー、コウタはサクヤのフォロー。ソーマだけで退路を開くのキツイが救助に来た筈のエリックが逆にパニックに陥っていることに頭を抱える。

一旦エリックの頭を叩き^{はた}、落ち着かせる。

「ソーマ、一刻も早くこの地点から脱出しよう!! 喰われたくない!!」

「そいつは同感だ」

帰り道何故か、あれだけいた《アラガミ》たちに遭遇せずにアナグラへ無事帰還できた。

任務の達成報告と同時にリンドウの事を伝える。受付嬢の顔色が青ざめていくのが分かった。これ以上報告をした以上エントランスに居ても意味ない。

今回でかなり摩耗したであろう神機を整備しに整備室に向かう。

ふと疑問に思ったソーマは素直にエリックに聞く。

「おい、エリックお前どうやってあそこまで来れた？」

「ああ、その事かい？具体的な説明は出来ないけど、薫からによると偏食因子を散布しただけらしい。それとちなみに華麗に散布したのはこの僕さ！！」

取り乱していた事について何も突っ込まないソーマ。

「偏食因子の散布だと？」

「具体的な事は薫君に聞いてくれたまえ、僕は聞いてもさっぱりだったからね……でも薫君最近さあ……」

「……ああ、分かってる。あいつの記憶が虫食い状態になってるって事は」

「薫君に続いて今度はリンドウさんか……アナグラはどうなるんだろうね」

「これで、潰れるようだったらこの先、生き残れんだろうよ」

第二十七喰目 記憶と感情（後書き）

今回の話は如何だったでしょうか？

原作のふいんき（なぜか変換できない）が出てますか？

薫が鬱っている上にリンドウのMIAとなるミッション「蒼穹の月」正直、無印でやった時びっくりでした。

鬱に加速が掛ります！ 飛ばしますよ！

今まで伏線撒くだけ撒いて回収が出来なかったとか恥ずかしいので地味に構成に苦労しております。

自動車学校とイケメン幼馴染という縛りが消えた今、私はフリーダムです。

ドンドン、執筆速度も加速していきたいですね。

何れはこの話題は本編にも出しますがここで少し予習をば本編は鬱ってますので明るい話題はここでしたいです。

皆さんは利き脳って知ってますか？

理解と表現をする時、利き側の脳を使うらしいですね。

それが腕組み指組みに現れるらしいです。

指を組む時右親指が来る人は左脳タイプで左親指ですと右脳タイプらしいです。

腕も同じです。

指は情報の入力を示してまして腕は情報の出力を示しています。

これがいわゆる利き脳を調べる原理だそうです。

ちなみに作者は理解を右脳で表現が左脳タイプです。

理解を感覚で行い客観的に説明することです。

単純なテストだからこそ、成るほどと納得してしまいます。

ちなみにこのテストは自身の性格と直結しているそうです。

右脳……感性

左脳……理性

作者の指の組み方は右脳ですから感性で生きてみたいです。だから、変人扱いなのか……こいつあ仕方ない。

薫君のタイプ？ これまでの本文で分かっちゃうと思いますが……秘密です。

自身の利き脳理解しているだけ勉強などが捗る様になりますよ。皆さまの利き脳どうい感じですか？

第二十八喰目 人形と人間（前書き）

時系列を間違えそうになりましたが、無事気付けて良かったです。

投稿してないのに次話の次話を出すとかどんな悪夢でしょうか……

第二十八喰目 人形と人間

『定期メディカルチェックを本日〇九〇〇にて開始します。該当班は、可及的速やかに斎藤薫博士の研究室に……………」

薫の研究室。その場所でメディカルチェックを行っていた。

室内には三人。診察医である薫とその助手の女性看護師。ピンクの髪を持つ少女だった。

検査の為か、いつもは束ねていた髪が肩まで下りていた。

「（あわわわ、あの時何も思ってたんですけど……メディカルチェックって年老いた人がやるんじゃない……）」

診察を受けに来た少女　カノン、いや年齢的には女性が正しいがその小柄な体躯と童顔がカノンを幼く見える要因を買っている。そんな少女みたいな女性、カノンが内心で悶えながら薫の診察を受けていた。彼女はもうすぐ成人を迎える筈なのだが、どうも精神が少女の域を脱してない。

「さて、スキャンをするので、どうぞこの機器に入ってください」

カノンが悶えている最中薫の声がかかる。指示された通りカノンはボディスキャンの機械の中に入ろうと仰向けに寝る。

妄想による心臓の鼓動でカノンが悲鳴を上げる前に終わり、薫が着席を促す。

上半身を肌蹴させ素肌を薫に晒し、カノンの胸部を見て入隊時の心電図とレントゲンが脳裏に呼び起こされた。

左胸鎖骨下辺りに薫の手に持っている聴診器が当てられた。

「（逆流なし、不整脈なし、狭窄音なし……）」

看護師に合図を送り、カノンの服がずり落ちないように手伝ってもらった。

「乳房を持ち上げてもらえますか？　大きすぎるので診察が……」

見た目が幼い子供から発する身も蓋もない言葉がカノンの表情筋をピシッと凍りつかせる。

「（あわわわわ、どうしよう。私、もしかしてこのまま……色んなことをされちゃうんじゃない？）」「

「（気管支、狭窄音あり……、痰が微量……、喘息か）」

内心で思った事がそのまま行動に出てしまったのか、カノンはさらに服を肌蹴させようとするが看護師にくるつと椅子を回転させられた。

「診察の順番を覚えていてくれて嬉しいです。直ぐに終わらせますからね」

彼女の行動を曲解^{きょっかい}した薫がカノンに人形めいた笑みを浮かべた。

カノン自ら肌蹴させた背中に聴診器を当て、再度確認した。

「（ふむ、痰は少し多いのかな？ 喘息は初期症状か、ちょうどいい時期に診察できたね）」

看護師に合図を送りカノンの衣服を整えさせる。カノンの準備が終わるまでカルテを書き次の診察に移る準備をした。

薄っすら頬を染めたカノンが縮こまって薫の言葉を待つ。

「カノンさん、脈と血中酸素濃度を調べたいのでまずここに人差し指を入れて下さい」

準備が出来た薫は最後の診察の指示を看護師に送りカノンの診察結果を待つ。

「（93か前のカルテだと96。投与する薬は……）」

看護師にカルテを渡し薬の調合を依頼に行かせた。椅子を回転させ薫はカノンと向き合い診察結果を説明し始めた。説明を終える頃には先ほどのカノンの身体スキャンの結果が薫のPCに届く。

照らし合わせ喘息の症状以外何も異常が無いことを確認しデータを保存しパソコンを閉じた。

「ちょうどいい時期にメディカルチェックで良かったですね。どうやら、喘息の初期症状が出てます。さっさと治しちゃいましょう」

「はい」

「最後のメディカルチェックと行きます、リラックスして下さいね」
身体のメディカルチェックを終え、精神のメディカルチェックが始まる。

特に今回はリンドウが件の任務から五日間と長期間行方不明となっている為に、アナグラの神機使い達のメンタルケアは最優先となっていた。

この時ばかりはいつもの薫の凄まじい求心力が役に立ち神機使いの悩みを引きだすのに一役買っている。

「最近、朝が辛い等とかありませんか？」

「それはありませんけど……」

何時の間に懷から取りだしたのか薫の右手にはペンが握られていて、左手にはカルテが握られ左腕で支え項目にチェックを入れた。

「食欲はありますか？」

「今、ダイエット中で……」

「あらら……神機使いは身体が資本ですよ？ 食事はしっかり摂らないと」

「でも、ジーナさんは私よりも……」

「大丈夫です、カノンさん綺麗ですよ。ただでさえ、平均体重を下回ってるんですから、しっかりと食事を摂らないと戦場でバテちゃいますよ？」

「……っ?!」

薫の口から自身の体重の話が出てきたことに身が強張った。聞き間違えなんだろうか……とカノンは思うが……次に紡がれる言葉に聞き間違えじゃなかったと思い知った。

「カノンさんの体重って4」

「わー!!!!!!わー!!!!!!」

突如大きい声を出し、薫の言葉を遮った。羞恥心で顔を真っ赤に

染め息を荒げている。

「……あー、すみません。口に出して言うことじゃなかったですね」

薫は自身の配慮の足りなさに少し気が沈み、カノンに謝った。

「いっいえ……」

「でも、しっかりと食事摂って下さいね？」

「はうっ?!」

「さて、一先ず食事の事は置いときましょうか……」

「……はい」

「《アラガミ》との戦闘の際の記憶はありますか？」

「あります」

「では言い方を変えます。『射線上に立つなって私言わなかったわけ?!』この言葉に聞き覚えは？」

「……………あります」

急に冷や汗がカノンの背中を伝う。ダラダラと額からも冷や汗が噴き出て、視線はあっちこっちと彷徨う。薫と目を合わせられず、ひたすら只管薫の視線から逃げる。

「別にカノンさん貴女を攻めるわけじゃないですよ」

余りの動揺っぷりに薫は思わず苦笑して漏らしてしまう。初めてカノンに表情と言う表情を見せた瞬間であった。

初めて薫の表情の変化を見たカノンはマジマジと薫の顔を覗き込んでしまうが、その表情はすぐに仕舞われ、なんの個性も無い、無機質、無表情の愛玩人形がそこに居た。

「ただ、ちょっと気になることがありますね……戦闘時の気分の高揚こうようとかありますか？」

「はい、神機を持つと気持ちたかぶが昂つちやいます」

ふむふむ、と頷き左手に持った項目にチェックを入れ、再び質問を投げ掛けた。

「その時の体調の変化についてはどうですか？」

「強しいて言えば、身体軽くなったような……」

薫はコンソールを操作し適合率とその他の数値を調べる。無論、時間短縮の為、コンソールを操作しながらの質疑応答を続ける。

「（ん？ 結構、適合率は高いね……が同調性は低い、親和性が低いのかな？）」

考えを纏めながら、カノンへ最後の質問し答えた後、心身両方共に良好と確認しメディカルチェックを終えた。

「……あつ今日はありがとうございました」

「いえいえ、お大事に……あっそうそう」

カノンが身支度して扉から出る矢先。

思い出したかのように薫は友達に忘れ物を届ける、そんな仕草でカノンに言葉を紡いだ。

「いつも綺麗ですけど、今日みたいな髪をおろしたカノンさん好きですよ」

「……………えっ？」

特大級の爆弾を去り際に放り投げられ、慌てて振り返るが診察室の扉は閉まり、次の神機使いが入った後だった。

「（聞き間違えだよね……………聞き間違え？）」

羞恥と違った感情がカノンの顔を赤く染めた。

1

643

午前の定期メディカルチェックを終え、休憩後、薫は再びメディカルチェックを行っていた。とは言ってもカウンセラーと言った方が正しい。今度はメンタル面のみとなっており午前と比べ幾分か楽である。

患者が来ない間に午前の部のデーターをまとめ自身の師である榊に送る為、送信ボタンを押す。

コンコン、と研究室のドアを二回叩く音。

「どうぞ」

「失礼するぞい」

そう言って入ってきたのは薫の予想外の人物 サクラであった。

「えっ」

「む、儂が受けに来たら駄目なのか？」

「いえ、ただ悩み事なんて無さそうなサクラが……来るなんて思わなかったんです」

「薫は勘違いしておる、誰だって悩み事はあるし、隠し事だってあるのと同じじゃぞ？ 儂もそれに当て嵌まる」

唐突に告げられる、薫にとって新鮮な言葉。

心が広がる感覚を感じ取った。

これだ、これだ

これだっ!!!!!!!!!!!!

長年、感じ取ってなかった新鮮味のある情報！ 《アラガミ》等の情報より欲した。感情の《解》の欠片を薫は見つけ、サクラから零れ落ちる言葉を必死に拾い集めてた。

僕に何が足りなかったのか、その答えの一部を知る事ができる！！

昏い瞳が急に輝きだす。

先ほどまでの大人顔負けの冷静さは何処に行ったのか、サクラの目の前には初めて見るあどけない笑顔を浮かべた子供がいた。

無表情だった人形に感情が宿り、無機質な笑みは、温かみを感じる程に変わる。

「ねえ、サクラ！！ さっきの話。もつと聞かせて！！」

「僕はカウンセリングに来たんじゃがなー、いや僕が話をするのは変わらんか。まあ、これも一興じゃ（薫の本物の笑顔なんて初めて見たわい、出会いから結構経つのじゃが中々見せんからの……）」

前世よりずっと冬の感情を耐え忍んできた薫に漸く訪れた春だった。与えられた春ではなく薫自ら感情の殻を破った春の季節。だが、その春は突如激しい吹雪に見舞われ、終わりを告げた。

サクラが薫を撫でようとして薫の頬に手を伸ばし、触れた途端。

それは起こる。

その現象をサクラは知るよしもないがそれは《感応現象》と言われるモノ。

薫が持つ莫大な記憶の流入がサクラに襲いかかる。同時に薫にもサクラの記憶の流入が起こるが薫にとって微々たるものだった。サクラと薫の記憶の密度が違う為に起きた差異である。

が、微々たるものと言うが薫にとってその記憶は新鮮そのもの。偶発的に巻き起こった一《感応現象》に感謝した。

サクラが息絶え絶えに成りながら《感応現象》を理解し流入した記憶は薫のモノと知り、手を床に着き啞然とする。

「薫……お主、こんな世界を見てきたのか……」

顔を青褪めさせ薫の方を見る。

世界の価値観情報を知っているサクラから見れば薫の価値観情報と言うのは酷く歪いびつなものだった。与えられる情報常識は僅か、作られる世界は狭く、向けられる感情評価は虚無そのもの。

ただ利用され続け箱庭で生きてきた少年が目の前に佇んでいた。

作られた稚氣無邪氣

壊された記憶価値観

崩された関係感情

潰された願望自我

消された成長道筋

狂人たちが生み出し育てた人形がそこ立っていた。

「……政次はこう見えていたのかな」

薫がその言葉を零す。

しかし、サクラに答える術は無かった。

2

薫は自室に帰り、自身が得た新しい情報に心を躍らせながら明日の準備を済ます。馨と夕食を取った後、二人で書籍を読む。

二人の間には何の言葉もないがこの沈黙が二人にとって心地よかった。

読み終えたのか薫はそのままぐったりと倒れ、馨が支え自室へ運ぶ。

「薫、君には辛い記憶はいらないよ。私が全て守るからな、そう……辛い記憶からもな」

バンダナが外された銀色の髪を撫で狂おしい感情が沸き起こり、行き場を求め暴走し始めた。

ついに禁忌を破り、感情を薫の唇を通して伝える。眠っている最中でも薫の心は感情を欲しているのか幸せそうな顔をした。

朝、薫は目覚めると義姉の部屋に居る事に疑問を持つが、すぐに自身に植え付けられた偽りの記憶を思い出した。

（また、終わった直後眠ったのか……）

自身の行動に呆れつつ、身体をベッドから起き上がらせた。

読み終わった後、またお姉ちゃんに甘えてばっかだなあー

自分の変化に気付かず薫は出勤の準備を始める。

台所で料理を作っている馨は口元の片側を吊り上げた。

「（薫、君は何も知らなくていいんだ）」

クスクスと笑顔が黒く染まる。

第二十八喰目 人形と人間（後書き）

批判感想意見大いに作者は待つてます。

批判はオブラートに包んで貰えるとありがたいです。

厳しすぎるのは流石に凹むので……。

更新停止期間中文章の勉強をした為かどうも若干文の書き方が少しズレてきた模様。

何か御気付きの点、御指摘を頂けるのなら御手数ですが連絡を頂けると嬉しく思います。

以下拍手返信です。

> 楽しくよませていただけてます！元になっている話をしらないのですが、とっても面白く続けてよんでいます。ググってゲームのHPにたどりつき、キャラクターまで確認済みですv 現在第十七喰目を読み終わりました・・あとがきを見まして・・ヒロインは薫しかみとめない（キリ これいいたくて拍手しちゃいました
これからも楽しみにしています！

これは一GEファンとして途轍もない誉ですぜ！拙作からGEに興味を持って頂けて作者は大変に天狗になっております。嬉しくてメルト弾いちゃうくらいに！

薫に好意を持つて頂けてありがとうございます！うちの子に是非愛情を注いであげて下さいな。常に感情に飢えてますので注ぐと子犬みたいにすり寄ってきますよ！

もはや、薫はヒロインという立場から逃げられなくなっている事間違いないのか？

ともあれ応援ありがとうございます!!
これから頑張って執筆
したいと思います!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1376p/>

グルメの日々

2011年11月12日18時50分発行